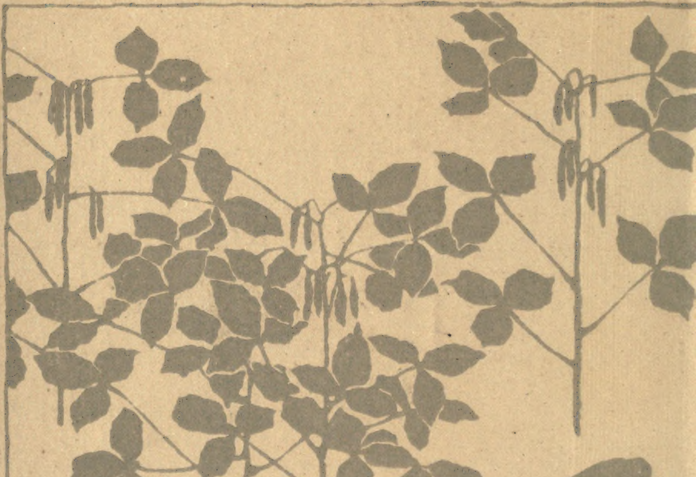
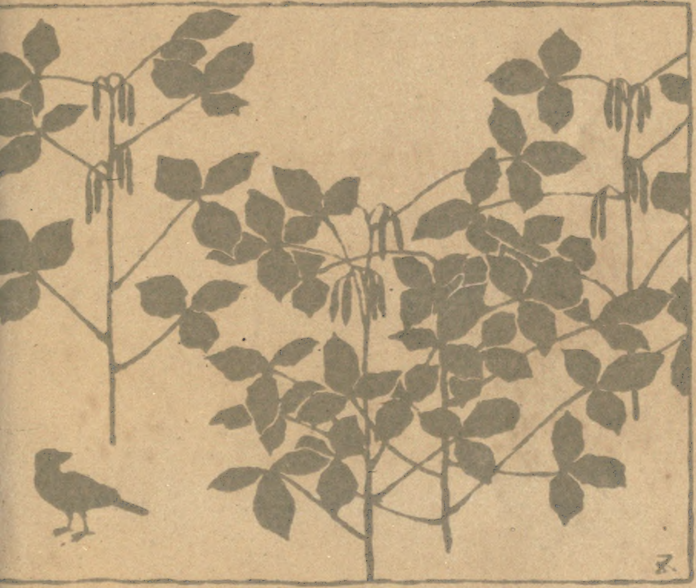
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03043 2777





大正四年一月廿四日印刷
大正四年一月廿七日發行

有朋堂文庫（非賣品）
醒睡・一休・曾呂利

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

り來らず。人して下さんとすれば、此猿牙を顯し怒りけるほどに、詮方なくて米を盆に入れて差出す。狗をば繫ぎ侍りければ、やう〳〵猿は下來り盆を取りて主に渡し、やがて主に抱かれて出でて去にけり。猿廻し心ありけるにや歌詠みけり。

名に立てる狗と猿との爭も米みせられて嚙付きもせず

○親子住み渡りける家に、或時好き肴ども幾品も見えはべり。親まづこれを喰ひけるが、子には喰はせず、歌をなん詠みける。

兎に角に若きは年の頼みあり定りつめし老が身ぞうき

息子聞きて、それならば歌詠み侍りて、道理を比べはべらんとて、

兎に角に老はあまたの年を經ぬ定なき世に若き身ぞうき

とて肴を取りで喰ひけるは、何れ道理の立侍りけるや。

曾呂利狂歌咄 終

後京極攝政入道―菅原長經

といひけるに、むくと起上りて、

物語りせしめ漆をぬる我は寂しくもなし是ぞよしのや

○世に煩きものは、知らぬ所にて狗の吠かゝるこそすべき方なき。後京極攝政入道の歌に、

主しらぬ岡部の里を來てとへば答へぬ先に犬ぞ咎むる

と詠み給ひけん。如何にもして狗の吠えやむべき計策こそあらまほしけれといふに、それこそよき咀の侍れ。手の中に虎といふ文字を書きて見すれば、跡もなく迯げ恐るゝといふ。後に犬の吠えかゝるに、此度の事と思ひ出でて、虎といふ字を書きて、さし出したる手先に喰付きければ、辛うじて逃げかへり、かの教へける人に逢ひて怨みければ、その人打笑ひ、さてはその狗は無筆にて、虎といふ字の詠めざりけん、殘りおほさよとて、

虎といふ文字だに讀まず吠懸る狗は何とて無筆なるらん

○猿廻の來て、猿を舞はせけるを、家の狗かけ出でて嚴しく吠えければ、猿は恐れて舞ひさしつつ綱引たぐり二階に上り居る。狗は頻に吠えけるを、猿の主さま〴〵呼べども下

去ぬる秋の頃東山に行きつゝ、神樂岡のあたりまでさすらひけり。これは昔紀州高野山に雷落ちかかり、山裂けて此所に飛來れりとかや。裂雷神にて吉田の地主なり。後に春日明神を勸請せり。天の岩戸の事に寄せて、此を神樂岡と名づく。さてかくぞ詠みける、

松ふぐり枝に鈴なり神樂岡かぜ吹くごとに颯々のこゑ

○皶鼻の病にて、鼻の赤き人頰先まで色付けるを、友達皆王の鼻と名を付けて呼び侍り。神社の祭に、神輿の前に掛る面の名を王鼻といふ。極めて鼻高く色赤きものなり。さてかくぞよみける、

君が顔さこそ見るらめ神慮いつもまつりにかく王の鼻

此人打笑ひて返し、

我かく王の鼻毛とおもふとも心のあかさ神ぞしるらん

○吉野やの某人々伴ひて遊び來ながら、枕を傾けいたく寢入りつゝ、座も寂しくはべりければ、

大和路や吉野漆の寂しくも獨りそむきていかにぬるらん

年傾きて後詠める、

今はわれ世を浮草の根にいらぬ藻屑が下にかゞむ老蝦

○世を過ぎ佗びて、彼方此方いとなみけれども、兎に角につきて身のなり立ち難ければ詠める、

又或時詠める、

鳴海潟鹽干鹽みち流れ木の浮ぬ沈みぬ身こそつらけれ

○山寺に住みける僧の、召使ふ小童の過失ありとて、ことゞしく腹立ちどよみけるを、

我家の垣ほの穗蓼花咲けど駒もすさめずからき世の中

行きかゝりてかくぞ言ひける。

世の外に心をすます山寺も耳に絶えせぬいかるがの聲

あるじの僧、返し、

○昔民部卿範光朝臣の歌に、

生死の海わたる身はおこなひの船にいがりを上下する

ふりたてゝならし顏にぞ聞ゆなる神樂の岡の鈴蟲の聲

○山雀を籠に飼ひ置きけるが、面白く戻をうち、日暮には籠のうちに掛けたる小き夕顔の中に入りて、明しけるを見て詠める、

山がらも源氏の君に習ひけん夜毎にやどる夕がほのやど

○或人木兎を飼ひける、その形は梟に似て、耳ありて兎の頭の如し。羽の斑は鶉に似て、大さは鳩の如し。土御門院御製に、

足曳の山深く住むは木兎浮世のことを聞かじとや思ふ

かくぞ詠みける、

繋れて聲をもたてず木兎のつくねんとして何を聞くらん

○或人未だ若き時より萬の藝能にたづさはり、學問なんど愚ならず力めしかば、何につれても心得はべりけれど、世にいふなる石臼藝になりつゝ身もなりたゝず、四十に及ぶまで打過ぎにけり。さてかくぞ詠みける、

冬籠る蟲の住家を打たゝき雲路かけらぬ四十からめは

又或時詠める、

世に立たぬ身はかたつぶり心から家を離ず住かひもなし

石臼藝―物にならぬ藝

におひ—荷負、匂

さまにも故ある事にこそと、宿に歸りて主に語りつゝ歌を詠みける、

　柴木にはあらで都のたき物はわがかたにいふ丁子圓かも

○或人牛を買ひけるに、此牛は橋をよく渡り、荷負もよきかと問ひければ、賣主の詠める、

　此牛の橋を渡るは鵜の如くにおひは沈の燒きがらと知れ

といひければ、さては善き牛にこそとて買取りて歸り、板橋を引渡せば、そのまゝ水に飛入り、荷物を負ふすれば、跳踴りて負はざりけり。彼賣主に逢うて、かう〳〵と語り、人を佯りける事よといふに、賣主は何か佯を歌には詠むべき、橋を渡るには鵜のごとく水に飛入り、沈の燒きがらは匂はぬといふ事を譬へ侍り。初より斷りけるに違はずといふに、すべきやうなくてかくぞいひける。

　いつはりを恥とも知らで賣牛の皮よりあつき顏の皮かな

○或人宿鴾毛の馬を買ひけるに、殊の外に瘦せて見えければ、物の用にも立ち難かるべし。せめて癖はなきかと問ひければ、賣主の詠める、

　馬の脊は古長刀のさびつきけ瘦こそしぬれ癖はなきもの

夏　汗水になりて世渡る人の身の夏の虱は浮いつ沈みつ
秋　引被ぎ帷子ごしに空見れば雲井を走る月のよしらみ
冬　冬ごもる布子の綿に住む虱雪の如くに白けてぞ臥す

虱六道の歌とて詠める、

地獄　捻る樂潰す極樂火は淨土水に入るこそ地獄なりけれ
餓鬼　脫ぎ捨てゝ棹にかけたる古布子がきの如くに瘦虱哉
畜生　人を喰ふ事より外はいさ虱いき畜生の果といふべき
修羅　血まじりに殺し捨てたる虱こそ宛ら修羅の巷なりけれ
人道　帷子の縫目に宿る虱こそ人と同じく立ちて行くなれ
天上　五月雨や龍の鱗にわくしらみ連れて諸共天に上れり

佛道　かくれ住む肌の守のしらみこそ生ながら今佛にはなれ

迚の事に成佛せさせ侍らんとて、

○北山家の人始めて都に出でて、彼方此方見廻りけるに、薰物を賣買ふを見て思ひける は、山方にては柴木をこそ薪物とはいふなれ、これは藥の名をかくいふぞ怪しき、如何

おんも―御裳
つんづ―噛みつ
けさ―袈裟
よめの子―鼠の子

西寺の老鼠若鼠おんもをつんづけさつんづほうしに申さん師に申さんと歌ひ侍る。かゝる事も詞に連ね、拍子とりて節可笑く歌ふは面白し。去ぬる年閏正月のありける歳旦の發句に、

春は百廿日ねずみのあしたかな

といへり。心ばせいと面白く聞ゆ。古き歌に、

よめの子のこねらは如何になりぬらんあな美しと思ほゆるかな

○同じ蟲の類にて人を吸ふ事は蚤に替らねど、虱は殊更に穢き事いふばかりなし。朝に子を生じ、夕に孫を産むと、韓退之は賦に作れり。時の間に子孫多くなりけるものにて、人の頭に住めば色黒く、身に落ち隠れては白くなれり。昔の人虱の百首を詠み侍りければ、虱の群りて怨みしかば、今一首詠まざらんは本意なし。名を現さずして員を滿つべしとて、

喰付かば逃しばしすなたゞひねれ布子の裏にわたがみはなし

虱四季の歌とて詠める。

春　うめ櫻すり縫箔の古小袖花見しらみのとびちりにけり

らばうて皆散々になりぬ。

飛んで來る競馬の先はあひもなし出ばる京者よ蹈まればしすな

○雙六をうつ人、もし七目を塞がれては術なき事、腸を斷ちて悶え焦る。碁を圍む人は敵に取込められ、黠おろされては逃遁れんとものする有樣、多く負けぬれば後は腹立ち怒り、助言する人あれば、穴勝に怨を含む。誠に我執といひながら、愚なる事になん。味方を生して敵を殺さんと、手を盜み僞を構へ、主從父子師弟兄弟と雖も許さず、四重五逆の罪にも過ぎたりと、兼好がいひけんも道理ぞかし。これほどに心を入れてすべくば、何れの事か感應の上手とならざらん。あたら光陰を徒に費す事、聖賢の旨に違ふらんとぞ覺ゆるといひければ、世に高麗胡椒とて好む人、その辛き事魂を削り、胸を爛らかして、これをよしと思ひたる、かの圍碁雙六に負色付きて、喘息しきを慰みにせば如何せん。蓼を食ふ虫もあるものをと、呟く人も有りけり。

雙六に七目ふさがれ碁にしちやう唐辛より辛うおぼゆる

○鋸屑もいへば云はるゝものとかや。何事も詞を續けて云ふに云はれぬはなし。催馬樂律調の老鼠の歌に、

水つき―轡の手綱の端を受くる穴

知人を見附けてそれかと呼掛け、人の袂の下搔潛りて行きて逢ふもあり。馬の駈來るを待兼ねて埒に倚り掛り、耳元まで口を開きつゝ大欠するもあり。素破や來るぞと色めきたてば、諸人一面に立騷ぎ、西に向きつゝ遙に見遣りける間に、馬は打立てられ、鬨の聲に驚き、蜻蛉の如く駈け通れば、乘手は馬を止めんと、轡を捉へ水つきを握り、その間に東の田中まで馳過るもあり。又は鞍下定らず、腰据らで桃尻になり、前輪にかぐりつきて駈行く間に、馬にあまされて撻と落ち、顏擦剝き泥まぶれになり、痛む所あれどもさらぬ程にて又馬に搔乘せられ、ぬけ〳〵として引返すもあり。見物の人どもは駈來る馬を猶遲しと、飛上り〳〵見る程に、風の如く馳來れば、是に蹴られじと崩れかゝり、彼方へむら立ち崩るれば、馬も行支へて横に切れ、乘手は落しながら東の山まで駈行くもあり。馬に踏れて氣を取失ひ片息になり、足を踏みたるとて喧嘩するもあり。兼好が云ひけるやうに、木の股に上り居て見る人、川向にして見る人は、馬に蹴らるゝ氣遣はなし。饅頭餠飴粔籹なんど、その中にも賣廻るに、崩れかゝる人馳過る馬に蹴散され打こぼして慌てたるも、かゝる所までは賣るべき物も用意あるべき事とぞ覺ゆる。競馬も事終り、自ら日も暮るれば、集ひたる人ども、何地去ぬらんとも知らず、醉ひさ

年寄れば絶えせず音の聞えけり我耳蟬の小川なるらん

○上賀茂は糺の杜よりは、一里ばかり北にあり。別雷神と申す。本社の東の方に流る水を、鴨川と名づく。賀茂山をば神山といふ。四月中の酉の日、葵祭あり。その前の日賀茂松尾の社司葵を奉る。これを鬘の如くかけつぎてまつる。祭果てぬれば簾几帳にかくる。其所へは雷の落ちずといふ。古き葵をば萬の物にも懸るとかや。賀茂の競馬は、往昔より名に負ふ見物なり。五月朔日を足揃と名づく。二十四匹の馬を飾り前後の鬮を取り、馬場の左右に埒を結ひ、乗人は布衣に烏帽子を著し、初は跳走とて一匹づつ駈けさせ、馬の足並遲きを見定め、次に二匹番うて駈けさせ、馬場中に樗の木有り、これを勝負の木と名づく、此木の前にして遲速の勝負を決す。同五日を競馬と名づく。乗人は赤黑二色の布衣を兩陣に番うて馬場を乘渡す。馬どもは近國の大名諸司の御許より、祈禱のためとて飾出ださるゝと聞ゆ。これを見に行集ふ人々、いまだその期を待つとては、盃取りつゝ興を盡す。さしも廣き馬場の間錐を立つる所もなく、老若貴賤堰合ひ押合ひ、或は菅笠をのけざまに冠り、或は編笠を横に著て、腰に差したる脇差落さじと握り、帶に付けたる巾著を盜人に切られじと捉へ、友達にはぐれじとものするも有り。

茶屋の軒圍つゞき、青き松葉差重ね、名に負ふ御手洗團子細き竹に挿して、前なる土塗の爐に立並べたるは、五十串立てたる心地す。好事の人行集ひ、下ゆく流に盃を浮べ、或は茂りたる木の間に幕打廻し、梢の蟬のむら聲吹交ふ風に交り、遠近聞え渡る響に和して、聲よき歌一曲時々拍子取りて、流石に喧しからぬもいと床し。眞瓜幾個も川水に投入れて、清泉に瓜を浮ぶと吟じ、茶瓜客を止むと口ずさふも、此所の事ぞかしと思はる。入日を送りて燈火に替ふるといふ、ほのめく螢火飛交ふ頃は、涼しさいとゞ勝りぬ。手に〳〵とりて家つどにし還る袂の名殘まで、興は盡きずとぞ。かくぞ詠みける、

　人はいさ物をも食はで御手洗やたゞすもどりを我はしにけり

○蟬の小川は、本社の南の方に流るゝ大川を云へり。光行賀茂の社の歌合に長明、

　いしかはや蟬の小川の清ければ月もながれをたづねてぞ住む

と詠みしを、師光入道判者にて、かゝる川やあるとて負けになり侍り。顯昭が判ぜし詞には、此川如何、所の人に尋ねて定むべしといひけるを、後に長明顯昭に逢ひて、これは賀茂川の實名なりと語りけるとぞ。さてこそ前の歌を、新古今に入れられたりしかば長明は過分の面目なりと喜びし事、自ら無名抄に記せり。かく思ひ續けゝる。

れそ一緒

す。何處も同じ浮世の中、その所こそ變れども、世を過す營業は、何につけても苦しきや。爪木椎柴樵積みて、束ぬるねその結び目まで、やすからずぞ覺ゆる。折節夕立して雷なりければ、山賤の家に宿りて、

　眞黑に夕立雲がはたゝがみ彼地此地人の胸ぞとゞろく

雨晴れければ出でて、行く〳〵十町ばかりにして、くろみかまへたる岩屋の瀧に到る。白布洒せるかと怪むほどに落ち沸れり。これぞ物の怪付きたる人を、此瀧に打たせぬれば、醒むるといふなる。倶利加羅不動の名瀧なり。

　うごきなき窟の瀧の水きよき濁る心もあらはれにけり

○年每の水無月下の十日のうち、都人高き卑き御手洗川に出て祓することあり。御祖神社南向に立給ふ、糺の宮と號す。御手洗川とは本社の東の方に流るゝ川なり。六月祓は天武天皇の御宇より始まれり。邪神を祓へなごむる故になごしといふ。河邊に五十串立て、麻の葉などにてするなりと八雲御抄に記せり。必ず晦日には限らず、六月の祓するを六月祓といふと定家卿は註せられし。此川水は淸く澄めるのみにあらず、又なく冷にして、重なれる氷にも遠からぬぞ、實に三伏の火も濕るべしや。杜の邊に差入るより

おぎのろ―
賣る

○此頃岩屋の不動の開帳とて、人々詣で侍り。往初空海和尚の開基石佛の不動明王靈驗著しとて、常にも絶間なく參詣すとかや。高き岩の洞より滴り出る水あり。香水とて小竹の筒に受け入れて歸り、垢離灌頂の功德に同じとて、少しづつ頂き飲むといふ。殊勝の靈地なれば、友人語らひて詣で行く。都より北の方大宮の森に行き到る。權現の社南向きにあり、大宮殿と申す。

名を聞けば外聞はよし大宮の森は小林かみは小やしろ

○今宮紫竹大門より北に行く。鷹が峯といふ所に到る。其北に岩尾といふ所あり。又は岩陰とも名づく。大石二つ柱の如くに立竝べり、岩門といふ。昔愛宕を草創せし所と云へり。

都をば思ひたちつゝきた山や足ぞつかれてはい鷹が峯

車坂を打過れば、此は鮎を捕りて都に出し、おぎのる名物の聞えあり。

世をわたる營業はうしの車坂のぼる小鮎を捕る暇なみ

まんじゆ峠を踰えて雲が畑といふ所に到る。その道の程五里ばかり、九折にして廻ぐれば上り、下ればだみて平地は少し。此は茅屋の軒竝べる山賤の家々、薪を樵りて業と

とて死にけり。いと尊き道人にてや有りけん。

○或人筒花入に櫻の花活けたるを見て詠める、

生花の浮世の水に繋がれて命は切れて死なれもぞせぬ

○江州栗本郡梅木の里は、草津の宿よりば二里ばかりの東にて、東海道往還の所、此に茶屋あり、座敷涼く作り庭あり。つぎ〳〵しくはなけれど、旅の勞を休らふ便に付けては、足の撓きも寛ぐやうに覺ゆ。前には馬乗物なんど宿りのために小屋作りて、梅の木植ゑて里の名を知らせ侍り。世に梅木の茶屋と名づく。和中散とて名譽の藥を出し賣りける。萬の病を癒す、殊更旅には此藥に勝る事なし。如何なる心地惱ましきにも用ふれば、其のまゝ効ありとて、東西諸國に隱なく流行りつゝ、藥を賣るに隙なし。心ある旅客は皆此茶屋に立寄り、茶に寄せ藥に寄せて、詩作り歌詠みて、書きて取らせ給ふほどに、此頃は掛物色紙とり〴〵の手跡多くなりにたり。梅の木の茶屋、藥を賣るといふ事を書きて給べと望みしかば、書きて取らせける歌二首、

鶯の宿る梢はいはねどもおのづからしる梅の木の茶屋

すき者は立寄る梅の木の藥賣るてふ茶屋の名こそしるけれ

ぞ付きにける。常に疝氣を患へて足弱かりしが、誓願寺の建立より、一千年になるといふ供養の時詠める、

　誓願寺千年の供養有り難や持病に替へておこれ信心

かくて心地煩ひて詠める、

　彌陀頼む來迎往生同じくは延させ給へ遲からぬこと

典藥の頭道作、此歌を聞きて哀れがり、心を盡して療治せられしかば、此度は病癒りけり。後遂に年經て、今は此世の名殘頼み難く煩ひ出でて、息絶えなんとしける時、

　旅のやの眠の夢のさめがたは元の住家に歸る門いで

と詠みて正念に事切れにけり。

○北山陰に住みける翁、その故郷の如何なる人とも知るものなし。草の庵に獨り世を遁れて、靜に月日を送る、傍の人訪ひ來るをも、心に合ぬ時は物も云はず、ある時は可笑き物語して、人をも笑はせ我も笑ひどよみ、露心に掛る事もなし。心地わづらはしく臨終と見ゆるに、

　七十路の夢こそさむれ今日のいま心霽れにし大空の月

名ばかりはしづや靜原椎しばを樵りはてもせぬ人心かな

○世に麁相なる人、六波羅詣しける道にて、何とは知らず黒燒の藥を拾ひけり。藥とだにいへばよき事かと思ひたるにや、知る人の許に立寄り、湯を求めてしたゝかに飲みければ、其のまゝ腹下り出して、間もなく後には痛みけるを、醫師を賴み樣々療治して辛うじて癒えたり。さてかくぞ詠みける、

名も知らぬその黒燒をまゐりける六波羅いたくあれ下りつゝ

○或人喘息の病起りて、痰にせきつめられ、横にも得臥さで、微暗き一間の内に倚りかかり居る。醫師に見するに、産後の煩かと思ひにたり。脈取りて立退きつゝ、産の上には斯樣の事もあり、苦しからずといふ。これは女にはあらずと斷りければ、醫師麁忽を云ひけりと思ひて詠める。

女かと見れは男の病人は痰やせくらん喉のなりひら

○四條坊門京極の邊に、道兒とかやいふ人いまそかりける。怪しうはあらざりけり。腰折の狂歌なんど口ずさび興じけり。酒を好みて醉ひぬれば、道行く筋の岐に見ゆとて、入道して初は道二とぞ云ひける。老いて再び兒になるといふ事を思ひて、後には道兒と

禮門院大原の芹生に籠り給ひ、人の見奉る事を面羞く覺して、うちそばみ給ひし面影とぞいひ傳ふ。小原木踊といふ曲あり。つゞみは家の大事なりとて、猿樂どもの祕するといふも、此處の黑木を賣ることなり。斯くぞ思續けて云ひける、

水ならで世渡るわざにこりつみし小原木かはひ黑木めさいの

來迎院證據の阿彌陀、瀨井の淸水、音無の瀧、皆此地に在り。かくぞ詠みける、

水口を木の葉草ばに堰かれつゝ問へどこたへぬ音なしの瀧

○志津原は大原より北西の方なり。名こそ靜原や、そむくとならばかゝる所こそあらまほしと思ふに、里人の有樣いとゞ靜にもあらで、身には藤葛の割織とて、簞に似て襟もなく、けふの細布にもあらず、胸合はで裾短きに、斧鎌といふものを腰に差し、おふごといふもの打擔ぎ、朝まだきより山深く分入りて、谷を渡りかけぢを傳ひ、柴刈り木樵りて、星を戴きて家路に歸り、商山四皓が住居を移すにもあらず、伯夷叔齊が行を慕ふにもあらで、葛を掘り蕨を折り、峯の小々栗を拾ひ、谷の根芹を摘みても、其日の飢を助けがたく、苦しうも急はしからぬかは、何時を限に何を待つともなし。拙き山賤の業かなと思ふにつけて詠みける、

商山四皓―漢の文帝に召されてはじめて山を出でて仕へし四老人、當時有名なる隱君子

尋常なり——しほらし

曾呂利狂歌咄　巻第五

○八瀬の釜風呂は、都方の人絶えず入り侍り極めて効あり。京より二里ばかりの北山家なり。黒木といふものを業として京に出し賣る。それをふすべける序に釜風呂を立つるに、生木を燒きて其の氣を受くるは、誠に人の身の藥なるべしや。四月始の辰の日は此所の祭とて、競馬つがはせ興ある見物なり。

　養生のために入來る病人は骨と皮とにやせの釜風呂

○大原の里は八瀬よりは一里ばかりの地に在り。村の家々立竝びいとゞ物寂しく、時々は軒近く猿の聲わびしらに聞え、かつ〴〵窓のまへに鳥の音微に落ち、月の光木の間に漏れて、瀧の音は積れる落葉に堰かれ、殊更に咽返り、何事に付けても心を傷ましむ。山賤の業とて、柴といふものを樵り、黒木といふものをふすべて、都に出し商ふに、女は鐵漿黒く薄げさうし、白布の帽子赤前垂して柴木を戴き、日毎に京に出でて、黒木召せと賣りける。人柄山家なれど尋常なり。木買はんといへば、後向きて見せ侍る。建

人の起請文の罰の、身代に立つべしといふ願を立てしとかや。時の人是を神にいはひ、その社は四條京極に西向に建ちたり。每年十二月大晦には、京都の諸商人空誓文のほどこしに、この社に詣でて祈る事なり。さてかくぞ詠みける、

商人の空せいもんやいつはりのかうべに宿る神も有りけり

かみもかたかれ—頭堅くあれと祝ふ也

○城南寺は鳥羽殿の宮の跡なり。城南の離宮といふは此森の事なり。世の諺に、腹の膨れたるをば城南寺祭といふ。此處の神事には餅を搗きて、人に強ひて食はするとかや。

城南寺まつりの餅を月の夜に聞きてぞきねが舌つゞみ打つ

○ある人の妻、娘の子を產みて、三十日餘り三日といふに、忌あけて產土御靈の御宮まゐりとて、乳母はいとゞ嬉しげに出立ち、人あまた連れて詣でけるに詠める、

忌明て參る御靈に祈る子はうぶすなほなれかみもかたかれ

○屏風と商人は直にては立たぬものといへり。さればこそ如何なる物を賣るとても、價を僞りたかくいふを、買ふ人はさま〲ねぎらひてまけさせ侍るを、猶買ひながらも、利分ありとはいはず、いつはりをのみもとゝする事なり。やゝもすればこと〲しく誓言して、誠らしく語りて賣付け侍る。年中いつはり立つるちかごとの報はゞ、商人にあたる罰に人種はあるまじくぞ覺ゆる。むかし土佐房正尊が、賴朝の仰せにて、九郎判官義經の討手として、鎌倉より上洛し此事あらはれて、六條堀川の御所に召されしに、討手のつかひにはあらず、熊野まうでの爲なりと陳じて起請文書きたり。その罰にや夜討に敗北して生捕られ殺されたり。彼の起請文を物うきことに思ひ、神にいはゝれて世の

男山にくねらばくねれ女郎花弓矢八幡無理にちぎらん

○八幡下向の道、淀の渡りを通るとて述懐の歌詠める。

淀川や河瀬に立てる鷺烏しろくろとして世を渡るらん

楊子島、美豆野このわたりにあり。

淀川や楊子島に住む千鳥はしにてなどか石をくじれる

といふ古歌を思ひて詠める。

淀川ややうじが島に立つ鷺はやなぎ鮨を觜でくじれる

住むも憂しみづ野の里の佛頂蕷親もぬか子も土をほぜりて

岩田の小野を過るとて、

ひもじさを誰にいはたの己のみこらへて過ぐる道ぞ侘しき

○鳥羽といふ所は、天仁帝の離宮を立てゝ住ませ給ふ故に、鳥羽院とは尊號奉り給へり。保延年中より此處に牛車ゆるされ、今も車借の家々ならび立ちて、物を運び送るにやすらかなり。

己が名を鳥羽のあめ牛ねりかみて涎垂れつゝ車曳くらん

○芹川は仁和の帝行幸し給ひけるよし伊勢物語に見ゆ。嵯峨天皇はじめて行幸有りけりと舊記あり。此例とぞきこえし。千世の古道は、龜山の腰にある道筋なり。戸名瀬の瀧は大炊川の上の瀧なり。

戸名瀬よりながす錦のきれ〴〵は時雨に染めし木の葉なりけり

○嵐山は法輪寺の後にあり。此處は元より嵐を我物と名のる山なれど、さすがにさわがしからず。春の花秋の紅葉、月雪につけても見所多く、筆にも盡しがたく、浮世をよそにのがれたる所ならし。

嵐山にそだつさくらはわがものとことさら花をよぎて吹くらん

○松尾を詣でて、むかし〳〵子供の諺を思ひ出でて、

松尾の使者といふなるどろ龜を燒米くれぬ田にやははせん

○西芳寺の庭は、夢窓國師絶景の工よりつくられし所、今も掃除怠ずや。

西芳寺碧岩石のつくり庭より〳〵塵をほちぬきやする

○八幡にまうでて所の人に尋ねしかば、八幡はこゝもとの惣名にて、その間に男山、鳩の峯とてあり。女郎花を結ひて詠める歌ども多し。男塚女塚の故事ある故とぞ。

天狗だのもし—宮

○有栖川は野の宮のほとりに聞えながら、その所定かならず。花鳥餘情には、伊勢の齋宮の野宮は嵯峨の有栖川にあり、賀茂の齋院の野宮は紫野にありと記せり。顯昭が注には、齋宮のおはします本院の傍にある小川を、有栖川といふといへり。野宮へ行く道の竹藪の陰に流るゝを、有栖川と名づくるよし所の人は申す。二尊院の南にある森の内に小社あり。黒木の鳥居小柴垣、今もその形ばかり殘りにたる、こゝぞ野宮の跡なる。

野宮の森のこがらすとまればやいとゞ黒木の鳥居とも見ゆ

○愛宕詣しつゝさまぐ\願たて祈りけるほどに、

願たてゝ祈をかくるあたご山これぞまことの天狗だのもし

樒が原といふもおなじ山の内にあり。曾禰好忠が歌に、

あたご山しきみが原に雪つもる花摘む人のあとだにもなし

樒をはたきて抹香にするといふ事を、

あたご山やまのあたまのまつかうをはたく樒がはらたちはなぞ

下向道の序大炊川を詠める。

とんづはねつ流れに添うてのぼり鮎汲みてぞしるき數おほひ川

結びてつらねたり。夫木和歌集の歌に、

水無瀬山木蔭の草のした露やはやしの鹿のなみだなるらん

此歌を思ひ出でて、かくぞ呟きける。

水無瀬山秋の紅葉はさを鹿の妻戀ふなみだいろに出づらん

○嵯峨野の宿光寺は、二尊院より東南の方にあり。是ぞ定家卿の小倉の山庄なる色紙の和歌を書き付けて置かれし所。今は日蓮宗の寺となれり。小倉山の内なれば古歌ども多く見ゆ。後鳥羽院此のほとりに行幸ましく〳〵て、小さき庵室に煙の立ちけるを見給ひて問はせられしかば、

をりくぶる薪はあれど鉢の木の絶えまがちにて煙立たざる

と詠みて奉れり。慈鎮和尚にておはせしとなり。定家卿は五條三位俊成の息和歌の中興なり。新古今集を撰ぜられし時に、父の喪にあうて座に列らず。後にその歌どものよろしからざるを、編入れられし事を殘り多く思ひ、新勅撰和歌集は、定家卿一人して撰ぜられしといふ。さてかくぞ言ひける。

晝なかも踏まよひけり敷島の歌の道にはをぐら山かな

名にしおふ里は桂のあめ牛や月の夜すがらねりをかむらん

○いざよひと云ふ言葉は休らふ心とにや、猶豫とかくよし。萬葉集には不知夜と書きていざよふとよめり。柿本人丸の歌に、

武士の八十宇治川の網代木にいざよふ波のゆくへしらずも

と詠めるは、宇治川のあじろは氷魚をとる爲なるに、波のせかれて流れのやすらふといふ心と見ゆ。或は十六日の月をいざよひの月といふ。源氏物語に、いざよふ月にゆくりなくあくがれん事をと書きたり。これは十五夜の月入かた十六日になる事をいへり。是も十五夜よりは十六夜には月の出る事しばらくやすらひて遲く出る心にや。萬葉集に、

山の端に不知夜歷月を出でんかと待つゝ居に夜ぞ更けにける

たゞしばらくやすらひて遲き心なり。古今集よみ人しらずの歌に、

君や來ん我や行かんのいざよひに槇の板戶も鎖ず寐にけり

と詠みたり。

○昔惟喬親王の別業は水無瀨といふ所にあり。伊勢物語に、山さきのあなたに、みなせといふ所に宮ありけりと書きたるは、此所の事なり。古歌に、川を詠み、山を詠み、鹿を

若き女—之をかつらめといふ

犬神人—下級の社家

○いにしへ都の内に、さもある人の家に目出度き祝事ある所には、桂の里より若き女の參りけり。その出立は、顏美しうけはひ、眉つくり、うるはしき小袖をかさね、わが名を桂と名乘りて彼の家に參り、嫁入、婿取、家作、何によらずめでたき御事の候と聞きて、桂が參りて候とてその事につけて、さま〴〵詞を飾りいひつゞけ、祝言の祓をいたし、そのほど〳〵の賜物取りて歸る事の侍りき。これにつけては、往昔正月元日の朝より十五日まで、年毎に假想文とて賣りけり。その出立は赤き布衣に袴の裙高く取り、猶それより前には烏帽子を著せりとかや。中頃は編笠かぶり覆面して、都の町々を賣りけり。これを買ふ人あれば、細き疊紙の中に洗米二三粒入れたるを、假想文と名づけて渡す。一錢より百錢までも、代は買人の心にまかす。さてその祝言は買ひける人、或は夫婦のかたらひの事、或は商賣の事、又は物書く事、其外何にても望む事を、さま〴〵目出度くいひつゞけて打通る、いと面白く賣りける。詞優しう聞えしを、時世の有樣におし移され、今は皆絶えけるにや、此頃若き人は知りたる者なし。是は祇園の犬神人なりや、又は桂の里より出る男にや、その出る所を知らず。此程は飴をねり出して里の名物となれり。桂飴とて世にもてはやすとかや、かくぞよみける、

○或人新しく家造りける、その祝ひにとて友達呼びてものしけり。家打見巡りつゝ、垂木の竹殊の外に太かりしを賞めけるとて、此竹は八町ばかり聞え侍らんといふ。其の故を問ひければ、ある所の家の竹垂木、未だ此竹には似るべくもなく細かりしが、火事の時に六町きこえ侍り。燒けて割れたる音の遠く響きし事を思へば、今此竹は八町は聞ゆべしといふに、人々さればとも得言はず。主聞付けて、殊の外に氣にかけつゝ腹立ちければ、此人迷惑して主の機嫌なほしに、歌を詠み侍るとて、かくぞいひける、

火をかけて燒くとも燃えじこの家の棟も柱も水をもりつゝ

この家遂に洪水に流れけりとぞ。

○或人綾の小袖を借りにやりければ、惜みて貸さず、歌を詠みてつかはしける。

綾の小袖あやかりものと誰も見ん貸ばあやかしつきやしぬべき

○鍛冶の國員は小刀を打ちて名を得し者なり。十二月の末に餅搗かんとて、甑を立て蒸しける處に、俄に釜鳴出でて、侍りければ、國員かくぞ詠みける。

我釜の聲をはかりに鳴る事ははがねを人に知らせんとなり

これより世に名高く聞えしとかや。

○ある人子を捨つるとて詠める。

身にまさる物なかりけり緑子はやる方もなく悲しけれども

○ある人子を亡ふ事五六人に及びしが、妻またたゞならず、既に月滿ちて男子をまうけたり。夫婦はいふに及はず、親類こぞりて喜びあひけるところに、隣の隱居の禪門よろこびに來て、此子は幾久しくかみもかたかるべし、歌を詠みて祝ひ侍らんとて、

緑子のかみの堅さは石佛いのちながきを彌陀にあやかれ

といひ出でたりければ、家内上下にがりかへりて物言ふ人なし。此禪門はたと思ひあたりて、さらば目出度く詠みなほさんとて、

親よりも先だちのぶる竹の子の林に入りてみるうちのほど

此歌いよ〳〵いまし〳〵しくて中たがひけり。

○ある侍緋縅の鎧を縅し立てゝ、其祝にとて人々呼集めてものしけるに、麁忽の人歌を詠みけり。

緋縅の鎧のさねをかた糸のわたがみとりて打ちきられけり

うちきられの字さし合ひて、あるじ不興せしとかや。

れど、繼子は更にうらめしとも言はず、何事もさかふ心なくて暮しけるが、父なやましくわづらひ出て、今は大方かぎりと見えしかば、跡識のこといかが、たしかに言ひ置き給へといふに、硯紙取寄せて、二筆ばかり書きて、我死して中陰の果の日、此書付を見て跡の事まかなへとてことされにけり。かくて四十九日過ぎて開きて見るに、何の事をも書かず歌一首あり。

なき跡はみな惣領にゆづり葉の末葉はともに我親になれ

○親を養うてねんごろにもなき子のありしに、親うらめしく述懐すれば、只今にも死に給はゞ跡よくとぶらひて參らせん、されば誠の孝行は、親の後世をたすくるにまさる事なしと、法談にも聞侍りといふに、親聞きてかくぞよみける、

孝行は命のうちにつくせかしうたがはしくば受取を取れ

○赤染衛門住みける家のあたり近く子を捨てければ、聲をはかりに母を戀ひて泣きけるを、あはれと聞居たるに、しばし音なくなりしかば、人して見せにやりけるに、寢入り侍りといふにかくぞ詠みける。

哀なり夜半に捨子のなきやむは親に添寢の夢や見るらん

しき衣を取合せては、合ひにくきものと聞え侍り。淸少納言が草子に、鍋蓋の取合と、古きに新しきたちあはせぬ小袖の裏はあひにくきものと書けり、よろづの事皆同じく、古きに新しきを取合はせてはにげなし、我が詠む歌を聞き給へとて、

姑とよめと小袖のうらはらに心のつまのいかであふべき

さては昔よりある事かとてやみにしとかや。

○丹波國野の村に、須原半之丞とて武勇の人、ならびの里より妻を迎へて婿入せんとするに、もとよりすり切りて著るべき上著のなかりけり。同じ里に赤澤の某といふ人は、親しき友達にて、それがもとへ小袖を借りに遣しければ、丹田山紬を苅安染にしたるを貸しけり。これを引はりて婿入しつゝ、明るあした返すとて、詠み添へてやる。

上著をば心おかずもかりやすのやすくもきのふ遂ぐる婿入

返し、

小袖をばかりやす〳〵と婿入をすはらときけば羨まれぬる

○一條の小路によろしく住渡りける人、總領は前の妻の子にて、後腹に二人の子を儲けたり。古今如何なれば女心に繼子を憎み、よろづあしざまにつらめしうもてなしけ

かんだう―強盗

手づゝ―不器用

送るとて、

いが〳〵し毛衣なれば手も觸れずそこにて肌をくりあけてめせ

返し、

おしつけて栗が毛衣はぎとらばいがかんだうと人のいふべき

○土御門の邊に住みける人、ある御所の女房を迎へて語ひしが、いさゝかの事をいさかひすれば、男腹立てゝ去り返しぬ。その女房の名をこつまとぞいひける。限りなく悲しみながら、涙をおさへて、

小夜衣いく夜重ねしこつまをばかへすうらみは縫ひし糸かず

男あはれに思ひて、

秋風の吹きかへしけるこつまをばうらむと聞けばまたぞ返さん

とて呼び返しけり。

○八條唐橋に住みける人、新婦を迎へて月かさなりぬ。姑の小袖を縫はせけるに、おもてはあらためしかども、裏は古しかりけるほどに、つまさきかた短かくて合はざりしかば、手づつなりとて姑のせんぎして腹立ちけるを、隣の人聞きて、もとより新しきに古

○忠仁公の宣へりとかや。花をし見れば物思ひもなしと言へるは、聞きよく面白ければ、さうに及ばずよしなき時、たけたかく見せんとして好みて文字を餘す事、中飽病とたてゝあり。たゞし信明朝臣、

ほの〴〵と有あけの月の月かげに紅葉吹きおろす山おろしの風

これは三十四字なれど、たけたかく聞きにくからずと覺えけり。二條院讃岐が歌に、

ありそ海の波間掻分てかづく蜑の息も吐きあへず物をこそ思へ

これは三十六字の歌なり。かゝる字あまりの歌ども多けれども、長高く聞きにくからず、さしも歌人のわざ量りがたし。今の字あまりの歌ども、皆病なきはなしといへり。

○彌生のはじめつかた、岡谷入道の許より櫻のさかりに一枝折りて、法橋紹巴に送りつかはすとて、歌を詠み添へてやる。

花のもとへまた此花を參らせばふたはなこゝろ妹やうらみん

紹巴返し、

花のもとへ又この花をさしそへてたゞひと花に妹とながめん

○小幡山城守入道がもとより、いが栗の十四五なりたるを、枝をりにして馬場美濃守に

しんみやう―針妙、物縫女

櫻ちる木のした風は寒からで空にしられぬ雪ぞ降りける

といふ歌をとりて、

雪晴るゝ雲まにさむき月影は水にしられぬ氷なりけり

と詠めりしは、是をこそまことに盗みせざるほどのなましんみやうの、衣盗みて小袖になしたるになん覺ゆると、和歌の六帖に記されけり。詞は古きを用ひ、心は新しきを可しとすとは侍れど、本歌をとるにその樣あるべき事なりと、或人申し給ひき。

○新古今集の歌に、よみ人しらず、

秋もあき今宵もこよひ月もつき所もところ見るきみも君

同集に西行法師の詠める、

如何すべき世にもあらばや世を捨てあな憂の世やと更に思はん

是等は萬葉集に詞を疊みて詠める本歌あり。

よき人の吉野よく見てよしといひし吉野よく見よよき人よ君

○一首の内に同じ文字なき歌あり。物部のよし名、

世のうきめ見えぬ山路に入らんには思ふ人こそほだしなりけれ

くらがり―
雁

たるも、世のあだし身のためしとおどろかれ、汗水になりて魂祭するに、はや鹿笛をひいやりと吹く秋の風に、棹になりて夜すがら渡るくらがりの空に、弓張月の入り残る影、初霜に冴ゆる鐘の音、弱り行く蟲の音をあはれと聞きけるに、簑毛なびけるぬれ鷺の、によろ高き莖に開き出づる白菊の花、うつろふ色をたすくる紅葉の錦のきれ〴〵に嵐に散るや、玉霰の板屋の庇に降りかゝるもすさまじく、雪ふる里の家々は窓さしこめつゝ、焚火にあたり居るぞゆるりとや思ふらん。せめて月日の移り行く有樣、難波津のよしあしをいはず、心の際を言ひあらはしなば、思ひをなぐさむにつけて、優しとも聞えなんかし。萬葉集の歌に、

あまのはら舟こぐかいの藥師寺あはぢの島に犁のへら

とよみしは、後先合はぬ歌のためしに定められたりと、淸輔の奥義抄には書かれたり。

雲間ゆく片割月の片割は落ちても水に有りけるものを

といふ歌をば、八雲御抄には、風情のいりほがとて出されしを、貫之が歌に、

ふたつなき物と思ひし水底に山の端ならで出づる月影

これよく相似たる風體なりとぞ。

曾呂利狂歌咄　巻第四

○天地のあひだにはらまれて、いきとし生ける者、いづれか歌を詠まざるとは云へど、大方詠まれぬぞ歌なる。八雲立つ八重垣を垣覗に覗きても、底さへ見えぬ山の井の、蛙の歌袋だに持たず、人の心を種とすと聞けども、さながら實なし麥の、吹けば飛び散るやうに生れつきたれば、如何におもひの土をほぜりて蒔くとても、ひとふしの言の葉の生え出づべくも覺えず。新婦の名の立つなれ〳〵茄子、ならぬものは歌なりと捨てにけり。春立つ今日より山も霞める目打ちしばたゝき、梅が枝に來居る鶯の歌、口を耳元までゆがめて、七草叩くも物ぐさげにて、呻まじりにねのびしける、小松がうれに吹通ふ風のまに〳〵、柳の糸を繰りたむる山姫の立ちはだかれる、ふともゝの花に心を懸けし兒櫻の、細眉を軒のつまに取殘し、あやめも知らぬ五月雨の雲の絶間より、ほとゝぎす幽に音づるゝに誘はれ、早苗取りて植ゑ渡すころも過ぐれば、耐へ難き暑さのまゝ、池の汀に立寄れば、梢涼しき蟬のもろごゑ、いくほどなくぬけがらの茅が葉に縋り著き

道員―道因歟

梅津のむめはちりやしぬらん

とぞ附けられける。今は句柄詞の卑きを謂はず、口に任せて百韻だに續きて、僅に指合を去嫌ふを、善き事に思ひたるいと口惜し。さればこそ茶杓竹にて打合ひ、袱紗物にて顏を拭ひ、たゞ數寄さへすれば、それ者とは云はるらし。

○昔俊惠法師と道員法師と、十首の歌合しけるに、道員は九首まけて一首は持になりぬ。次の日俊惠が許より詠みて遣はしける。

君が歌しかまの市と言しかどかちの一つも何なかるらん

道員この歌を讀まれて、いと口惜しく思ひ、住吉に參籠して祈りつゝ、重ねての歌合には、必ず勝させ給へと念願し、七日の後に下向いたし、その翌日紅葉の歌合とて、俊惠道員召合せらる。俊惠法師の歌に、

しなが鳥稻野芝山吹く風におろす紅葉か小屋のうはぶき

道員法師は右にて、

紅葉ゆゑふたゝび物を思ふかな又落葉さへ拂ふべしやは

と、詠みたりしかば、勝に定められ侍りし、住吉明神の御利生とぞ喜びける。

うみ—熟み、海

春の山ところ求むと云ふなるはふしたらぬ計見出でたるやも

女どもの中より返し、

　春の山はる〴〵みれどなかりけり世に所せき人の爲には

この事にて思出せば、過ぎにし春の頃鞍馬に詣でて、聞及びし野老もとめんと、此處彼處見廻り、山賤の家の後に行至りしに、顔にくさいなる婆の出でて、何者ぞ家近く來て物すとて、殊の外に叱りけるほどに、かくぞ詠みける、

　鞍馬山野老もとめて山婆に苦々しくもとがめられけり

○昔の俳諧體とは、今世に聞ゆる風情には替りしにや。凢河内躬恒、

　奥山に舟こぐ音の聞ゆるは

といひければ、貫之かくぞ附けける、

　なれるこのみやうみわたるらん

賴慶法師が前句に、

　桃園のもゝの花こそ咲きにけれ

とせしかば、公資朝臣

普賢菩薩ののり物―普賢は白象に乘れり、鼻の大きなるを象に比したる也

朝日さす軒の垂氷は解けながらなどかつらゝの結ぼるらん

普賢菩薩ののり物とぞ宣ひける。或時詠みて聞え給ふ。

懐かしき色ともなしになにゝこの末摘花を袖にふれけん

鼻のとがめをいたうし給ひて、

紅のひと花心薄くともひたすらくたす名をしたてずば

○玉葛の御裳著して内侍のかみになさるべしとて、冷泉院より勅の下りしに、宮々達より様々御賜物あり。末摘花の御許より、落栗色の昔物のやうに、古るめかしき衣を奉り給ふ袂に、

我身こそうらみられけれ唐衣君が袂になれずとおもへば

此君唐衣といふ事を常に歌に詠れけるを、源氏可笑く思ひ給ふにや、

唐衣またから衣からころもかへすがへすもからころもなる

と詠み給ひて笑はせ給ひけりとぞ。

○山近き所にてつぼさうぞくしける女どもの、物を尋ぬるかと覺えたるを、何業を爲給ふと問へば、野老といふものを掘るといふ。この答を聞きて詠みて遣はしける。

よし都が女夫の容貌は悪けれどせめて一めは秋の前かな

此歌を聞いて、されば夫婦して四つなるべき目の三つは失せて、唯一目残りたるこそ欺られけりと思へども、今更詮方もなくて返し、

三目悪く形あしきも人はたゞひとめ守るをよし都とせよ

○伊勢の國司の家に忍坂と云ひし人、妻を迎へけるに、聞及びしには替りて、疱顔にしてさしも見憎かりけり。されども怪しうはあらざりけり。さて親しき友達呼集めて、物せんとするほどに、家の老臣小監物を招くとて、消息を遣はしける奥に詠みて遣りける。

手に入れて見てこそ秋のいもが顔きめの悪を君に見せばや

返し、

いもが顔きめは悪くと味のえぐだになくば堪ふべしやは

とて行きて酒飲みつゝ人々興じけり。

○源氏物語に記せる末摘花と聞えし女房は、額廣く顔のかゝり下ふくらかにて、鼻の差出て色赭く、丈高く痩々しく、髪はうちきに一尺ばかりも餘りてなよやかに見ゆ。源氏の御歌に、

ひとめ—一妻、一目

えぐ—えごく

むせ―咽せ
六瀬
やせ―痩せ
八瀬
脇本―湧き

信濃川七瀬と聞くにいかなれば法師は獨りむせ渡るらん

西行返し、

信濃川七瀬わたると聞きてしが君が馬こそやせ渡りけれ

といひけるを、西行なりと聞きて、さればこそと驚き、いとゞ床しく興じけり。

〇西行法師北國修行すとて、越前國脇本といふ所にして、或家に立入りつゝ水を求めければ、主云ひけるは、此夏の旱に水涸れてなしと、はしたなく答へけるに、西行、

名にしあふ脇本なれば此里は水こそ澤にあらましものを

とて過ぎければ、主水を參らせしとぞ。

〇篠岡筑後と云ひける人の家に、久しく仕へし女房お秋とて、稚き時に疱瘡の入りて片目つぶれたり。かく不具づきければ、逢ふべき男のなくて四十に及ぶまで抱へ置かれしを、或人これを見て、破鍋に閉蓋といふ事の侍り、似合はしき男を配遇せんに難き事かと、よし都といふ座頭に媒介して、此不具をばふかく隱して、如何にも形好しと語るに、限なく喜びて語ひにけり。日數經て、さかしらする若き人々いふやう、我身こそ不具ならめ、又片目潰れし女房をかづきける事よと笑ひ合へり。さて詠みて遣はしける。

あま―尼、雨

よしさらば光なくとも玉と言て言葉の塵は君みがくらん

○西行法師河内國交野のわたりに行暮れて、小き庵に宿を借りけり。主は七十にも及ぶらんと見ゆる古尼唯一人居て、見苦しくとも明し給へ、されど参らすべき物に事缺き侍るこそ甲斐なけれといふに、尼の用意あるものを給べとぞ云ひける。さらばとて家の外に、柿の木の枝立延びて、高きに掛けたる干菜を、竹のほういはしさして取りておりけるに、闇かりければふみ違へて落ちけり。腰の邊強く打ちて、少時は起きも上らで呻き吟びたり。西行走出でて引起しけるが、顏憎さげなる尼の、聲慄きながら、腰を擦れと云ひければ可笑くて、

空晴れて雲の景色もよきものを事々しくもあま落ちぞする

と云ひけるに、あな憎くの法師や、和僧故にかゝる過失して、亡せなんとするに、何の戯事ぞとて呟く程に、外の家に遁げて行きけり。

○西行或時陸奥より中道に掛りて、信濃國に聞えし七瀬川に著きて、懷より麥粉を取出て食ひけるに咽せたりけり。目を見出で身を搖り、水を掬ひ飲みてやゝおこたりぬ。橋の上を馬にて渡る侍の見居りて、人してかくぞ云はせける。

六つばかりになりける子の、土なぶりして遊び居りけるが、内へ遁げ入りて、門に乞食法師の我を見るが恐しさにとて、興覺めて語る聲の聞えしかば、やをら立退きて打過ぎぬ。西住上人と二人連れて、都の内を歩きけれど、いと窶れて替る姿を見知る人もなし。西住が家の門に立ちて乞食しければ、内には妻や乳母稚き子を抱き擁へてよゝと泣きて、後に塗桶の蓋に米を入れて參らせしかば、回向して歸りぬ。思切りたる樣哀にも尊かりけり。程經て仁和寺の御室に、二人ながら召されて、月の百首和歌結縁せよと仰せけるに、西行、

　月の入る山に心を送り入れて闇なる跡の身を如何にせん

西住法師、

　ふりにける我身の影を思ふにもはるかに月の傾きにけり

年月隔たりて後に、西行は伊勢に下りて、二見の浦に庵をしめて少時住みけるを、建春門院少納言が西行が家集を求めて詠みて遣はしける。

　さてことに玉を殘せし玉札の類はまたも有りけるものを

西行返し、

がんだう―
強盜

といふ。怪しの僧や、如何なる寺に居ますぞといへば、つかれの雉の草隱といひて打過ぎけり。其跡に柴人の通りたるに、かの僧知るやと問ふに、宗鑑とて世に聞えし僧なりと申しけるにぞ、さてはと驚かれける。

○和泉國岸和田に、世を遁れて住みける法師ありけり。道德高く聞えしが、身の安かなるを求め、心の靜なるを樂みとして、行ひすまして居たりけるが許へ、親しき旦那の、道明寺の干飯と錫に酒を入れて來り、六月の暑さを散し給へとて詠める、

道明寺寺井の水にあらはせて參る心はすゞしからまし

僧喜びて、返し、

ほしいまゝ取つて食うて飲ならば我身ひとつの蛇鬼がんだう

○西行法師未だ憲淸と云ひける頃より、世を憂き物に思做しながら、恩愛の離れがたく覺えければ詠める、

山深くさこそ心は通ふともすまで哀は知らんものかは

遂に發心して修行しけるが、或時京へ上りて、上西門院法性寺の傍をとほりけるに、我子の稚きが如何生立ちぬらんと懷しくて、元の家を他處のやうにして少時見居たれば、

○白川の花見んとて四五人連れで行きけり。花の下にて破籠竹筒取出てものしけるに、年の程六十にもやと見ゆる乞食の、蓆を被きて傍に臥したるを、それ追ひ退けよといふに、男ども立寄りてやゝと起せども答もせず、足して踏起しければ、顔擡げて斯くぞ云ひける。

身は更に卑しけれども心には人をへだてぬ佛もぞある

男返りて斯々と語る。これは世を見限れる人の道を樂みて、衣食の乏しきを憂へず、花の下に憚らず、心のまゝに居たるなるべしとて、樣々詫言しけるとて、

形こそみのむしなれど人心底のふかきを思ひやるかな

といひけるに、顔を擡げ打笑ひて、

いにしへの花の盛りも時過ぎて今は朽木にすがる簔蟲

と詠みて跡なく失せにけり。

○京よりやむごとなき人々、山崎寶寺の花盛と聞いて、乘物遣り續けて行くに、貧しき僧に行逢ひて、寶寺は今幾程の道ぞ、花は猶盛りなるかと問はせしに、答はせで、

盲目と貧なる者は花も見ず嗅も知らねば散るも覺えず

咲く梅にあらぬ鶯ころすなりにほひもふかき僧の歌口

かくて此僧と親みて、かたの如く寺を建てまゐらせけるとかや。

○西山に住みける隱遁の僧、程學とかや聞えし世捨人の許へ尋ねまかりしに、さま〴〵の物語の序、疊紙に書いたる物を、取出て見せられしに、歌あり。

木には杉園の吳竹鑓の柄に人には乞食これ直ぐなもの

實にも山海の賊夜盗なんどは更なり、正直を造る人、かだましからぬはなし。我身一つの僞人を誑し僞りて物を掠め取る、これも盗の數ならんかし。殊に世を厭ふとて頭を剃り、墨染の衣を著て三千世界第一の正直なる佛を方人にして盗をする者滿ち〳〵て、是を尤めんとすれば、佛の衣の袂の下に隱れ居る、無智無道の法師は、社の鼠城の狐と云はまし。

○普光院殿彌生半、高野の山に詣で給ひ、奥院には大師入定の室の扉を拜み給ふにも、當來彌勒の出世三會の曉をや待ち給ふらんといとゞ貴く、骨堂に移りて深く無常を觀じ、笄を拔きて自ら御齒をおとして、納め給ふとてかくなん、

高野山おろす嵐の烈しくもこのはは殘れ後の世までも

普光院—足利義教

このは—此の齒、木の葉

もとめ―元妻、わかめの本

二佛の中間―釋迦既に去り彌勒未だ出でざる間

俣折して―枝の股より一部を折り取りて

淋しさを訪ふために參らするわかめを君が慰みにせよ

と書いて贈りければ、和尚喜びて若布の本を切りて、それに添へて返しける。

若布得てもとめ返さぬ物ならばふため狂と人のいふべき

○細川玄旨の召使ける中間あり。長大に肥りて心は正直なりければ、異名を大佛と呼び給ひ、常には庭の塵を拾ひ、朝ぎよめして能く使はれしが、法師に成り侍らばやと望申しけるに、許されて髮を剃りたるが極めて似氣なく見えしを、御前に召して斯くぞ聞えける。

大佛かしらをそりてまた佛これぞ二佛の中間のはて

○伊庭の玄蕃允と聞えし人、侍十人ばかりを具し、馬に乘りて京に上るとて、十禪寺に住む僧の梅の花咲きたるを一枝持ちて歸りけるを、其の梅分けて給べと云はれしに、これは佛に手向けまゐらせんとて持て歸り侍る。されど所望をばいかで空しくすべきとて、俣折して參らするとて、

我宿の佛に手向く梅の花折分けぬれば香こそしるけれ

と申したりければ、玄蕃感じて返し、

跳はねしける雀の心とて鷲のすみかを如何で知るべき

○昔比叡の山、北谷の覺成房の阿闍梨、月の夜寳の子におましを延べて、兒達數多諸共に眺めつゝ、松が枝繁りたる木の間より、疎に月の影さしけるを興じて、彼に立てるは男松か女松かと云はれしに、大兒は松ふぐりの有るからは、男松と定め侍らんと申されけるに、小兒は、月の障りの有るからは女松と見侍ると申されし、いと優しくて阿闍梨斯くぞ詠まれける。

男松とも我は得言はじ女松とも定めぬ影を月に任せて

○長尾景虎の家臣甘糟近江守とて、武勇の名隱れなきが、心さへ優しくて、寺の東堂の許へ甘苔を參らするとて、

東堂の衣の垢を振りすゝぎあま苔つけて早く召させよ

と詠みて遣はしければ、返し、

垢もなしと思ふ衣をふりすゝぎ甘苔附ば汚れやはせん

○江州北郡に眞慶房に阿闍利とて尊き聖の許より、近き邊に岩雪和尙のおはしける所へ若布といふものを遣はすとて讀み添へて遣りけり。

引かれしを、或人これを見て、
　布施取りて今永樂と思へども後の世を見よあく錢ぞかし
と書いて、寺の門に立てたりければ、和尙返しすとて詠みて立替へられたり。
　おどすともおそろしからず黑革の鎧にまさる墨染の袖
○銀の板金が許より、こま金の豆板が許へ歌を詠みて遣はしける。
　銀針の軸と法師の布施のかねひねるつらさは何れ勝れる
豆板のこま金返し、
　懷に法師の入るゝ布施の金捻るつらさは針はものかは
法師の布施取りて懷に入れつゝ、捻りて多き少きを試るらん、いと淺ましく可笑かりけり。
○洞家の長老、本來空の理を醒悟して行ひておはしけるに、遊行上人聞き及びて尋られしに、座禪にはあらで眠り居るを見て詠める。
　夜晝の念佛してだに覺束な眠り居りては如何のちの世
長老聞いて、目を擦り〳〵打笑ひて、

といひ遣はしければ、返し、

身をも身と思ふ時こそ浮世なれ太山も此も同じ隱れ家

○一遍上人念佛して諸國を廻り給ふに、京都に少時おはしけり。老いたる若き尼ども五六人を召使ひけり。法橋紹巴あれは何尼ぞと問はするに、上人旅衣の洗濯仕るといふに、人憎き心地して詠みて遣はしける。

上人のうすずみ衣桐のずゝあまけ離れぬ空念佛かな

上人返し、

水鳥の水に入るとも濡もせず海の魚とて鹹もあらばや

○土岐藏人の侍過つ事ありて、曹洞宗の和尚を賴みて走り入りけるを、樣々詫言せられしかども聞かずして、後には此寺の僧我許へ出入するなとて、侍を引出して打殺しぬ。かゝる政法荒けなき國の主には、何か心の止りて侍らんとて、出でて去にけるが、寺の柱に書付けける。

日本にはゞかる程の傘を持ちては簑はいらぬものかな

○奧州會津の國の守洞家の僧を供養して、母の追善のためとて、永樂の錢百貫を布施に

洞家―曹洞宗

蟲の音に替る哀は六田をも過ぐるを見たといふ人もなし

秋の山は下鳥羽にあり。鳥羽殿の御時、さしも絶景の築山にて、春の花秋の紅葉、殊更に池に差入る月までも、詠め一入の興ありけり。年經て今は名ばかりになりて、畠を作る地となし。引平して山の形もなく侍れば、

みづうみの桑原になるためしにや今は畠になる秋の山

淀の小橋の北の方大あらきの森を見て、

大あら木の森の下なる草の上に木から落たる猿ぞ我なる

斯く獨言ちて行く程に、元知れる人を便に河内に下り、尋逢うて打頼みつゝ、さるべき人の許に留りて、今は安らかに住み渡りけり。村里の師に倣ひて、萬の事を習ひ侍り。その里を高安とかや云ひければ詠める。

侘人も所を替へて住みて見よこゝろもやすし高安の里

○世を捨てたりといふ人、頭を剃りこぼして、和泉の堺なる町に少時止りけるを、或人歌を詠みて贈りける。

籠りなば深山をさして入りてまし此は市中の堺なるもの

兎もかうもせし人ー相應の身柄なりし人

○古は兎もかうもせし人、流石に卑しきが果にもあらざりけり。世に荒められ身も衰へ京を出て鳥羽に赴く。日暮れしかば、地藏堂に立入りつゝ臥せりけれど、夜寒の嵐はしたなく吹きていも寐られず。古き席を引被き、夢をだに結ばず、佗明して思續けゝる。

何となく物悲しくぞ思ほゆる鳥羽田の秋の夜寒なる身は

鳥羽と言へど飛れぬ川に渡すてふ小枝の橋を我はゆきけた

小枝の橋を渡るとて、

世をそむく身は谷川の蟹なれや横大路をも横走りして

横大路は世に横うちといふ。下鳥羽の南に在りて、車借の家々多く立竝べり。折節向ふより吹來る風に小雨降出つ、はしたなく面を打ちければ、横向きて行くとて、

零落し我身は人にはづかしのもりて餘れる袖の涙に

鳥羽の離宮の横大路より、羽束師の森を見遣りて、

六田の邊古は茅交に菫、萩、薄なんど生續き、鳥羽の面に程近くして、秋の夜すがら蟲の聲々心細く、物哀れなる處なりけるを、今は田畠になり、鴫の羽搔きだにも稀々なるやうに侍り。

めんざう―眠藏、寝間

○黒谷法然上人御年傾きて、今一度故郷を見んとて、美作の稲岡の庄へ赴き給ふ。垢付ける布の服に墨染の破れたるを召したるより外に何もなし。勢観房餘りに見苦しき御出立かなと申されしに、上人詠み給ひけり。

ふるさとへ歸るも今は恥ならず錦にまさる墨染の袖

故郷には錦を飾るといふ事を、詠み給ひける歌と覺えていと尊し。

○誠の道心にもあらで、世を厭ふとて東山に庵を結び、念佛して尊く裝ひ、無智無學なる癖として、愚なる尼かゝをすゝめ、物を貪りけるを、有難き長老と持噺す。賢き人此に詣でて、念佛の安心を示し給へといふに、聖は唯慾多く、念佛すれば罪消えて極樂に往生すといふ。それは餘に淺々し、何ぞ心得の候べし、聞せ給へといふ。それならば、一念彌陀佛即滅無量罪と唱へ給へかしといふ。これも人每に云覺えて、珍しとも覺え候はずといふに、さもあらば極重惡人無他方便と唱へ給へといふ。それも昔より能く知り侍り、今少し深き道理を示し給へといふに、聖いふべき事に詰りて、

六敷や南無阿彌佛陀を疑はゞ釋迦も我等も口過ぎはなし

とてめんざうへ逃込まれけり。

さて斯くぞ詠みける、

　借錢をわが首だけに大澤の池には魚の住むよしもなし

○夏は狐の鳴かぬものとや。若し啼く事あれば、深く忌むといふ。昔右大將賴朝信濃の國御原野の御狩の時、狐の啼きて侍りしかば、賴朝御心に懸けられ、誰か有る歌詠みて奉れと有り。武藏の國の住人愛甲三郎季隆斯くぞ詠みける。

　夜ならばこう〳〵とこそ啼くべきに淺間に走る晝狐哉

いしくも仕りたりとて、上野國松井田にて、三百町を賜はりしとかや。中頃小田原北條氏康の城中にて、夏狐の啼きければ、氏康、

　夏はきつねになく蟬の唐衣おのれ〳〵が身の上にきよ

と詠まれしが、其狐已が啼きつる所にて死にけるこそ、歌の奇特と申し合ひたりけれ。

○楊梅の北油小路の西の方は、六條堀川の御所とて、昔源九郎判官義經の家ありけり。土佐坊が堀川夜討も此處の事といふ。その古跡に、太刀懸の松とて木立枝たれて物古りたる大木のありしも、今は跡なくなりにたり。或人太刀懸の松を題にて詠める、

　太刀懸の松の葉掻きて火に焚けば亂刃と見ゆるなりけり

雁が云々ー諺に雁が飛べば石龜もじだんだ

いにしへの人は汀にかけ絶えて月のみのこる廣澤の池

秋の中比詠める、

廣澤の池に降居る雁がとべば底の泥龜じだんだやふむ

廣澤の東の方路傍に帶取池とて、昔は底深く波立ちて凄じく、池には主のありて、人を取らんとては美しき帶に化して、水に浮きて誑しけりと云傳へしが、今は荒れて僅に窪みたる水の中に、藻の生えて見えければ詠める、

水衣誰れきよとてか帶取の池の藻長く生えて見ゆらん

○槇尾は律院の寺なり。大納言雅經卿の歌に、

春來ても誰かは訪はん花さかぬ槇尾山のあけぼのの空

數多の比丘衆首を垂れて、目元は竹の子の番をするやうに見えて、戒品を破らじと守り居るに、突吉羅波羅夷月毎の布薩を致さるゝも、實にさる事ぞかし。

身は田地戒は鋤鍬機は加地子佛の種をまきのをの寺

大澤は大覺寺へ行く道にて、樹木茂りたるこもり江なり。俊成卿の歌に、

大澤の池の景色もふけ行けど變らず住める秋の夜の月

曾呂利狂歌咄　卷第三

○鳴瀧は七瀨の其一なり。御室の西十町ばかりに在り。西行法師の詠める、

しばしこそ人目堤に堰かれけれはては涙になる瀧の川

といふ歌を思ひ出て、

しばしこそ人目堤に耐へけれ腹はひもじになる瀧の川

○砥取の山は鳴瀧の西に在り。合せ礪を切出せり。高雄に續きたる山なり。

高雄なる砥取のやまの子規おのが刀をとぎすとぞなく

廣澤の池も程近ければ、斯くぞ續けゝる、

ひろ澤の池の鴛鴦劒羽を砥取の山に磨ぎみがくらん

此廣澤の池は月の名所ぞかし。世の好事の人は名月に嘯き、此處に惑ひ來て興を催し、歌詠み詩作り、酒飲み歌唄ふ。此池の月を見るには、池の西の岸に居て東の山の端より出る月の、水に映るを見たるこそ類なき詠めなれ。源三位頼政の歌、

寛平法皇―宇多天皇

此頃はながるゝ水をせき入れて木かげ涼しき中川の宿

と詠みけるも此の中川の事なり。

中川のかはばたちかきこずゑより高く聞ゆる空蟬の聲

○京うちまゐりの時、西郊わたりに行きけるに、仁和寺御室の東の方に、竝の岡とて小山ありて、上には一叢の松あり。世にいひつたふ、寛平法皇は延喜帝の不孝におはしますとて恨みたまひ、都のかた見たまふまじとて、此岡を築かせられしとぞ。さてかくぞ詠みける。

春秋のならびの岡の奥の山もみぢは高尾はなは栂の尾

此岡の麓より高雄に行く道あり。その山に木島といふところあり。折ふしわかき尼どもの見えければ詠める、

水もなく舟も通はぬ此島にいかでか蜑の媚めかるらん

忠仁公―藤原良房

所さだかに知る人もなし。爲家卿の歌に、

しめのゆき紫野なる柏の森葉かへずながら埋れにけり

たゞ古歌にのみ聞傳ふるはいと本意なし。

名所も認め失ひてしめのゆき杜こそ見えね柏野隠るゝ

千本閻魔堂の閻魔王の頭を掘出しける所は、釋迦堂のあたりなり。こゝを柏野とぞいひける。今はあやまりて頭野と呼ぶも覺束なし。

頭野はぢごくの道の戸口かや閻魔の首こゝにいでたり

○昔正親町の北、京極の西二町の間は忠仁公の家あり。その南に清和の院とて、清和天皇御誕生の地なり。忠仁公の御娘染殿の后明子の住み給ひしとかや。かゝる古跡も今は知る人だになく、民家となりにたり。

名を聞きて今は何にか清和院心を法にそめどののあと

○異國には河東、西河とて川を隔てゝ、名をかたどれる所々あり。日本にても西に桂川東に鴨川あり。その中間にながるゝを中川といふ。源氏の君御かたたがへの夜、うつ蟬の尼の住みける中川の宿といふは、此のあたりなるべし。光俊朝臣の歌に、

天をだに驅りし梅の根に入らば地よりはなど花のひらけぬ

と詠ぜしかば、神感おはしけん元の如く榮えけりとかや。かくぞ思ひつゞけゝる。

天かける梅のこずゑに鶯ののりて筑紫のあんないやせし

○いにしへ大内裏の時、紙屋院は野宮の東にありけるよし、古傳に記せり。平野より東の方、北野より西にあたりて、南へながるゝ水を紙屋川と名づく、世にかい河といふめり。むかしは此水にて紙を漉きて、圖書の別所これを採りて紙屋院に納む。宿紙と名づく。綸旨宣命なんど書侍る、今は紙漉く事も絶えて、川も流れの本意をうしなひ侍り。

今もその名に流れたる紙屋川かきにやる物は芥のみして

○時世にしたがひて、名所も變りて絶え行く事多かり。都の北に七野あり。内野、北野、紫野、萩野、滋米野、柏野、見苦野、その所々殘れるもあり絶えたるもあり。その總社は舟岡山の東に七野社とて今もあり。いにしへ賀茂の祭の時に、都より行く道は紫野を通りしにや。源の兼高賀茂の葵祭のかへるさを詠める歌に、

宮人のかざしてかへる葵草むらさき野まで緣なるかな

滋米野柏杜は、紫野につゞきてありと記しけれど、森の跡もなく野といひながら、その

おあし─お足、お錢
つく─搗く、付く、
連歌は前の句に付くな
肝要とす

生居もて死しても腹のいぬならばまづ一日も生たるがまし

と詠みて中直りしける。

○或人世渡る業に拙くやありけん、十二月の大晦になれど、借りたる物を濟すべきおぼえだになし。いとわびしくて詠める、

達者にも道はありけど越兼ぬる年はおあしを持たね故なり

○丹波の杵の宮に詣でて詠み侍る、

つくやうに守らせたまへ杵の宮米こそ持たぬ連歌なりとも

○菅相丞の住みたまひし第は、昔四條西洞院のあたりと聞ゆ。紅梅の色異るを植給ひて、かぎりなく愛せられ、その弟を紅梅殿とぞ名づけられし。後に筑紫の太宰府に流されて詠み給ふ、

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ

と詠じたまひしに、紅梅殿の梅一詠の内に、筑紫の配所に飛び行きて、庭の面に生立ちたり、その梅を飛梅と名づけられしとかや。安樂寺の別當僧堯孝が時に、飛梅の枯れ侍りしかば、

ば、女郎が詠みてつかはしける、

　風流男と我は聞けるを宿かさず我を歸せりをそのたはれを

此歌に依りてをそといふ詞はありといふにや。

○九條あたりに住みける人、下づかへの者につけて、いさゝかの事を言ひ上りて夫婦喧嘩になれり。妻腹立ちて、とかく思ひ切りて、身を投げて死なんとひしめきけるを、隣の人とりさへつゝ、けうくんしける中に、源氏かげろふの巻に、

　世の中に憂き度毎に身を投げば深き谷こそ淺くなりなめ

といふ歌の侍り。身のある限りは、いくたびも腹立ことなきにしもあらざるべし。あなかしこ、思ひとまり給へといふに、さも侍らば尼になりて、いかなる所にも引籠り、心安くせんといふ。それも身をはなれぬ心なれば、山とてもうき世の外ならず、世を厭ふとも、はじめ思ひ入りたる所も、後はものうき事あればにや、西行法師の歌に、

　住めば又浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

と詠めり。とにもかくにもながらへたる身は、心のまゝにはならずとぞ。昔も今もしかあるといふに、この腹立しき事は、生きても死しても同じ事と呟きけるを、夫聞きて、

花見んと—
「花見んと
群れつゝ人
の來るのみ
ぞあたら櫻
のとがには
ありける」
西行の歌

書きて、門の戸におしつけ侍り。

　花見んと入來る人を嫌へばやあたら櫻をきりが谷かな

○御鬚の塵を取りて諂ふ者は、出入する門にちごめきて、あまさかさまなる事をもたゞ可とのみ申して、鼻毛の數をよみて阿呆になしけるを、是に妖されて涎を流し、召連れて花見に出つゝ詠め居るありさまを、或人の詠める、

　櫻咲く梢をたかくふりあけて見るは鼻毛の長き春の日

○人々集まりて花に興じつゝ酒飲みけるに、鯛を求め出て料理すとて鱗をふきけるを見て、

　吹き散らす鱗は花か櫻鯛

といふ發句を出しけるは等類多かるべしや。

○幼き子の這ひ廻はりて、惡しき事するをおどして、をそ〳〵といふ詞は、をそとは獺の事なり。此獸は初めは戲るゝやうにて、後には喰付くものなり。昔大伴の田主といふ人は美男なりければ、石川の女郎思ひ懸けて、隣の貧しき女の眞似をして、闇き夜に火を求めに行きたりしを、田主はそれとも知らで、火ばかり遣りて空しく歸しけれ

たか野—鷹野

○都の北山高野といふ所に、犬櫻のやう〳〵咲きかゝりけりと聞きて、見に行きければ、櫻の下に歌詠みて札に建てたり。

まだらにも咲盛りたる犬櫻折る人あらば足にかみつけ

是は花の主の建てたりやとて、

たか野には必ずつるゝ犬櫻ひきをる人を咎めやはする

とて手折りければ、主聞きてやさしき人にこそとて呼入れつゝ、酒など出してもてなしけり。其後は折々音づれ交はしけるが、又の年花の頃人々いざなひて見に行きければ、主は身まかりけりといふに、いとあはれに悲しくて、かくよみて手向けて歸りにけり。

また來んと契りし花の主は早や今は此世にいぬ櫻かな

○伊勢伊勢守が庭に、伊勢櫻の今をさかりと咲きみだれたるを、やごとなき人々見におはしけり。かくて詠み給ひける歌、

神風も心して吹け伊勢櫻花のさかりをあだにちらすな

○或人の家に、桐が谷の櫻木立見事に咲きければ、好事の人多く立込み詠めくらし、歌詠み詩作る。なか〳〵世渡るいとなみに、障となるとて切捨てたり。如何なる人か歌を

今は櫻の名殘もなく、農人のすみ家となりければ詠める、

名にしおふ雲の林に來て見れば殘るさくらの朽木だになし

○墨染寺は深草の内にあり、墨染の櫻とて名木ありてこと古りて聞ゆ。古今集に上野のみね雄が歌に、

深草や野邊の櫻しこゝろあらば今年ばかりは墨染に咲け

と詠みしは此花の事なり。さて詠める、

咲く花に短册多くかけぬればみな墨染の櫻なりけり

○花のころ清水寺に詣でけるに、春の日うらゝかなるに誘はれ、花見過ぐしがたく、櫻の木の下にめぐりせはしく立寄る人、袂に散りかゝるは、雪かあらぬか白雲の、おほひ來るかとたはぶれ、詩作り歌詠み、筆美しく短册書きて、たわめる枝に結びながら、風にひらめくは、實に花に咲添ふ花なれや。しかま塚をすぐるとて、

はる來てはしかまのかちの古布子花見しらみや飛んで散るらん

經書堂にて詠める、

櫻にもあらで妙なるのりのはな經かく堂にすみぞめに咲く

誰がまことより――「話のなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけん」

と仰せられしかば、北のかた返し、

田宮にはあがりし御酒にかたそ木のかみさへ知らず我しらめやも

かく陳じけれど、後あらはれて恥見られけり。

○或家のあるじの女房、心ざまはしたなく、夫の友達入り來るをも、心に合はぬをば物も言はずふりくすべけり。かゝる女ぞと沙汰し合へりければ、男うたてしき事に思ひ、嘆じて詠める、

顏曲のわろきや小野のすみがしらおこればいとゞ燻ぼりにけり

○定家卿の建てられし時雨亭と聞えしは、都の北千本のあたりにありといへど、今は跡絶えて、さしてそこと知る人もなし。さてかくぞ思ひつゞけける。

だづぬれば時雨亭はあともなし誰がまことよりそことさだめん

○雲林院は紫野にあり、世にうぢ井と名づく。昔常康親王住み給ひし。遍昭僧正も暫時住みけり。其頃寛平法皇御幸ましくき。名木の櫻あり。そのかみ大伴黑主是を眺めて春を興ぜしと聞傳ふ。

黑主がながめし花やすみぞめの櫻のたねの初めなるらん

よよと一澤
山に

走出てやう〳〵引退け、女をとかく呼生けてけり。左兵衛督は連歌師可徹といひける人を召して、物語りしておはしける。かう〳〵と告げたりければ、可徹聞きて、いみじの馬やとてかくぞ誘みける、

故郷の人とや駒も陸奥のしのぶと聞けば袖やなつかし

○山名の某の家に田宮といひける童、顔容きはめて美しかりければ、いとほしみ給ひしを、北の方嫉む心深く、いかにもして此田宮が髪を切り、見苦しくなして疏ませ侍らばやと思ひ、山名の外へ出でし跡に、侍に頼まれたりければ、酒もりせさせて、かの童によよと飲せて、酔伏したるを前髪を残りなくはさみ落しぬ。山名帰りて是を見給ひ、こはいかにしつる事ぞと仰せあり。撫でて見るに髪のなかりしかば、童も呆れにけり。さてかくぞ詠みける。

これはまた誰が嫉みともしらにぎて田宮もいまは神さびにけり

とて引籠り居る。年頃北の方ねたう思ひて謀りける事よとて、山名はいとゞ憤りつゝ、北の方に向ひて、わが後をくらまかし、いみじき事仕出でたりけるやとて、

田宮なるかみおろしける神子の湯をたてゝ見ませば現れやせん

うはなりうち―前妻か後妻の許に亂入すること

といへりければ、仲文恥かしき事かぎりなくて、それより行かずなりにけり。

○或人傍に女房を語ひて、鹽干る間のつれ〴〵には忍びて通ひ侍りけり。此女の持ちける鏡の、殊の外に曇入りたりければ、男取らせんと契りてのち、遂におこせざりしを、女逢ふたびごとに鏡はいかにと責めけるを、ほどありて求めて取らせつかはすとて詠み添へてやる、

　鶴龜の齡もあかぬしるしとて鏡をやるぞ心くもるな

女かぎりなくよろこびて、返し、

　曇なき君が心をけふぞしる鏡のそこにちりも見えねば

○敎月上人とて貴き聖、國々を巡り修行しけるが、筑紫のある里がたに、女房のうはなりうちをなんしけるを見て詠みける、

　世中に女の心すぐならば女牛の角やぢやう木ならまし

○畠山左兵衛督の召使ひける信夫といふ女房、厩屋の前にて衣を張りけるに、三疋立ちたる馬の中に鹿毛なる馬、いかゞしたりけん、繩喰ひ切りて駈け出でつゝ、信夫が腰のあたりふつゝかに嚙みて振りければ、女悲しやとも得言はで絶入りにけり。有合ふ人々

おにの醜草―實は「しこのしこ草」なり

平仲文―仲文は貞文のあやまり、貞文渾名を平仲と呼ぶ

て死にけるを、此墳に埋みしが、今もその跡あり。さて詠みける、

　おそろしやあだちが原にあらねども金輪の鬼の籠る古墳

○鬼醜草とは紫苑と云ふ草の事なり。物忘れせぬ草といふ。萬葉集に、大伴家持が坂上大娘に契りて久しく中絶えしが、忘れんとすれどもわすられざる心を詠みて、つかはしける歌に、

　忘草わが下紐につけたればおにの醜草ことにしありけり

○平仲文忍びて通ふ女ありけり。或時かの方に行きてしめやかに物語して、此世ならぬ志を互にうらなく聞ゆるほどに、仲文硯の水を懐に持ちて、袖の下に祕し置き、女の目を忍びてとき〴〵目に塗りて、涙を流して泣く眞似をしけるに、女これを見附けて、ひそかに人して墨を摺りて水入に入れさせけり。仲文これをば知らで、たび〴〵目を濡らしければ、顏うち墨に汚れてことそぎて見えたり。女これを見て、あな淺まし、したり顏にぞ思ふらん。いでや妖を剝がさんと思ひて、鏡を取出して、これを見給へとて詠めりける、

　我にこそ辛さを君が見するとも顏にすみつく人の氣色よ

鬼のすだく ―「葎生ひて荒れたる宿のうれたきは假にも鬼のすだくなり」

ことは此故なるべし。五月玉ともよむなり。

菖蒲草ねたくも君に問ぬかな今日の心にかゝれとぞ思ふ

といふ歌も藥玉を詠ずとかや。

○鬼といふ事は、よき人の御前にありて、朝夕の食物盛りたるを、一口づつ食ひて試みする者をいふ、是毒の試みなり。亂れたる世には、殊更大將する人は毒のおそれあるによりて、鬼といふものを召置かれけるとかや。これを名付けて鬼といふは、伊勢物語に、鬼はや一と口に食ひてけりといふ詞を取りていふ事なり。又同じ物語にも、鬼のすだくとよみけるは、女を鬼とはいひけるなり。平兼盛が歌に、

陸奥のあだちが原の古塚に鬼こもれりといふはまことか

と詠みしも、女を鬼といひける歌なり。

○富小路の西五條坊門の南に金輪墳とて侍り。昔ものねたみふかき女あり、その男通ふかたありけるを、かぎりなく腹立ちて、頭に金輪を戴き、金輪の脚に火をともし、顏には臙脂を塗り、髪を亂して貴布根の明神へ丑の時參りをしければ、明神夢に告げ給ひ、貴布根川にひたりしかば、鬼になりて憎き人ども思ふまゝに捕りたり。後に降伏せられ

て門弟多し。其頃筑紫より荻田強之丞とて鑓の名人、出雲の國に來りて弟子を取る。兩家の弟子ども小太刀と鑓との勝劣を爭ひ、杉坂荻田が雌雄を決すべきになりたり。日を定め野中に出合ひて、杉坂まづ荻田が才覺のほどを見んとや思ひけん、人を遣はして言ひ遣りける、

古の賀茂の祭にあらねども長柄を取りてやりやつけなん

荻田返し、

春の山こだち下りと見ゆれども一東風あてば花や散さん

國中ゆすりけることとなれば、晴久より勝負の事を留められ、荻田は筑紫に歸りぬ。

○牛頭天王の御託宣に、我年の內常に眠りて、たゞ五月五日に一度覺めて、空に向ひて氣を吐き給ふ、其氣既に天が下に渡りて、雲となり雨りなり露となる、その地のめぐりによりて、毒ともなり藥ともなるといへり。さればにや五月五日朝露の落ちざる間に、百草を取りて黑燒にしつゝ藥につかふ事あり。百草といへば、其數百色といふはそれにはあらず、數の多きをおほやう百とはいふなり。是に思ひ合するに、端午の日に藥玉とて、百草を摺りて五色の糸につけて身にかくれば、その年の疫を拂ひ命もながしといふ

を忘れて返事なかりければ、これは主君を輕しむる所より起りたりと戒められけるに、玉川申しけるは、柳意軒より薫物を給はり、消息に一首の歌を送られ、その返し仕うまつらんとものして、心のうつけたるよし陳じ申す。その歌に、

牛ならで匂ひをやるぞ薫きもののけぶりは袖につなぎとゞめよ

さてその返しは、いかゞ案じけると仰せければ、玉川、

薫きもののかをる一ふしうたかたの袷のそでにとめて聞かばや

歌の道には武き武士の心もやはらぐとかや、了俊これにめでて許されしとなん。

○賀茂川逍遙し侍りけるに、大木の皮を押削りて、かの字となの字を句毎の上に置きたる歌を書付けたり。

かど〳〵に蚊遣火焚くやかもの里

夏なれやなすびと梨のなりみだれ

いかなる人にかありけん、面白くて書添へたる、

あまかゝのあさ草とるやあさばたけ

○尼子下野守晴久の家に、杉坂角彌とて才覺勝れたる侍あり。卜傳一流の兵法の名を得

惜むこそ
「惜むこそ惜まぬ假の宿なるとなどやをしむと夕波の」謠曲江口の文句

が、強く惜みければ、かさねて乞ひにつかはすとて、

　惜むこそ惜まぬ狩の犬なればなどやおしつけ貰はざるべき

亙理此歌にめでて犬をつかはすとて、返し、

　のぞむをば惜むは是も狗なりと思へば君にほえ〳〵ぞやる

○江州月稱院にて日吉大夫が能をせしとき、內山助作といふ人、太鼓を打ち損うて大夫の仕舞惡しかりければ、

　太鼓をばうつゝなげにもうち山の神の咎かばちのあたりは

○八月十五夜の月見んとて、廣澤に行きけるに、すみのぼる空の氣色隈なく照りかゞやきて、水底にうつる月影、いつよりも殊更に面白かりければ、

　望月の鏡のいへは廣澤のいけのふた取れみるぞうき草

○美濃國土岐合戰に打負け、城郭殘らず沒落しければ、

　ときはれどのりだちもせぬよの袴みのは破れてひとのにぞなる

○今川伊豫入道了俊の家に、玉川松之介とて幼きより召使はれ、その間には學文を勉め、才智の聞えあり。了俊も祕藏の者に思はれしが、大事の使を承はり、三ケ條の內一ケ條

て、よろづともしく、かつ〲に月日を送りしかば、いとゞものふりて年久しき家なれば、自ら苔ふかく、朽ちかたぶき、臥しながら星を見るほどに、詮方もなかりしが、いかなる果報のつき時にや、醫師を習ひしに、よく病の癒えければ、隙なく人の賴みて、今は貴族高位の御許に召され、家づくりいみじく、人多く召使ひ、時ならねどいつも春めきけり。故鄕の友達尋ね來て、住家の目出度く榮えたるを見て、

いとゞしく過にし方の侘しきにうら山しくも住る家哉

○杉本小四郎といひける人、年久しくきぢ染のきる物一つを持ちて、晴がましければいつもうへに引張り出でけるを、或人、

我身ても久しくなりぬ杉本が麹塵の小袖幾世經ぬらん

○平俊方朝臣の家に、おいぬとて女房達のありてやゝもすれば、蟲氣起り腹痛みける程に、醫師の點を受け灸治しけり。殊の外暑しとてよゝと泣きけるを、俊方障子を隔て聞給ひて、かく詠みて恥しめらる。

蜘だにもすゆるや糸に聲はせずいかに侘しき犬の永ぼえ

○亙理石見守が家に、逸物の鷹犬二疋まであるよしを聞きて、石川某わりなく申されし

いらなく／＼
事々しく

らんとて、佛壇を淸めさせ、日蓮上人の病卽消滅の曼陀羅を持來り、是を懸け參らせ、供物いみじく飾りそなへ、師弟子三人聲をはかりに二時ばかり御經讀みけり。今は早や名殘なく落ち侍らんと勢ひ聞ゆるに、人皆さこそと貴く思ふに、翌日いつもの頃昨日に替らず顫ひ出ければ、寺へ使を參らせて、かくと告げければ、上人聞給ひ、定めてかけとてさるものぞかし、つね／＼信心の淺きは、一往にて落ちがたき事も侍りとて、いらなく唱へ上げて經讀みけれども、いさゝかの奇特もなし。或人いふやう、此方の長老に賴まば、たゞひとまじなひにて、影もなく落ち侍らんといふに、此ものうさは、宗旨を替へるとも苦しからじとて、呼迎へしに、十念を授け念佛一迫申されしに、そのまゝ落ちて涼やかになりて、彌陀のちかひは、現當二世の御利益かなとて念佛宗になりけり。上人聞付けて、その曲者佛の敎うけごはれずとて、

念佛にて疫よし助と思ふとも善の恨よ後世はあし助

といひ送りければ返し、

八軸のけうとき聲に隙どりて疫は癒ず陀羅り品かな

○田舍より京へのぼりて、二條堀川に住みけるが、貧しさは田舍もこゝもおなじ有樣に

茶菓子、綺麗にものし、濃茶うす茶、とり〴〵に疎からぬさま、その道の捨てがたきものをや。茶には七種の名園とてあり。

森岩井宇文字河下奥の山麓の朝日琵琶を挽くなり

又此宇治川は、源は近江の湖水より勢多の橋の下に出でて、田上鹿飛なんど云ふ所を經て、巽の方より乾をさして流るゝ、其の下は伏見の豐後橋より淀川におつる。卯月の末つかた此處は螢の集り得ならぬ興を催せり。餘所の螢よりは一際大にして、光殊更に見ゆ。世に言ひならはし侍る治承の昔、頼政入道が亡魂にて、今も軍するありさまとて、夜に入りぬれば數千萬の螢川の面に群り、或は鞠の大さ、或はそれより猶大に丸がりて空に舞上り、とばかりありて水のうへにはたと落ちて、はら〳〵と解けて流れゆくこと、幾群とも限なし。螢見とて行きけるによめる、

來て見れば晝は藍ぞめ宇治の川夜は螢の緋縮緬かな

○四條坊門に扇をあきなふ人、よし助とかや言ひける、秋の初つ方より瘧といふ事を仕出だし、さま〴〵藥を用ゆれども落ちず。後には栽期になり日毎に起りしかば、詮方なさに寺の上人にかくと申しければ、疾くにも承はらぬことの口惜しさよ、忽ちに落し侍

曾呂利狂歌咄　巻第二

○都の南宇治の郡宇治の里は、名にしおふ古より茶の名所ぞかし。茶園おびたゞしく植ゑならべ、其處等小屋多く造りて芦簾入れ置きたるは、八月十六夜の初霜より茶園に霜覆すといふ爲なるぞ、おろそかならず覺ゆ。土をそゝり、やしなひを入れ、草を引き、蟲を拂ひ、露障なく、小枝ひとつも折らさじと、空吹く風に手を當て、あらき雨には傘さしかくるばかりにおもひたるを、彌生のころ木の芽僅に出づれば、茶摘の女ども手毎に籠持ちて摘みたむるを取集め、甑に入れ、焙爐に掛け、茶師の家々數十人の女鐵漿くろく薄化粧し、赤前垂して一やうにいでたち、打幷び鳥の羽持ちて、聲可笑しく節おもしろう歌唄うて、上しも中に茶の葉を選り別くれば、茶利の人は、色と形と氣味と匂をこゝろみすぐり極めて、諸國うへつがた御物の壺に詰めて渡し遣はす。袋には何がしの茶と、銘と名とを書き付けて、それ〴〵賴み來れる御方、あまたの壺にほと〳〵にまかせて詰め納むる、そのほど立ち込み、入り込むともがらに、さま〴〵もてなし、會席、

やしなひを入れ―肥料を施し

我戀は―慈鎮和尚「我戀は松を時雨のそめかねて眞葛が原に風騒ぐなり」

とて、芝草繁き所あり。我戀は松を時雨の歌は、此にて詠ませ給ふといふ。これを飜案して、

　我戀はまゝを日暮に待かねてあばらの下に蟲騒ぐなり

○祇園會に祭り渡す山鉾は前後を爭ひ、六角堂にて鬮取して、番々を定むといふ事を詠める、

　前後をあらそふ鬮や何のかのひゞの山鉾わたす祇園會

○去ぬる辛亥の彌生の頃より百日のほど、鞍馬の毘沙門開帳とて、京田舎詣で集ふ人幾人とも限なし。さらばと思ひ立ちて只一人詣でけり。散り殘る櫻を見て、

　いぎあらばしばれ鞍馬のうす櫻手折るは人の落花狼藉

と打詠めて、僧正が谷に行きつゝ、

　僧正が谷に嵐のふき落ちて木葉天狗や飛んで散るらん

足曳の一後鳥羽院「足曳の遠山櫻咲きそめて長々し日もあかぬ色哉」

○その上鳩吹といふ事世に流行りて、人の爲しなり。兩の手を組合はせ、掌の内を空にして吹きぬれば、鳩の鳴くやうに音の出る。これを吹く人に相圖をする事あり、又は獵師の鹿を待つにも吹く事あり。今は知る人も稀になりにたり。古歌に、

丈夫の鳩吹く秋の音立てて泊れと人に謂はぬ許ぞ

まぶしさし鳩ふく秋の山人は己が住家をしらせやはする

○山賤のむくつけきが、腰を引きて山鳥を持ちて、京に出でつゝ賣り廻ぐるに、大方買ふ人なし。卯月の始つ方、さしも永き日にやうく疲れて、或家の門に休みけるを、主これを見て詠める、

足曳の遠山鳥を賣る男なかくし日をあかず歩りきて

○花見にとて友達語らひ、東山の方彷徨ひつゝ、處狹く立集ひし花の本に捩寄りて、人より懇に花をぞ見るらんと見苦しきまで物しければ、長樂寺のわたりに鐘の聲聞ゆ。はや入相に及びけるや、實に春なれど、樂には日をも短う覺ゆとて、

撞きいだす長樂の寺の鐘の聲櫻の花のほかにきこゆる

歸るさの途の序、智恩院に立入りけるに、門の内に慈鎭石あり。其より上の方に眞葛原

年たけて―西行の歌「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」

いひ椀―言はん

あるじめが姿形は柳屋ぞたをやかなれど心いばら木

これより女房心を持かへ、酒も世竝に賣りけりとぞ。

○或人寄集りて遊しけるに、酒飲み種々興じけるほどに、かたはし言出でけるやう、盃を替へて飲侍らんに、古歌なりとも當意なりとも、一首を連ねて替侍らんは面白かるべし、これこそ實に今日の遊の本意ならめとてよみける。

　年老けて又飲むべしと思ひきや命なりけりさよの中椀

と詠みて、たぶ／＼と受けて飲みければ、次に在りける人、

　紅葉せぬ常磐の山に住む鹿は己啼きてや秋をしるわん

と詠みて、又受けて飲みしかば、又其次なる人、

　年のうちに春は來にけり一年を去年とやいひ椀

とて差出す。皆云ふやう、歌の下の句の七文字の足り侍らずと尤めしに、いやとよ、先づ酒を注ぎ給へ、其後跡をば申さんといふ。さらばとて酒を注がせたれば、一息に打飲みて又差出しつゝ、今年とやいひ椀とて、又差受けて飲みければ、滿座笑壺に入りて笑ひ興じけり。

紛れ有るまじと思ひながら、忙しくて行燈を書きたり、中なる墨は火を點したる所よと

いふに、可笑くて笑ひければ、大に腹立しくなりて斯くぞ呟きける。

行燈も提灯もはた闇の夜に火さへともせば同じ明さよ

○東國の住人名和角之丞とて武勇の者、小鷹狩に出でて、筒竹の酒に醉ひつゝ、木の本

に臥せりて日暮に歸りけり。主人より召さるゝに、醉ひ臥して參らず。例の給醉かなと

いへど、流石に武勇の者なれば、あたら男の瑕かなとて、詠人知らず歌を書きて送る。

大酒を飲むは浮世の癈物いふもいはれずくさり繩かな

角之丞これは下戸の爲たりける業にやとて、返しを書きて立てたり。

上々の上の字附きし上戸をば下々の下の字の下戸が妬て

と詠みければ、腐繩にはあらで、云はれたる名和殿かなと人皆興じけり。

○萬里小路に柳屋とて名酒を造る者、名は八田の某といふ。女房は顔容美しけれど、

心樣はしたなく、酒の直も他所より高く少も許さず。されども酒の善かりければ、人多

く買ひに行きけり。如何なる者か爲たりけん、歌を詠みて門口に立てたり。

柳酒直こそ高けれほとゝぎす本尊かけて憎いやつだな

かうわ―乞ふは、幸和

五月雨や天のさかてに降りつまり雨の脚程かうわ迷惑

酒屋の主返し、

五月雨に日脚も見えず入相の暮ぬと告る鐘ぞうたてき

○唐橋の邊に酒賣る翁あり。本より無筆にて、帳に繪を書きて記憶とし、十二月廿日ばかりに、物書く人を頼みて酒手の書付せさせ、借りける人の許に遣はして、代をば取る事なり。繪の書きたる有樣色々なる中に、馬の前足の間へ人の頭を差入れて、嚙付きて居る所あり。是は如何なる事ぞと問へば、馬を喰ふ所は馬工郎と云事なり、馬の俣を喰ふ所は、又九郎と云心なりといふに可笑くて、斯ぞ詠ける。

馬工郎と又九郎とをひとつ繪に書くは誠に覺え難らう

○大津に酒賣る人、物をば得書かで帳には繪をかきて記とす。七月八日九日の頃、人を雇ひて書立の日記を書かせけるに、己は帳を前に控へて、それかれと云ひて書かするに、四角なる物の中に、細き墨少し付きたる繪あり。我ながら忘れて暫案じつゝ、吃と思出でたり。これは宗珍といふ人の事なりといふ。其故を問へば、さればこそ、宗珍より酒を借りにおこせたるを、如何書きてよからんと思ひしが、宗珍とは提灯を書きたらば、

成ても酒を
ー正しくは「なりてしもがも酒にしみなむ」

酒甕に我身を入れて漬さばや醤色にもほねは成るとも

斯る歌の類萬葉集に見ゆ。

中々に人とあらずば酒壺に成ても酒を飲みてんものを

○或人強ちに酒を好みて云ひけるは、我死ば備前國の土とならばや、酒壺に燒かれて酒を飲むべきにと云ひけり。嚴しき上戸にこそ。晉の七賢が酒を好みし事を詠める、

古の七の賢き人どもも欲するものは酒にしあるらし

○京の樋口の町に酒賣る人あり。十二月の大晦日に、田川某が許へ酒手を乞ひに遣りけれ共得爲さず。物憂き事に思ひけれど、爲べき力もなくて、斯くぞ詠みて遣しける。

醉果てた酒手を我にこひ衣幾度きてもやれる氣はなし

酒屋の主此歌の返しすとて、

こひ衣心強くも今日の日にやれぬと聞けば我ぞ恨る

○四條油小路に幸和といふ醫師、七月十二三日わたり酒手を濟まさゞりしかば、酒屋より櫛の齒を挽く如くに、人を遣りて乞ひ立てしに、爲すべき覺えだになく、詮方なさに歌を書きて遣はしける、

に仰せて、住吉へ行きて尋ねさせられし、其の夜の夢に業平の詠める、
思出て神代の事もわすれじな昔ながらの我身なりとは
これに依りて業平を、住吉明神とは申しけるとかや。業平朝臣は東に下りて逝去りけり
と云傳へし。下總國牛込と云ふ所に業平塚とて有り。隅田川にて舟より落ちて空しく
なれりとて、塚も舟共に築込めたりと云習はせり。
亡き跡のしるしは此所に在原や塚のかたちは舟の業平
○櫻非基佐貧くて人々侮りけるにや、歌の集に入れられざりければ、歎き思ひて詠める、
足なうて登り兼ねたる筑波山和歌の道には達者なれども
○奈良の帝の御時紀の貫之と聞えしは、紀の文本が子にて泊瀬に住みけり。元服し實
定とぞ云ひける。内へ召されて御前にして、首を傾くるとて冠を落したり。極たる非禮
の御尤め如何あらんと、人々淺ましく思はれけるに、冠を押直して、
今よりは紀貫之と召さるべし實定ながらかむり落せば
叡感斜ならず興ぜさせ給ひげり。御書所を承り、古今集を撰びて奉らる。大方ならぬ上
戸にてやありけん、

深山なる榾に喰ひ付き鳴く螢聲なかりせばこれぞ狐火

斯く爭ひて是非分ち難し。法橋紹巴と云ひける連歌師、太閤秀吉公の御前に出られし時、秀吉公斯く仰せけり。

奥山に紅葉蹈分け鳴く螢

紹巴心得知らず、螢は鳴かぬ蟲と承はりしと申すに、御氣色を損じて、天が下を手に入るゝ程の事に、鳴かするならば、螢とても鳴くまじきかと宣ふ。細川玄旨御前に有りて、螢も鳴くものにて古歌に、

武藏野の篠を束ねて降る雨に螢よりほか鳴く蟲もなし

と詠みたりと申されしにぞ、流石に和歌の道廣く學ばれし故にこそ、かゝる證歌をも出されたれと御感あり。此歌は聞歌とて、實には螢の鳴くといふ證歌にはあらず。時に取りて螢も鳴くと申し慰められ、引歌に取りなされける、歌道博學の心ばせなり。

○宇治の中納言藤原朝雅卿、熊野に詣で給ひしに、和泉國大鳥郡にて、在原業平驪の馬に乘り、七八人具して勢餘りて行合ひたり。朝雅卿夢のやうに覺えて、如何にと問へば、常には住吉に住みはべるとて行別れぬ。恐ろしくて帝へ奏しければ、行平の中納言

菓物を籠に入れて、中納言の前に打置きて、愛敬ある貌付にて、物いふけはひいと艶に優し。定家卿手を取りて、戯言を云ひ懸けられしに、如何に仰せ給ふとても、御色の黒う御座しますものをと云ひければ、中納言殿取敢へず、

葛城の神はよるこそ契りけれすがたに依らぬ人は心を

と詠み給ひしに、女房は返しもせで入りにけり。

定家卿猫の妻戀ふるとて、喧すしう鳴きければ詠める、

羨まし聲もをしまぬ野良猫の心のまゝに戀をするかな

或人の歌に、

戀をして佛になるといはませば我ぞ淨土の主ならまし

不言戀といふことを詠める、

夏は扇冬は火桶に身をなして情無き人に寄りも付かばや

○螢には聲の無きにや、宗祇の引かれし證歌に、

こゑ〳〵に鳴く蟲よりは中々に鳴かぬ螢の思こそ増せ

宗長は螢も鳴くものとて、證歌を出されし、

南無藥師|
正しくは
「南無藥師
あはれみ給
へ世の中に
あり煩らふ
も病ならず
や」
待宵に|
「更け行く
鐘の聲きけ
ばあかぬ別
れの鳥はも
のかは」

こゝに在り。

　亡跡のしるしの塚に立寄りて泉しきみの花を手向くる

○紫式部は越前守爲時が娘なり。始めは藤式部と云ひけるが、源氏物語を作りて紫上の御事を殊更目出度く書き現しける故に、紫式部とは名づけられけるとかや。式部が墓は都の北閻魔堂の左に在り。白毫院と名づく。前より語る五人の女房は、上東門院の御時に梨壺の五人の歌仙と言はれて、何れもとり〴〵に目出度き歌よみ出しけるが、又何も〳〵貧しかりけるとかや。

○昔さしも名有る人多くは貧しく聞えし。小侍從局は誠に貧しくて世に立交はり難く、因幡堂の藥師に祈りて詠みける、

　南無藥師癒やさせ給へ是やこの貧しきも亦病ならずや

藥師の御利生にや、德大寺實定公に思はれ參らせて、裕になりけるが、待宵に更け行く鐘の聲といふ歌詠みて、待宵侍從といはれしとかや。

○權中納言定家卿は、色黑く疱顏なりしとかや。或時內より召されて、殿上の大床に參り給ふに、程ありて、二十ばかりの女房の形清らなるが、柳の五に紅梅の袴蹈みしだき、

とて引籠りしが、家の荒れ渡りて、蛛のゐまとはれ、垣壁疎なりければ詠める、
我宿のあるじも今は歎かまし蛛の八重垣隙もなく見ゆ
○和泉式部は大江の雅致が娘なり。母は昌子内親王の乳母辨内侍とかや。式部は歌の道に名を得しが、或時詠める、
人は只厭れぬうちに世を出でよ情の有るを思出にして
娘の小式部あな心とまりて聞ゆとて詠める、
人はたゞ厭かれて後に世を出よ情の有れば名残惜きに
式部は保昌に連合ひて丹後に下りぬ。小式部が未だ文も見ぬといふ名歌を詠みけるが、十八にて空しくなれり。その年の暮に上東門院より美しく衣縫立てさせ、小式部と書いて何時もに替らず給はりければ、母の式部いとゞ悲しくて詠める、
諸共に苔の下には朽ずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき
其迄は後世の事露ばかりも思はざりしを、三十五の年より小式部に後れし歎の餘り、佛の道に入りて寺に引籠り、念佛唱へて往生を遂げけるとなり。京極三條の南に誠心院とて式部が影あり。四十ばかりの美しき尼、墨染の衣に花の帽子冠れる姿を描せし、其墓も

聞くぞ―正しくは「見るぞ」

捨らる—正しくは「捨てつる」

公に思はれしが、すさめられ奉りて、娘の中務を停めて、我は故郷に歸るとて、

　厭はるゝ我身は春の駒なれや野飼がてらに放ち捨らる

かの住みける所、今は伊勢寺と名づく。中頃地を掘りけるに、伊勢が持ちたる鏡なんどの出でたりと聞傳ふ。

　書置きし伊勢物語ぬしや誰昔々になりにけるかな

○清原元輔逝去りて後は、家に住む人も無く成りて、軒も傾き垣も破に、苔深く荒にけるを、娘の清少納言親の跡とて、行きて住みけり。枕草紙とて、有難き草紙を作り出て世に持囃す。ある冬の末つ方、雪の甚う降りけるに、赤染衛門訪ひ來て、家の有樣隔の垣もなく倒れて、哀なりけるを見て詠める、

　跡もなく雪降る里の荒れたるを何れ昔の垣根とか見る

○赤染衛門は時望が娘にて上東門院に仕う奉り、和歌の道に廣く學びて、宇治殿の世の盛りなりし事を記して、榮花物語と名づく。いと面白き文なり。後に如何なる思の有りけるにや、萬につけて味氣なく覺えしかば詠める、

　身を隱す方無ものは我ならで又は燒野の雉子なりけり

の二の丸に搔込められ、外へは見えずと聞いて詠める、

人丸のしるしの塚は二の丸の石垣の本となりにける哉

○小野小町は衣通姫の流を汲んで、和歌の道に名を得し人なり。後に年老いて都を離れ、逢坂山の麓に住みにけり。淺ましき藁屋の內に居て、昔を思出でつゝ、

花の色は移りにけりな徒に我身世に經る眺せし間に

と詠みけるも百年の婆となりての歌なりとかや。小町が墓は都の北市原野邊に在り。深草の少將百夜通ひて死せし所とて其しるしの跡有り。小町と少將との墓向合はせて見ゆ。又或說には、小町は物の怪付きて、奥州まで狂ひ行きつゝ八十島にて死す。其墓所を市原と云ふとかや。

陸奥とこの市原とおなじ名の小町が墓のまち〳〵の跡

○伊勢太輔は伊勢物語を目出度く書著はして、世の持囃も高く聞えしが、後に衰へて久しく住渡りける京の家を錢に賣りて、

飛鳥川淵にもあらぬ我家もせに變行く物にぞ有りける

と詠みて山城の淀の西に引籠りて世を過しける。その上若かりし時に、枇杷左大臣仲平

せに—瀬に、錢

曾呂利狂歌咄

卷第一

○柿本人麿は和歌の祖師にて、歌仙の長と崇められ、世に有難き歌ども數々詠み給ひけり。如何なる國の誰人の子と定かに知る事なし。唯是化生の人にて、後には天に昇られしと云傳ふ。八尾大臣の姫宮は、文武天皇の后にて御座します。此御許へ忍びて通ひける罪に依りて、上總の國に流され、三年經て召し返されけり。又或女を戀渡り、年頃情無かりしかば詠み遣はしける。

一昨年も去年も今年も一昨日も昨日も今日も我戀る君

石見の國高津浦にて逝去るとて、

石見潟高津の松の木の間より浮世の月を見果てぬる哉

西國に下りし時、舟に乘りて石見潟を行きけるに、太山の里に人麿の墓はあり。今は城

石見潟―「石見のや高津の山の木の間ゆもわが振る袖を妹見つらむか」を誤り傳へし也

書林　心齋橋筋　河内屋喜兵衛

續一休咄終

夢閨銀燭繡簾月　白日青天咲朗吟

○一休和尚如意庵へ行きて見給へば、品々校割の道具有り、その道具の箱に詩を題して歸り給ふ。

將常住物置庵中　木杓笊籬掛壁東

我無如此閑家具　江海多年簑笠風

○或時江の邊を行給ひ、薄氷を見て、

但看江海薄氷池　不管人々心上危

可憐極苦目前急　迷道衆生終不知

間の一生もまた此の如し、眞を假とし假なるを眞とす、此意を詩に作りて示さんとて、

一棚頭上現全身　或化王侯或庶民
忘却目前眞木橛　癡人喚作本來人

○一休の庵へ來りて、常に敎をうけし僧あり。或時久しく打絶え來らざるを、いと不審に思ひ給ひ、しれる人に尋ね給へば、その人のいひけるは、誠に此僧いかさま十日餘にもなるらん、傷風の病發り、以ての外のくるしみ、脈もあしく命も危く見え候、ある醫師の、此病には葱を服せば、よろしからんと申せども、此僧五辛をば深く忌みて、用ひられず候と語りければ、一休是れを聞き給ふとひとしく、葱をば買はせ、人に持たせ病僧の方へ詩をそへて遣り給ふ、

病僧大苦發傷風　死脈頻々命欲終
如來新病用牛乳　莫忌凡身藥艸葱

○ある人一休の像を畫きて、一休の庵へ持ちて參り、是に讃を遊ばし給はれと願ひしに、いと安き事なりとて、そのまゝ硯にむかひ、筆を染めてさら〳〵と書いて遣し給ふ、

傍若無人閑逸心　奈何床下法塵深

しにくる人もおちざらめやは

とぞ附參らせける。一休驚き、いとやさしくおぼし給ひ、かへすぐ打吟じ、猶それよりいづくとしもなく行廻り、都にぞ歸らせ給ひける。此遊女、佛といふ名を折返し、地獄と付なる心から、女とはいひながら、無智愚昧の男には、遙に生れ增り、遊女にはと惜しき志の人哉とはいへども、また遊女とてやは賤むべきにもあらず、代々撰集に檜垣の女、難波の白女、江口の君が言の葉など、その類かずく多ければ、けしうは心置くべきにこそはあらねど、必ずも又さげすむ事もなかれかし。

○一休和尙詩文の事

あるとき一休和尙、人形廻しを見給ひ仰せけるは、彼が所作誠に面白し、十善帝王の御尊貌をもうつし奉り、或は武士、又は民賤の女など、それぐのすがた、その態を移し、おのづから活きて働らくが如く、見る人また正身の人と思ひなし、をかしい事には笑ひ、怒る時にはともに怒り、愁歎の切なきには、猶ともに涙をながし哀を催す、これ何者ぞと思へば、元は木の檪、今の木のはしにて作りたる物を忘れたるなり、されば人

周防の室積、又は江口神崎の里などは、古よりその名に高き遊女町にて、人の覺も世の常ならず聞えし。又爰の高須の町も、中興ならぬ女肆なれば、右に等しく萬に付けて物事優しく、夕より家々の門々には、夥しく火をともし立て、うたふ聲琴の爪音、哀情未練のたはれ男の浮れそめて、わが身をはまり、身命をも拋つの族さのみ咎ともいはれじと、凡欲無垢のお身ながらも、世の中の有樣を思惟ましく〳〵、かなたこなとし給ふ内に、ふとおぼし出さるゝは、誠や此里の遊女に、かの清盛の寵愛ありし佛御前の事を思ひて、打かへに地獄とつきし遊女ありと聞たれば、尋ねばやと思召し、そこらにありける人を語ひ、かねてかゝる事を聞きし、此里にや有りけん、聞かまほしと問はせ給ふに、かの人さん候、それは此所にて名高き遊君、それ其そこに、白壁造の家こそ、御尋ね候地獄のおはする見世にて候へ、いざさせ給へ、敎へ參らせんとて先にたちて連行き、あれあの濃紫の綾に、春の野をぬはせたる小袖著しこそ、かの地獄にて侍るといへば、一休格子の外面に立ちより、良しばらくうちまもりて、

聞しより見て恐しき地獄かな

と遊ばし、高々と口ずさび給へば、地獄やがて、

籠を提出んとするに、籠の内をころ〳〵ところげあるく程に、もしやは落ちけるかと、そつと手を入れて探り見れば、鶉にはあらで、大きなる芋魁なり。彌五郎取出して見て、扨々また和尙の御計略に大きにはまり候、扨無念至極と笑へば、一休はいやさればこそ、始よりふける譯もしらず、芋のやうな鳥とはいひしとへり給へば、彌五郎も大笑して御暇申し歸りける。

○一休和尙泉州高須の町遊行の事

時しも彌生、都の花の春に暮れて、いづくを求めんよしもなけれど、又津の國難波の春も、いとゆかしく思しけるにや、一休和尙供人をもつれ給はず只一人、世を雲水の身輕に出立ちて、名におふ御津の浦づたひ、海づらを見晴し給ふに千鳥かもめの夫婦づつ、波間にかよひ磯に求食て、おのが世過に隙なき風情、げにや能因法師が、心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを、と詠ぜしも尤らしく、けしきよく打詠め、ほく〳〵とさすらひ給ふに、すでに住吉の社に詣で、とても遊行の序なれば、いざさらばこれより和泉の國堺の浦、高須の町をも日暮に一見せばやと思召し立寄り給ふ。いづれ

絜矩―大學に絜矩の道といふ語あり人情の自然にもとづきて大公中正に神を處するをいふ

所は舛を以て、算術の邪正を檢して見るにはあらずや、しかれば樣々算法に根氣を碎き、首を搔て思案せんより、舛にて計るが遙に道理に合ふなり、よつて昔より律度量衡規矩準繩の八法を立て萬事はみな數にしたがふ、猶重ねていはん、若徑一丈高さ二間にも及ぶ匿形なる桶に、水何程入るぞと問へば、是升にても積がたし。近道に桶屋を呼び積らする事理が早し、何事も世間はみな一人として計られず、その物は、その物を手馴れたる人に積らするが算法なれ、絜矩の奧義なりと說き給へば、愚痴我慢の算法人も、一時の理に詰られ閉口し、こそ〲と歸りける。その跡へ彌五郎とて、平生飼鳥好きの人來り、此程はお見舞ひも申上げず、御音信の爲參りたりといへば、和尙はよく社來られたり、先こなたへと連行き給ひ、良しばらく四方山の浮世話の隙に、彌五郎傍に鶉籠の有りけるを見附け、和尙には鶉を飼せ給ふか、扨世話なる物を、かく申せばいかゞながら、御出家のお慰には、何とやらん似合ぬやうに侍れば、我等に下され候へかしと望ければ、和尙はされば世間にことの外飼鳥がはやり、拙僧も羨しく思ふ故ゑ、今朝さる方より求めたりしが、新鳥にて籠馴ず、ふける譯も知らず、一向芋のやうなる鳥なり、それとも望ならば參らせんと仰せけるまゝ、彌五郎嬉しく、しからば申し請け歸らんとて、やがて

も、それにてはつい大根が皆にならうがと笑へば、和尙かの人の顔をつく〴〵見て、いか樣にも一理屈有るものと見給ひ、されば此大根にかぎらず、今の世の人は浮石を以て大根を洗ふが如し、好色淫事に身を委ね、肌の白いを美しい〳〵と思ふ內にわが氣根を削り、身をない物となす事よと、立ちながらの一休の答へ、算者も頓て一休と心得、扨は和尙にてましましけるぞや、我は都の町人算者にて候が、積り物の手に餘りたるあり、もし和尙算術にも精しくおはすならば、御積り給はれかしと、備前瓶の爰かしこへごみたるを取出し、是に水何ほど入るや、御積り御覽下されといふに、和尙はかの德利をひねくり廻し、是に水の入ほどを積れとや、いと安き事なりとて、頓て舛漏斗をもつて、とうとうしゆんと積上げ、水壺舛貳合五勺入とぞ仰せける。算者大きに腹をたて、和尙には人を淫氣にし給ふ物かな、何ぞや舛にて積る事を、はる〴〵是まで問ひに參らん、凡かくの如くの姿異物なる丸きものは、玉闕積の法を以てこそはしるなれども、もし和尙にはそのうへに、智たる內法、珍術もやあらんかと存ぜしゆゑ是までは來りたるに、舛にてのお積とは、片腹いたくをかしうこそ侍るといへば、和尙色を正しうして、おことが算術の奧儀を知らぬゆゑ、尤種々の法を以て、算木十露盤にて計りしるとも、つまる

走の本―流し元

ねばとて朝夕禪の飯を食みながら愚なる問ひ事、夫を喩へていはうならば、其方が鼻から洟が流れるといふやうな物なるはと仰せければ、小僧暫く俯いてゐたりしが、良有つて尤とや思ひけん、いかにもさうぢうといはぬ計に、頷いてこそは居たりける。

○一休和尚算者と問答并鶉を飼ひし事

世の人一休和尚は今の代の活佛、森羅萬象何に付いても闇からず、希代なる活僧哉といひあへり。然るにその頃、都戻り橋の邊に一人の算者有り、法術をよく諳じ、易數をも探り見る程の堪能なりしが、一藝に勝れては、おのづから慢心の氣をこらずといふ事なし、我よく算法に通じ世間には算者なきと、我慢のみ日々に長ぜし。一休和尚よろづ何に付いても活達にましますと聞きて、此算者思もふは、佛法に社は殊勝なりとも、算法には疎くおはすらん、いざ行きて問答して見ばやと思ひ、紫野和尚の庵にぞ參りける。折ふし和尚は走の本に、浮石を以て大根を洗ひ居給ひしに、次第に細りけるを、彼算者庵へは案内も乞ずして、はて是なる坊主は氣違にやあらん、大根を浮石にて洗ふ事はと、いかに御坊、その大根は藁の苞などにてこそ洗ふべきに、浮石にて洗ひ、尤も美しくはなると

槩一升にて物をはかる時上をならす棒

ふくれず身の徳にはならぬ事よ、此道理を思ひ合せ、眼で見た毒で死せんとは中々存じもよらぬ妄說、氣遣せず勝手へ行きて、今こそは誠の非時を申付くべし、したゝめよく酒も過し歸られよとぞ仰せける。男此道理に安堵し氣を取りなほし、さて勝手にての御馳走の非時を打食ひ、機嫌よく念比にお暇申し、嵯峨野へこそは歸りける。それよりいかな噎もせず、隨分と息災にて、身の一期には八十八の槩をも切りしとか。世間の俗說にかゝはらず、無益の思惟を費さぬこそは、大事の身命をよくたもつの元ならんか。

○小僧一休和尚に字の訓を問申せし事

ある徒然に、一休和尚は庵の軒の簾を引上げ、靑山を見晴し給へば、五つ六つ四つねにゆく烏梢に暮る蟬の音蛙のつらへは筧の水、本來無心の水こそは我等が氣に入の友、孔子も斐たる君子とは、かゝる泉水の隈岩に碎く流をこそは賛られけんと、獨心をすまし給ふに、小僧茶を持て來り和尚へ來らせ、扨御前に畏り居たりしが、いや申し合點の參らぬは、天下と書きてあめが下とかな付け有り、然れば天をもあめといひ、又雨をば元來も雨と申す、どうやら紛らはしく侍るといへば、一休可笑く思召し、ヤイ小僧、いかに年がゆか

も膳もて來べしと仰せけるまゝ、頓て膳をすゑたり。一休膳に向ひ箸を取り、いやおことはわが指圖の時まで箸をとらるゝなと仰せられ、お手前には心よく汁も菜も再進、物したゝか打食ひ給へと、かの男には箸をとれとの御挨拶もなきまゝ、膳には居りながら、じろ〳〵と打守り居たる内に、一休膳のうへ殘らず喰仕舞ひ、食の湯まで呑ませ給ひ、膳をとれと仰せけるに、小僧見渡し、客は未だ箸もとらねば、まづ和尙の膳よりとらんとするに、ハテ客より社と仰せけるまゝ、手もつかぬ膳ながらすでに上げて勝手へたち、皆膳もあげ仕舞うて、扨おことはよき時節に來られ、麁菜ながらも非時にあはれける事よと仰せけるに、彼男堪へかねて、いや膳には居り候へども、箸をとる事お指圖をまてとの仰せ故、見合ひて居り候うちに、膳は上げさせ給ひぬ、尤お非時の膳には居り申せど、食べねば結構とも麁菜とも、御返答も申されずといふに、その時一休、されば其事よ、最前おこと三毒を見たとて、その毒氣に中り命を失はん事を悔歎かれぬ、今また一汁五菜に据り、目で見た計で食はぬ故、甘い味ない返答がならぬとある、其三毒も其通り、もし三つの毒を生でくらひでもしたらば、毒氣に中り死もせられめ、目で見た計で死んとは丁度たゞ今膳に据り、旣に食ふと甘いに極つた膳部の香氣を、嗅いだ計では腹が

入佛事―せずともよき人の追善供養をすること

草の茂りたる畦道を、何心なく京の方へ來りしに、かたへの堀端に蛇と蛙と蜒、にらひ合ひて居たりしを見附け、暫く詠めて居たりしが、誠に此三つの毒虫よる時は、互の根性邪を諍ひ、立所に死し、是を見し人も、又卽座に三つの毒氣を嗅ぎかけ死すると言傳ふるに、果して右の毒虫三つとも見てゐる内に居ずくみに死したり。彼男此事を心に籠めて、扨是非もなき所へ來かゝりし事よ、すでに三毒にらみ合うて死するを見たれば、我またその毒氣に中つて、命を失はん事治定なり、此上は力及ばず、よし死するとも、都紫野一休和尙の御勸をも受け、此世の業を果し、來世をば助らんと、急ぎ一休の庵室に來りしが、和尙は今日は去人の入佛事とて、非時の料に付せ給ひ、漸非時も出來しまゝ、膳を出さんとせし折から、かの男來りしを、日比お目をも懸けらるゝ若者なれば、頓て奥へと招き給ふに、此男和尙の前に畏り涙を流し、右の三毒の物語り我命までも失はん事の悲しきまゝ、有難き御勸にも預りたく、是まで參りたりと申すにぞ、和尙は扨おことは珍しき三毒を見し事よ、夫故その毒氣に中り、其方の命も心もとなしとや、はてそれも因緣、誓ひ死ねばとて、生あれば死あり、それ程悔むべきにもあらず、よしそれは夫に今日はよき時節にて、志の非時出來たり、報謝に逢はるべし、それ此人へ

納受―持ちこたへ
目連―釋迦の十大弟子の一人
富樓那―これも十大弟子の一人
槃特―釋尊の弟子中の愚痴第一なる僧

耳の持溜なく、和尚も氣の毒におぼしめし、色々と折檻をもし給へども、とかく今習ひし事、後には早跡かたなく忘れ、物一時納受のなきまゝ、和尚も今は早もて飽満み給ひ、目連の賢しきと、富樓那の口利根なると、槃特が愚痴なると、いづれはかゝる事もある事に覺えかぬるを覺えさせんとする、故手間隙入りてわが世話もやゝ苦勞なれば、覺えよき事を教へんとて、天下泰平國土安穩といふ事をくり返し／＼教へ給ふに、いかさま二十日計もかゝりやう／＼と覺えけるが、一休知久に覺えたかと仰せければ、天下泰平國土安穩の事にやと申せば、和尚笑はせ給ひ、もはや覺えたり、今こそはわが弟子なりとたはぶれさせ給ひける。扨それより二三日も過ぎ、賀茂の里まで用事有りて狀箱をもたせ使に遣されしが、門前にて寺内の寶樹庵の圓宅といふに逢ひしが、かの狀箱をふところへ押込みしに、圓宅すかさず、敵を見て旗をまくはと問懸しに、知久天下泰平國土安穩と答へければ、圓宅も流石は一休のお弟子と肝を潰し、わが寺にぞ歸りける。

○一休三毒を見たる人を教化し給ふ事

都の西嵯峨野に一人の男子、なま心有る者なりしが、頃しも卯月の末長雨の晴間に、夏

相傳祕藏し所持せらるゝ事、古筆目利の何がしに聞きしぞかし。

○一休の御方へ二見の禪尼より頭巾を參せられし事

都の町に二見氏の禪尼、一休の道德を尊敬し、寒暑の便をとひ參らせ、折ふしを忘れず音づれ、いと念比に歸依せられけるが、比は霜月の末、極寒近く冷えしかば、文して巾上げられけるが、消息のしるしにとて、とくさ色の頭巾を仕立てさせ、和尙へ參らせられし。一休その返事に、

かづかする青のり色のづきんこそ二見のあまのしわざなりけれ

と遊ばしける。ある人のいはく、此歌は近き比、畏き御位の人の御歌ともいひしが、わが覺えしは、一休和尙の御詠歌と聞きはべりしまゝ、誤れるをも知らず、爰には書加へ侍るならし。

○一休御弟子手柄の事

一休のお弟子に知久といふ小僧あり、生得もの覺えあしく、何を習ひ何を聞きても、籠

付た佛になり、九品蓮臺の上に座らうとは、娑婆にての欲から見えぬ來世までの大欲心、かう見た時には、愚痴に後世を願ふよりは、無念無想に願はぬ方がましならんか。とかく何事もその中を執といふ事こそ當然の理なるべしや。

○一休愚なる人に狂歌をしめし給ふ事

ある佛性なる律義の人、一休の庵に來り、われ和尙へ尋ね參らせたき事こそ侍るは、人死しては極樂へ參ると承れども、我等存ずるには、現在の果を見て過去未來を知るとかや申せば、それがし如き此世にて貧苦に暮せば、前生にて惡事をなしける報いで、今生此の如くならん、猶又來世の事も此世の貪欲愚癡の罪業の重ければ、どうでは善所へは行かれまじく存ずる、もし又佛を賴み、佛果をば得る時は、いかなる所へか參るやらん、承りたく候といへば、一休

うまれ來たその前生を知らざれば死にゆく先は猶しらぬなり

とぞ仰せける。さあらば迚の事に、是に遊ばして給はれとて、紙取出し書付けてもらひ歸り、床にかけ置きて、明暮思案せられしと承る。此墨跡、都のある町人、今の代までも

三遍くる〳〵とまはり、にやんといふ聲を、夫婦への形見にして死したり。さる程に此夫婦、理なくも歎きかなしみ、子か親かに離れし如く愁傷の餘りに、何とぞ紫野一休和尚の御引導を受けたくおもひ、右のよしを申上げ請待せしに、一休たゞ常體の平人の引導とならば、早速かく容易には來り給ふまじきが、猫といふがをかしさにや、使と打連れ來り給へば、夫婦は悦び、右のよしを申上げて、何とぞ來世成佛の御引導を御勸め下され、四足の生を轉變なし下され候へと、涙を流しお賴み申せば、一休をかしさながら、氣遣はるな、拙僧よく引導して佛果を得さしむべし、夫婦もそれにて聽聞あれとて、

汝生有りし時は鼠を捕る事を得たり。その能を以て人間に飼れ、一生安樂なり。汝また何ぞに生をかへて、佛をとる事をせよ、喝。

とぞ引導し給ひ、和尚はすでに歸らせ給ふ。かの夫婦たゞ今の一句をわが身の上に悟り、それより誠信心の後生願ひにぞなりけるとかや。一休後に仰せけるは、此二人が俄に後世を願ふこゝろ、猫の引導に、汝來世にて又なんぞになりて、佛をとる事をせよと勸しを聞いて、おもしろい所に氣が付き、欲から菩提に入りしぞかしと、大笑し給ひける。いかさま濁世の大凡夫、何ほど後世を願へばとて、金色の肌になり、寒う肚餓うない箔の

馳走答拜―
寵愛

○一休和尚猫の引導の事

都の巽 音羽橋とやらんに小き酒屋あり、夫婦仲よく、浮世睦じく友挊にせしかば、いつしか身上も廻しよく、相應に人をも遣ひ、朝夕の起臥も、いと心安く暮せしに、此夫婦年頃廿年近くも相馴れぬれども、いまだ一子とてもなく、何とぞ佛神へ申子にてもとおもひ、奇瑞ある宮寺に歩を運び、靈佛靈社へその御願のみ、いろ〳〵と心を盡くせども、元より子に縁なき約束にや、佛神また納受もましまさぬにや、何の驗もなきまゝ、夫婦も扨は前生にてまかぬ子種、此世にて芽出でぬとて、佛神を御恨み申さう樣もなしと、あきらめて居たりしが、世の中に子のなきもの、必ず猫を一向に愛著するといふ事。誠なるかな此夫婦、ひとつの女猫を寵愛し、晝は夫婦の懐へ互違ひに抱入れ、よるはふたりが中に寢させて、子といふとも、かくはと人のおもふ程に祕藏し、肴も骨をよきてくらはせ、鰹節も土佐を撰み、ずゐぶん氣を付け、二人が中の物忘れ草と悦び飼置きしが、昏愚の畜類、人間のうへをこして、馳走答拜にあひ、因縁過分の理にや憎まれ、二三日物をもくはず、鳴く聲も哀に、既に病付より四日目の朝、四足を震し毛をすゝだて、二

續一休咄　卷之四

○一休和尚蜷川新右衛門子息の方へ壽の狂歌を送られし事

蜷川新右衛門嫡男ことし已に十一歳、生得器量よく發明にて、父母の寵愛餘にこえ、手裏の玉とかしづき育てられしが、近しき一家の内に、相應の娘ありしかば、互にその約束をなして、行末八千代の玉椿、かはらぬ中に釆納をも取りかはして、めでたく許嫁をせられけるが、日頃うやまひ申し、よろづ何事をも先和尚へと思入れたる心から、早速此よしを御知せ申上ぐれば、一休聞き給ひ、限なく悦ばせ給ひ、やがて壽の一首を送せ給ひける、

尉となり姥となるまで白雪もふりわけ髮のゆひ名付かな

と有りければ、新右衛門夫婦悅に堪へで、思ひけらしとぞ言ひをりける。

釆納—結納

おもひけらしとぞ—伊勢物語の詞を用ひたり

たると承る、それでもさして只今のお咄しごときの、奇しい不思議も候はざるは、御信心が足らなんだか、但は行力か薄きにては有るまじきやといはるれば、和尚は眉を顰め、あゝ新右衛門、コレ水には平等の德あり、百千劫を經ても傾かぬが水の德、石に不滅の能あり、阿僧祇を過ぐるとも朽ちぬこそは石の德、正法に不思議なし、猫は禿げても猫なり、杓子はわれても杓子なり、奇妙奇特は己が氣よりの迷ひなりと仰せければ、新右衛門此一句に歸伏し、又いつもの通り、御尤に候と閉口し、感心してぞゐられける。

網戸―竹にて編みたる戸

しみて窓よりそつと覗いて見しに、かの僧經を讀誦せらるゝ口の内より、此の如くの光り出しとなり、見附けし人いと不思議の思をなし、明朝にもなれば人々に語りしに、聞く人みなあやしみ驚き、されば不斷勤行の信心賢固なるゆゑ、さうした不思議も有るならんとぞいひし、又かの僧もしたしき人に語りけるは、われ目を閉ぎ御經を誦せること百遍計にもならん比、目を披いて草庵を見れば、四方の壁悉く透通り、庭の外面わづかの小草迄も鮮に見ゆる、いと不思議とおもひて立ちて見れば、窓も網戸も、宵にさしたるまゝにて、成程かたく閉ぢて事ゆゑなし、又座にかへり經を誦するに、透通る事さきのごとし、是摩訶般若心經の力にてこそあれといひしとか、その事を思へば、丁度硝子の魚、外は見へ透きながら、心まゝに出る事叶はず、しかればかの法師も、不斷讀誦の功積つて、そのやうに庵の内から、世間の事が見え透いても、見え透いた計で、さして夫ほど德もなし、自然は盜人の用心にや成なん、右の外には畢竟、無益の事かと思はるゝと仰せければ、新右衛門承り、いかにも仰の通御尤には候へども、それも懈らず讀經の功德積つてこそ、さやうのふしぎ奇妙なる事も候、さればそれから見た時は、わが祖師の達磨大師は九年まで面壁し、その間言はず眠らず、一心不亂に座禪をば遊ばし

御心よげに坐し給ひしが、かの床の硝子の水に入れし小魚をば御覽じ、いかに新右衞門、是は定めて御子息の手習の目覺しか、いづれ夏のもてあそびには、是に過ぎたる涼しさはあらじと仰せけるに、さん候是は愚息が方へ、去る人暑忘れの爲にとて送りたり、しかし僅の水の內、狹くて住憂るべし、夕去にはおのが氣まゝの川へ放たせ參らせばやと、存じ侍ると答へられしに、一休われ此小魚を題にて、ふと狂詩一聯浮めり、聞きて給はれとて、頓て筆を取りて、

謀₂費長房仙術壺₁　乾坤天碧虛言都
比₂之海水精魚詠₁　其色以₂青論₁有無

と遊ばし、いや人の聞も恥かしけれども、一興なればと仰せけるに、新右衞門成程いかにも面白さうに存じ侍る、さればかの藥賣の老人が、一つの壺の內を見せて、費長房を欺し、丁度この小魚の小さき陶の中に居ながら、透通り見ゆるゆゑ、娑婆世界の廣い事を見る心、御秀逸にて候といへば、一休重ねて、いや新右衞門、是に付て思出したる事有り、昔々いづくの事にや有りけん、一人の僧、摩訶般若心經を不斷懈怠なく讀誦せられしが、或夜そのあたりの人、此僧の庵室を見るに、光明赫灼として見えしまゝ、怪

ふらすこー
硝子壜

○一休硝子の魚に詩を題し給ふ事

蜷川新右衞門一子よろづ發明にて、やう〳〵修學のころほひなればと、手習讀書に暇なく、弓箭の家とて、幼とはいひながら、武藝の稽古にも心をよせ、猶その隙には繪書き花結び、茶事の遊びのかず〳〵、親の身の欲から唯少しの間もなく、よき事をのみ學ばせ、引立つるやうにぞ養育他事もなかりし、しかるに水無月の半、土用の暑を涼しめの便にもやと、ある人一つの硝子に小魚を入れ、かの一子の方へ目慰にもと送られける。子息は世に嬉しく床になほし、打詠めるけるに、透通りたる硝子の内を、心よく遊ぶ魚の、下へなり上へなり、首をもたげ尾をひそめ、いと面白さ類なくぞ悦び居られける。折ふし一休、此ほどは便も遠し、幸ひ近所まで來りしまゝ、音便のため、又は炎天歩行もいと堪がたく、しばらく爰にて風納れ、夕かげに社歸るべしと、立寄りたりと仰せければ、新右衞門夫婦、誠によくも御立寄り下されし、まづこなたへ、この一間こそは南うけにて涼しき風も入り候へば、御晝寢にてもまし〳〵、夕かげ迄はゆる〳〵と打くつろがせ給へかしと、さしも丁寧に御饗應申されける。一休他事なく悦せ給ひ、

心空及弟す
—悟入

又問ふ、世法の有樣はいかに、

和尙こたへて、

何事もみな僞の世の中に死ぬるといふぞ誠なりける

庄左衞門おし返し、

何事もみな僞の世の中にしぬるといふも誠ならねば

答へて曰く、

生死もみな僞のよの中に誠といふも何あらばこそ

一々問ふ言葉の下に歌を詠じ答をばなし給へば、庄左衞門眞實心に貴くおもひ、有難さ肝に銘じ、賴み參らすべき導師かなと、いよ〳〵道を示し給へ、かくては濱の眞砂の數々いひも盡さじ、まづ御暇申すにて候と、枝折戶の邊りまで歸りしが、手をはたと打ち、一大事の安心忘れたり、佛にはいかゞしてかなりけるぞと尋ねければ、一休さやつは曲者かなと思召し、それはいと安き事かなと、やがて尻ひんまくり、雷の如くなる屁を一つこき給ひて、佛には此所にてなるはと仰せられければ、庄左衞門驚き、扨聞きしよりも活大禪師かなと、心空及弟してぞ歸りける。

○一休奈良の里にて問答の事

一休和尚奈良の薪といふ所に、折々はおはしましけり。其あたりの村に庄左衛門とて、禪法に好たる俗人有りしが、いつとなく聞法の功力、禪の活機を探り、此一休の活僧に入らせ給ふを聞傳へ、導師にも頼み參らせたく、常々思ひゐたりしに、或時かりの草庵にゆき、扉をほと〳〵と音信れば、和尚はそも何人やらんと問給ふに、庄左衛門こたへて、佛法修行の大俗にて候と申せば、一休はや佛法いかにと問ひ給へば、庄左衛門、

佛法は升で計らぬ米五升たかぬ鍋にて食となりけり

と申しければ、一休その息もひかぬに

たきもせで食となりける鍋ならば升も杓子も何たのむらん

庄左衛門つゝと内へ入り、

如何成か是無始終。

答へて曰く、

深山木の時雨に染もみぢ葉はそのさくために落葉とぞなる

髪をおろし候には、棄恩入無爲、眞實報恩者とやらん申す文を授り、得道仕るよしかねがね承りしに、一向左樣の事もなく、情なくも心なきそらせられやうに社侍るとお恨を申せば、一休扨その方には拙僧が存ぜぬ事をよく知れり、その文が唱へたくば、はて剃た跡でも、さしてそれほど延引なる事もあるまじ、しかし出家といふもの、畢竟娑婆の名聞を遁たるといふ印に、頭の毛を浮世の塵と見て、跡から除つて捨るが塵埃を離れし氣味、されば今爰にて、譬喩を以つて道理を聞かさん、あれあの棕櫚の毛、時々には毟つて、時となく坊主にすれども、その度ごとに棄恩入無爲、眞實報恩者の文も授けず、しかれども木を坊主にした因緣、佛道にもいと遠からず、浮世の塵を掃を能とし、娑婆を廣く掃廻つて、帚の毛も切果て、境界にすりからして、すでに又坊主に成た時は、もう今は用がなしとて、二階の隅へ投入れられたその時が成佛、誠に浮世の隙があいたといふ物なり、しかれば棄恩入無爲を、百萬陀羅唱へても、誠の坊主にならぬ内は、とかく娑婆世界に遣れねばならぬ事よと、合點のゆくやうに敎化し給ふ程に、かの父もいづれは文盲にもなきゆゑ、當然の理に伏して彌殊勝に、渇仰し奉りしとや。

かゝれとて
ーたらちね
はかゝれと
てしもぬば
玉のわが黒
髪は撫でず
やありけん

なれば、欲に迷ふ心から、ふと誠にさうぢや、これ一休の筆作に極まれり、しからば彌惣をば何ほどに嘖はたくとも、此一通にこえたる利運は得まじ、まう是切にと一人がいひ出せば、惣々が其氣になり、ついそれ仕舞に彌惣が事こそ治りたり。一休のお弟子の筆といふ事を知らば、まだ此分には濟まじきに、和尙のお手と心得しが、彌惣が爲の仕合。誠に正直正路の愚鈍は又、天是を捨ず、憐愍の相ありとは、かゝる事をや。聞くさへもをかしかりき。

○一休お弟子得道の事

ある人一子を一休のお弟子に參らせ、すでに今日得道と有りしまゝ、和尙の庵に來り、かの兒の衣服を改め、髪を洗はせ、遍照僧正が、かゝれとてしもなでずや有りけんと詠ぜしを、今更思出られ、一子出家すれば七世の父母成佛する善事とはいひながら、親心にはちと胸しをれ居たりけるに、和尙はかの兒をよび、前になほして、髪をしみだき剃刀おつ取つて、ごそ〳〵と除つて仕舞せ給ひ、箕の髪の落を、これぞ浮世の塵なり、捨て來べし、はてよき小僧と笑はせ給ふに、餘り無造作なる剃髪、父は和尙にむかひ、抑

畚―物を運ぶ竹籠

近頃もつて御無理のいたり、しかしながら此女、その身に種々の道具あり。是はいづれも不足なく、最前一所に返し申す。まづ顔は杓子頭は擂揆、籠耳で目は皿で、手は搪搔足は鍬篦、立た姿が竪臼に薦、へたばつたが石磨なり。尻は大きな畚尻。その癖上戸で樽は底ぬけ。欲の深い心の熊手までも、殘る所なく返し申す、改めて請取れよ。おなべ親たちへまゐる、彌惣。

と讀みも終らず名主は腹をかゝへてをかしがれば、何がわやくの曲者ども、さなくてさへ憎げなるに、今の一通を聞くといなや、いよ〳〵燃ゆる火に燒付、さて〳〵憎きその身知らずの彌惣人形め、おのれ是よりすぐにふんごみ、首筋つかんで取つておさへ、存分にしてくれんと、すでにかけ出でんとするに、名主はこれ〳〵皆の者共、此一通をば何と思ふぞ、彌惣が力でかうした文が作られよか、彼者つねづね紫野の一休和尚へ、御心安く御懇比にお出入り申せば、慥にこれは一休和尚の御筆作、しかればわづかの道具などより、此一通こそそちたちが家の寶、今の代の活佛の御筆、わづかなる事を諍はんより、これを其方たちが腹いせにして、事を是ぎりに濟せよかしといはるれば、無念無想の文盲人の寄合なれども、此頃一休の御筆作、いづくの浦でももてはやし嬉がる最中

ま縁を切つて返すとて、何とて一所には返さず留めて置く事、近比横道なる者と同じ類の俠の方人を伴ひ、彌惣が家に此二三日、毎日々々ねだりけるを、彌惣、かの女何一つもて來ぬよしを諍へども、多勢にいひ込られ、詮方盡きて是非なく、一休の庵にかけ著け、右の趣を申上げ、何とぞ穩便に事濟み候やうに、御計ひ下されなば、生々世々の御恩にと、涙を流しお賴み申せば、和尚つく〴〵思惟ましまし、さて憎きやつらが振舞かな、しかれどもさやうの愚人に理を說いて聞せたとて、容易には納得せじ、いざさらばと思し召し、何かは知らず一通、さら〳〵とお弟子に書かせ、彌惣に渡し給ひ、是をば彼者共方へ何ともいはずに遣はすべし、と仰せけるに、彌惣は文言をも知らばこそ、やがて嬉しく取りて歸り、かの女の親許へぞ遣しける。ねだれ者ども打寄り、何を書いておこせしぞ、まづ名主殿へ持行き、讀みてもらはんといふ程こそあれ、彼一通を名主へ見せ、讀みて聞かせ給へ、はやとくといかめしく嘖くまゝ、名主一通を取り、つく〴〵と見て大笑ひし、さらば讀みて聞かすほどに、いづれもよく聞かるべしと、高聲にはり上げ、

一、妻事不緣ゆゑ暇を遣せしに、何一つ持ても來ぬ道具を、今になつて返せとは、

塗轍もない―案外なる
餼子―飯拘子

名とは申ならんと、懇に御禮申して歸られしとか。

○紫竹彌惣妻を離縁の事

紫竹の村に彌惣とて、一向律義の百姓有りしが、一休和尚の御氣に入りて、折ふしは草庵の庭まで出入し、正直を表にし、木を切つてなげ出し、膝をまくつてそこらを遠慮も知らぬ土百姓、それが和尚のお氣に入つて、彌惣々々と召され、をかしい事、塗轍もない事をいふを、賞翫にこそはなされける。しかるに此彌惣四五年跡に、隣村より妻をむかへたりしが、此の世に珍らしき惡女、口のさがなさにくげさ、身の野風俗なる事、又類もあらじと覺ゆ。その癖夫を餼子の如くいひ罵り、女の業は何一つ手に取らず、著たる物の綻をも縫はずそれなりにし、朝夕の水仕までも夫の手を守るやうに、前代未聞のいたづら者なりしかば、彌惣も今ははやもてあまし、終に緣を切つて、漸々として親元へは返しぬ。さればその如くなる子をもつ親も、又人に知られし橫惑者にて、娘の嫁入る時、道具とては一つもなく、正身著のまゝ夜紛に連來りし事を、心には覺えながら、娘を離緣せし腹立にて、なき無實をいひかけ、それへくれし時これ〳〵の道具衣類、い

古法眼—狩野元信

恠我の高名—諺

しまさぬかとつめかくれば、いやなる程有るは有るけれども、それ計はと氣毒さうに宣まふ程、しこり懸つて聞きたがれば、あゝそんならいうて聞かさう、邪婬戒は、はて大かた知れた事よ、まづこの火吹竹といふ者の、穴がひとつ有る故、よつてかゝつて口をすふ缺脣は涎を流すはやいと、どもりまはつて仰せらるゝにぞ、一座みな大笑し、又和尚の御頓作、いや是は面白う侍りと、どつとどよみ、興に入つて歸りしとかや。

○一休和尚古法眼の繪に狂歌書給ふ事

ある有得の人、古法眼の筆五十三次の繪に、池鯉鮒、熱田、鳴海、此三宿の切離れたるを所持してゐられけるが、裱匠に云付け、あとさき目立たぬやうに繕はせ、軸のものにはしたりしが、白紙にていと無念におもひ、頓て一休和尚の庵へもてゆき、しか〴〵の由をお頼み申し、御賛をと願はれけるに、一休見給ひ、實にもあたら物に、此三宿のきれける事よ、いで繪こそはなくともと、

　春の花ちりふをすぎて夏の日のあつたの前に梅はなるみか

と遊ばしければ、かの人なゝめならず悦び、きれたる故かく面白き御歌、是を恠我の高

頓作、耳のどこやらにへばり付いて、今に面白う殊勝に存ずるといへば、和尚いやはやそれは扇に限らず、氣を付るか付ぬかにて社あれ、一切の道具、持戒破戒の心のない物はなし、まづ今から持つてゐる火吹竹も、一段と五戒を破れりと仰せられけるに、又出るまゝの御頓作にや、然らば火吹竹の五戒を破れるとは、まづ殺生戒はいかがにやと問へば、お手前等を見れば、竈の前へ犬が來ると、何の仇もせぬに、まづ火吹竹を振廻する、これ無益の殺生戒ではあるまいか。しからば偸盗戒は。さればどう吹いてもぴうといふ音を出す事もならいで、普化が大事の尺八の形を盗まずや。さあらば妄語戒はと問へば、それは世間で虚言をつく喩に、針ほどな事を棒ほどにといふ、されば此火吹竹も針ほどな穴から棒ほどな風を、ふつ〳〵とうそぶくは。さていかにも面白うこそ侍る、さうして飲酒戒は、ハテそれも林間に紅葉を焚きて、酒の間の燰くを待ち兼ね、口のだるいほどふかるゝ、されば間鍋の尻をねぶれば、飲酒戒をも破るではないか。なるほど是は御尤なれ、ア、何やらたらぬやうなが、オゝそれ邪婬戒はと問れ、その時和尚は、なるほど邪婬戒をも破れども、それはどうも拙僧が口からはいひにくい、それはどうもと淀み給へば、件の男角芽だち、いやそれでは四戒で事が濟ませぬ、今一戒はお出來合がま

普化―普化僧、虚無僧

林間に紅葉云々―白樂天の詩句に「林間煖レ酒燒二紅葉一、石上題レ詩拂二綠苔一」

をごめぐ—得意に物を云ふ時の形容

ふ事なりと答ふ、誠に書きも書きたり、又讀みも讀んだり、かゝる仕前の二字となま心ある人に見せては、結句柄祭まへとは、どうも訓は付られまじ、はくらんの藥ははくらんをやむものが買うて飲むとは此類の事なるべし。

○火吹竹の五戒を破るといふ事

內野あたりに住みける者、老若五六人打連れて、一休の庵に來り、今日はさる者の妻をむかへしに、今かく打連れし仲間よりとして一樽を送りしかば、その口を切べし、打連來よかしの由いひける程に、皆々參りたりしに、所こそは鄙びたれ、中々なる饗應、酒もなるべく過しのまぬもおのづから、酒にまじり赤い顏ながら、手前のきげんなるまゝ、此程はお見舞も申上げず、幸ひと皆々打連れ參りたり、又何にとも面白き御事、聞させ給へと聲高にをごめぐを、和尚は折ふし火鉢の火を吹きおこさんとて、火吹竹を持ちながら、是は思ひよりての打連れての御出で、近比過分の至り、まづ上られよ、扨世間に、變りし事もなきかとの給へば、其中にちと法然あたまのはげて、理窟くさき男、いや世にかはりし事は承はらず候が、さりとてはいつぞや仰せられし扇が五戒を破るとの御

てあるは、そも鳥羊と申す物は、終しかいまだ承らず、薬種にても候はんや、但は菓子の類ならんか御勘辨下され候へといへば、和尚もしばらく思案し給ひ、はて是は存外なる宛字、ちと讀かねしも理なり、是は鳥指の用ふる黐の事と仰せけるに、かの人不思議なる顔付にて、鳥羊と書いて黐と讀み候やといへば、讀まぬを書いたで宛字とはいふなり、夫あのつゝじといふ事、いまだ開かぬ莟が乳に似たるとて、是を見たる羊躑躅びよるとやいふ、しかれば羊躑躅と書いてもちつゝじとは訓めり、右の人定めて、何その字盡の端にて、此羊躑躅にもちつゝじのかな付の有るを見覺え、羊といふ字をもちと讀むと心得て、鳥といふ字と羊といふ字を、黐に用ひたると覺えたるはと仰せければ、かの人しばらく思案し、誠にさうも侍らん、その次に腰綱ひとつと註文に有れば、成程鳥もちにてこそ侍らん、是にて註文埒明しとて、悦びて歸りける。されば世に文盲なる宛字を書いて、文盲なる讀人によませば、大略はよめて通る物なり、ある柄巻屋へ賣方の得意よりの手紙に、仕るといふ字と前後の前の字とを書いて、下に、に御越と書きたるをば、かの細工人成程心得たよし申し、使をば返しぬ。折ふし小文才有る人居合せ、是は人の名仕前といふ人に御越といふ事かと問しに、いや是は誂の柄祭前に御越とい

うにと、其勸が肝要、これ〳〵とて、一首の狂歌をば下されける。

さんびやうのむさきを鬼がくらはずばひとり佛にえんはむすばめ

娘此歌を授り歸り、和尙の筆跡なればと、いとよく表具して病人の枕にかけ、猶一向に心を盡して看病しけるが、此娘の孝心天も納受有りけるにや、次第に病もかろく、惡しき臭みもやう〳〵止しが、すでに如月初つかた、彼岸の中日の曦に、臨終正念に往生をばとげしとかや。されば此娘の愚なる心ながら、誠正道の孝心、いかでか無下になるべきや。人の子としてはかゝる事こそ、末代今の世までのよい手本かと思はれ、いと不便にこそ覺ゆれ。

○一休あて字を訓み給ふ事

或人一休の庵に來り、我田舍にしる人ありて、時折ふしは京都にて調へたき物品、註文を遣はし頼みし、いつも調へて下し候が、此度の註文數々の内に、一品どうも讀みわけがたき品これあり、文才ある人たちへも讀みてもらひ候へども、これ計は一圓しれ申さず、こまり入り候へば、何とぞ御讀下されかしと、一通の註文を取出し、此鳥羊と書き

光棍―惡徒　業―罪障　得道―得心

元來病が重きによつて、その甲斐もなきならんや、しかるに兄弟とてもなきに一人の娘が、さほどにおもき病人をば跡に置きて先だち、萬一その光棍奴がいひし藥が可き、病が平癒したにもせよ、親の身として生先ある子を食ひ、わが身を存命たき心やあらん、まづ其藥に女の肝の入ると言ふこと、跡かたもなき僞なり、さやうの類自由ならぬ物をたくみ、金銀を多くしてやらんとの計略、又父もかゝう難病をやむ事、その身の宿世の因緣、しかしながら眞實を以つて見る時は、癩風をやむ人は、佛千體神千體、千人の人間に憎まれ、その業の盡きぬ內は、癩風がなほらぬと世俗にいふ、それ程の佛神、それほどの人間に、憎いとなりとも思はるゝ事は、願うても叶はぬ事よ、さやうに現世にて過去の業障を果し、來世は既に安樂の身と成るべしとの事、似虛たき善人ぞかし、しかればおことも是より歸り、命をば全うして、猶々病人の面倒を見らるべし、其心入の人ならば、日頃の孝行、看病の程も思ひこそやられたれ、是より早く歸らるべしと、送の人を添られければ、娘も和尙の敎化に伏し、いづれ我身のむなしくもなるならば、父うへ又歎き給はん事もかなしとて、やう〳〵と得道し歸らんとせしに、一休は、いかに少女、これを得さすべし、是を病人にあたへ、とかく病をかへり見ず、往生をよく遂らるゝや

一蓮托生—來世に於て倶に同じ蓮華の上に生まる事

きに候へども、癩風をやみたる人は、來世も成佛かなはぬとやらん、情なく悲しう侍ふ所に、ある醫の申さるゝは、この病體至極重しとはいへども、わが家傳の藥力あり、本復の事は請合うて平癒させ給はらんが、此藥には未の年の火性の女の肝を取つて、藥に調合し與ふるならば、立所に即効を見すべしと申さるゝ、我つく〴〵考へ見るに、則わが年未にて火性に侍れば、みづからが肝を取つて、父の藥に調合し、何とぞ惡病本復させて給はれよと、かたく約束いたし、こよひ夜紛に船岡山に行き、みづから捨身の書置を殘し申さんまゝ、心まゝにわが胸をたち、父のために肝を取り藥に合せ、父に與へて給はれと申し、只今參るにて侍ふ、しかればかね〴〵、和尚の道德の有難さ承り及びしゆゑ、最期の一句を授りたく、又は父惡病を平癒し給ひ、露命の限りむなしくもなり給はゞ、來世にて又一蓮托生の願望をも、合へさせてたび給へ、此事をばお賴み申さんため、是まで參り侍ふなりと、和尚の前に涕泣すれば、一休始終を聞給ひて、扨も〳〵奇特なる心入の少女かな、扨兄弟にても侍るかと問ひ給へば、いや親一人子一人にて侍ふといふにぞ、和尚はいかに少女、年のゆかねば一筋に思ひ詰し心入の深切、尤殊勝には存ずれども、爰をよく合點めされよ、おこと有りて父が看病し、心をば盡してだに

宿世の業因―前世の罪業の結果

續一休咄　卷之三

○一休癩病人の娘に敎化し給ふ事

都の北安居院の町に、癩風をわづらひ惱る人あり。醫療手を盡し、いろ〳〵と藥といふ藥、用ゐずといふ事なかりしかども、次第に眉落ち顏はれ、色惡くわる臭く、日に〳〵社は重りし。一人の娘あり、例なき孝子にて、樣々と心を盡し佛神へ祈をかけ、晝夜しばらくも眠らず、ずゐぶんと孝行をなし、世に大切に看病しけるが、ある貪欲邪慳の、藪醫のいひける事を、此娘女心に誠と思ひ、たそがれに一休の庵に尋ね來り、和尚へお目に懸り參らせたきよしを言入れけるに、やがて一休立出で給ひ、こなたへと招き給ふにぞ、彼の女うちしをれ泣く〳〵一休の前に蹲きて申しけるは、みづからは京あぐるの町に、去者の娘にて侍らふ、さればわが父いかなる宿世の業因に候や、世に悲しき癩風をやみ、いろ〳〵と醫療を盡し、心の及ぶ程は氣を碎き參らせ候へども、露程も其しるしなく、今ははや命も賴みすくなう見え侍ふ、尤も命は限りある事ともあきらめ申すべ

と判じ給ひければ、皆若輩の人ゆゑ、誠にさにて侍る物を、さてもよくは判じ給ひしとて、腰をぬかして悦べば、一休重ねて仰せけるは、いや是は正眞の、童吟しの謎なり、しかれども謎は、惣じて案じ付けん的なくては解かれぬものなり、是も此興行仕候と書いたるが、此謎のとけ口、是から氣付いて、扨は能か角力かとさう心が付といなや、白う樂むとは白樂天、鍋からすぐにはム丶敦盛などと、早速と解るものよ、これ判じ物の奥の手、皆若ければたゞ今傳授しておくなり、又序なれば良古い事ながら、聞かぬ人も有べければ咄して聞かさん、ある人西といふ字をなぞ〳〵に懸たり、その座に有合ふ人々、みな己々が身のうへに、もて扱ふ事にて解きしとぞ、歌學に心をよする人は、西は日が留るとて人丸と解き、神主は西は酉、西が居るとの事にて鳥るとゝく、門徒宗の道場坊は、みだい所と説かれたり。醫者は二と四を書きわけ、三のまへ三のうしろ、產前產後とは解きしとかや、此やうなる類の謎こそ、その說人の發明、分別工夫もいる事なり、かゝる事よりよく〳〵勘辨有るべしと仰せければ、かの四五人の若者ども、滅多無上に有難がり、今の代の見通し、活如來とは此和尙をば申すならん、扨も面白い。あら御尤の御事やと、口々に評定して、皆々宿に歸りける。

年よりは歯ぐきで梅をくらひけり花鳥風月始終まつたし
十づつを十と千づつ十合せまあというては返されにけり

と有りければ、一休讀みも終らず笑はせ給ひ、扨もかいたり、又此謎を得とかぬ各も、さりとてはのどかなる人々かな、是能の番組の書附なり、餘り淺き事ながら、知らずば解きて聞すべしと、始終のこらず、鼻は口上なり、鬼の酒器はきたる、歌の讀習は廿日なり、新社は今宮、お足のふくろはおたび、走り船はおいて、原をひくはのうなり、興行仕候。

番組は

上見ればしろうたのしむ春がすみ　白樂天
鍋からすぐにものよそふなり　敦盛
年よりは歯ぐきで梅を喰ひけり　軒端梅
花 鳥 風 月 始 終 全 し　花月
十づつを十と千づつ十合せ　百萬
まあというては返されにけり　海士

げにも正直、殊勝なる例ぞかし。

○一休能の番附を判じ給ふ事

一休和尚の草庵へ、若輩なる人四五人いかめしく、和尚は内に入せ給ふか、尋ね參らせたき事侍りて來たると、物さわがしくいひ打入りけるに、一休見給ひ、何の用やらん、皆皆是へと仰せけるに、何かなしにへばり上り、一人の男申しけるは、昨日暮方、一條の札の辻の門柱に、ふしぎなる書付を張り候、打寄り讀みて見候へども、讀みながら合點が參らず、それゆゑ寫し取りて參たり、いかなる事やらん敎へ給へといひ、懷中より書きたる物を取出し、和尚のまへにさし出すに、

鼻

鬼の酒器　歌の讀習　新社

お足の袋　はしり船　原をひく

興行仕り候。すなはち番附は、

上見ればしろう樂む春霞鍋からすぐに物よそふなり

新之丞も封をときて見れば、

誰がなほす中とはなしにめうとする

と有りけるまゝ、筆を染めつく〴〵見て、扨もをかしき上の句かな、いかなる下の句やらん、早く見たしとは思ひながら、上の句をさら〳〵と書きて、物をもいはず妻の前へさし出す、妻も頓てかの下の句を書續けたり。かくて夫婦立寄り、一度に吟ずるに、

誰が和す中とはなしにめうとするいさかひ過ぎて夜のちぎりき

と有りければ、夫婦はしばらく物をもいはず詠入りて居たりしが、互に顔を見合せてくつくつと笑ひ出し、かの詠草をば下に置きて、新之丞は妻に向ひ、我等又そなたと、ものいひ口説の有りと見給ひ、それといはずに中を直れとの御戲に、かくは我々を歌に付けての御教訓、いまに始めぬ御事なれども、有難き御心にこそといへば、妻も今は打解け、誠に折ふし物いひさがなき事を、憎しとも思召さず、却つてかくいはずして示させ給ふ有難さよ、此うへ向後は思召されん心の程もはづかければ、心得べきにてぞ侍らんと、それより夫婦中よく、世に睦じくぞなりける。誠に手替なる夫婦いさかひの扱ひ、その昔の人の氣ゆゑ、意見せられしその人も、生得が律義ゆゑ、和尚の作意も無にならず、

草に、男女の手に書かせてくれよと賴みしまゝ、安き事とて請合うたり、御身たち夫婦、此歌を書きて給はるべし、上の句は新之丞へ參らせ置く、下の句はそなたへとて、拙僧歌一首を二つにわけ、よく封じて夫婦に渡し、深く隱してくるゝやうにとなれば、今封ぜしまゝにて、是を今宵深更に及び、二人とも閨にて、人しれず書きて給はれ、必ずしも人に見せ給ふなと、くれ〲仰せければ、夫婦は心よく請合ひ、いと安き御事にこそ侍る、さるにても和尙へは、種々の御事をお世話になり申す事よなどと挨拶して、つい取敢ずの御馳走、和尙も深切のほど過分のよし仰せられ、扨暇乞して歸らせ給ふ。しかるに新之丞夫婦、顏をふり合ふ折からなれば、和尙歸らせ給ふ跡にても、その歌の噂もなく、やう〲日も暮れ、ほどもなく深更に及びしかば、新之丞は妻の閨にゆき、今日和尙の賴み置かれし歌、今こそは認むべけれ、料紙硯もて來られよといふに、妻は應もなく、かの封じたる稿と料紙を夫に付け、ぶんとしてゐながら、竊に下の句を拔きて見れば、

いさかひ過ぎて夜のちぎりき

と有りし程に、かはりたる下の句かな、いかなる上の句やらん、早く聞まほしと思ふに、

○一休夫婦いさかひを狂歌にて中直し給ふ事

一休和尚の庵近きに、新之丞とて大百姓有りしが、一休貴くおはします故、この夫婦常に念比に尊敬し奉り、いとそこいなかりし程に、夫婦も折ふしは一休の草庵に參り終日聞法を承り、又和尚も新之丞方へ心安く入らせ給ひし。されば新之丞よろづ丁寧の生得、一子も今年七才、田畑も多く持ちし程に、何一つたらはぬ事なく心のまゝの暮し、皆人羨まずといふ事なし。氣もなるほど質朴にて、了簡隈なき人なりしが、いかなる事にや、時折ふし夫婦いさかひし、半日一日互に物をもいはず、顏をふり合す事、いかさま月には一二度づつも有りけるが、又いつとなく中直り、かくの如くなる故、後には緣者内の者までも、又いつもの癖こそおこらせ給ふと、たが扱ふ者もなく、その通にぞなり行きける。ある時一休新之丞かたへ入らせ給ふに、又夫婦の人、何とやらんをかしき顏付にて有りしを、和尚扨は例の持病こそと見てとらせ給ひ、何となく座に居給ひ、今日は夫婦へちと賴みたき事有りて來れり、近く寄られよと仰せけるほどに、二人は何事にやと和尚の傍へまゐらるゝに、賴みたきとてさしたる事にもあらず、ある人歌一首をば一枚の詠

寄月戀

忍ぶとて訪はぬ夜すがら照る月の桂男はきみが横目か

寄井戀

くるま井の釣瓶のなはの一すぢにかけて思はゞめぐりあはなん

寄松戀

住吉のきしませぶりにねばふしてやにこき人はまつにきのどくと八首ともに卽興にぞ遊ばしける。宗喜ことぐく書留め、返すぐも甘心し誠に俗人にあらねば、俗の氣をば知らじとは宣へども、かく戀の題の一首々々、その意味の深き事よ、げにや清輔が詞に、修練未熟の人も、わが深切に思ひこめし事に付きては、玄妙奇特の秀逸も有るものなる、元良の親王の、あふ坂は東路とこその歌、曾丹がゆらの戸の歌など、平生に似ず堪能なること、人の口にもある歌と書きしが、此和尙は、よほど心法にこみ入りて著し給はぬ事にも、その執心の深きより、猶上をこしての御秀逸のみ、珍らしとやいはん、有難しとやいはんと心にこめて、後代の言の葉種にもと、家の集の序に、悉く入れられたりとかや。

清輔—藤原清輔

曾丹—曾根義忠「ゆらの戸を渡る舟人梶をたえ行へも知らぬ戀の道かな」

愛し、とかく色あるものに心を動かすなりとぞ答へ給ふ。時に宗喜申さるゝは、しからばなにも興なれば、われ戀の題を出し參らせん、お慰に狂歌を遊ばし御覽もやといひ懸けられ、いやいかめしう讀むべきにはあらねども、まづ題を出されよと仰せらるゝに、宗喜題をぞ出されける。和尚取あへず

見戀

小座頭のはれぬ思やましならん見るに目の欲煩惱の雲

契戀

契り置くことは質をや取りぬらんともにふたりが名は流すとも

別戀

今なるは七つの鐘ぞむつごともまだつきせぬに別れ急ぐな

後朝戀

別れ來し跡にひかるゝ後髮けさくしぐと思ひみだるゝ

片思

君がふくほうづきなりの提灯に身を釣鐘の片思かな

有髪の居士—頭髪を剃らず在俗の儘にて佛門に歸依する男子

庭の櫻も開敷ならんと、扉を敲き尋ねらるゝに、一休も折ふし花見て暮す春とては、身の一生に一日、本來空の花は根に歸るかなと、詠ぜさせ給ふに、深山宗喜此程は打絶え、御うと〳〵しさのまゝ、春の行方も都の西、折から心憎く、お尋ね申すにて候といはるゝにぞ、和尚も、いかさま此程の中絶、人づてならでいはんよすがもなきまゝ、無沙汰にこそは打過しなどあしらひ給ふ。しかるに宗喜申さるゝは、和尚は世上の事を眼裏につゞめ、何一つおろそかならぬ御身なれども、流石は塵俗に塗れ給はぬ御出家、煩惱に心を動し給はぬゆゑ、哀情の道にはうとくましますらんといはれけるに、一休笑はせ給ひ、人間出生の時は、高位高官貴賤の差別なく、みなあたまの丸い坊主なり、段々と年齡をつみ、その樣々の境界に作るが故、男子も有り坊主もあり、或は有髪の居士などとて、いろ〳〵に狀をなす、されども心はみなおなじ、佛性同體の人間、しかれば出家の我等でも、煩惱あり菩提あり、情の道も知らぬでは有まじと仰せけるに、誠さやうには宣ふとも、流石は俗人の色相に迷ふとは、懸隔たがはせ給はんと言るゝに、和尚はいかさま俗人にあらねば、俗人の心は知らじ、しかれば俗の煩惱に氣を移すのはどのやうに懇切なるかは知らねども、われらは只春は花の麗しき香を思ひ、秋は紅葉の色こきを

れ既に法を聞きて、隨喜の信心をなし、罪を滅せる感涙なり、此涙の夥しきを見て、わが形の大きさを計り知れ、今よりしてはかたく惡業をなすべからずと、いふかと見えていづくともなく消失せし。誠に此僧、虎の尾は踏まれねども、毒蛇の口をばのがれたる鹽梅、骨身にしみてよく覺え、恐しさ限なくもやおもはれけん、猶信心堅固に、讀誦懈怠もなかりしとか。されば龍神隨喜の涙は、その樣に山根を洗ひ、大盤石をも浮にする程の洪水、誠しからずとはいへど、此雲淨法師の奇特も、慥なる書籍に出たり。又一休和尙のお手紙に愛で、一日一夜感涙をふらされし龍神も、おもへば伊曾良が崎と草津とは、餘り國も遠からねば、龍神の內でもおなじ降らし仲間の、難陀龍王といふにてや在りけん。

難陀龍王—八大龍王の一

○茶人深山宗喜一茶に狂歌望れし事

都の東岡崎といふに、深山宗喜といふ茶人有りしが、一休の活僧にましますを信じ、時折ふし寒暑を問ひ、隔意なく出入せられける。頃は彌生のすゑ、永き日の暮れがたきに、心に合ふ友も稀なる故、東の果の岡崎を立出で、西の果の紫野に來て、一休の草庵、小

松そばたち、鳥の聲幽に物さびしき所なれば、爰こそわが住むべき閑居の地なりと、やがて小き草庵を結び、日夜朝暮かの法華經をよみ、偶然としておはせしに、ある夕暮いと腥き毒氣の香、ふと鼻に入りしかば、心に深くおぢ恐れ、一心に法華をよみ居らるる所に、夜半ばかりのころほひ、風はげしく梢をならし、その臭き氣煙の如くにみちみち、やがてわが身の邊までせまり來ると覺えし。さればこそ一つの大蛇忽然とあらはれ出で、腮をそらし紅の舌をたれ、かの雲淨を呑まんと蜿りよる。されば生きたる心地もなかりしかども、かゝる時こそと、猶一心不亂に、法華經を高らかに讀みてぞ居られける。しかるにかの大蛇、御經讀誦の聲を聞くとひとしく、忽ち信心を起し、惡念をかへし口を閉ぢ角をかたぶけて、良しばらく法華經を聽聞して居たりしが、いつの間にやらこそ〳〵と、人目に見えず歸りさる。扨しばしが程に又雨風はげしく、谷も響き山も崩るゝばかりなるが、またそのまゝ晴れ、月も淸らかにさし出でたるに、その樣氣高き束帶の人來り給ひ、かの雲淨を禮し、われは此海山に年久しくすむ惡龍なりしが、常に人畜を取りて食物とし飢を助く、さればその罪いくばくとなく廣大なるに、今有難くもお僧の讀誦を聽聞申し、惡業忽ち消滅せり、それ今夜の大雨、これ天の雨にあらず、わ

年がましき者―年長者
夜の五つ―午后八時

れば、

雨がふらぬによつて、百姓ども難儀の涙をこぼせども、大海へ蜆貝の一雫で行届かず、天も是を不便におもひ、弔の涙を二三日ながし給へ。

とぞ書かれける。是は興がる文言かな、かやうの事にて雨の降るべき事思ひもよらずと、嘲るもの多かりしが、その中に年がましき者の、いや先年關の地藏の開眼、和尚をば嫞きし故、村中へその祟り的然なり、しかればこのお手紙も丁度その如し、殊には此所の產沙、龍神といひふらせば、いかにも信心に納めよといひける程に、いかさまにもといふ者も有りて、その日社壇へ納めけるに、暮方より空くもり、夜の五つよりあくる日の暮るまで、車軸を流して大雨ふり、諸木枝を潤し、田畑も濕り渡り、その一村のみならず、近國近鄕の百姓の悅、天も納受まし〳〵しや、誠に不思議の例なり。されば一休今の手紙の内に、天も憐の涙を流し給へと書かれし事、その謂なきにしもあらず。そのかみ三熊野に雲淨法師とて、法華持經の僧あり、行住坐臥怠らずかの御經を讀誦せられしが、三熊野の山、心に染まずや有りけん、住馴れし草庵を捨てて それより大和路を過ぎ、志摩の國伊曾良が崎に來り、打見渡されけるに、前は大海漫々と白浪高く、後は巖

開眼—佛像落成のときに行ふ儀式

雨たもれ—雨給はれ

ば、いとゞ水の便あしく、天よりふらねば寔子に一盃の水も出づべきところ更になし、どうかして雨乞をし、せめて一雨なりとも降らば、少地の潤ともなるべきにと、評議まち〳〵の所に、一人の百姓のいへるは、過ぎにし年關の地藏の開眼したまひし、京の大德寺の一休和尚、伊勢へ下り給ふとて、夜前此宿に泊り給ひしよし、われら以前よく見知置きたれば、追付きて此歎をいひ、雨の祈をお賴み申さんといふに、村中是は一段とよからうとて、大勢一休の跡をしたひ追ひかけしが、つひには田村川のこなたにて追付き申し、やがて御袖に取附き、しか〴〵のよしを歎き、何事も御慈悲に候へば、ひたすら賴み參らするまゝ、雨の祈をなし下されよかしと、大地にかうべをならべて申すにぞ、一休をかしく思召して、われらは人を佛にする事は、どうぞ談合もなるべきが、雨の祈は不得手なり空海こそは上手なれ、これへ賴みて見るべしと仰せられ、行過ぎんとし給ふを、大勢取りまき、是非〳〵どうぞとお賴み申せば、一休もこまり給ひ、よく聞分けもなき人々かな、龍宮に近付きもなければ、雨たもれとおし付いて無心いはう方もなし、よししからば此手紙を、在所で氏神と賴む神の社壇へ納めて見よと、立ちながら一筆書きてぞ遣されける。百姓ども悅び取りて歸り、村にての名主殿へ右の手紙を見せけ

と遊ばしける。新右衞門承り、扨も是は名對かな、一句の内にわが禪法、寂莫座禪の心もこもり、對する所文字の應へ、誠に珍しき佳對、いつもにかはり是は有難き御秀逸、わが友だちの内にかゝる事を聞きて、眞實から樂とする者の侍れば、よき土産早く見せたくこそ候へ、お暇申すにて候とて、返すぐ\悦び、懷紙に書きつけ、ひとり心中にほゝえみ、足疾に我家にぞ歸られける。

○一休和尚に雨の祈を乞し事
幷志摩の國伊曾良が崎龍神の事

陽火陰に勝つ時は干魃して、諸木を痛め五穀をこがし、陰水陽にかつ時は洪水して、江河に溢れ人家を毀ふ事、陰陽の合體和せざる故、しかるに天災とはいひながら、今年いかなる年やらん、三月の末より、照出し、六月の半まで一滴の沽もなく、耕作業を事とする國々の百姓、天を仰ぎ歎きかなしみ、樣々の祭をなし、あらゆる雨乞のいとなみを盡せども、いかな一天に握つた程の雲もなく、容易く降るべき體も見えざりけり。爰に草津の片外に、百姓ども打より、いづくはあれど、此所の田畑みな過半は山田なれ

せたげ—しへたげ

馬の念佛—馬の耳に念佛

暮さんと思立ちて、漸と庵に來り案內を乞へば、和尚も同じ御心、哀猿雲に叫んでは、思腸を斷つ、物さびしと思召す折から、つね／＼お氣に入の蜷川新右衛門といふといなや、心嬉しく立出で給ひ、今日は一入秋の心、愁の字の義理に叶ひ、淋しうてならぬによくこそは參られたり、まづこなたへと仰せらるゝに、新右衛門もやがて奥に通り、和尙と鼻をつき合うての物語り、何やかやの浮世の噂に新右衛門申さるゝは、只今是へ參る道にて、人の家に何かは知らず女の聲にて聲高にいひ罵りし程に、何となく立留り聞きしに、姑の嫁をせたげ、わゝしくいひのるにぞ侍る、扨もいかなれば世に姑といふもの、嫁と名が付けば憎いとは申せど、あれほどにいひはためかずとも、事のわけも立つべきに、とかくがみ／＼浮世の中に、馬の念佛耳に喧しうこそ侍るなれといひながら、ふつと心付いて、たゞ今の詞のはしに、

世中馬念佛喧レ耳

かく綴りて見れば、何とやらん七言の一句のやうなり、是に對をといひ切もせられぬに、和尚はその對句なるほど心得たり、かうもあらんかとて、

時間鴫看經叶レ心

かされば云々ー小野小町より衣を貸さん事を乞はれし時の歌「世を背く苔の衣は唯一重貸さればうとしいざ二人寐む」

即ち筆を取つて、

老婆心爲賊過梯　清淨沙門與女妻
今夜美人若約我　枯楊春老更生稊

汝等此詩を見て悟るべし。かの老僧も不可なり、婆も不可なり、我は可もなく不可もなしと教へ給ふ。此詩の心は、むかしの婆がこゝろは、盜人のために梯をかけ、通路をこしらへてやるに同じ、故に清淨なる沙門に、艶なる女を與ふる、こよひ美人來りてもし我に約束せば、枯たる楊なりとも、春の末に稊を出すごとく、心を若やげ情になびき、おもひみだれんとの詩の意味、かの老僧が、枯木の暖りなき氣にはあらじとなり。是一休の向ふ境界をうけて著せざる所、遍照僧正の、かさねばうとしいざふたりねんとのこゝろも、是に推てぞ知るべきなり。

○蜷川新右衞門に一休對句し給ふ事

さなきだに秋は物の淋しく、哀も深き折から、此二三日小止もなき雨の内　つれ〴〵いと堪へがたく、蜷川新右衞門は一休の庵室に尋ね、四方八方の物語して、今日の雨中を

供御―食事

一休和尚ある夜のつれ〴〵に弟子たちを集め物語し給ふ。昔ある所に一人の老婆あり、禪法に深く歸依し、草庵をたて禪の老僧を供養し、常に法を聞きて、二十年許も此僧をうやまひたり、召仕に二十許の眉目容貌すぐれたる女、これにいひ付け、每日の供御を運せ、その外の小づかひ諸用を便ぜさせけるに、あるつれ〴〵の雨のたそがれ、物さびしき夜を幸に、老僧の心を引見ばやと、かの女にかう〳〵といひ含め、暮れかけてぞ遣しける。女庵に行きて老僧にむかひ、老婆よりの言傳、用の事をいひしまひ、人しれぬ此夜半、ひとり住居の御つれ〴〵、かうした時はいかなる御意にやと、老僧にいだき付けば、僧は答へて、枯木依二寒岩一三冬無二暖氣一といひたり。此意は、たとひ美人に抱かれても、我心は枯木の寒き岩に依つたる如く、冬の時に暖なる氣は少しもなきが如く、心を動す事なしとなり。此女も常々禪法に逸れたる老婆に仕へ、かたき事をも聞きはつり覺えしにや、此老僧の禪法漸〳〵と聞覺え歸り、片言交りに老婆に語りければ、婆大きに怒り、今まで道を悟りたりし僧とおもひ、二十年このかた此俗人ごときの者を供養せし事の腹だちやと、卽時に僧を追出し、その草庵を燒捨てたり。此僧禪の活機を知らず、婆はよく活氣の悟處を知れり。汝等よく〳〵工夫すべし。此心を詩に作つて見せんと、

中道—途中

鵜の眞似する烏云々—諺に鵜の眞似する烏水に溺る

しが、その翌日住持、一休の庵室にゆき、昨日あやしき不思議をいひ、まづ和尚の道徳有難きよしをのべ、扨虚空に向ひ、ろうか〳〵の印文は、何といふ文にて候にや、願はくは我に授け給へと、ねんごろに申さるれば、一休は笑はせ給ひ、いや昨日のろうかろうか、何の印文にも候はず、此助次郎存生の時、當寺客殿より本堂へ樓架のなき事を氣の毒がり、大分の金子を寄進し成就せり、昨日のふしぎ事急なる故、此事を思ひ出し、寄附施人の善根、今更空しからんやと心にこめ、郞架〳〵と呼びたれば、天道もその義理にせまり、中道より棺を返されしなるべし、別して外の仔細なしと宣へば、住持はあきれ果て、さて是は案に相違なる事、しかし是といふに和尚の道徳、まこと殊勝にましますゆゑ故、一休なればこそ我等如きいさゝかの道徳もなき身として、かゝる事を習ひ得しとても、正身の鵜の眞似する烏、身こそは同じ墨染のまつくろな形なれども、金に似たる眞鍮のつたなきこゝろ、今更いふもと自得して、ねんごろに暇乞し、わが寺にぞ歸られける。

○一休和尚禪の老婆が物語し給ふ事

味をやらるる—氣取りたる仕方をせらるゝ

くてはあらじと、やう〳〵と野送りのいとなみ、又遺言なればとて、紫野の一休を諷經にこそは請待しけれ。扨し旦那寺の堂のまへ、籏天蓋紙花、辻らうそくのかすかなる晝のともし、來世の冥闇を照さんとの規式、鉦鐃鉢の鳴物、稱名の聲も物哀なる時、住持は立ちて芬々しき香を捻り、引導とて鍬柄を取りて、仔細らしく、ア、悲しいかな娑婆の罪業、蒼溟却つて淺しなど、聲をかすらせ味をやらるゝを、一休諷經に出させ給ひ、つく〴〵と御覽じ、心の内に引導は、ある僧七本杉と答べし、身過世過といふ事、今更眼前に見る事よと、名聞ぐるしくおぼし給ふ折ふし、此亡者在世の時は、相應の善根をもなし、佛緣をも結びし身、いかなる因緣舊惡天の御にくしみ在りけるにや、俄に空かきくもり神鳴り雨ふり、かの亡者の龕のうへに、黑雲一叢まひ下り棺を卷込み、一丈計上らんとせしかば、住持を始弟子小僧、諷經の僧徒野送の人、皆々肝をひやし恐をなして、いかゞはせんと騷ぐ所に、一休和尚ずつと立ち扇を披いて、ろうか〳〵と高聲に呼はり給へば、ふしぎや黑雲また舞ひ下り、元の如く棺をすゑ、雲たちまちに消え雨神鳴も止みにけり。諸人奇異の思ひをなし、有難く貴みける。旦那寺の住持、誠に一休といふ道人のまし〳〵ける故にこそ、怪しき目に逢ながら、まづ亡者を取留め、首尾よく葬りし事よと悅ばれし

有得—富豪

諷經—讀經

續一休咄　巻之二

○一休和尚を諷經に請待し奇特の事

都の町人に扇屋助次郎とて有得なる者有り。その身は淨土宗ながら、常に紫野一休和尚を歸依し奉り、信心怠ず仕へ申せし。元來富貴の身なれば、よろづ心に叶はざる事もなく、世を安樂に暮せしが、露命限り有りて、比しも秋の風身にしみ〴〵と、ふと風の心地と悩み、とやかくするうち段々と病おもり、今は此世の名殘と見えければ、妻子眷屬の歎き世の常ならず、色々と醫療をも盡せど、つひに本復のけしきも見えず、主もその覺悟にて妻子を枕によびよせ、ねんごろに暇乞し、我すでに往生すべし、わが死したらば旦那寺の上人、これは代々頼み來りしわが宗旨の寺、それを頼み參らするは勿論、又紫野の一休和尚、我存生の時他念なく歸依し申せば、よくお頼み申し諷經に出させ下さるゝやうに、尊敬して申すべしと、萬端殘る所なくいひ置き、すでに此日空しく、夕のあらしに誘はれ、無常の露とぞなりにける。恩愛の別れ、あはれ切なき事なれども、か

江師—誤りなるべし

○一休石火答問の事

白川の邊に、いと江師口才なる男有りしが、千本まで來て、いや是より紫野一休の庵に尋ね見參し、一問答せばやと思ひ來りしが、一休折ふし、火打を取つて火を打つて居給ふに、かの者これ幸ひと、

いかに和尚、その火は石より出づるや鐵より出づるやと問ひ參らすれば、和尚さあらぬ體にて、

おことは父が子か母が子かと答へ給へば、此只一句に閉口し、一言も返さずして、尻をからげ迯去りける。

調度―手道具
遷化―逝去

へ、和尚の可不可を窺ひけれども及びがたく計がたく、懸隔の思ひ、思惟するに遙なれば、二度奇しき妖怪もなかりしが、ある夕暮一點の風に、一雙べの木の葉を吹寄せ、一休の庭前に落せり。和尚是を拾ひあげて見給へば、四五枚重ねの桐の古葉に、虫くひの歌あり。

いくとせか眞袖が原の秋風をわが身にふくと知らで過ぎにき

と有りけるを、一休つく〴〵と御覽じ、扨はかの狐め、己が不能を後悔し、自得の悟の目が覺めたるにや、この歌かならず、かの野干が所爲ならんと思召し、たれ〴〵にも見せ給はず、紙に封じ、狐が詠歌と上書し給ひ、調度の角に入れさせ給ひぬ。遷化の後、弟子たち取出し、扨はかの眞袖が原の狐が歌ならん、されば君子は、怪力亂神を語らずとて、御存生のその內、かゝる事御物語りなかりし、實に尤殊勝の事と、その虫食の古葉の歌、傳へ〳〵て今は遙東路相模の國秋名の山、禪法を立つる寂莫庵とやらんに有りとかや。

野干ー狐

菅原の神なり、今夜すでに妖怪の奇特をまち得、無益の問答を費やさん事、思ふにとにかく默止がたく、かの野干は神通の矛をもつて、怪力の道を斷ち、われ異形を露し、汝に詞をかはす、有を無に轉ぜばなんぞ邪正ふたつならんやと、高聲に聞えさせ給ふを、座に有合ふ人々、皆々奇異の思をなし、有難さ骨髓にしみ、夢かと許おもふに、和尚は手を打つて大きに笑ひ、扨も化けたり、宵に小川の某というて來たら、晝からの催ゆゑ狂言が出來まいとて、菅原の天神と、はれ勿體もない事、よし天神にもましませ、すでに夜も更け、お寒うもあらうに、御好物の松梅、櫻には花のない時分、松葉の青いを卓散にもて來て、燒火をしてあて申せ、さてこれは御苦勞と、本心を落し付けて、山の動せぬ御氣色、その内に呑空は、何が生の青松葉をふすらせ、襖も障子も眞黑になる程、寒い夜ながら汗をたらしてたき立てしが、やう／＼として火を靜め、障子をぐわらりと明けしに、誠不思議や、菅原の神體とは眞赤な僞、煙と共に消失せ、夢の覺めたる心地せり。諸弟子たち同宿等、みな／＼不思議、まこと希代の思をなし、去とてはどちらへ見ても博識の善知識、人情の變化を察し給ふのみならず、魑魅の氣をまでかく先だちて知らせ給ふ有難さよと、こぞりよつては語りあへり。然るにその狐、さま／＼と品をか

初夜―夕より夜半までのこと或は戌の刻即午后八時より十時迄のことも云ふ。子―午后十二時より午前二時までをいふ

の妖狐の來るを、遲しとこそは待ちける。すでに日も暮れ、今やそれかと門前の人音、そよとするをも待ちたりしに、やうく初夜もとく過ぎ、四つ近くもなり、夜寒も增り、目もそろくと眠を催し、坊中こぞり、扨もかの狐め、和尚の今日の高覽の博識を悟り、今夜はもはや來をらぬにぞ有るべし、ねた方が增ならんと、和尚の前を引きたさに見えしに、和尚はきつと座をも亂さず、子のころまで待つべしと仰せける。時に夜半の鐘の聲もつくく、蕭然たる折ふし、障子をそつと引きあけ、物しづかに來る人有り、人々すはやと目を付くるに、其形巍々として、黑き布の道服を著くし、白枯木の高き冠、髭長く眉たれ、七旬の齡を腰に槻の弓をはり、靑き眞菰の杖をもち、流水微妙の御聲を出し、いかに一休、汝誠に禪法に逸なり、故に濁世を離れ境界を空に觀じ、塵埃をさり、淨土に住すと思へども、其さとる所の心法、喜怒哀樂に轉變し、溫冷暑寒の往來につけ、なんぞその有無に著不著の心なからんや、されば花は、花あるがゆゑに風をいとひ、月は江にやどるがゆゑに、濁れるを惜むぞかし、新花開かぬ枝、滿月すまぬ谷ならば、風吹くとも水濁れるとも、是には更に所緣なし、汝なまじひに悟道の是非を極めたると賴むがゆゑ、邪魅の障碍も有るならんか、我は是より西南、北野の森に宮居せし、

を、枯葉の芭蕉に包みたるなり、一德利の酒は種とるためのふる茄子、いつぞの雨の降溜りの腐り殘せしにぞありし。一俵の精米と見しは、紙屋川の流れにつゞれし、眞白の砂子なり。人々各肝を潰し、あきれ果てゝ見えし時に、和尚仰せるは、是はみな妖怪あやしむにたらず、されば此寺の五丁ばかり西北に、眞袖が原といふあり、そこに年久しく栖む狐、かれ己が年數を經るにしたがひ、邪慢の通力を得たり、よつていづかたにても、半途の初生の輩、未練の微才を賴んで、慢生する折を窺ひ、本心を昧路に道びき、邪氣を盛に、正法を妨ぐるのよし、いづれとく聞きたり、右の妖怪ひとつとして他にはあらじ、この舊狐の我禪法を試みんとての所爲かと覺ゆ、しかれば今日小川よりの使といひしに、今宵は語る友もなければ、故障なくば來り給へといひやりぬ。かの狐すでに此方七日が內、工をかへ施主をかへて、物品々を送りしを、我邪魅に謀られ、受納の甘心を極め凡欲にかゝる、正しく邪道の手引と、我慢增重を賴んで、來らん事は治定なり、しかればその時、先の方便を見附けたる氣色なく、かう〳〵こそは計ふべしと仰せければ、吞空をはじめ、是はきようがる人にこそはよるべけれ、此和尙の先知をしらず、己が邪氣を賴み禪法を試み、戲物にせんとは近頃憎き所爲かなと、皆々日の暮か

不退轉―不相變

れをその方へ預けたれば、是へ持參せられよ、小僧その方に預け置きたる立賣の禪尼より參りし衣、北山の確山居士のくれられし袋入の杖を、是へもて來よ、同宿には隱岐の國の旅僧が土產の海苔、千本の穗浪屋より送りし一德利の酒、竝に紙屋川の名主が、年中不退轉の齋米一俵、さて最前の重の內、いづれも是へもて來れとの事、みな面々仰の通りことぐく取集め、和尙の前にならべおく。一休仰せけるは、皆いづれもの者、此七色の物品、いづれも一不思議有るものどもなり、此程あそこ爰よりと主をかへ品をたがへて送りし、是一つとして正眞の物にあらず、まづその重の內を開いて見よ、打見には時ならぬ艾の餠と見ゆれども、それをば庭の泉水へ捨てて見るべしと仰せけるに、小僧立ちて御意の通り泉水へ打ちあけしに、件の草餠みな靑蟆となり、ひよいくと飛行きぬ、是はと皆々肝をつぶせば、一休は、いやこれのみにあらず、その品々皆いづれも此の如くなるべし、その金子の封をといて見よとありけるに、ほどけば秋の風に散る柹の葉の黃色に、日陰の紅葉の古葉なり。それから隱岐の濱海苔、これも同じく落葉の塵をふきとぢし土蜘の巢、黑き衣と見えしは、一つかねの荒和布、雨に朽れたるにぞ有りける。杖は蟠紫竹のねぢれたるを、木蘭色の袋に入れしと見えしが、芋の葉の細き莖

〇一休和尚狐の妖怪をしり給ふ事

比しも時雨の降りみ降らずみ、十月の十日餘り、其の淋しき折から、一休和尚板緣に立出で給ひ、四方山のけしきを詠め、心を澄し給ふ折ふし、小僧來りて申しけるは、小川あたり染井の某よりとて、重の内を參らせられたり、則ち口上の手紙もとてさし出すを、和尚やがて蓋をとりて見給ひ、又元の如くし立出で給ひ、使にむかひ、おもひ寄りての音信、よくこそ人を給はりたり、殊更今めづらしき重の內、こゝろざし淺からず侍れ、こよひは誰も物いひかたる人もなければ、宵のうち來りて咄されよかし、必ずも待つにて侍ると仰せられ、使をば返されぬ。小僧同宿等打寄り、そも小川の染井の某とやらんは誰なれば、いま使をこされし人、また晩に夜咄に來られよとは、つひに未だ知らぬ人、いかにやと疑ひける。時に奥の間に和尚のお手の鳴りけるまゝ、やがて小僧參りけるに、一休仰せけるは、弟子の僧たち同宿下男まで一人も殘らず、座敷へ參るべきよしの仰付け、こは何事やらんと思ひながら、皆々奥の間に參りしに、和尚は吞空にむかひ、此中境の町人福島やの某といふて來り、祠堂の爲とて金子五十枚寄附したり、そ

候へども、畢竟御贊を願ひのゆゑ、何事も懺悔に罪業消滅と申せば、僞の咎を免るさせられ候へと、涙をながして申す時、誠の一休襖障子をあけ立出で給ひて、八九郎にむかひ、いかに八九郎、其方最前是へ來りしより、二人が工み、此畫の物には論ありとおもひ、わざとわが弟子、呑空にいひ付け會釋はせしぞ。重ねても在るまじき事にもなし、假にも僞謀計は天のにくしみ、その身に罰は遁るまじ、ましては少にても、われより先達、年うへの者の目をぬかんとは、不覺の所爲、しかしその狂歌、それはわが實作なり、もし一休にてなきといはば、たとひ我死後なりとも、來世までも問ひに來べし、慥に證人に立つべしと立ちながら仰せられし、又襖をはたと引立て、内へ入らせ給ふにぞ、件の八九郎面目もなき心になりて、誠に地龍の氣を以て亢龍の遙なるを伺はんとは、わが此今の事なるべしと、獨と目が覺め、默然として居たりしが、呑空禪師にわが身の罪業を謝して歸らんとするに、呑空もをかしく、遙々の所おぼし寄りてのお出に、何の馳走もなきまゝ、和尙の出來合を一盃まゐつてお歸りかと、笑うて奥へぞ入られける。

四の五の―かれこれ

繪に贊したる事も覺えず、わが筆かわが作か、ものに著せぬから一向に覺えず、よしわが筆にもせよ作にもせよ、今一首書足すべしと、頓て筆を取りて、

　にせさんと四の五のいへばむづかしきしちや八九郎　拾枚にうれ

と墨ぐろになされ、とかくそなた利潤に迷ひ、慾に貪るゆゑ惡し、損だにゆかずば、元の拾枚に賣らるべしと仰せける。八九郎この狂歌を見て、扨も〳〵忝く侍る事よ、此詩の差別に及ばず、此御加筆にてこそ、正眞の極とはなり候へ、有難き仕合、迚の事に又贋の正眞のと評議の無きやうに、ちよと和尚の御名を、一筆遊して下されなば、此うへいか計忝かるべきよし、和尚はいやその狂歌の內よわが名こもれり、にせの二より十枚の十まで、數量の文字續きしが、一の字のなきは一が休み、一休が名としるべしと仰せられけるにぞ、いよ〳〵有難く、俄にわが身の枉れるを恥ぢて、何をか隱し參らすべき、此繪の贊は、わが懇の藪醫の作文なりしが、何とぞ和尚の贊を願ひたく、日頃の懇望なれども、贊と申さばたやすく受がはせ給ふまじと存じ、此仁との相談にて、和尚の御筆作の贋と、態と論を設け、そのうへの御加筆を願はんため、斯樣には計ひしに、ぞんずる通りの仕合にて、有難き御一首、尤和尚を誣僞し奉りし事、勿體至極もなく

ゆゑ、畫の義は不案内に候へども、この賛和尚の御筆作と申されしゆゑ、よく相改め候が、此仁とは日頃無二の中ゆゑ、よも相違も在るまじく存じ、右の金子借し申候が、約束の日限も過ぎ候故、取戻さるゝやうにと催促申せば、金子調ひかね候へば、外へ賣拂ひくるゝやうにと申され、それゆゑ他へ見せ候へば、繪は朱印の通り正筆なれども、和尚の御贊の詩贋筆にて、漸く右の元金拾枚ならでは主有るまじきよし、その通り此仁へ申し、何とて斯樣の胡亂なる物を、日頃の懇意にも似ず、われらへ迦けられ候やと急度うらみ候へば、慥に和尚御贊の詩に紛ひなきよし、是非のうへとかく直々にお尋ね申し、贋か正眞かを糺すべしと申され、只今同道申せしとて、かの一幅をさし出すを、和尚は取りて見給ふに、鍾馗大臣の繪、はるか空に蝙蝠一羽とぶ所をかけり。上に一首の詩有り、

鍾馗振レ髯晩風涼　執レ扇仰レ天蝙蝠翔
同氣相求斜日急　蚊歸二林下一客歸レ堂

和尚繪の體、贊のやうをつくづく見給ひ、ふと立ちて奥へ入り、良暫してまた立出て、かの八九郎にむかひ、成程此鍾馗、珍らしき出來もの、贊はわが筆作と有るよし、我此

手づから戲繪に書かせ給ひけるが、傍近く召遣はれし童にぞ下されけるゆゑ、竊に父が許に送りしを、父も亦物好の數寄人、殊に上つがたの幼くまし〳〵、いみじくも畫し給ふ物かなと、大切限なく祕藏せしが、其頃紫野一休和尚、所々にて古筆の繪どもに珍しき贊を受けて、一入道具の面目とするよし噂に聞き、此繪にも何とぞ贊をお賴み申さんと、かねて心安く出入をもせしかば、彼一幅を懷中して和尚の庵室にゆき、しかじかのよしをいひて、贊を賴み參らせけるが、一休その繪をつく〴〵御覽じ、やがて筆を染めさら〳〵と、

しなだまか何ぞと人のとひし時つゆとこたへんきえてなければ

と、一首をぞ遊ばしける。かの人世に嬉しく取りて歸り、猶家の寶と一入大切にぞしけり。爰に又八九郞とて萬世智さかしき男、同じ類の人を語ひ、一幅の繪贊の物を持ち、一休の庵室に來り、私は京の町人、質商賣を仕る、八九郞と申す者にて候が、和尚へお尋ね申上げたき事候うて、是まで參上いたし候よしを申せば、和尚と覺しく、かるはずみなる僧立出で給ひ、かの二人を奥へ通し、何の用にかと尋ねらるゝに、かの八九郞懷中より、一幅の表具を出し、是に居らるゝ仁、私方へ此一軸を金拾枚の質物に入れられし

籠耳—聞いたる事の残らぬ耳

放下師—手品師

右の品勝手の者に相尋ね候へば、何れも有合も候へども、どうでは跡より入用の品どもなれば、調へ置きしかるべきよし申し候まゝ、賣りたきと申す者に御もたせ越さるべしと、さら／＼との御報、新右衛門夫婦は打寄り、さりとては何事をいひ、何事を問懸けても、よろづ何に付けても、さしつかへぬ和尚の當話、早速の御發明、申すも中々今更ながら、是まで世の例にも聞えず、此後とても有るまじき比類なき大活禪師と、又いよいよ殊勝にこそはおもはれける。その時の青物の數、品々に多ければ、謎の數もまた數多有りしかども、殘は籠耳についもらしぬ。漸有るが中に面白く聞留しばかりを、爰には書載せ侍るらし。

○一休和尚放下師の繪
并鍾馗大臣の繪に贊の狂歌を書給ふ事

或堂上の公達、北野に詣うで給ひしに、上手なる放下師けしからず見物をよせ、あやしく品玉を取りて、見る人の目を驚しけるに、此公達も常珍らしき事なればとて、暫く立寄り見物まし／＼しが、館に歸らせ給ひ、誠に不思議奇特なる事に思召しけるにや、

和尙の氣轉をきかまほしと、青物の一品々々、謎にこしらへ書附けてぞ送られける。

口上

一唐の道法五十四丁
一祖師は達磨の一奏
一節から節分までの空
一ぬれぶみ

右の品々。もし御入用にも候はゞ、調へ遣され下され候へ、京を仕まひ、田舍へ下る者に賴れ、世話いたし候よし。一休は右の手紙を御覽じて、扨も又新右衛門例のわざ事を拵へ、人に世話を懸くる事よ、いざ返事をせばやと、やがて一々謎をときて、返答をぞなされける。

一くり唐の道法五十四丁
一ぜんまい祖師は達磨の一奏
一かんてん節から節分までの空
一ほしみるぬれぶみ

色々といたし候へども、遂に本復もなく相果て、外に兄弟もなく候へば、年罷り寄り候二親、誰有つて介抱いたし、死の面倒をも見るべき者これなく、さし詰私に罷下り、いかやうとも老の身の世話を致させたき段、しみ〴〵と申し越し候、わたくし儀も幼少より京にそだち、かく旦那方へも年比お出入仕り、御懇の御意どもにて、幾何の御恩に成り、今更薫りくさき藁屋住居の在所へ下り、土塗の鋤鍬仕事、身に堪へて氣の毒には存じ候へ共、又年よられたる二親の事も心元なく候ゆゑ、近々には當地を仕舞ひ、在所へ罷下りたきとの口上、そのうへこれまで御懇になし下されし私ゆゑ、今また憚ながらお頼み申上げたくぞんじ侍るは、日頃買置きし干物青物、旦那には世間廣うましませば、何とぞお詞を添へられ、早々に賣拂ひ申度きとの願ひ、新右衞門始終をとくと聞届けられ、最前の物語の通り、誠に餘義もなき事なれば下らでは成るまじ、いかさま年來なじみの其方、殘多くも思へども、又下るも親孝行なり、隨分首尾よく京を仕舞ひ勝手次第に下らるべし、又買置し青物共、賣拂ひたきとの願、これ大德寺の一休和尙の御方へ申遣し、入用ならば賣付けて得さすべしと請合れ、扨和尙のかたへ右の通こひ遣さんと、手紙をしたために懸り、ふと思付きて、いや〳〵只申遣さんも興なし、いざさらばわざ事にて、又

五逆—五逆罪を犯したる重罪人

此妻今こそは賤しき百姓の妻ながら、いづれ昔は由緒有る者の果にや、此狂歌をつくづく見て、是は當分の狂歌とやらんいふもの、是にて未來成佛は心許なしと、常々頼む旦那寺にもちゆき、右のわけをくはしく語り、一首をも見せければ、田舍とはいひながら、流石一寺の住持、殊には禪宗にて、その流を汲みわけよく見知りて、横手を打ちて、扨果報の亡者かな、是は疑ふ所もなく、都の西紫野の一休和尚の御手跡、その御引導を受け申し、その上に又かゝる一首を授かりたる上は、卽身卽佛の往生有難き善緣かな、羨むべきは此亡者と、感涙を流さるゝにぞ、妻も扨はと疑ひを晴して、一倍と忝く敎の如く葬りしとか。かゝる事をば佛は五逆をも捨てず、一たび發起の善果は、一味の雨に芽を生ぜずといふ事なしとは、此亡者の事ならん。不思議なる結緣にて、有難き引導を授りしは誠に貴く、げに希代の例とぞ覺ゆる。

○蜷川新右衛門一休の許へ謎にて手紙を參らする事

蜷川新右衛門かたへ、年頃久しく出入する八百屋の有りしが、ある時新右衛門かたに來りて、私儀此ごろ國元よりの便宜、一通の書狀相とゞきしが、兄にて候者、永々の煩ひ、

かう百姓と朽果つる、其うへかゝる殺生の業、みな親や子を思ふがゆゑ、我死後に何とぞよき結縁、善知識の一遍の御廻向にも預りたくおもふなり、是のみこそ婆婆の願ひと繰返し悔い歎き、つひに往生をとげ申されたり。しかればわりなき歎きの折から、奇縁とて有難き御勸め、今一句をも授け給はゞ、いか許忝く存じ奉らんと、世に哀に語るにぞ、一休も共に御衣の袖をぬらされ、妻女にむかひ仰せけるは、かゝる浮世にすむからは、いかなる身も相應に罪業のなきといふものはなし、しかし一念發起といふて、其方の夫の如く、此世にての罪業をおそろしいと、我身も合點し、臨終にも先非を悔ゆるその一念にて、もはや此世のつみ消滅する、猶そのうへひとりと極樂へゆかるゝ、藥をば授くべし、心安く思はれよと、何かはしらず一筆書いて、亡者の手に握らせ、葬られよと言置き、扨その内とやかくとする程に、夏の夜の明安く、漸夜も未明にもなれば、かの妻の女、一夜の宿の夫婦にも懇に暇乞し、和尙は京へ登らせ給ふ。妻は嬉しく有難くて、敎の如くかの和尙の一筆を、亡者に握らせ置きしが、五重相傳とやらんいふ物か、何ぞとちよと披きて見しに、一首の狂歌をぞ書れける。

つくりおく罪が須彌ほどあるならばえんまの帳につけ所なし

婆婆—梵語にて此の世

五重相傳—淨土宗にて行ふ口傳、五部の書の要文を師より弟子に傳ふ

須彌山―佛說にて世界の中央にある高山高さ八萬四千由旬といふ

ろとし給ふ折節、となりに人の泣聲のするを、和尚亭主に、かれは何んぞと問ひ給ふに、さん候あれは今日の暮まへ夫をうしなひ、妻や子の愁歎尤切なるよし物語すれば、和尚は、さあらば是ぞ一樹の陰の宿、他生の緣なり、拙僧行きて法事をもなして得さすべしと仰せられ、あるじの男を連れて、隣へ行かせ給ふに、亭主しか〴〵のよしをいひ、法味をも授り給へといふに、かの亡者の妻、これは思ひもよらぬ有難き奇緣かなと悦び、和尚をば請じ申して、扨一休にむかひ、はづかしながらわが夫は此所の百姓、わづかの田地を作り、世をいとなみ候へども、父母二人、夫婦ふたり、十をかしらに子も三人、とうでは渡世の便の足らぬゆゑ、人しれず夜々流し黐の高繩のとて、鳥をとり往來の人に代なし、又或時は山川の年魚をつり、濱へ出ては折節毎の魚をとり、親や子を思ふがゆゑの殺生、誠に後の世の酬いの程も怖ろしく、此世にて作れる罪は須彌山よりも猶高し、是ならで世渡はなき事か、扨淺ましき境界かなと詢きながら、先今日をたてんがつらく、かく往生の十日程前までも、毎日々〳〵の殺生、病氣に惱み床に付きても、それ斗をいひ歎き、今日の七つの臨終の刻まで、誠に切なる涙の隙に、我元よりの百姓、かく殺生を好む惡人にも非ず、おこと我も種姓のある身なれども、譯有りて零落れ、今

都をは霞と
共に―立ち
しかと秋風
ぞ吹く白川
の關
味方が原―
遠江

○一休和尚死人に引導の狂歌賜はる事

一休和尚東路一見のため、都をば霞とともに立出給ひ、早秋風の吹かぬさきにと、頃しも皐月の末つかた、京へとたち歸り給ふに、遠州濱松の宿も今すこしになり、天龍のわたし、味方が原の古跡など、爰かしこと打見給ふ内に、やう〳〵日も暮れ、いかなる賤が埴生にも立寄り、一夜を明さましとおぼし給ふに、並木の松もまばらに、榎、栴檀の陰、ものの淋しき片岡はらに、人家四五軒有りしまゝ、旅の習の心嬉しくて、灯の影を便に近付きて、行脚の僧にて侍るなり、一夜の宿をと乞はせ給ふに、あるじの男は、庭の隅に一束ねの藁を打つて、明日の貯の沓をうつ。妻とおぼしきは手杵にてこと〳〵と臼を搗ちながら、爰は旅店屋にてはなし、今一里餘行きて、濱松とて宿あれば、それへ行き給へと人望もなくいふに、あるじの男、いや御出家さうなれば見苦しくとも留ませよかしといふ詞に、一休いや見苦しきは苦しからず、濱松も漸近しとは知れども、日も暮れ足も疲れたれば、一宿を賴むと、おして内へ入給ふに、しからばとて夫婦の者、俄に蓆の塵を拂ひ、鍋茶をわかして饗應すに、一休も打寛ぎ、一日の暑を忘れ、とろと

白浪―知らぬの縁語。

し、一首を書付けて、かの男の袖へおし入れ、立別れ給ひける。男不思議に思ひ、傍へより竊に披きて見れば、

盗より外のことをば白浪のあはれあぶなき世のわたり川

とぞ遊しける。此男も流石はさる者の果にて、ことなる心も有りけるにや、此歌を打返し打返し誦して押戴き、貴く思ひ、それより發起し心に恥ぢて、扨今のお僧はと、かなたこなたを尋ね求め、お跡をしたひ來りしが、此紫野一休和尚にてましく〳〵けるにぞ、扨こそと一入有難くて、草庵の庭に蹲りて先非を悔い、あはれ御弟子と思召し、剃髪の一偈をも授け給ひ、御庭のはき掃除をも致させてたび給はゞ、採菓汲水の難行をふるとも、いかでかいとひ申さざらんと、世に殊勝に願ひしかば、和尚は共に感じ給ひ、誠つたなきたとへに、悪に剛ければ善にもつよしとは汝が事よ、その心に變なくば弟子にすべしと仰せられ、終に出家させて、忝くも御弟子になされけるが、つひには御教化にしたがひ、信心淺からざりしゆゑ、尋常の活僧呑空法師とは、此巾著切の得道したる禪法師にてぞ有りける。

採菓汲水―朝夕の雜役をつとむる事

木森勝手―共に吉野山中にある神社の名

さすらひ―逍遙

○盜人一休和尙の御弟子となる事

千本の花は、和州よし野の木森勝手を都に遷し、千もとの櫻の名所、その遺跡とて、世に珍らしき名木の盛ども、詠にはあかざれども、又東山、祇園、淸水の花、諸人の覺えも殊なるゆゑ、貴賤群集の花見の人、毎日々々の賑ひ、一休も西山紫野を立出て下川原に來り給ひつゝ、爰かしことさすらひあるき、かなたこなたとし給ふ折ふし、さもしからぬ男の、あそこの人群、爰の人だちをば、ひたものおしわけ〳〵、目に角をいれて徘徊じけるを、一休何となく見給ひ、何をするぞと氣を付け給ふに、人のふところ腰の廻をねらひ、よき首尾もあらば、してやらう〳〵とする巾著切にてぞ有りける。和尙此よしをちやくと見て取り、扨はきやつは望姓のいらぬ商賣をする、晝鳶とやらんいふものにぞ有りけるよな、打見し所人並の生れ付なる人間、しかも賤しからぬ身の、不便なる心かな、どうぞ敎化して止させ度もあれど、かゝる人中、かれ是いはゞ、又人もや見附けて却つてその身の讎となるべきも知れず、所詮まづ一首をしめし、それにて萬一合點をすれば、その身の德、發起の基にもなるまじき物にもなしと、頓て懷中より筆取出

氣の毒に思ひ、誠に罌粟は美しき花ながら、愛相もなき詠にこそ侍れといへば、和尙いや是にてこそ花なれとて、やがて一首をぞ、

いろ〳〵の名利の花が散ればこそ青坊主にも見參はすれ

とて、返す〴〵面白がらせ給ふにぞ、かの客の人もともに悅び、一枝の花をさゝげ、御法問の一首を承る事、限なき花とわが面目にて侍ると、それよりしばらく難波の物語に、ふと彼人、和尙の善知高覽は、世にかはり奇異に覺ゆ、何をもてかく分明には見分ち給ふらんと問ふ。其詞の內に、明かなる物は日火心眼と答へ給ふに、客の人甘心し、誠に此四つにもるゝ事なし、一句の內にかく活則の當話、ありがたくも殊勝に覺え、猶此うへ今一問せばやと思ひ、折ふし手元に有りし火箸を取りて、天目の緣を叩き、此音は茶碗が鳴りや、火箸がなれりやと問參らすれば、和尙は早速、打るが早きや、鳴が早きやと答へ給へば、かの人も此一句に閉口し、何れに頓智の發明、希代なる御僧と、彌〳〵殊勝にいつ迄も尋ね參り、他念なく渇仰し奉りしとかや。

天目―茶碗の一種

過分―有難し

仰せられけるに、そのお詞の下に、座敷の眞中へどうと打落し、鉢も水もそこらあたりへ流れ渡り、座中立騒ぎ彼是として、漸と座治りけるを、皆人高位の人の御前を憚り、臆して打落されし物ならんといへど、又心有る人は、一休は頓智勝れし故、高位の人の御意あぶなしと思召されしお目鏡の詞を、無下になすまじとの幼了簡ゆゑ、態とかくは打落されし物ならんといひしが、果して一休の心もその意趣にて有りけるとなり。

○一休和尚活則返答の事

賀茂の里に、いと賢しき男有りけり。西の京にいさゝかしる人有りけるまゝ、それを尋ねしばし打物かたらひ、それよりよき次手とて紫野の一休の庵に立寄りしが、和尚も折ふし寥然として、只一人飛花落葉を觀じ、一大事の因緣、有空無空の松の嵐、心を澄し給ふ時、かの人、その後は打絶え御音問も申さず、今日はいさゝか用の事あり、西の京まで罷れり、序ながら御消息承りたく、立寄りまゐらせし、又此花は路次にて人より得しまゝ、お慰にもと美しき罌粟の花二本をさし出すに、和尚志の程淺からず、過分のよし仰せられ、取扱ひ給ふ内に、いかゞしてか一本、ばら〳〵と花散り、參らせし人

うとんげに ─稀れに
なん〱 ─波々の音便

續一休咄

巻之一

○一休幼き時發明の事

一休和尚は幼き時より、常の人にかはり給ひ、利根發明なりしとかや。師の御坊養叟和尚の許におはせし時、頃しも水無月の末、極暑地をさき、諸木の風もなまぬるうして、炎天誠に火のごとくなる折ぶし、ある高位の人、この養叟の坊にうどんげに入らせ給へば、坊中立騒ぎ、南表の客殿の障子も簾も引きのけ、こなたへと請じ、庭前の松風、遣水の流、梢の蟬を饗應に納涼をすゝめ申しける。猶そのうへの御馳走にとて、大きなる鉢に水菓子、水なん〱と入れ臺にすゑたるを、一休小き時より力量も有りし程に、くもなげに目八ぶんにかまへ持ちて出給ふ時、かの高位の人、あゝ小僧あぶなしと

けれども、好む所の心に任せ、かく又續一休咄と題號して、世の人の笑を待むのみ。至らぬは一休の旨趣、御意にはあらじ。聞きはつりやうの惡しきがゆゑ、筆の尖が屆ぬわざと、大概に見てまくほしく覺ゆ。愚なるを惡ず、孱なるを捨てず、只老和尚の遺德を信仰あらまほしとのみしかいふ。

享保十六辛亥稔孟春初旦日

編者　也　來　花押

此和尚の御事好むに任せて、一休和尚の御頓作、面白き咄はなきやと人二三人打寄れば、何れは三つ四つ五つをのみ根を推して聞けば、右の前編あくまでよく書かれしとは雖も、七つ遺りたるにや、闕けたるにや、かの集に出ざる御發明の頓作、ありがたく貴くも覺ゆる事のみ。是も或は反故の裏紙の端に書付け見るに、漸と一夜の目覺し草になるらん程も有りしまゝ、是又我獨みんより、もし書綴りても置ばと、既に筆を取りては見たれ共、前の集に一休の意味をよく受得、其うへ堪能の文を加へ、面白く貴く書かれしなれば、夫に雙べては誠に鶴に似たる鴻、鷹に似たる鳶よりも猶懸隔の違ひ、いかゞして編集すべきと、又筆に辭して見たりしが、いやく是愚の上の臆病、そも此一集文を以て書くにはあらじ、なき學を求んやうなし、只一休和尚の頓作、活則の物語を書留めて見る迄の事に、我力のなきを悔い、もし中途にして止なば、是まで信心を以て、前の集に遺たるを拾ひ、洩たるを求めたる意趣、徒に空しくならん、然れば十が一つも、見る人聞く人の笑種ともならば、是則一休大禪師の御遺徳といふ物かと、拙き筆を以て、誤交りに編集せん事、我咎の程も恐ろし

續一休咄序

前編一休咄の序に書かれしは、或寺に詣て、小沙彌小喝食と、昔物語の折しも、いでや此寺の先師、一休和尚の放氣咄して聞かさんと、時の茶物語を、餘り貴く面白かりしまゝ、、雜紙の端に書付け、猶又御一代の戯は狂雲集に有りとて、堅き中より、世に耳近く口に安きを拾ひ求め探出し、一集首尾し全部なれりとぞ書かれぬ。誠に其詞に違はず、御一代の御事共、まづ此集の發端、幼くましくし時よりの發明、橋を端との當話より干鮭と活たる鯉の引導、或は關の地藏の開眼、元朝の靈天蓋、大歳に土器賣を追剝し、比枝の山では峯より麓までのしの字、高野の山では山形の詩、萬物につけ事によそへて、秀逸の狂歌ども、勝て計ふるにも暇なし。さればかく有難きを集め面白きを求め、堅きを和らげをかしきを盡して、口車にかけ筆に鞭して一編の奇異なるを、世に廣く見る人の目を悦ばしめ、聞く人の耳をよく穿つの集たり。然れば其面白さのまゝ、幾度ともなく讀盡せども、更に心にあきたらねば、或は都の花の友、東の武藏の月の友、爰の市立かしこの船の乘合にも、只我

一休咄　終

天明二年寅八月

京書林　錢屋長兵衛板

して、いかにも大文字にあそばしける。

　櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける

是はいかにと宣へば、彼僧いや是もまた耳なれず候と申す所へ、又さくら花風にちらされ、さつ〳〵と亂れければ、そのまゝ遊ばしけるは、

　雪やこんこ霰やこんこお寺の柿の木にふりや積れこんこ

是はとのまへば、彼僧はらをするかね、さてもおどけたる御僧や、いかに耳なれし物とて、あまりに候と申せば、一休もわらひ給ひて、實尤なり、いで〳〵貴僧の目なれ耳なれことを書きて參らせむとて、

　きねがすゞ海山木こり谷のこゑ入相のかねに庭前の人

と遊ばしければ、彼僧さてもよき御かる口や、まことに見なれ聞きなれし物を望みけるこそ愚なれとて、御口のかるきを感じて、おくゆかしくこそ侍りけれとて色々馳走申して送りたてまつりけりとなり。

きね——神官

候かと申しけれ。されば古へより有りしことなり、唐の詩人東坡居士か徑山寺にてつくりし詩にかくいへり。

山僧
山鳥偸來
山雲飛片菓問
山遠路幽深片食道
山花發茂林沈吟尋
山水碧沈樹相
山猿抱還
山客

とかたり給へば、拗もめづらしき詩や、此年までかよる山のおくに住みければ、かやうなる詩は目なれも耳なれもいたさず候、とかくちと我がおろかなる耳にも、耳なれ目なれし事をあそばし給はれと、望みければ、貴僧の耳なれ目なれたる事はなにがなとのたまふ所へ、折ふし櫻花俄にはらはらとおち散みだれければ、貫之が歌をふと思しめし出

れば、遊ばしける。その詩は、

七　山里放光
五　山瀧吟落碧三
三　山海浪高船片雲社
一　山廟等一扶桑神。片張景
二　山客成群數萬人。綸塵春
四　山樓鐘動月綸惱宮
六　山谷洗流煩本
八　山花猶馥

一休老人偶題

とあそばしける。さて彼僧一休なりとて横槌にて庭はき、杓子で芋もり、御馳走申す事、中々いふも愚なり。打ふし花のさかりなれば、庭前の花を見給へと、酒肴を出してなぐさめ申し、扨彼僧申しけるは、此山へ又御出なさるゝ事ははかりがたし、末代の寶にも成べければ、何にても一筆あそばし給はれと申しければ、やすき事なり、御望みあれと宣へば、扨も拜殿にての御作の詩は御自作にて候か、又古もかゝる詩の傳りける事にて

弘法大師活佛

死ねば野はらの土となる

と、一筆さら〳〵と遊ばしける。皆々ふかき事もありと、いそぎ登山して學匠に見せければ、かくべつのおどけ事ありしかば、又ひじりども口をえふさがざりけるとなり。

第五　一休和尚ある時熊野山へ御參詣まし〳〵て、本宮へあがり給ふ。比しも春の半過ぎなれば、山々谷々の櫻、都の二月の比よりもいとめでたかりければ、拜殿によぢのぼり、四方の風色をながめてまし〳〵ける所へ、社僧一人出て、客僧は凡人とは見まゐらせずと申しければ、中々我等はたゞ人にては候はず、出家にて候と仰せられしかば、彼僧さてもよき御口かなと、一つ二つ物語しけるが、一休高野山の詩の事おぼし召し出され、此山にても一首つくりてなぐさまむと、其まゝあそばされける。彼僧にすゞりかみを乞ひ、かきつけて宮前にそなへ給ふ。此そう御筆跡のめでたきを見て、いよ〳〵推量申したり、都衆と見たてまつるは僻目かと申しければ、よくこそ見知り給へ、我等は都の一休なりと仰せられしかば、さてこそたゞの人にはあらじと、初めより申けるはといひもあへず、彼拜前へあげ置き給ふ御さくの詩を取りきたりて、御名をあそばせと乞ひけ

て、扨も見事なる筆跡や、目なれぬ詩の體やと、口を開きてからふさぎかね、先より皆皆よしなき事どもを云ひて、御僧をはづかしめけることの恥しさよ、いかなる人ぞ名を名のり給へと、口々に申しければ、其詩の下に候と宣へば、誠に一文字候は、何一とか申すぞとたづねける。其中にひじり一人まゆを皺め、彼詩の筆跡を見る。一休ははや御いとまとて御下向あらんとす。彼僧この筆は正しく紫野の一休なり、ことに一と書きしはくせ者なり、やれ引とゞめよとて追驅けたり。一休これは何事なりと仰せられければ、先より存ぜず皆々慮外申したり、御めんあれ、先御かへりありて坊へ入らせ給へと、やうやうに申して留けるが、はや御下向あるべしと宣へば、色々馳走申して、おくりたてまつりけるに、ひじりの中に一人申すやう、あのごときの名僧、此山へ又はのぼらじ大師の御影に贊をたのみ申さんものをと、又追驅け奉る。何事なると仰せらるれば、しかじかと申す。一休わらひたまひて、それほどの事は又立歸らずともなる事なり、その御影をいそぎ持ち來れとて、みちなる茶屋にやすみておはしける。みな人おどろき、大師の贊を請ふに、たちながら思案もなくあそばすこと、聞きしより大博學の祖師かなと、舌の根をふるひて、さて大師の御影を持ちて來れば、立ちながらあそばしける。

なしなどとて口々に笑ひける。一休片腹いたくと思しけれども、いかにもそらさぬ顔にて一首仕り候、硯紙給はり候へと宣へば、何と一首出來候とや、さてもはやしと又口々に笑ひて、やれ硯紙をかせと出しければ、一休筆をおつとり、東坡居士が徑山寺の詩を山なりにつくりしことを思しめし出されて、

七山｜秋の葉落は
五山春の開｜花發。空｜
三山は迎へて連｜峯報ず佛。心｜亦｜
一山高して近し都率内院に土。進。空｜
二山閑にして表す華藏世界を地。醒。寂
四山平幽にして源化す佛｜惱。亦｜
六山｜夏涼風煩。寂｜
八山｜冬の素雪は

▲此山形の詩のよみやうは

山高近都率内院
山閑表華藏世界
山迎連峯報佛土
山平幽源化佛地
山春開花發心進
山夏涼風煩惱醒
山秋葉落空亦空
山冬素雪寂亦寂

かくのごとく即時に筆をひかへながらあそばしければ、一山のひじりたなごころを打つ

わごぜ—汝
こそめき—紙衣のすれる音

り、いかでか蜆子の御心が知らるべき蜆子にならずば知りがたしと、あざわらひ申されければ、各も尤と、蜆子の御心は凡人の知りがたき事なり、蜆子にならではいかにしてか知られむや、一休蜆子になりて御覽じけるかと、口々にわらひければ、一休すこしもさわがず、さて〳〵各はおろかなる事をのたまふものかな、我等は蜆子にならねども、蜆子の心根をよく知りたりとのたまへば、皆々それは無理なりと申されければ、聞き給へ人々よ、しからば各は、此一休におなりなくば、一休の蜆子の心を知りたる心根をえしり給ふまじとて笑ひ給へば、各藤咲く門にてにげられけるとかや。

第四　一休和尙高野山へのぼり給ひて、四方の山々をながめ、さても聞きしよりおもしろき風景かなと、眺めておはしければ、高野ひじりども立出で、一休を見ていかなる人ぞと尋ねければ、いや名もなき道心者にて侍るが、此山はじめて一見仕り候へば、あまり風景がおもしろく侍れば、こしをれの詩か歌か一首仕らんと存じて、つく〴〵として侍ると宣へば、ひじりども一休とは中々思ひもよらず、しほらしや、わごぜはまことに盲人のかきのぞき、すぐちの嘯も心なぐさむとや、その身は紙衣でこそめき、うそ寒げなるなりにて、襟のうすさは此の山名物の剃刀の刃よりもうすくて、ほそくびいとあぶ

世尊―釋迦

それ人は若きにもよらず、老いたるにもよらず、道においては老若はあるまじ、老いたるが悟道せば門外のむく犬も悟道したるかして、毛もぬけすねたゝず、にじりありくは、若とて悟道せまじきや、世尊は三十成道と承る、我等が祖達磨大師の古を承るに、或時般若多羅尊者の來り給ひて、光明赫灼たる璧をさゝげ、三人の王子に見せ給ひつつ、心をためさんとて各此璧を寶とし給はんやと問ひ給ひしに、御兄二人は、此璧にまさるたからは又あらじとのたまひけるに、達磨大師は七歳にて、一の乙皇子なりけれども、此璧は世寶にして寶にあらず、智光の珠こそは又なき寶なれとて、彼璧をなげうち給ひければ、尊者おどろき、かゝるいとけなき身にして、ふしぎなる人かなとて、すなはち御名を達磨とつけられける、始めは菩提多羅と申せしとかや、達磨とは萬の事にたつし通じて、みがき立てたるやうなる人なりとの心とかや、しかれば悟道は老若にはよるべからずと一休手を打ち、彼老僧を笑ひ給へば、老僧も人中にてこみつけられ、赤面して申されけるは、かる口にまかせて申されたり、如何に口にてはいふとても、心はさもなきものに候よ、貴僧は實正蜆子のゑびまゐりし御心根を知り給ふか、一休答へていはく、中々存じたり。老僧申さるゝは、各いかにとおぼしめす、それ禪宗は以心傳心な

得しけるとなり。

第三　一休和尚堅田の庵におはせし時、海ばたへ立出で給ひては、毎日釣をたれては魚をとりて參りけるに、御弟子兄弟の僧達、是は不律なる仕合なりとて、一休を一間所へよび入れて口々に意見しければ、一休のいはく、各たちは學問をするとて、何事をかし給ふや、我等は古の祖師の眞似をするを、禪宗の學問と心得たり、しかれば例なき事は仕らず、いでく古の例をしらずば見せんとて、もとより繪はきやうなり、蜆子の海老をつり給ひて喰ひし處を、ありくと繪に書き、なほ一首の歌をかゝれける。

蜆子—蜆子和尚

いにしへのかしこき祖師は蜆を釣し我はあはうて魚を釣りてくふ

とあそばして、彼僧達にさし付け、さあらぬ振にて居られける。みなく彼繪を見て、扨も器用なる繪や、見事なる假名の書きぶりやと感じけるが、其中にての老僧あざわらひて、古の祖師の蜆を御釣ありてまゐりしとて、貴僧の若きなりにて、其魚をつりまゐらんこと、鵜の眞似して烏水のむといひし類なり、扨貴僧は此蜆子和尚のゑびつりて參りし御心根をしろし召しけるか、中々及びなき事やと笑ひければ、一休すこしもさわがず色をもかへず、さてく貴僧の愚なる心にては蜆子の海老を食ひし心根、合點參るまじ、

梯のこ―梯子

自心自佛―即心即佛に同じかるべし

ば、佛の道にふしんあらば申せと仰せられしにより、佛の道は佛殿へ行く道なると存じ、一はしりに見てまゐり候が、いかにも合點のまゐらぬ事こそ御座候、あの山門のほとりの松に巣をかけて候が、なにの巣とも更に合點まゐらず、大かた鷺の巣には見えて候へ共、しかとはわきまへず候と申しければ、いや〳〵からすこそいま時分は巣をかくれとのたまへば、いやとてもの御事に御慈悲をたれてしめし給はれと申しければ、其義ならばとて梯のこを持ち行きのぼり給へと仰せられければ、かの者いそぎのぼりてかの巣を下して見れば、中に鳥の子もなく、なにとも見えぬなり。一休何なるかとのたまへば、何もなかにはなく侍りと申せば、

一休和尚

　鷺の巣をおろして見ればからすにて

これにつけて見たまへ、こゝが一則なるはと仰せられければ、かのもの中々何ともつけ申すべき心はなく候と申しければ、一休仰せられけるは、そこなるは、我も汝に一そくさづけ知らすべき心は無しとしめし給へば、かの者おどろき、さては一休様も仰せられがたく侍るかと申しければ、自心自佛と答へ給へば、よこ手をはたと打ちてかへり、終に自

参じられよ
―参禅せよ

是まで參り候と申す。一休出合給ひて、中々の事天眼通を得申し候と、仰せられければ、其中にこびたる者のすゝみ出て申しけるは、是は御僞にて有るべし、虚空の事は思ひもよらず、此扇の上へあがりて御覧あれと申しければ、いとやすき事なり、さりながら其扇の上へものらんと思ふ心出れば乘る、今日は早天よりのらうと思ふ心なし、虚空へものぼらんと思へばのぼる、上らうと思はねばのぼらず候、重ねて御出あれ、のぼらんと思ふ時上りて見せんと仰せられければ、みな人あきれて歸りける。其中の一人申しけるは、いかにしても一休なり、人のあまりにいはんとて、天眼通を得給ふと言ふををかしく思しめし、かくいましめしなりとて、感じて歸りしとなり。

第二　一休和尚へある時旦那來りて申しけるは、此御寺へ出入仕り候とて人々申しけるは、話則の一そくもぬけたるかなどとて、我等の愚痴なるをあなどり、なにとも迷惑をいたし候間、何にても一則御慈悲に示し給へと申しければ、安き事なり、さらば參じられよと有りければ、參ずるとはいかなる事にて侍りけると申せば、いや何なり共佛の道にて合點のゆかぬ事を尋ねられよ、畏つて候とて、佛殿をさして走出る。一休をかしく思し召し見ぬ顔しておはしければ、せつなの間に走歸る。一休いづくへ行きけるとのたまへ

一休咄　巻之四

第一　一休和尚は活佛にてましまし〳〵けると世上に風聞しけるが、あまりにいはんとて、其人申しけるは、此間一休へ參りければ、よく來ると宣ひて、虚空に座し給ひて、御庭の松の枝に御腰をかけられ、御すゞみなされしなり。ふしぎなる事にあらずやと、しげ〴〵とかたりければ、皆人それは僞りにこそ、人間と生をうけ、かゝる自在のなるべしやと、取沙汰しける事ほのかに一休聞し召し、一條の辻に札を立られしは、

佛法の修行すでに道なり。天眼通をえたり、虚空に坐せんとすればすなはち坐し、坐せじと思へば則ち坐せず、通力自在を得たり、若し疑ふ人あらば見物に來るべし。

と書かれたり。みな人是を見て、此間人の評判しけるが、かくせらるゝ上は更に疑ふ所なし、さりながら魚をくひていかして吐と仰せられしも誠ならず。さなることにてやあらんと云ふ人も有りしが、いや〳〵それとは品かはりたるとて、すこびたる仁二三人つれだち、一休の御庵室へ來り、御札の表うたがひは有るまじけれど、直に拜み申度く候うて

下男二三人はしり出で、供養はあすの事なるに、今日來て喚く曲事やとて、もとよりたれとはいざ知らず、いたはしや一休をたゝき出し奉り、さん〴〵に打擲し、踏み倒してぞ入りにける。一休はからき命をやう〳〵たすかり、むざんの所爲とおぼしめし、むらさき野へぞ歸り給ふ。其日にもなりければ、昨日の樣に引きかへて、あらたにゆあみし給ひ、衣をふるつて召されける。七丈の御袈裟をすそながに引きかけ、金襴まじりにとりつくろひ、もとよりしゆしように見へ給ふ。一休御越し有ければ、旦那大きに悦び、佛前へこそ請じける。されども一休すゝみ給はず、いやそれまでは參るまじ、愚僧は是に候とて、石うすになりてにじり給はず、旦那はもだえて、是は佛事にておはします、あらいまはしや、こゝは下郎のむしろなり、こなたへとほらせ候へとて、手をひきたて奉れば、一休御覽じて、しからば此衣に料供を給はるべし、愚僧が給はるべき子細なしとて、一首の狂歌をよみたまふ

黄檗の三十ぼうをあてられて身にはれきたるせみのぬけがら

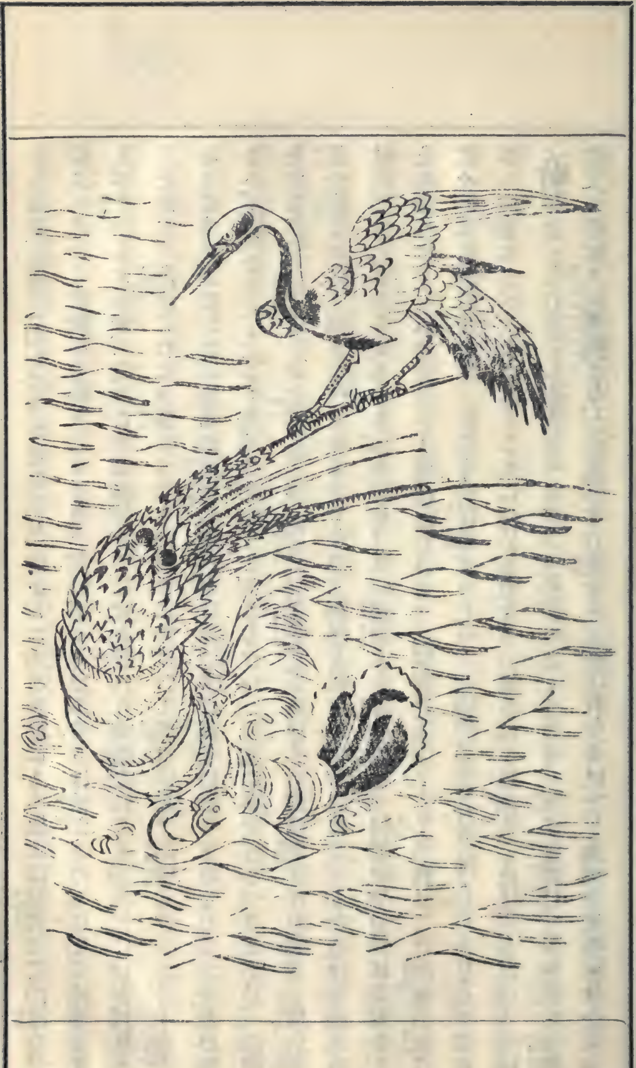
と詠み給ひて、こつじきも愚僧も、おなじ火と水なれども、きのふは棒をくらひ、今日は御とき給ふこと、偏に此衣の色が光るゆゑなりとて、脱ぎすてゝこそ歸られける。

こつがい人
—乞丐人、物貰ひ

まじきなり、思ひたちしはやさしけれども、志を空しうして、これより急ぎかへるべしと、よばはるこゑ、天地にひゞきて聞えける。扨はゑびもかなふまじとて、終にむなしくかへりける。それよりかの龜、又南極におもむき、見てかへらんと志し、我すむうみを立出でて、南をさして行きけると聞えしが、いまだ今日において歸らず、いはむやいつ歸らんといふ事もなしと、めさむるやうに仰せられける。

第十　都にて大分限なる者、人事のとぶらひをしける事ありけるに、をりふし導師にはいかなる人をか請じ奉るべきと、思案まち〳〵にくらしける。その比名高き知識あまたおはしけれども、中にも紫野一休和尙にしくはあらじ、佛事は明日の事なれば、急ぎ人をぞつかはしける。折ふし和尙は、庵のちりをはらひ、庭を掃除してまし〳〵けるが、すこしもなづまぬ御僧なれば、心やすく領掌し給ひける。さるほどに、やがて賤しく樣をかへ、あさましきこつがい人に身をやつし、手足に鈴をにじり付け、くさりごもをまとひ、藻屑の中より出たるやうになりはてゝ、かの門に立ち給ひ、こつじきののしる如く、御供養の御せぎやうをたべ、御慈悲を下されよと、とり〴〵にのたまひけ る。あるじじやけんに腹をたて、見ぐるしき奴原をおひ出せよと下知しける。そのとき

からなく、此所に羽をやすめ侍るなり、かゝる大木をひげにもち給ふは何者にてか渡らせ給ふ、名のらせ給へとのゝしりける。其時下よりいふやうは汝がかたちにて、南極を見ん事思ひもよらず、我はこの南海のそこに代々經たる海老なれども、我だにいまだ見ざるぞかし、急ぎこれより歸るべしと、大きにさけびて怒りける。高慢しける大こうも力およばずあざむかれ、もとの北海にかへりける。其時海老いかりをおこし、かゝる小鳥さへ、南極を見んと心ざし、思ひ立つこそやさしけれ、我見ぬ事や有るべきと思ひ、南海をたち出で、南をさして泳ぎける。漫々たる蒼海を、あけくれ南に急ぎけれども、廣大無邊の道なれば、到りつべうはなかりけり。海老も程なくつかれはて、とあるほらのありければ、しばらく立ちいり休みける。其時虚空より聲を出し、何者かやわが耳に入りしとおぼえたり、いそぎ出よと呼ばはりける。海老是を聞くよりも、我はこれ南海の底に代々經たる海老なるが、かやうの仔細よりして、南極へおもむき候といへども、はるばるの道なれば、しばらくこゝに休む者なり、然るに不思議や、此ほらを耳にもち給ふ御事は、たれなるらんとおそれける。その時こくうより、大千世界にうなり渡る大聲にて、我は天地開闢より、此海にすむ龜なり、おのれが身にて、南極を見ん事はかなふ



がれ、森羅萬象すこしもかはる事なし、天運は須臾もつて千歳とす、然るにたがひに國をあらそひ、左は右をうちとり、右は左を亡し、合戰さらにやむ事なし、あるひは一年國をたもちては、二ねんに滅び、扨ほろびし國も又おこり、年中の間存亡たちまち地をかふる事たび〳〵なり、されば須臾を千ざいとするうちに、蜉蝣の蟲ありて、夕べに生れあしたに死すること、是よりちいさき事なしと宣ひける。その時弟子、然らば世中に大きなる事は何事か候はんと、尋ねければ、一休きこしめされ、心得たりと宣ひて、北海に水鳥有り、名を大こうといへり、胴の大きさ千里有り、羽の長さ千里あり、あはせて三千里にはたらざりけり、この鳥南極を見にゆかばやと心ざし、北海より思ひたち、はる〳〵と飛ぶ程に、一月にいく千萬里といふ事を知らず、昨日も飛び、今日も飛び、年をかさねて急ぎけれども、いつ行きつくべきとも知れざりけり、さしもの大こうも疲れはて、とある木の枝にとまり、しばらく羽を休めつゝ居たりければ、下より大聲をあげてかろらかに、我ひげさきにとまりたるは、何ものなるぞとさけびける。大こう大きに驚き、こはいかに不思議やな、われは北海の水にあそぶ、大こうといふ鳥なるが、我かたちをもつて南極を見ばやと思ひ、はる〳〵飛び來るといへども、つかれに及んでち

ゆんで―左
めで―右

づかひなる事なし、是あみだにもあらず觀音にもあらず、則生直佛なり、佛果を得る事疑ひなしと、事もなげに仰せられける。男つく〴〵と承り、扨は心やすく候が、又それがしが兄にて候者、三年以前にむなしくなり、つねに佛道をも知らず、いたづらにあかしくらし、はづかしながら天性ぐどんに候ひて、人のくちに、ぬかりものと名を得候事、口をしき次第なり、たゞし罪をもつくらず候へば、佛果を得候はんやと問ひける。一休聞しめし、なか〳〵罪科なしといへども、佛にはなり難し、さやうのものは、愚僧がゆるしても人がゆるさざればのがれず、其おつる地獄を則あはうぢごくといふなり、たゞ今生のごとくに後生の事も侍れば、佛果と地獄と少しもうたがふことなしと仰せられける。

第九　粗忽なる弟子、ある時一休へ尋ねけるは、世中になる程ちひさき事を御物語り候うて聞えさせ給へと言ひける。一休聞しめし、汝かたつぶりといふ蟲を見たるや。弟子いかにも見候といふ。其かたつぶりめが、かひよりいでて這ひゆく時に、かしらにつの二つ有り、其ゆんでの角さきに國の數五百有り、めでのつのさきに國の數五百あり、合せて一千の國有り、しかるに此せかひのごとく、日月空にかゞやき、山川下にそばだちな

亡者法味のため―死者に佛法の功徳を手向けん爲

事なゝめならず、我等のあさましく、愚なるたはむれを申し參らせ候へば、一々に解きわかち、みちをもまよはず御いり候こそ、いつはりもなき天眼通にておはしますとて、ひそかに釋迦のごとくにおもひける。男もけうがるくせものにて、むつかしく難問をかけんと思ひけるが、法事も過ぎぬれば膳を出してすゑたりける。其時和尙膳にむかひ、殊には亡者法味のため、囘向をなして三界にたむけ、蓋をあけて見給へば、めしにはあらで粉糠をもりて据ゑたりける。ふしぎに思しめされ、汁をとりあげ見給へば、是もおなじく糠なりけり、殘りの物もさぞあるらんとて、よこ手をてうと打ち、あゝいたはしや、扨は亡者の三七日にあたり候よと、かぶりもふらず宣ひける。男いよ〳〵肝をけし、恐をなしてうやまひける。其時男いふやうは、仰せのごとくそれがしは、ちゝをうしなひ候うて、三七日になり侍る、佛果にやいたりけん、もし地獄にや落ちぬらん、後生の事覺束なくして悲しく候と問ひければ、一休仰せられけるは、なに事かあるべき、たゞ存生のふるまひをば他人はよしとほむるや、あしきとそしるや、いかゞいふぞと宣ひける。されば平生は常によこしまなる事候はず、ひとへに正直にてまつたき性候ひければ、他人はほとけにてありつると、褒むる者おほく候と申しければ、一休聞し召し、しかればき

了簡して―考へて

ひて、しばのあみ戸をひらき給ふ。この男いふやう、我等はちかきわたりに侍り候ものなるが、明日はさる心ざしの日にあひあたり候へども、ちしきをたのみたてまつるかたなく候へば、おそれながら和尚を請じ奉り、おろそかなる齋をまゐらせあげたく候うて、是までたのみ來り候なりと、思ひ入りてぞ申しける。一休きこしめし、もとより出家のいとなみに、いとやすき事なり、いづくの程ぞと問ひ給へば、男こたへて、さん候我等が家路と申すは、にごり川通、底拔柄杓の町と申してかくれなき所にて侍るなり、たづねてわたらせ給はゞ、かどべにしるし置くべし、かならずまち奉り候とて、いとま申してかへりける。一休あとにてつく〴〵とあんじ給ひ、きやつは不思議なるをしへやうを言ひつる物かな、さらば了簡して見ばやとて、やがて義理をぞひらかれける。抑にごり川といひしは、是今出川なるべし、底拔柄杓といひしは、ゐがは町といふなるべし、いで〳〵たづね行きて見んとて、おもふあてどを問ひ給へば、あんにたがはず、ゐがは町といふ所に、行きあたらせ給ひける。しるしといひしは何なるらんと見給へば、おもてに杓子をぞつり置きける。是は誠にしるしなりとて、やがてうちにいりて見給へば、きのふの男にあひ給ふ。めでたかりける智慧ぞかし。あるじかんにたへかねて、渇仰する

しやぢくる—しやぢくの夜車軸を流す程の大雨

く出來たるよとうれしくて、さもあれ一休に見せばやと思ひ、いそぎむらさき野へもて行きける。和尚この袷を一目見給ひ、あな見ぐるしやとて、目をとり大きにあざけり給へば、いかなれば所存をもかへり見給はず、かく笑ひ給ふぞやと、うち腹立てゝのゝしりける。其時ゑざうを取つて、庭上へなげすて、土草履をはきながら、さん〴〵に踏みにじり、一筆かうぞ書かれける。

世をすてゝ形をすてず、鬢髪を切りて煩惱を切らず、かりに畫像をかきて、おのが惡業をかづけ置く。ゑざう大きなるめいわくなり。

と、くろ〴〵と讚をかきてわたされける。沙門つく〴〵とかんじ、やがて懷中してかへりける。

第八　五月雨のふりつゞき、はれまも見えずうちしめり、四方の景色うるほひ、梢ふかく見えわたる比、つれ〴〵わびしく思し召しけん、しばのあみどをさしこめてさんぜんとしておはしましける所に、三十路あまりのをのこと見えて、やぶれ笠をかむりつゞれ蓑を身にまとひ、しやぢくる雨にそぼぬれつゝ、いかにもおもひあまり、うれへにしづみたる有樣にて、しづかに物申さんと、うかゞひける。一休たそや、こなたへと宣ま

ちしき—善智識、高僧
致景—風景
よねごも—俵

やまざれば、いとあさましきよすがなりけるが、つひに身まかりて死にける。妻子したひてなげく事かぎりなし。さてあるべきにあらざれば、火にやせん土にやうづまんとかなしみける。せめていかなる智識をもたのみて、後世のくげんをたすけたきと思ふをりふし、一休風雲のゆくへを追うて、浦のかたにねまり居て、よもの致景をたのしみておはします所に、妻子是をみて、衣のすそにすがり、只今かやうのあさましきものの相はてて候が、あはれ御慈悲をたれて、かのものの後世のくるしみを導びきて給はり候へ、生生の厚恩にて候べしとかなしみける。一休ふびんにおぼしめし、何よりやすき事なり、引導さづけ得させむとて、し給ふやうこそふしんなれ。まづ〳〵死人をよねごもにつゝめよとて、俵に入れて縄をかけ、まるた船にかきのせ、湖水の波に浮べける。沖にいたりてこゑをあげ、高らかに宣ふやう、

此たはらはこれ元來米俵にもあらず豆べうにもあらず、なんぢは堅田の彌五郎俵なり。ほとりに沈んでうろくづのゑとなり。佛果を得よ、喝。

と宣ひ、水のそこにぞつき入れける。是成佛の引導なり。

第七　一休和尚とひとしき沙門有りけり。わが畫像をみづからうつし、心づから一入よ

方寸―胸中

かたくな―固陋

僧かな、何とて大事の秘藥をならひ得て、他に口傳せまじとて、起請をかきながら、あまつさへ高札をたてゝ萬人の目にさらす事、いかなる曲事ぞやと、しのびかねたる其ふぜい、打ちはたしても堪へがたく、まつ黒になりていかりければ、さしもの一休なれども、をめき殺すかとぞ見えにける。されども驚くけしきなく、そらさぬ顔にもてなし、あらことぐ〵しの有樣や、何事をかくはの給ふらん、起請をかきしも誠なり、しかるに札を立てしもいつはりにあらず、さりながら口傳せまじとかきぬれば、口傳は一人もせざるなり、札をたてじと書かざれば、立てたる事があやまりか、起請に少もそむかざれば、佛神のはぢも恐しからずとて、空うそむいてまし〵ける。かのものあくまでのゝしり、怒氣におかされて方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうばはれ、言葉もなくかへりける。

第六　近き江や堅田の浦わに、彌五郎といふ船頭一人ありける。己がわざながら賤しきいとなみにやつれはて、一生帆のふすま梶のまくらをそばだて、まことの道にうとくして、心ざしさながらえびすなり。九重の花にあそぶともがらにははるかおとり、おのづからいやしきに慣れて、いみじかるべき事を露しらず、かたくなに尊きをしへをはぢて

きそく—氣色、樣子

起請—誓言書

賣僧—俗僧

つたへ來り候へば、一子相傳の祕法なれば、他にもらす事おもひもよらず、さりながらきそくゆゝしき御僧と見奉れば、いなびがたくもこそ候へ、深き御執心にてわたらせ給はゞ、他に口傳有るまじき御起請をかゝせ給へ、しからばゆるして敎へ侍らんとぞ言ひける。和尚聞しめされ、我身の大事、一代一紙の誓文なれども、愚僧にをしへてたび候はゞ心得侍るとて、すみぐろにこそ書かれける。やがてならひ得ていほりにかへり、あざわらひてのたまふやう、人のやまひにくすりとなるべき物を、祕藏してひとりおぼえたらんは、慈悲のうとき心なり、これらの事をひさうせば、おそらくは祕しても祕しがたき一大事因緣をばいかゞせん、さりながら佛神の冥罰そらおそろし、さらば札をかきて知らせんとて、

一口痺のくすりの事。もし口痺をやむものあらば、必ずみかんの核を黒燒きにしてのむべし。なほる事すみやかにして、ふたゝびおこる事なし。是きたいの妙薬なり。

と書き立てられける。敎へけるもの是を聞き、もつての外に腹をたて、脊骨をいからかして、急ぎむらさき野にはしり行き、一休をたづね出し、いかに御僧、はらはむざんの賣

天に云々―当時の小兒の口ずさびなるべし

第四　睦月の末つかた、ある人和尚にともなはれ、逍遙して山野にあそび、見るにつき、聞くにつき、ひた物例のかる口を仰せられ、我もよろこび、人をも興ぜさせ給ふ。折ふしはるかに雲井の空を、かりがねの友をしのび、こしに歸るかと思しくて、二羽つらなりてとび過ぎける。かの人一休に申しけるは、いかに只今空を過ぐるかりがねは、いづちへかおり申さん、御申しあれといひける。和尚聞しめされ、天にかね一ぱい、じやのひげ三すぢといへり、じやの鬚はいかばかりながからん、ちやくと申されよとのたまふ。かのものいふべきやうはなし。さればじやのひげとやらんは、今日までいまだ見たること侍らず、知らぬに候と申しける。一休さればあのかりも、奥州へかおりなん、つくしへかおりなん、終にかりがねなどと、同心してあゆみたること侍らねば、知らぬなりとこたへ給ふ。

第五　其比しも、都に口痺の妙藥をおぼえて祕藏しける者有りけり。一休きどくを聞し召し、いかにもして知らばやと思しめされ、やがてたづねあひ給ひて、しかぐ\の御くすりを知らせ給ふよし、承りおよび候うて、あはれ此愚僧御相傳をうけたくぞんじ、はるばる是まで尋ね參り候と申されける。かの人承り、中々の事、さる妙藥をわれら代々

なり、聞きもらしぬる口をし。
第三　一休和尚の庵ちかき邊りに、四十からを愛して飼ひけるもの有りしが、生有る物なれば、死する期有りて、籠のうちに空しくなれり。あさゆふ手なれし可愛さに、殊のほかふびんにおぼえ、いと悲しくて子に別れたるおもひをなせり。およそ非情無心の物だにも、おの〳〵佛性を具せり、ましていはんや、生有る物をや。死出の山、三途の河、冥土のやみいかゞ有らん、しかるべき智者をたのみて、引導わたさばやとおもひ、一休のいほりにたづね入りて、しか〴〵の事、たのみ申したきよしなげきければ、折ふし和尚の弟子出合ひ、いとやすき事なり、いで〳〵成佛得させんとて、佛前にむかはせ、足下に引導わたしける。

はつたい河
—跋提河

むかし釋尊八十三、はつたい河においてねはんに入る、今なんぢ四十から、むらさきの野に成佛をとぐ。

と、高らかにこそ授けける。かの者たのもしく思ひ、やがて葬りてかへりぬ。是を一休物ごしに聞しめし、たゞ今の引導はよくでかしたる小僧かな、風骨似よると思しめし、大きによろこばせ給ひ、きげんのよき事なゝめならず。

かけうた—先によみかけたる歌

のなさけあさからず、比翼の契ふかゝりけり。上下水魚の心をなし、むつびけるに、つらき者のいひなしにてや有りけん、ひそかにことづまを重ねて、ふた心あるよし、まことしやかに新右衛門につげける。新右衛門もとより、いつはりを信ずるものにはあらざりけれども、げに〳〵おもひあたる事ありとて、物をしのびぬをのこなりければ、しばしの延引もなく離別してこそおくりける。女房は折ふし懐妊の心ありてなやみければ、うらみの心あさからず、つるぎをのみ、ほのほをかうむらんともだえ悲しみけれども、ちからなく出でにける。無實の程ぞあはれなる。しかれどもあとかたもなきいつはりなれば、誠つひにあらはれて、ざんげんのしわざと知りにける。新右衛門後悔して、又よびむかへんとて、わがあやまりなるよし言ひつかはしければ、女房返事に、

秋風の人の心にたつならば實のらぬさきにいねといはざる

とかやうに詠みおこせて、ふたゝび歸らざりける。それより女房のなさけたぐひなく、いさぎよきふるまひは、かへりてまさりけりと、褒めぬものなかりしとなん、ある人かたり侍り。いみじうおもしろくおぼえければ、かく耳のそこにとゞまり、わすれもやらず有りけるを、かりそめに現はし侍る。さればかの歌に、いづれもかけうた有りしと

さみし―讒り

うむ―續む、有無

皮をすりて拜まぬものは無りけるとなり。老子のいはく、死しもほろびざるものは、いのち長しといへるは、かゝるためしなるべし。

第二　新右衞門が最愛の妻、いとけなき時より、よろづに心みじかく、たけ〴〵しかりければ、悲しき者にも慈悲の惠みなく、めしつかふわらはにも、哀憐のなさけうすかりけり。されば人は似を友とするならひなるに、悟道の居士になれそひて、たふとき敎を知らざりける事、いか程むくひのばちなるべしと、みな人ごとにさみしける。新右衞門あけくれ不憫におもひて、もとより道者の事なれば、たましひをくだき、にうわの敎をすゝめける。しかれども露したがふけしき見えざりけり。ある時あまりいたく制しければ、女房かほをあかめて聞えけるやう、

あさ糸のながしみじかしむづかしやうむのふたつにいつかはなれん

とたゞかやうに詠みておともせず。親當おどろき、日頃のふるまひに相違して、歌の心あまり殊勝なりければ、はづかしくおもひ、わがをしふるにおよばずとて、肝にめいじてかんじける。ふしぎなるかな、今までは放逸邪見に身をまかせ、誠にくらき愚人なるとおぼえしが、扨は我よりさきに悟りける物をとおもひ、したをまきける。其後は夫婦

とかやうにつらね、臨終をとげ給ふ。奇なるかな、空寂の靈を恵得して、邪魔のしやうげをはらひ、其身は死門に入りながら、活人のねむりをさまされけるは、世人の珍事とする所なり。其後一休を導師とたのみ奉り、御引導をこひければ、一休も此新右衛門には一かはりかはりて、引導すべしとたくみすましておはせしに、はや新右衛門が死骸をこしに載せて來りければ、一休立出で給ひて、後新右衛門が乘りたる龕をたゝき給へば、死したるものが高らかなる聲を出して、一首の歌をば、一休にかけけるこそは不思議なれ。新右衛門もたゞ人にはあらじと、今の世までも人のいひつたへ侍るなり。其歌に曰く、

　ひとり來てひとり歸るも我なるを道をしへんといふぞをかしき

と高らかにとなへければ、其言葉のをはらざるに返歌をし給ふこそ有難けれ。

　ひとり來てひとりかへるも迷ひなり來たらずさらぬ道を教へん

と宣へば、新右衛門も實もとやおもはれけん、その後は音もせずなりけり。人みな是を聞きて、まことに人間にはあらず、たゞ佛菩薩のかりにあらはれ、ひとり來てひとりかへる道といへば、來らずさらぬとのたまふ、さても有難やと、見る人きく人、あか手の

三體の中尊—阿彌陀佛

ば落日にちかき老士、まだ物なれぬ若輩のやからは、天にあふぎ地に伏し、共に死なんとぞ狂ひける。道の至極とぞ聞えし。其中に嫡子は、新右衛門が膝のもとによりそひ、泪を袖につゝみながら、いかにあれ御らん候へ、たのもしくおぼしめされて、往生安全にとげ給へと、ゆびをさしてをしへける。其時親當ねむれる眼くわつと見ひらき、我子をはたとにらんで、それ弓馬の家にむまれけるものは、たとへば安養淨刹にいたりて、九品蓮臺に坐す共、弓箭を忘るべきにあらず、書院の床に立て置きたる、重籐のぬりごめに、矢そへてもち來るべしといふ。聞く人おどろかざるはなかりけり。こはいかにと見る所に、親當弓勢なん人張とは知らね共、さしも强かるらんと思しきが、やがて引きくはへ、引きしぼり、しばし固めてひやうとはなつ。あやまたず三體の中尊、ひかりをはなちて立ち給ふ阿彌陀のむないたを、あなたこなたへ射通してければ、虚空にあまねき紫雲のよそほひ、もろ〱の聖衆とおぼしき物、暫時にきえてかげもなし。いかなる事ぞとれうけんすれば、處に久しきふるむじなの、ばけこふを經たるにてぞ有りける。誠に希有のしだいなり。終に一首の辭世を作りのこされける。

生れぬる其あかつきに死ぬれば今日のゆふべは秋風ぞふく

正法眼藏―佛の本告
胎下―生れおち
九品上刹―極樂淨土の九階級の最上級

一休咄　巻之三

第一　蜷川新右衞門親當、其身いみじき才智發明の道士ながら、和尚のもとへ立入り、禪法に參じられける。誠に佛心の妙奥をつたへ、正法眼藏をきはむ、英雄の士といひつべし。和尚も心通あひかなひて、ゆゝしく思し召しけるもことわりなり。されば定業期來つて寂滅の室にいらんとす、胎下の昔より是をまつ事とし久しく、おもひまうけたる道なりとて、快氣のいろぞ見えにける。一門はせあつまり、おの〳〵今はのかぎりに、名殘をしみ、したひなげく事よその見る目もあはれにて、知らぬ袖さへぬらしける。ことわりとぞ見えける。かゝるしうたんの折ふし、青々たる西の空より紫雲たなびき、空中におほひ、音樂きこえ異香くんじ、花ふるも妙なるかな、三尊二十五菩薩かく〳〵たる聖衆を引き連れ、まぢかく來迎し給ふ。ふしぎなりとも中々有難かりける瑞相なり。疑ひもなく新右衞門は、西方十萬億土極樂世界に往生せしめて、九品上刹のうてなにいたらむ事は、たなごころを見るがごとしと、おの〳〵かんに堪へざるはなかりけり。されば

聞きしには十倍せり。汝が俗よとは卽時に出でまじき答話なりと、感氣きもに銘じて歸り給ひけるとなり。

一則―一問題

第十三　或時新右衛門誰の話を參じけるに、一休しめしていはく、

しやかみろくは是他の奴、しばらくいへ

他はこれ阿誰

と問ひ給へば、新右衛門歌をよみて答へけるは、

たそといふことばの下にあらはれてたそこそ誰よたそはたれなれ

と侍りければ、一休これをかんじて、此一則にて千七百則をゆるし給ふなり。

酒屋の亭出て、御醉眠御心よく侍りたるかと申しければ、扨もよき氣味やとて、一首よみて亭主に取らせられけるは、

極樂をいづくのほどと思ひしに杉葉立ちたる又六が門

とあそばしければ、亭よろこびけるとなり。かゝる所へ小僧又來りて、はやお歸りあれ、さきに申せし和尙の御待兼ねと申せば、こたへず又打かへし高鼾かいて、ふんぞりかへりて寢たまひしかば、小僧かへりて、何ほどおこしても起きあがり給はずと申せば、よしよしその寢入りてなにともおもひよらぬ時、ひきおこして一問かけたらば、こゝろざしいよ〳〵知れ侍るべしと、彼唐僧一休の臥し給ふ處へ、さし足して行き、まくらもとへどうと坐し、何ともいはず引ずり起して、目もいまだあき給はぬに、一越聲をあげていはく、

西來意の祖師の話に、俗語ありや。

と問ひ給へば、その息もつぎあへぬに、一休も大音にて

汝が俗よ

とこたへてつきこかしたまへば、彼大禪師舌根をふるひて立たれけるが、扨も活祖師や、

偷盜戒—八戒の一

貧のぬすみは偸盜戒にはあらず、いかんとなれば、戀の歌も邪淫戒にあらさる證據あり。慈鎭和尙とてたつとき聖のよめるに、

我戀はまつをしぐれのそめかねてまくずが原に風さわぐなり

と侍りけんとかや。しかればとて邪淫戒をやぶりたる人とはいひがたし、我も貧のぬすみなれば、偸盜戒をやぶりたるとはえ言ふまじきなり、

さつしんが
いちしう—
三進が一什
割算の詞

と書かれけるとかや。扨引導に出で給ひて曰く、

人は六道錢とて六文出す、汝は引導錢とて一貫八文、さつしんがいちしう、さては汝は人に一貫二文まされり、十方に道あり行きたい方へすつと行け、成佛正にうたがひなし、是いかんとならば、有魔地獄のさたも錢がする。

とのたまへば、みな人おどろきて、扨もおどけ人やと感ぜぬ人はなかりけり。

第十二　或僧一休の活機なることを聞き傳へて、いかほどなる道德かあるとて、大德寺へ行きて尋ねければ、折ふし一休は門前の酒屋が方へ行き、酒にたべよひ、前後も知らず臥し給ふ處へ、小僧たづね來りて、只今唐僧とかや見えし大和尙、一休はと尋ね給ふ、はや御歸寺あれと引起しければ、一休御目いまださめず、うか〳〵としておはせしに、

八つの木—米
青きあかゞれ—錢

感にたへけるとなり。

第十一　一休和尚は金を山に捨て玉を淵になぐべくもあらん御きざしなれば、もとより一鉢のまうけより、兼ねてたくはへなかりけるに、はや大晦日の暮方になりければ、一僕申すやう、明日は元旦なり、なにをかまゐらせむ、八つの木は一合もなく、青きあかゞねは一錢もなしと歎きければ、一休聞き給ひて、それはなげくことにはあらず、いざ出よとのたまひて、一棒をふりかたげ山家街道へ出で給へば、折ふしかはらけ賣通りければ、逃すまじと追懸けたり。彼者おどろき、一荷のかはらけを捨てにげければ、扨こそとて彼めしつれし僕にもたせて、これをしろなし、初春をむかへ給ふが、はからず大名果て給ひけるとて、一休を引導に請じければ、いやまゐるまじとのたまふ。何とて御出なきぞと申しければ、錢をくれば行かんと宣まふ。やすき事なり、何程か御用なると申せば、一貫八文ほしといへり。やすきことと申して奉りければ、其錢をもらひて、彼おひはぎし給ひし所へ行きて、かはらけ籠に錢をくゝりつけて札を立てられけるは、先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文、但一枚に付一錢づつ帳けし給へと、書付けて、そばに一句、

り。今の世までも其しの字叡山のたから物となりて有りけるとなり。山法師達も、望みし事なれば、いやといはれぬ御作意と、みな感じけるとなり。

第十　ある人牧溪和尚の御筆なりし靈照女の繪を持ちけるが、一休和尚の活機なる事を聞きて、讃をたのみ申すべしとて、やがて一休へ持ちて參り、しかぐ〵のよし賴み申しければ、それこそ易き事なれ、望みならば讃して參らせむと、筆おつ取り給ひ、すらすらと一筆かき、かの者に渡されければ、有りがたしといたゞき、さてもかるき御僧かなとよろこび、内へかへり、友達どもをよびよせ、日來の繪に一休の讃なされしとかたりければ、おの〳〵拜見申さんと云ふ。やがて床にかけ、皆々拜見しければ、かなまじくりに、

汝の親の穴作り　馬祖にだまされて
寶を海にすつる　阿龐居士の娘

とあそばしければ、みな人よこ手打ち、さてもだうけたる御事かな、龐居士も靈照女も、唐土にての賢人なりと、みな人いひ傳へしほどに、定めてさやうの心をもあそばさるべきかと思ひけるに、格別なる御事かな、誠に天下の活祖師にてましますと、みな人

を書かせ置くべしとて、其中の老僧のいへるは、先よりおの〳〵書きもらひけるは一字もよめず、又語もあまりにみじかくて此山のたからとはなりがたし、いかにも大文字を長々と書きてたべ、讀み難きはありても詮なし、いかにも讀みやすき事を賴み奉ると、一山ともに望みければ、一休のたまひけるは、紙筆は候か。中々いにしへ大師の遊ばしける、七八尺の大筆あり、紙はなにほどもつぎ申すべしと申されければ、さらば紙をつがせ給へ　御望の通りなが〳〵と大文字をかきてよく讀めるを仕るべし、いそぎ紙をつがせ給へとありしかば、何程なりと紙は御のぞみ次弟とて、ひた物長くつぐほどに、えいざんの金堂の前より、上川、さかもとの人家まで長々しくもかみをつぎければ、さらば筆をそめんとて、墨たつぷりとふくませて、へたと紙へ書きつけて一さんかけて不動坂まで一すぢにひかれて、讀めるか法師達とのたまへば、いやなにとも讀めずといふ。又すみをつぎて。不動坂より坂本まで一すぢにはしりびきに引きて、讀めるか〳〵とをめき給へば、一山の法師たち膽をつぶし、いやなにとも讀めずといへば、これはいろはのあさきのくだりにあるしの字なり、なが〳〵と書きてよめやすきは是なりと宣まへば、皆人興をさまし、さても聞き及びしよりおどけ人かなと、一度に咄と笑ひて興じけるとな

聖道のあて字—聖道門の僧の無學を嘲る詞

とて、がばと死骸を川へなげてかへられければ、其宵親子の夢に、ありがたき御引導にていまこそうかびけるぞとて、白雲にうちのりて西の空に行きければ、見る人ありがたくぞおぼえけるとなり。

第九　一休和尚山姥の謠をつくり給ひし時、比叡山に中よき人おはしますにだんがふにのぼりてのたまふは、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もありといたしける、此つぎいかゞはせんと宣まへば、彼人もさすがの人にて、さだめて柳はみどりとなされつらんと有りければ、一休さてもよく推し給ふものかな、柳は綠花はくれなゐの色々、扨人間にあそぶことゝ仕り候とのたまへばこそ、といひて興ぜられし。まことに同氣あひもとむなるこゝろざし、いとはづかしくおもはれける。扨よきついでなりとて、叡山の堂社を拜みめぐり給ひしに、山法師ども是を聞きて、一休はかくれなき能書なり、何にても書きてもらはんとて、手に〳〵硯紙を持ち來りてたのみしかば、一休おぼしけるは、聖道のあて字とかや、定めて文盲なる法師どもならむ、何にがな書きて取らせんと、いかにもよみがたき一句を、さら〳〵と一筆に書散してつかはされければ、一山の僧よりあつまり、かゝるな能書の名僧この山に來る事は、後の世までもたから物ともなるべき語

川舟を云々―謠曲「江口」の文句

中有―人死して次の界に生るゝ迄の間

まざ〳〵と―正しく

しかば、其死人を出せよとて、一休かの死人の首に縄をつけ、ひつかたげて川岸に立てのたまはく、

川舟をとめて逢瀬の浪枕、うき世の夢を見ならはしの、驚かぬ身のはかなさよ

とて、川へざぶと投げすてゝはやかへり給ひける。妻や子供おどろきて、御氣もそゞろなるか、此一句は江口をうたひたまふなり、かゝる事にてはうかびがたしと、彼死骸を引上げ、ねんごろにをさめて、ある寺の上人に引導たのみければ、其宵よりかの夫も子どももさん〳〵にわなゝきふるひて夢見けるは、一休の御引導にてうかみしものを、よしなや上人の引導にてひきもどされて、中有のたびに迷ふよ、又一休をたのみて、われをすくはせ給はずば、妻子もともに取殺し、手に手をとりて三途の川を渡らんと、まざまざと夢まぼろしに見えければ、是はとおどろき、一休へまゐりて其よしをしか〳〵と申上げければ、我よくいんだうせしに、又こと人をたのみし故なりとて、ふたゝびかへりみたまはねば、親子の人のさま〳〵に歎きしかば、扨も不便の事やとて、埋みし死骸をほりいださせ、又鴨川へかたげゆき、川岸に立てて、

大水のさきに流るゝ橡殼も身をすててこそ浮ぶせもあれ

ば、たつさまやよこさまかけて十文字、犬の瞳とめゝあひらうんけんそわか〳〵と言へども、いぬは吠えやまず、一休をかしくおぼしめし、そこのき給へ、それほどのことにあびらもうんけんも、そわかもいる事にてはあらず、あの犬の怒りをやめ、たちまちここへ來らせんと、ふところよりひるげのやきめし取出し、かの犬に一目見せて、ころころころとのたまへば、さしもいかれる犬なれど、やきめし一目見てしより、くん〳〵くんとて尾をふりて來りければ、山伏も肝をけす。みな人、さても格別なるこゝろかなと、かんにたへてぞ別れけるとなり。

第八　なにがしとかや言へる人のおくがた相果られけるに、今はの時の言置きに、我等此年まで、佛とも法とも知らずして、かくなりはつるなり。ことに女は罪深きよし、末の世いと心もとなし、うけたまはり及びし紫野の一休は、今の世の達磨殿とやらむいふなる間、われが引導をばたのみ奉りてえさせよと、ねんごろにいひおきしかば、妻子なくなく一休へ參りて、其よしをかくと申上げければ、その年まで佛とも法とも知らずば、大かたのことにてはうかみがたし、さりながら我等が、一句をさづけてすくふべきなり、水葬にせんあひだ、鴨川へつれゆけとて、其まゝ座をたち、打連れて川のほとりになり

ぢうめん―造面

行―修行の力

いのり出して御目にかけむと、一に金剛二にせいたかをはじめて、もみにもうで祈りければ、皆々のりあひの者共、目とく見あはせをる處に、あんのごとく船のへさきにたちまち不動の像火炎をはなつてあらはれたり。其時山伏ぢうめんをつくりて、おの〳〵拜みたまふかと申しければ、皆人ふしぎのおもひをなしけれども、一休は更にふしぎにもましまさぬふりなり。いかに禪僧、かゝる奇特は如何にし給はんと、せぐりかけて申しければ、我等がきどくには身より水を出して、あの火えんを放つ不動をけして見せん、隨分祈り給へとて、彼不動の像の火焰に小便をしたゝかしかけ給へば、火焰は其まゝきえて、山伏の法力つきたれば、みな人一休を禮して、奇異のおもひをなしけるなり。揚舟よりあがり、陸路を打連れ行くところに、むかひよりなるほど大なる犬、山河にもひゞくばかりに吠えてかゝりければ、山伏申すやう、いかに御坊、さきの行くらべにこそまけたりとも、あの恐しき犬のいかりをやめて、たゞ今これへ呼寄する法力をあらはさんか、御僧はいかにと申しける。一休これはいと易き事なり、先いのりて見たまへ、若來らずば我等にまかせたまへとのたまへば、山伏大いらたかの赤木の數珠をさらり〳〵とおしもんで、一いのりこそ祈りけるが、一切犬はほえやまず、手もとへ來るねんもなかりけれ

に浦山敷く候ひて是まで參りて候、あはれ此方の善導にも讃を遊ばしてたべと申しければ、それこそやすき御用とて、かの繪をひらき一覽あり、立ちながら一筆さら〳〵とかき給ひ、もとの如く認め、かの使僧にわたされければ、かたじけなしとて謹んでいたゞき、いそぎやうくわん堂にかへり、しか〴〵のよし申しければ、さてもかるき御僧かな、本望は遂げたり、まづ一山をよびよせ、讃を拜見せばやとて、やがて人をまはしければ、おのおのよろこびはしり參る。さてかの畫像を方丈にかけ、拜見申しければ、いかにも大文字に歌一首あり。其歌に、

くろからん衣のすその黄になるは善導大師はこをたるらむ

とあそばしければ、みな人どつと笑ひ、興をさます人も有り、感にたへたる人もありしが、今の世まで傳へて、天下に一幅の名物となりけるとかや。

第七　一休堺へ御下りの時、淀の河瀬舟に乘り給ひけるに、その船の乘合に山伏有りけるが、御僧は何宗ぞと問ふ。一休われらは禪宗なりと答へられければ、禪宗には我等が如き、奇特はあらじといひける。一休申さるゝは、いかにもきどくおほし、其方にも何にても奇特あらば見せ給へと仰せられれば、いで我等が法力にて、此船のへさきに不動を

やうくわん堂―永觀堂
かうかつ―代寶
半金色―半身を金色に彩色したる也。

申しけるは、さん候いかにもかつかうに大きにかゝせたく存じ候へ共、先日淨土宗法然の讃をじまん申し候ゆゑ、口をしく候ひて、取る物も取あへず、先ちくりけにかゝせて參り候。いそぎ讃してたべと申せば、心得候とて、さきの法然の讃を所々なほして

傳聞日蓮活如來　香座則是妙法臺
尼入道同㆓愚痴輩㆒　一遍題目殊勝哉

となされし、その奥に

はうす〳〵小ぼうずまめの粉にぬりぼうず

とぞあそばしけるとかや。其比又やうくわん堂の住持黒谷の讃のよしを聞いて、よき寺のかうかつなりと浦山しくおぼしめし、かほどかるき御僧なるに、何にかな此方にも讃を頼み申さんとて、先一山の人々を呼寄せ、談合せられければ、其中に一人申しけるは、なになにと申すまでもあるまじ、先宗の祖師なれば當寺につたはる半金色の善導大師の畫像に讃をたのまれよと申せば、おの〳〵申すやう、げに〳〵是は代々當寺の重物なれば、是にましたる物は有るまじ、さらば其方使僧になり給へとて、かの半金色の善導大師の畫像を持せ、一休へ參り、彼僧一休に對面して申しけるは、黒谷の讃のよし承り、あまり

いがむ―啀みあふ

濁世末代導二惡人一　一切衆生易二往生一

法然上人には

傳聞法然活如來　安座蓮華上品臺

尼入道同二愚痴輩一　一枚起請最奇哉

と卽時にあそばしければ、扨こそとておの〳〵大きによろこび侍りて、此兩佛に淨土宗としてかく讃をいたさば、家の事なればてほめにしたるとて、又日蓮宗があざけるべきに、かゝる嬉しき事こそなけれと、かの讃を日蓮宗に見せて、大きに威言をぞ申しける。其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中あしくて、犬のいがむがごとくし、牛つきまなこをいからかしければ、日蓮宗の讃を見て大きにはらを立て、一休をそねみにくみけるが、其中に一人申しけるは、いや〳〵一休の御心は、ものに飾りなくすなはなる御事なり、いざや日蓮大聖人の像を書せ、讃を乞ひて見ん、あれ程の褒美は有るべしと申しければ、尤もしかるべしとて、いそぎふためきて畫をかゝせ、やがて一休へもちて參り、讃をたのむ由申しける。もとよりかるき御僧なれば、やすきことゝのたまひ、彼畫をひらき御覽じけるが、此畫は扨もちいさうかきて、うそ黃なる衣をきせけるよと笑ひ給へば、人々

念佛無間―念佛を唱ふれば無間地獄に墜つといふ

非なくその御歌を見れば、

　我はたゞ後世の敎を知らぬなりあうんの二字の有るに任せて

と侍り給へば、皆人これを聞いて、あともうんともいはれざる御僧かなと、默して感じあへりしとなり。

第六　一休和尚は天下の活僧なりしとて、諸宗もおしなべてたつとびけるなれば、何れの上人、長老もあがめ給はずといふ事なし。ある時一休黑谷へ御まゐり有しに、寺中の人々一休を見奉り申しけるは、今の代に、活佛と人每にいへるは此禪師なり。よき折からなれば、いざや當寺に侍る善導、法然の畫像に讃をたのみ申し、かの念佛無間とてあざける日蓮宗に見せて、禪宗の佛心宗だに、かく此方の祖師はたつとび給ふと高言にせばや、輕き僧なれば定めて讃し給ふべしと申しければ、おの〳〵此議しかるべしと相議して、やがて一休を方丈へ請じ申し、件の畫像を取出し、讃をたのみ奉るよし申しければ、案のごとくやすき事なりと宣ふ。すなはち硯と畫像を御まへに出しければ、さらりとひらき一覽あり、筆おつ取り給ひ、先善導大師に讃していはく、

　末法出現名㆓善導㆒則是彌陀化身也

今はの時─
臨終

第五　西の國の大名身まかりけるに、今はの時に申されけるは、我死して後しゆ〳〵の佛事をも勤むべからず、紫野の一休禪師を請じて引導を賴み申せ、是より外にのぞみなしとて死しける。人々なげきて御遺言なればとて、いそぎ都へ使者をたて、一休を請じける。一休折ふしありあひ給ひて、やすきことなりとて、かのつかひと打ちつれてかけり下り給ふ。葬禮の日限きはまりしかば、音に聞えし紫野の一休和尙こそ、此國のなにがしに御引導のためとて御下向ありしとこそ言うたれ、國々島々より、きくほどの人、足を空にまどうて、貴賤くんじゆし、一休の御引導をちやうもんせむとぞ犇めきける。葬禮の儀式天には花をふらし、地には錦を敷き、ことばにも述がたく、結構をつくし、其日になれば、數萬の見物、かの一休の導師をぞきくべけれと、おしあひへしあひしけるとなり。さて玉の輿を舁据ゑければ、一休立出で給ひて、龕の前に一默し給ふ。諸人いまや〳〵と耳をそばだて居るに、一言をもいひ給はず、天を見て口をひらき、地を見て口をふさぎて、さつとひきこみ給へば、かの大名の御臺公達をはじめ、一門家來の人々、是は如何なる御事やらむ、せめては一句をしめし給はれと、御衣の袖にすがりつつ、諸人の見物も興をさましければ、一首の歌をよみて、都をさして上り給ふ。人々是

さし出し、御用心々々々とてありき給ふ。皆人いまはしくて、門さしこめて居けるより、今に正月三日は門戸を鎖しけるなり。然れば一休を見まゐらせて、或人のいへるは、御用心とは尤も至極なり、祝ひてもかざりても、終には皆人かくのごとし、されども世の習にて、かくいはひよろこぶに、そのむくつけなき髑髏を、家々へ出さるゝことは御ちがひならずやと申しければ、さればよ、われもいはひて此れしやれかうべをおの〳〵に見するなり、目出度しといふことといかゞ心得けるぞや、むかし天照おほんがみ岩戸をひらき給ひしより、こと起るといへども、此髑髏よりほかに目出度きものはなしとて詠よめる、

　憎氣なき此髑髏あなかしこ目出度かしく是よりはなし

と侍り給ひて、是見よや人々、目出たるあなのみ残りしをば、めでたしと言ふなるぞ、皆人ごとにかくとは知るらめど、昨日も過ぎし心ならひに今日をくらしつ、あすか川の淵瀬常ならぬ世とは目に見ぬからに、風の音にもおどろかぬ人々に、用心せよと思ふなり、たゞ人は是にならねば、目出度き事はなにも無しと宣へば、諸人これを聞きて、さてもかしこき聖とて、をがまぬ人はなかりけり。

かなるも、愁あるも愁なきも、貴きもいやしきも、いはひかざることかはる事なしと見ゆ。屠蘇白散には濁酒なりとも髭につけ、おかがみすわるとて尻餅なりともつきて、それぞれに祝ひませるありさまは、まことに昨日に變りたるにはあらねども、空のけしきものどやかに霞みわたり、大路のさま松立渡し、家にはながき代のためしといふしめなはを引廻し、昨日の夜半過ぐるまで、人の門たゝきて何事にかあらん、こと〴〵しく足を空にまとふが、たゞ一夜あけぬれば、ひきかへ心もゆる〳〵と、又とも晦日の來るべき心もなくて、野邊の小松に千代萬世をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、萬のことをいみ恐れ、あしたの露に名利をむさぼり、夕の陽に子孫を愛し、蟻が磨をめぐるがごとく、同じことをくるり〳〵と、五百八十年七まがりといひて、世を秋風の心は露ちりほどもなき人心を、一休をかしくおぼしめし、誠におろかなるかな、槿のひかげまつ間をもさかり久しき花とながめ、かげろふの晴天に、羽をふるひてたのしむ間もなき世の中に、くそにははぬる正月ことばや、たゞ時の間の烟ともなりなむと打見るより思はるゝ、いで物見せん人々よと、墓原へゆきて、しやれかうべを拾ひきたり、竹の先につらぬきて、此の正月元日の早三に、洛中の家々の門の口へ如鼓々々と、彼しやれかうべを

三尊―彌陀如來及觀音至勢の二菩薩

ば、此僧三尊の外は一人も名を知らざりければ、何共物はいはずして方丈へにげ入りける。折ふし一休その寺に居給ひて、何事なると問給へば、しか〴〵と申さるゝ。一休宣ひけるは、いらざる俗のとがめごとや、かくて藝にもならざること誰かは覺え侍らん、われも知らねども、いで〳〵云うて聞すべしとて、羅漢堂へ進み出て、こなたへ物申さん、羅漢達の名の御望みかと仰せられければ、おそれながら承はりたしと申しける。さらば一々問ひ給へ。まづ眞中なるは。釋迦牟尼。左なるは。迦葉。右なるは。阿難。さて次はと問へば、南無さたんど。其次はと問へば、すぎやとや。其次はと問へば、をちこちと。一々知り給はねば蓮華咒にて答へ給へば、五百羅漢のことはおき、百貫羅漢を問へども、なにかはつまり給はんや、彼俗こと〴〵く問ひて、扨もよき御覺かなと申しければ、さもなく候、いにしへは一巻ばかりは中に覺えて候へどもと仰せられければ、笑ひて歸りけるとなり。されば時にとつて頓作なる御心入れと、人みな感じけるとなり。問うて用にたゝず、覺えても用にたゝぬことをば言はざるにまさるめでたし。よしなき事をこびて問ひあやつられける。すべて羅漢のみにもあるべからず。

第四　元三は歲の始め、月のはじめ日のはじめとて、一天四海の人々のかしこきもおろ

たゞうど—常人

別けられず、餘りに合點ゆかざれば、土佐守へもたせ、つかひ何なりと問へども、我等も知らずと云ふ。かゝる畫を持つて何かせん、引破らんと思へども三國一出來たり。とやせむかくやあらましと思ひけるが、いや〳〵一休和尚に讃をこひて掛物とせんずるぞと、いそぎ大德寺へ走り行き、一休に申上げけるは、此畫は土佐守に書かせしが、さらに此水の中の物知れず、いかゞ御覽あると申しければ、されば何共見えね共、讃のぞみならばして取らせんと仰せられければ、忝けなしとて讃を請ふ。一休其畫に讃し給ふは、

水中に物あり、その一の物を問へば、かきし畫工も知らず、持主も知らず、讃する
我は猶しらず。

と遊ばしければ、見る人聞く人、さてもまつすぐなる御心ばせや、むこならで三國一の掛物なるべしといひしが、今においてそのかけ物、たゞうどの手にはあらずとかや。

第三　或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ、貴賤群集の見物有りけり。法事やみて後、其寺の僧羅漢の前に香花など取りてゐけるに、こびたる世俗一二三人羅漢を見物し、みな〳〵人去れども、此ものはつく〴〵と見居りて、扨かの僧に問ひけるは、此五百羅漢に一々名こそおはすらん、御坊は定めて御存知あらん、うけたまはりたしと申しけれ

瓢簞の川流—輕きことの譬

太鼓うち殿—たぬきの事俗は狸は腹鼓を打つと云ふより云かる口に云ひしなり

ぞ。白河の者なりと申されければ、

白河黒谷隣

とあそばしければ、彼僧肝をつぶし、さもむづかしき章句なり、一句の内に二つの色名二つの所の名、いかなる瓢簞の川流なる輕口も、少しはしぶりこぶりし給ふべしと思ひしに、貝とる海女ならで、息もつぎあへず付け給ふ、かゝる名對ある上は恥やこはしとて、空うそぶいて尻をからげて逃げられけるとなり。

第二　或人畫書の土佐守に内々掛繪を一幅たのみければ、終にかきて遣はす。彼人心せきて、直に土佐が宿へゆきて申されければ、折ふし太鼓うち殿にはあらねど、晝寢をしてこそ居けれ。かの仁常々したしくかたる中なり、また内々頼みおきし事なれば、引づりおこし書かされける。土佐眠るにたへたり、たとひ一夜ねずとなり共、晩に書きてまゐらせんとて起きず。しかれども又晩といはゞ、明日か川の淵瀬と心がはりもやせん世中なりひらにといふ。是非なく筆をとり、くる〳〵とまはしてはけおつ取り、さつと書いてこれ〳〵とてふせりける。望足りぬと其畫を取つてかへり、ひねくりまはして見れ共、何ともさらに體なく、水を書いて其中に一筆くる〳〵としたるもの有り、さらに見

一休咄　巻之二

客發句に亭主脇—連歌にいふ諺

第一　白河の邊に住居しける桑門に名譽なる輕口の人侍りけるが、一休の輕口なることを聞き及びて、いつぞは行きて難句をしかけて試みんと、常々心がけられけるが、ふと思ひあたりたる趣向有りければ、さらば一休へ參りて御知人にもなり、扨一句してみんと、遙々白河邊土より紫野へとぞ急がれけり。折ふし一休も庵にましまして御知人になり、とかくふる程に、內々たくみし一句の句作も出來ければ、彼僧申されけるは、承り及びし御輕口を、何にても一句あそばせかし、何とぞ付けて見侍らんと申されければ、一休仰せらるゝは、客發句に亭主脇とこそ申せ、先其方あそばせと有りしかば、內々たくみ置きしことなれば、さらば申して見んとて、難句をこそは出されけるが、此所は何と申す、紫野と仰せられければ、

紫野丹波近

とせられければ、いまだ息もひき入れぬに、はや付けられけるが、そなたはいづくの人

ば、見物の群集御顔をまもりゐ、生たる魚をはき出し給ふかたと、今や〳〵と待ちゐたるに、暫くありて宣まひけるは、おの〳〵はる〴〵の御出なるほどに、いつもより一きは手ぎはにやるべしと、種々思案をするに、中々吐れさうにもなし、是非におよばず糞になりとひりてすて申さむ、はや各々は御かへりあれとて、内へ入給ふ。上下萬人膽をつぶし、さてもおどけたる御坊と興を醒してかへりけるが、其中に心ある者のいひけるは、たゞ今參りたる魚はみないきて淵にをどるなり、有難き一言かな、誠に正法に奇特なしとこそ承りしに、人のあまりいはんとて不測なることをいひて、一休をほめんがために、かへつてそしるなれば、其理にしめし給ふ、有難し〳〵と感じければ、みな人これに氣がつきて、合點したも合點せぬも、頷きあへりて歸りしとなり。

やと、口をとぢて歸りける。

第九　一休和尚は生佛にて魚を參りて水中へ吐出し給へば、其魚忽ちいきかへりて、元の如くになると洛中に此事專なりと、或人來りて語りければ、一休をかしく思しめし、洛中の辻々に高札をこそあげられける。其ことばに曰く

來るいつかの日、さがり松の邊むらさき野において魚を食ひて、其儘もとの魚に吐出し水中に踊らさしむる事なり。御望のかた〴〵御見物に待ち奉る、

太夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書かれける。洛中の諸人是を見て、うそか、誠か、かくとは人々いひけれど、誠しからず思ひしに、さてはうたがふ所なし、正しく御自筆にて高札を立てらるゝ上は、しるしなくては叶ふまじ、いざや人々見物して末代のかたり事にせよやとて、知るも知らぬも、見たも見ぬも、其日の來るを待兼ねて門前に市をなし、我見洩さじところぶまでのび上りて、洛中の貴賤群集せり。其刻にもなりしかば、大だらひに水を入れ、なるほど魚をよく料理て、彼たらひの邊りに御膳をぞすゑける。一休出給ひて、彼魚をひた食に食給ひて、さてはんぎりにむかひて喝々とのたまひて、暫く目などをふさぎなどし給へ

千手觀音鮹手多　刺懸柚酢拜如何
佐刕一味天然別　他禁戒任老釋迦

やれ、引導はすみけるぞ、火葬にすべきか土葬にせんか、いや〳〵水葬にせよとて、手とり足とり、手に〳〵沐浴させて、柚醋をかけてひたぐひに食ひて、さる檀方へ行きて酒など參りける。あまりにおほく鮹を參りければ、吐逆なされけるに、皆蛸なり。檀那衆是を見て驚きかへりて申しけるは、一休和尚は佛のやうに思ひしに、鮹を參りけるか、なまぐさ坊や、是は〳〵とあざけり笑ひければ、一休すこしも騷がず、いやとよ我等は鮹をたべねども口より出れば詮方なし、さりとてはくはぬと、まつゝすみになりてあらがひ給へば、口より吐出したるものを食はぬとあらがひ給ふかや、いよ〳〵聞えぬ御坊やとをどりあがりて笑ひければ、いで〳〵わごぜ達にくはねば口より出たる證據を見せんとて、皆々引連れて百萬遍にゆきて善導法然の畫像を見せて、あれ見給へや人々よ、ぜんだうの阿彌陀をくひし事はなけれども、口より三ぞんの彌陀佛出で給へば、善導大師さへ、くはねど口より出づるあみだを制し難し、まして愚僧くはね共、口より鮹の出る事、さらに詮方なしと仰せられければ、皆人よこ手を打ちて、さても頓作なる御返答

本來の面目坊—自家本來の面目を觀るは禪家の第一義

出でて、扨こそ申さぬ事かとて、いそぎ其名の知らまほしくて、彼文ひらきて見れば御歌あり。

本來の面目坊がたちすがた一目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達磨もあらかんも此君故に身を窶しけり

と書かれたり。三人のものども案に相違して、横手をはたと打ち、日比の御心も知らぬ身が、あらぬわざを思ひけるこそをかしけれ、いまにはじめぬ御どうけに、たばかられけるこそ愚なれ、まことに有難き御僧かな、畫にうつし木に彫めるはおほけれど、わたもちの釋迦如來なりと、をがまぬ人はなかりけり。

第八　一休和尚は蛸が御好物にて、或日のつれ〴〵に蛸を買ひにつかはれけるに、折ふし棚にきれて、彼つかひの者こゝかしこと尋ねておそく歸りければ、待わび給ひて一首侍りける。

此たびは急ぐといふにながそでの蛸の入道みちの遲さよ

と遊ばしける處へ、蛸四五盃買ひもて來りければ、一休よろこび給ひて、此蛸むざ〴〵と食ふもむざんのことなり。引導の頌なくてはとて一首、

糸によるものならなくに—貫之の歌此つゞきは「別れ路の心細くも思ほゆる哉

面上—面前と同じ

ぬこともや侍らん、ひそかに、よき中の知音のみ二三人見舞ひて、そとうかゞひ侍らば名ざし有るべし、然らばたれ人にてもあれ、此もの共がかゝりなば、などか御本意を遂げられぬことは有るべからずと、頼もしく言合せて、ひそかに三人參りたり。一休出合ひ、四方山の物語りすみて、一人申し出しけるは、此間さま〴〵の御療治にても、御脈は常にかはらずと、醫師おの〳〵申すなり、平生にはちがひて何とて心ふかく渡らせ給ふぞや、定めて戀をなさるゝと見つけ侍るはひが目か、ありのまゝに仰せられよ、叶へて參らせむと打つけて申しける。一休いかにも嬉しげなる御顔ばせにて、この上はなにをかさのみ隱すべし、此日來戀ひわびて、扨かくのごとくやつれはてゝ候なり、よくこそ仰出されたり、何とやらん、我等にはにあはぬ事にて侍れ共、おの〳〵は日來のよしみなれば、ひとへに沙汰なくかなへてたべ、去ながら絲による物ならなくに、心亂れてはづかしや、それぞと名をば面上にて述べがたし、一筆かきてまゐらすべし、門外へ出給ひて、おの〳〵開き御覧んじて、いそぎ叶へて給はゞ、我等が命は長らへて、おの〳〵には其替りによき道をしへ侍らんとて、奥の間へずんと入り、一筆さらりと書きて引結び、彼三人に渡し給ふ。三人よろこび、御心やすく思しめせとて罷出で、門外へはしり

一圓―のこらず

しつねつ―濕熱

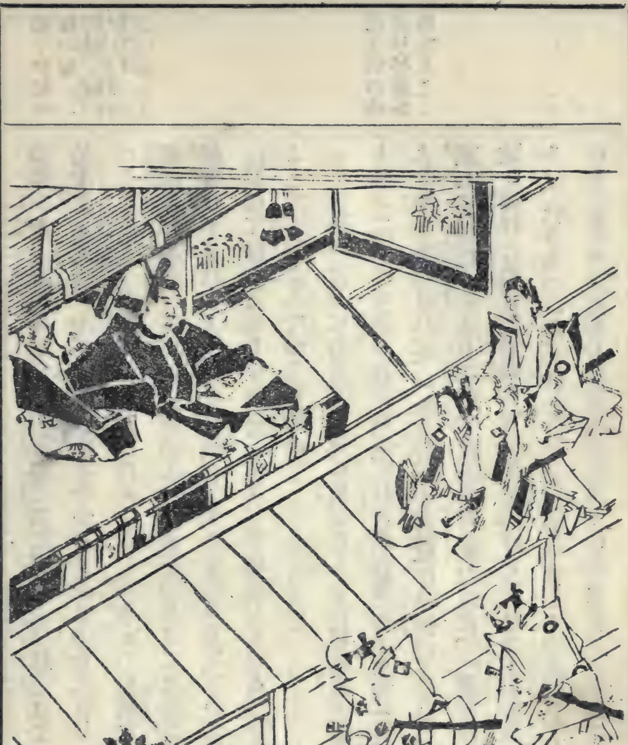
下帶をまとふとひとしく、みな〳〵物怪のきしかば、さても名譽の御事なりとて、その下帶を、えはづさざりけるに、一休御上りの時、又立寄り給ひて、かの首の下帶をはづして、金の緒にかけて都へ上られける。それよりして、今の世の佛神のかねの緒を下帶のたけにくらべ、六尺に定めけるとなり。不思議なる事どもなり。

第七　一休一大事因緣の御工夫なされし時、諸旦那あるひは御伴達衆、毎日とぶらひ來まして、さまたげとなりければ、かしましく思召して、御心地あしとて、一圓人々に出合ひ給はず。みな人心元なくて、をり〳〵に御見舞申し侍れば、御長髮鬅々とし給ひて何とも色見えず、御なやみとのみ仰せられける。旦那を先として御知音衆もより合ひ、是はきづかはしき事なりとて、時の名醫を、入替へ〳〵かけまゐらせて、御いたはりいかにと聞けば、醫師申されけるは、御脈はいかにもよし、不審なる御煩と、どれ〳〵も申しければ、ある時旦那、知音衆、よりあつまり、此御なやみの樣子は、如何樣しつねつのなやみとは見えず、若き御僧のことなれば、もしや戀などをばなされて、かく思ひ煩ひ給ふ事もやあらむと、二人申しければ、おの〳〵此儀尤しかるべし、とやせん角やあらんと口々に申されけるが、いや〳〵人おほく知りたりとおぼしめさば、あかし給は

眼はこれ迄なりとて、あづまを指していそがれける。所の人々これを見て、あら勿體なの御事や、きようがるやせ法師の物ぐるひをつれ來り、かゝる大事の菩薩に小便しかけさせることの腹立ちさよ、彼法師め、のがすなと、我も〳〵とはがみして追懸けるが、尼入道はよりあひて、扨ももつたいなや、一休坊主めがしけることはとのゝしりて、淸水を掬ひ來りて、かの地藏にそゝぎかけて、小便をあらひ落して、又供物をしなほし、ゆるし給へと禮をなしけるが、彼追懸ける若者も道にたふれ、彼小便あらひし者共もわなゝきふるひ狂亂して、口ばしりけるは、天下の老和尙一休の開眼なされしを、なにとて洗ひ落しけるぞとのゝしりて、みな〳〵物に狂ひしかば、妻子眷屬おどろきて、やれ彼一休和尙を追懸け、いま一度開眼をたのみ奉れと、我も〳〵とおつかけけるに、桑名の渡舟にのり給ふ所にてぞ追付きけるが、彼段〻はしく申しければ、それは不便のことなれども、是より歸るに及ずとて、布下帶の八百年ばかりにもなるらんとおぼしきを取出し、これにて地藏の首をくゝりて置け、忽ちにやまひは治すべしとのたまへば、かの者共勿體なしとは思へ共、數のきとくに恐れて、おづ〳〵御請け申して、急ぎ關に歸りければ、一休は關東へいそぎ給ふ。さて里人かへり、仰の如くおづ〳〵地藏の首にかのふる

關―伊勢の關の宿
開眼―新に作りたる佛像に魂を入るゝ式
ぼんのくぼ―頭の中央の凹處
廬山―支那江西省にあり

第六　關の地藏をはじめて造りし時、所の人々よりあひ、此開眼をば、いかなる御僧にか賴むべしと、皆々口々に評定しけるに、其中に一人申しけるは、我等今度都一見仕りし時、京童のいひしは、今の代には紫野の一休に勝る僧はあらじと申せる、いざや是ほどの地藏をこしらへ、世のつねの僧に賴まむより、一休和尚を請ずべしと言ひければ、おの〳〵然るべしとて、はや都のむらさき野へと急ぎける。折ふし一休寺に御座有りける。關の者共御禮申す由を委しく申上ぐる。一休のたまひけるは、幸ひ關東修行に出づるなれば、立寄り開眼して參らせむと仰せ下さる。望人よろこび走り歸り、一休こそ御下なれとて、上を下へともてかへし、なけれど道の塵をとり、あたまを棒につき、踵をぼんのくぼにつけて、御迎ひに出でける。一休たゞ一人すご〳〵と來り給ふ。皆々よろこび、先御禮を申す。一休かの地藏はとのたまへば、さしも結構なる地藏をつくり、供物をそなへ、香花をたむけ、しやうごん怠らずぞ見えける。さて開眼して給はれとて、一休を請じて、いかなる事か有るやらんと、われも〳〵とのびあがり、おしあひつまづきなどして見る處に、一休つか〳〵とはしりより、彼地藏のあたまから、小便をしかけ給ふこと、廬山の瀧のごとし。種々の供物もうきになり、流るゝばかりしかけて、開



百姓のあたり—百姓の取扱方

免—田の物成り年貢を免ずること

の御領地にてありけるが、左近尉と云ふ家老百姓をひたものせぶり取りけるに、百姓共是を歎きて、いかゞせんと犇きあへり。其中の老人申しけるは、いかに百姓のあたりきつしとても、武家とは遙かちがふべし、御公家の長袖なれば、うつたへ申して見んとて、訴状をたゞみける所へ、折ふし一休鉢をひらきに出給ふ。百姓ども一休と請じ、此訴状御書き下されよと頼みければ、やすき事なりとて、いかなる事ぞやと宣へば、しかぐの事にて侍ると申しければ、長々しき状までもいるべからず、是をもちて近衛殿へ捧げよとて、歌よみてやらせ給ふ。

よの中は月にむらくも花に風近衛どのには左近なりけり

と詠みてこれを遣されければ、村々の百姓かゝる事にては免おほく給はることと思ひもよらずと申しければ、一休ひたすら此歌のみ捧げよと仰せられて歸り給へば、おのく詮議しけれ共、本より土のつきたる男共なれば、一筆よみかく事ならざればぜひなく、彼歌を捧げければ近衛殿御覽じて、是はいかなる人のしけると仰出されける。百姓申しけるは、たき木の一休の御作にて候と申せば、その戯者ならでは、かゝる事いはん人は、今の世に覺えずと興じ給ひて、おほくの免を下されけるとなり。

又とふ、色即是空の心は前の哥の心をかへして見るべきや。答へてよめり、

花を見よ色香もともにちりはてゝ心なくても春はきにけり

又とふ、佛法とはいかなる心得をよしとし侍るや。答へてよめり、

佛法はなべのさかやき石のひげ繪にかく竹のともずれの聲

又とふ、世法はいかに。こたへて詠めり、

よの中はくうて糞してねて起きて扨其後は死ぬるばかりよ

と、一々問ふことばの下に歌よみて答へられければ、親當舌をふるはかして、聞き及びしよりたけき活僧かなと、頼もしく思けれぱ、いよ〳〵道をしめしたまはれ、いつまでかたるとも濱のまさごの數々なれば、先御いとま申すとて、しをりがきの邊までかへりけるが、手をはたとうち立歸りて、一大事のあんじん忘れたり、佛にはいかゞしてなりけるぞと申されければ、一休きやつは癖者かなと思しめし、それはいとやすき事なりとて、ふむぞりかへりて目口をひろげて、かくして佛にはなるよと宣へば、親當おどろき、活大禪師かなと心空及第してこそかへりける。

第五　一休和倘ならのたき木と云ふ處に、折々はおはしましける。其邊の村々は近衞殿

こゝはいづくとか知るや。　紫に染めたる野邊。

如何としてか染めけるや。　尾花槿紅菊紫蘭。

散りての後はいかん。　宮城野が原。

原には何事か侍る。　水は流れて沈々風は吹きて颯々。

よきかなやこれへ〳〵と請じ、茶をまゐれとて一首よめる

何をかな参らせたくは思へども達磨宗には一物もなし

一物も無きをたまはる心こそ本來空の妙味なりけり

と申されければ、一休のたまひけるは、聞き及びしより蜷川殿は道心者なりとて感ぜられける。扨四方山の物語過ぎて、親當申されけるは、少し承り度き事有り、邪正一如と心得はいかなるが能く侍るや。一休聞き給ひて、わごぜは歌ずきなれば歌にて答へ侍らん、聞給へとて邪正一如の心を、

生れては死ぬるなりけり押並て釋迦も達磨も猫も杓子も

又問ふ、空卽是色とはいかん、答へていはく

白露のおのが姿は其まゝに紅葉におけばくれなゐの玉

蜷川新右衛門―原本通り以下同じ
道師―師匠

と侍りしによく似り。一休の心を問ひて、今其方の歌よむ事よと感じ給へば、彼人申すやう、一休の二字をたづねて四休の四字を知る事、誠にもとめずしてうるを幸と注せしとかや、これ幸ひなりとよろこびけるが、かの四休の内、三平二滿とはいかなる事やらんと申しければ、其方の内方よと宣へば、合點まゐらず、見にくきといふ心かと云ふ。いやさにはあらず、おとごせのことなりと宣へば、扨もめづらしきことかな、誠に三平は兩の頰と鼻、二滿は額と頤よ、おもしろき故事なり、去ながら女どもにきかせば一休様をつめり申すべしと、笑ひてかへりける。

第四　一休の時代に蜷川新右衛門尉親當といふ人有りけるが、禪法に身をやつし、心を惱しけるとなり。一休の發明なる事を聞き及びて、道師とたのみ奉るべしとて、或時一休の庵室へたづね行き、柴の扉をほと〳〵と敲く。をりふし一休出で給ひて、いかなる人ぞと問ひ給へば、いや苦しうも候はず、佛法修行の大俗參りて候と申されければ、一休早問ひ給はく、

なんぢはいづこの人ぞ。　答へて云はく和尚と同國。

國には何事も侍らぬか。　鴉はかう〳〵雀はちう〳〵。

すんさき—
一寸先

いとふ事侍らずと仰せられければ、扨も有難き御歌や、おそれながら只今さづかり申せし心を、一首申してみんと申されければ、それは奇特なるこゝろざしやと宣へば、かの俗よめり。

有漏路無漏路一やすみぞと聞く時は十萬億土すんさきと知る

と仕りければ、一休きこしめし、善哉々々とて尻餅ついてよろび給ひて、かゝるためし唐土にも侍りし事あり、四休居士といふ人有りけるに、山谷といふ人その四休の心を問ひければ、四休笑ひて答へていはく、

麁茶漬飯飽即休　補破遮寒暖即休
三平二滿過即休　不貪不妬老即休

と申されければ、山谷がいはく、これ安樂の法なり、それよく少時は不伐の家なり、足ることを知るは極樂の國なりと感じて、したしくかたりて、四休の心を詩三首につくりて謠ひたのしみしとかや。其一首は、

富貴何時潤髑髏　守錢奴與抱官囚
大醫診得人間病　安樂延年萬事休

有漏路—煩惱界

ひて、田をかへす爺、海苔をする海女まで、物語のすゑまでもそれぞと人に言ひもてはやされ給ふこと、誠に常人にてはましまさざるなり。

第三　一休和尚御諱は宗純と申せしが、別號を一休と名付け給ひけるに、或人來りて一休と名付け給ふ御心は、いかなる御心得にて侍るやと尋ねければ、よくこそ尋ね召れける、去ながら一休にふかき心もあらざれば、語りて聞かすべきやうもなし、聞き給へと詠めりけるは、

　有漏路より無漏路へかへる一休雨ふらば降れ風吹かばふけ

とあそばしければ、かのもの聞いて、さても面白さうなる御歌や、有漏無漏とはいかなる事にて御座しけるぞと尋ねければ、御そばなる拂子を取りてかの者の顔をなで給へば、目かほしかめてうつぶしける。一休拂子を引き合點かとのたまへば、いや何事かなさるゝと驚きたるばかりにて、何とも心得ずと申す。その何とも心得ぬ處が無漏路なり、はつと驚く所が有漏路なりと仰せられければ、かの俗きもに銘じて、有難や、そくじに大事をさづかりけると悦びて、さて御歌の一休とは心得申し候、雨ふらばふれ、風ふかば吹けとは、いかなる御心にて侍りけるぞ。さればよ、わづかの道の事なれば、雨も風も

御家の一棒
―禪家慣用の警策といふ棒

我等も引導おはしますとて、さらぬ體にておはしける。師の坊もあきれ果て大に笑ひて、それはいかなる引導ぞや、もししからばゆるし申すべし、しからずば濟まじとて、かの御家の一棒をこわきに搔いこうで、引導いかにと責められける。一休すこしも騷がず、いで引導つかまつらんとて、左には鯉の細首ひんにぎり、右にはながたなを斜に構へていはく、

なんぢ元來なま木の如し。助けんとすれば逃げんとす。生きて水中に遊ばんよりは、しかじ愚僧が糞となれ、喝。

とて、鯉の細首水もたまらず打落し、ぐつ〳〵とかい煮て、したゝか食ひて、そらうそぶいて御座せしかば、師の坊これを聞き、さてもよき引導ふりて、手がいかなる心得かな、昨夜のわれらが引導にては、からざけが佛果をば得ずしてくそとなるべし、なんぢが鯉はくそとはならで佛果を得たり、さて〳〵活機なる人や、禪僧なるかや小僧殿とて、かの一棒をからりと捨て、舌をふるひて宣ひけるは、三年になる鼠を、今年生れの猫子が取るとはかゝることをや、とかくに汝はたゞ者にはあらじと、感じ給ひけるが、案の如く、程なく天下老和尚と自らいへるほどの活祖師にて、一休とて名を千歳に傳へ給

わごぜ―汝

ながたな―庖丁

間の身として小僧にのみ罰あたらむや、老僧こそなまぐさ物まゐらば罰はあたるべけれとて、嘲笑ひておはしければ、師の坊のたまふは、幼き身として心たけたる言ひやうかな、さればよ、老僧とて御赦はなけれども、われらは引導をして食ふなりといひ給へば、その引導いかなることやらん、少し承りたしと申されければ、さて〳〵わごぜはこしやくなる人や、いで引導して聞せんとて、一盃盛たる乾鮭をさげて箸おつ取りのべて宣はく、

なんぢ元來枯木の如し。助けんとすれども生きて二度水中に遊ぶこと能はず。愚僧に服せられて佛果を得よ、喝。

と宣ひて、ひたもの參りけり。一休つく〴〵と聞きて、又眉をひそめて思案して、夜のあくるを待ち兼ねて、いそぎ魚の棚へ走行きて、したゝかなる鯉を一獻買取り來りて、味噌汁をこしらへ、かの鯉をひんにぎり、ながたなをおつ取りのべて、ほそ首ちうに打落さんとせられける所へ、師の坊立ち出で御覽じて、是は沙汰のかぎりなり、昨夜もしめし敎へしごとくに、いとけなき小僧の身として、からざけだにも無用といひしに、其いきてはたらく物を害してくらはん事、勿體なしといましめ給ふ。一休すこしも騷がず、

ひたもの―ひたすら
かまくら街道―廣きに諭ふ
せき―咳、關
からざけ―鹽鮭

出しけるが、今一度不審せばやと思ひ、一休にはわざと魚類の膳をすゑけり。珍しくや思しけむ、ひた物食ひ給ふ。時に旦那、人しれぬ衣めしたる御僧の、したゝか魚を參ることよと戯れければ、一休聞き給ひて、口はかまくら街道なれば、貴きも行き、賤きも過ぐとのたまへば、かゝる物も通り候べきかとて、刀をするりとぬきける。一休すこしも騷がず、敵か味方かと問ふ。敵なりといふ。然らば通す事ならず。いや味方なりといへば、そのまゝけへん〳〵と宣ひて、くせ物が通るとて、只今にはかにせきが据りたるはといひ給へば、旦那も和尚も、此お小僧の口にはかたれまじとて、言の葉なく舌の根をふるひてやみぬ。

第二　一休和尚十二三の時、師の坊につかへて、物よみ手習などしておはせしに、折ふし夜寒の比なれば、師の坊からざけを羹としてたゞ一人まゐりて、一休へは豆腐やうの物まゐらせられけるに、一休これを見て、およそ出家は、なまぐさ物を食はざるよし承りしが、和尚は乾鮭をまゐるよ、くるしからずば我等もたべんと申されける。師の坊をかしく思召し、汝等がやうなる小僧の身として、なまぐさものくふ時は、たちまち罰あたるなりと仰せられければ、一休眉をひそめて、暫く思案して申さるゝは、おなじ人

はし―端、橋

方へも太鼓のばちをあて申さん、革の袴きられける程にとおどけられけり。その後かの檀那養叟和尚を齋によぶとて、一休も御供にと申す。かの返報せばやとたくみけるが、入口の門の前に橋ある家なりければ、橋のつめに高札を假名にて書きて立てける。

此はしを渡る事かたく禁制なり

とかき付けける。養叟齋の時分よしとて一休をめし連れ、かの人方へ御出あるに、橋の札を御覽じて、此はし渡らでは內へ入る道なし、一休いかにと有りければ、一休申さるるは、いや此はしわたることと假名にて仕りたる間、眞中を御渡りあれとて、眞中をうちわたり內へ入り給へば、かの者出合ひ、禁制の札を見ながら、いかではし渡り給ふぞととがめければ、いや我等ははしは渡らず、眞中をわたりけると仰せらるれば、亭主も口をとぢ侍るが、何がな小僧に不審申さんとて、又いはく、凡そ沙門の形といつぱ、忍辱二體の衣を著、罪障懺悔の袈裟をかけてこそ僧と申すべけれ、いかに小僧なりとて、俗衣の出立ち心得がたく候と申せば、一休をさなけれども、歌一首よみて答へられけり。

きてきたぞ本來空の黑ごろも袖ながからで人こそは知らね

と侍り給へば、旦那も養叟も手を打ち口をあいてふさぎ兼ねられけるとなり。扨御齋を

参學―禪の道をうけ學ぶ

ばち―罰、桴

一休咄

巻之一

第一　一休和尚はいとけなき時より、常の人にはかはり給ひて、利根發明なりけるとかや。師の坊をば養叟和尚と申しける。こびたる旦那ありて、常に來りて和尚に參學などし侍りては、一休の發明なるを心地よく思ひて、折々は戯をいひて問答などしけり。或時かのだんな革袴を著て來りけるを、一休門外にてちらと見、內へ走り入りてへぎに書付け立てられけるは

此寺の內へかはの類かたく禁制なり。もしかはの物入る時は、その身に必ずばちあたるべし

と、書きて置れける。かの檀那是を見て、革の類にばちあたるならば、此御寺の太鼓はなにとし給ふぞと申しける。一休聞き給ひ、さればとよ、夜晝三度づつばちあたる間、其

も人もはぶしは強けれども、よみくだく事ならず、偏に胡椒丸呑みなり、風をひかぬ養生ばかりにては詮なし、よし同じ事にても、思しき事いはざれば腹ふくるゝわざなり、たとひ狂雲集は住吉の神なりとも、これを人に見せぬもいと口惜し、さてかくあらく侍るなり。

えうつりては猫の爪とぐがごとくに、一書付け二三冊となして、一休咄と名付けて祕してけるが、或時また御寺へまゐり、お喝食達に問ひけるは、扨も一休和尚はいかなる御僧やらん、犬うつわらはべ牛かむ男まで、よく知り申し候といへば、それ一休和尚は後小松院の二の宮なり、世人の口にある歌にも、後の小松の二葉と詠ぜられけるなり、誠にいとも賢き人にてましく〳〵けるが、たかき御位をもふみちらし、大内ををどり出でて、十宗をたゞ一目ににらみつけ達摩宗となり給ひて、九年面壁をも、賊のあとの棒ちぎり木と見立て、その身はあさがら程にもおもはず、うき世をばへうたんより輕くもてなし、邪なるきざしなく、竹二つに割りたるが如くの御心ざしなりしなり、路人の口碑にあれば、舌のさきのひまとし侍ると仰せられ候ひし。扨はいよ〳〵有がたし、我等一人して見るのみも罪ふかし、梓にちりばめて、夢の世わたる人々の、煩惱のねふたなぐさみと思ふなりと人に語りければ、一休の御事は狂雲集にくはしくと申しもあへず、狂雲をもとめて見れば、まことに御一代のたはぶれは殘らぬさうなり。されども其書は、唐土のかたくな文のごとく書きたれば、我

一休咄序

此年比くるす野の片隅にねまりゐて、萩の下枝をあつめては、雨もる宿の漏をとめ、篠の葉をならべては嵐をふせぐよすがとなして、一鉢のまうけ藜の羹をすゝりて、うつら〱とねぶり暮しけるが、ころしも秋のすゑ、千代を一夜のなが〱しさに、一人かもねも寢られまじく思ひて庵ちかき御寺へ參らばやと、としよりこひとはいはねど、鳩の杖にすがりて、よろぼひ出でて、御寺の大庫裏の長爐のはたにかゞみければ、小沙彌喝食達出合ひ給ひ、煎茶をたまはり、昔物語をせよと仰せられければ、祖父と祖母との咄より知らぬ我なれば、かしこまつたりとは申せども、山へせんだくしに、川へ柴苅りにと申しければ、ふるめかしのはなしや、いで此寺の先師一休和尚の放氣ばなしして聞すべしとて、ひた物がたりし給ふを聞けば、我も人もおぼえたるは片言まじはりなり。扨もおもしろやありがたやとおもひて、わすれては大事なりと葛紙の雜紙の皺をのばし、書付けかへりてみればえ堪へぬものなり、又參りてうけたまはり、そろり〱と鼠の鹽なむるがごとく、聞き覺

元和元年之頃、安樂庵咄を所望いたし承り候へば、別而おもしろく存ずるに付いて、御書集候うて草子にいたし給はり候やうにと申し候處、一兩年過八册に調へ給はり候。紛失可仕かと存じ奥に書付け置也。

寛永五年三月十七日　　重宗

此草紙は、いまだ櫻のみどりこの、年は十になり給ふといふ春、御父周防守殿の前にて、わがよむを如何にも神妙に聞きおはします風情、栴檀は二葉よりの感に堪へて候ひきに、又かこひにて茶をたてられ給うたるしほらしさいふばかりなければ、生ひたゝせたまひて目出たう榮え、するはんえいあるべきいろまでも床しく見及び、此書をかきて贈り侍るめり。

前誓願

安樂老

寛永五年三月十七日

板倉侍從殿

參

○夢に卒都婆を見ると思ひ、さめて後わづらふ事あり。博士を呼びてうらなはせたれば、卒都婆は木でしたる塔なるあひだ、祈禱をせられたらば、本復せんと祝うたり。

○江州かたたといふ所の地頭へ、毎年大晦日に浦の百姓かならず鮒を二つ宛あぐる例あり。或時一つあぐる。主人氣色かはり腹立するに、元日膳を出すをり、女房したゝめて持出で、今年は猶もふなをりせんと云ふまゝ、彼鮒のどうぼねを二つに折りて參らせけり。

○故相國駿河の御城出來たるいはひに、三百韻の連歌興行なされし時、板倉六右衞門入道正佐巻頭の發句に、

なみ木たゞ花はつぎ〳〵のさかりかな

とありければ、相國大に御感ありて、乃ち其懐紙をもたせのぼせ、玄旨法印へ見せ參らせられしにも、稱美斜ならず候ひし。されば右の發句ことばの縁にたがはず、御子孫はん榮のめでたさ、もつとも祝ひすまいた。

醒睡笑終

桶結—桶屋
かん—雜煮

○桶結のありしが、元日の朝ふとおき〳〵、女房のいひけるやうは、元三から大晦日迄ようゆひ事をする人には、お身より外又二人ともあるまいぞ。やがて男、そのゆひ事は、千あらうと萬あらうと、皆わがわるいからよと祝うたれば、其年そこ〳〵の仕合せ、くれ〳〵よかりき。

○江州甲賀大原の庄に菊田の玉木といふ者あり。正月のかんの箸に栗の木かた〳〵、柏の木かた〳〵四角に削りて、親子三人祝ふ心は、九里四方にかしくふとの心なり。

○氏康公の城中にて、晝狐の鳴きたる事ありき。これはよからず忌む事なるにといふを聞きて、

晝はきつねに鳴く蟬のから衣おのれ〳〵が身の上にきよ

○京都六條の道場に、文閑といふ連歌の作者ありき。其親の名を惣吉とよぶ。或時彼惣吉火事にあへり。其砌文閑雄長老へ尋ねられたれば、長老出合せ、文閑に火事の噂を問うて後、

御親父の貧乏の神をやき拂ひ惣吉事にやならんとすらん

右の惣吉家やけてより後、一段仕合せなほり富貴なりしと。

何事もおめでたいと祝うたり。

○或人福をいのりの爲、はつせの觀音に一七日參籠しけるが、やうやく六日目の夜半ばかりに、俄に我ひだりの足にはれものいで來て、ひたもの腐行くを、こはそもいかんせんと悲しみ侍るうちに、夢なれば覺めてけり。あくるを遲しと宿坊にかへり、右のむねを語りければ、めでたき大悲の告夢なり。やがて利生におあしをくさる程もち給はんとぞ申しける。嬉しげにて又こもりぬ。まんずる夜の夢に、兩の足に物いできて、左も右も腐るとおもひ驚きぬれば夢にてあり。件のむね又宿坊にかたれば、いよ〳〵福壽海無量の利生あらたに、料足をくさるほどもち給はんとぞ祝ひける。

○物いはひする商人ありて、初春の朝ごと、こぶかちぐりなど菓子を入れてすわる。そめつけのはちあり。宵より妻のとりいでて下主に渡し、綺麗にすゝぎてあけよといふに何とかしけん、取落してうちわりぬ。女房肝をつぶしあへり。あけぬればいつものちやのこいづるやと、亭主までどもさらに出でず、そのまゝ氣色をそこなひ、女房を叱る時に、下主くだんのわれたる鉢をもちいでありの儘にいひてけり。亭主あんにかはり、きげんをなほし、珍々重々なるかな、ことし我あきなひは八割あらうずよと祝うたり。

料足―錢、兩足

お袋―母

正路―正直

五百八十―五百八十年は長久を祝ふ詞

を、賣主も見ればうばなり。肝を消しながら、おくれぬ顔して言ふやう、是こそえびすのお袋にて、殊更にめでたしと祝ひければ、げにも〳〵わかえびす殿も、おふくろがなうてはいかであらん、福の源これなりと悦びて、頂きをさめけるとなん。

○若狭の太守武田殿、無縁の出家をかゝへ置かれ、寺など建て憐愍あさからず。されどもその家の事を知る人正路ならず、何を送らるゝも或は半分、或は三分の一遣し、中にて殘す。彼會下僧もよく知りながら、さすが國主へ申上ぐべきよしもなかりしに、ある年の暮正月の菓子に胡桃を千送れとあり。然るを、五百八十やりたり。僧不審に思ひ、一首の狂歌を參らする。

　下さるゝくるみの數も君が代も目出たかりけり五百八十

大守代官をめし出し、くはしくせんさくあれば、あやまる處紛れなかりつれ共、これは祝儀の歌をよまれし僧の心を感ずる條、今度の科ばかりはゆるすとありし。

○商人のならひにて、正月は藏の口に必ず鯛をかくる例あり。これをなん傳へてかけこだひといふ。或者の藏に、目のぬけたる鯛をかけておけり。亭主元日の朝見附け、大に機嫌をそこなふ時に、こざかしき中居出でて、ことしこなたのお仕合は殘る事なし、

○同じく信長公へ、諸大名おの〳〵元日の出仕ありつる座敷にて、仰せあるやう、こよひの夢にいづくともなく出陣のことちして、一宿よろひて馬に乗ると思ひつれば、乗りたる馬の足、四つながら折れて、危ふかりし體を見たはと御諚あるに、誰も有無の返答なし。又藤吉郎殿とりあへず、千秋萬歳の御夢なるべし、そのゆゑは、合戰をなさるゝたび、いつもかち武者の御名一天にとらせたまふべき御告とこそ存じ候へとのたまひしが、まことに戰のあるとなれば、勝ち給はぬはなかりき。

○古道三信長公へ始めて御禮に出らるゝ、進上に扇子二本もたせられし。御前に候人みなあら些少のいたりやといふ氣色なりき。時の奏者に言上あれ、これは目出たう日本を、御手の内に握らせ給ふやうにと。

○元日いまだ夜深きうちに、萬物をうりかふ人、えびすを求めむかふる事は、聖徳太子よりさだまれり。さるにより町々をもちて、わかえびす〳〵と呼ぶ。これを望む者うけて悦ぶ。彼えびすのはん木をする者、いろ〳〵人の尊むほどの姿をおこして持ちたりしが、師走のいそがはしきにや取紛れけん、えびすと思ひて持出しけるが、三途河のうばをすりたるを取り違へ賣りありきぬ。明方にうくる者の見附け、これは異な姿やといふ

むばー慶安本「うば」に作る

祝濟多

○抑四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝寶元年己丑の春、始めて奥州より黄金を獻ず。重寶参りたりとて大伴家持に歌召されければ、

皇の御代さかえんとあづまなるみちのく山にこがね花さく

と祝ひすまして、是より元和九年まで八百五十五歳なり。和朝の山々、黄金涌く事彌増されり。

○正月に三ケ日の食物をも、昔よりいはひて書きたり。何にあるぞと問ふ。暦に候。なにとある。元日はかん日、二日はもち日、三日はくへ日。

○左大臣信長公或年の元日、曉ざふにのお膳すわりけるを御覽ずれば、箸かたくあり。これは何者のしわざぞとて、大に御氣色かはれり。大相國いまだ木下藤吉郎殿にて御座の時、お機嫌あしきはさる事ながら、當年より諸國をかたはしどりになさるべき瑞相なりとありければ、これにて御腹立やみぬ。案のごとく、そのとしより國々をしたがへ給ひきとかや。

慈照院殿
―足利義政―

○雄長老ある寺に立ちより、これに數寄屋はないか。いやなしとの返事なり。さらばわる茶にてもたてて出だされよと所望ありて後、

　數寄屋あらぬお茶や昔のお茶ならぬ我身獨はうすのみにして

○後陽成院の御時御口切とて、御壺出でたりつるを、雄長老、

　御前ではちやくと歌よむ壺なれば口をはられて物もえいはず

○慈照院殿、愛に思召さるゝ壺あり。名を何とがなつけんと御工夫ある。頃は寛正二年八月二十日、誰かある今日は二十日かとお尋ねあれば、女房達の聞きもあへず、なかなか今日初雁を聞きまゐらせたと申上げられたり。あらおもしろの返事やとて、能阿彌にむかはせ給ひ、

　たれもきけ名づくる壺のくちびらきけふ初雁の聲によそへて

と仰せあれば、能阿彌とりあへず、

　初雁のきこえあげける言の葉よいやめづらしき雲のうへまで

此由來により初雁といふ壺ありとなん。

し。會漸く過ぎ、亭主茶をたつる時見れば、三人ながら眠入りたり。されども上座の人目を明き、次の膝をつめられ、これも目をさまし、又下座の膝をつくに、彼心には茶の禮かと思ひ、まづおみしやれと麁忽にいうて、よく〳〵見れば、亭主いまだ茶を立て居けり。面目なさ御推量あれ。

○東堂のもとへ人來つて問ふ。茶堂と申す者候、又茶堂と申す者候、いづれが本にて候や。いづれも苦しからず、されども、茶堂は唐韻にてこびたりとあれば、男合點ゆきたる體にて立去りぬ。一兩月過ぎ、今度は總領の子十六七なるをつれ來り、此松千代に何とぞ男名をつけてたび候へと申せば、乃ち左近の太郎とつけらるゝ。親あたまをふり感じて後、左は唐音でござあるの、いや〳〵我等ごとき者のせがれに唐音は過ぎて候。唯ちやこの太郎とおつけなされよと。

○大相國御數寄ありし時、こい茶をひきうばひ、御祕藏の井戸茶碗われけり。御氣色かはる事なく、幽齋の歌の出來不出來によるべしと御諚あれば、

つゝるづつ五つにわれし井戸茶碗とがをば我身おひにけらしな

と詠じ給へば、此茶碗がわれずばなんであらうぞと、御感情深かりき。

態とさしたる—誂へて拵へたる
くすむ—珍重する
眠藏—寢室

嗜み、茶壺候よ。さあらば一つ求めたい。伊勢より尋出でし、これは藤四郎とてよき壺といふを、代八貫に買取り、福人祕藏し、名を平家法花經、伊勢物語とつけたり。人其故事を問へば、平家とは家がひらさに、法華經とは八貫に買ふ。つぼの出處は伊勢物なり。態とさしたる家にてなければ、もちありく度かたり〳〵となるほどに。

○古今萬葉集といふ壺をもちてくすむ人あり。聞く者めづらしがり、其心を聞かんと望めどもあへて語らず。いはぬに深き心の程ゆかし。いたく執心し尋ねけるに、彼壺ぬしいふ、古は古茶、今は新茶、萬葉は無上別義そゝり、集はいづれもあつめつむる故に、其德をもつて名とす。

○山家に居住の貧僧あり。たま〳〵客を得たり。物相一飯をもてなし、茶をたてゝ出し、これは、といわら壺につめたり、色香味を吟じたまへ。客おもひきや、かゝる住居に名壺のあらんとは。一座事をはり、彼壺を見んと乞ふ。僧眠藏より持出でて、これは山賤の粉骨をつくし作るところ、始の稻をわせといふ、其疾藁を幾重にもあみかけ、焙爐の紙につゝみ詰めおき候まゝ、といわらつぼと號するなり。

○歷々の衆三人ともなひ朝會に行き、昨夜鷄明まで酒にふけり、いまだ人心地もなかり

なか〳〵 慶安本「やんた」

よりおもたせのお茶と斷るにぞ、亭主いはん事なく、今一口二口のみ、なか〳〵や、くださるゝ程よいと。

○足利の門前に姥あり、往來の出家に茶を施す。されば學侶の智惠を察せんとたくみ、僧來つて茶を所望すれば、人のひいた茶はをりないと言へり。時に僧風がひいたりとも飲まんといふ。姥大によろこんで與へたり。

○時しも夏のあつき頃、民家に姥らあつまり茶事してゐけるが、れんじやくかけたる商人の通るをあはれみ、立寄りやすみ、茶をも飲まれよと呼びたれば、あら嬉しや三服たべうといふ〳〵立ちよりし。いかほどなりと飲ましませ。商人いや三服はそらね、定は一服たべうずと。

○法師あまた少人をともなひ、清水へ詣でしが、まづ茶屋に寄りやすらふ。其中に一人の若衆甘茶をのぞみ多く飲む。指南の法師おもふ、あまき物はむしにたゝると、又さきにては苦しからず、今は先づこらへられよと敎訓しければ、こゝな人はけうさんさうに、一斤飲うでも錢二十こそすれと。

○如何にもまつたき福人あり。茶の湯といふには何が入るものぞやと、數寄には第一の

うめ—梅、埋め
とがのを—栂の尾、科
上林春松—宇治の茶師

いかにしていかに燒けばかいづみなる横山炭の白くあるらん

わかばうめぬるくば炭を置かへよくみたらん程水をさすべし　夢庵

○祇公信濃路にて山家の草庵に立ちより、茶を所望ありつるに、湯のぬるかりければ、

お茶のぬるきは春のしるしか

卽ち亭坊、

うめ過ぎてわがとがのをの花ざかり

○和泉の國篠田の茶屋に、宗祇一夜とまりたまひし事あり。茶屋の亭、今夜は冷えて、夜尿つかまつりてと申したれば、

我物とほしさのまゝにたてのみて夜尿しの田の森の茶坊主

○古田織部助に數寄あり。濃茶たちて出でけるに、客のいふ、此茶士は誰やらんと問ふ。上林 春 松が雲切りなるよし返答あれば、彼客今朝の御茶別して忝きかな、春宵一ぶく直千金とあり。

○或寺の住持檀那へ見まはれける、土産の茶あり。主人ありがたく思ひ、内に請じ先づ茶を進ぜよとたてゝ出る。亭主一口のみ、是は散々の苦茗やと叱る時、女房それはお寺

てくふ食の、きえては何の益あらん、あらいやの茶やと頭をふりたれ。されば憂喜依レ人といふ題にて、

ますらをが小田かへすとて待雨を大宮人や花にいとはん

と詠める。さまこそかはれ、心ばへひとしかるべくや侍らん。世をおもしろく住む人は茶を愛し、賤の男は茶をいなと狂言せし、一旦は理あり。

何となく人に詞をかけ茶碗おしのごひつゝ茶をも飲せよ

花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや

利休はわびの本意とて、此歌をつねに吟じ、心がくる友にむかひては、かまへて忘失せざれとなん。

契あれや知らぬ深山のふしくぬ木友となりぬる閨の埋火

是は夢庵の歌にてあり。古田織部冬の夜のつれ〴〵に吟ぜられし。

○泉州かうの瀧炭を定家卿の歌とや、

泉なる横山炭のしろくしてとる手につかず飛ぶ事もなし

又古歌に、

し人と文とは京につきしかど、送れる二種は大阪に忘れ置きたりとて渡さゞりければ、

はる〴〵とよく田舎より給はれど茴香とてや上らざるらん

○旅人敦賀にて一夜の宿を貸したまへといふ。亭のこたへに、春か秋冬ならば易き事なり。夏月にとまり事はなるまい。如何なればと問ふ。爰は處をつるがとて、鶴程の蚊ありてくらふものを。旅人いふ、それならば宿かし給へ、毛頭くるしからず、生得我すむかた山家なれば、山ほどの蚊にくはれつけた身ぢやと。

茶の湯

○西行法師、伊勢の宇治にすみける時の歌、

爰も亦都のたつみしかぞすむ山こそかはれ名はうぢの里

○茶は是れ釣睡鉤とあり。又食を消するともいへり。

我門に目ざまし草のあるなべに戀しき人は夢にだに見ず

などいうて人々ほめはやしのむ。末座に百姓の候うて、それならば我々は一期茶を断ち申さん、終日ほねをりても夕べとくと眠ればぞ、辛勞をも忘るれ、又たま〳〵とほじく

よく田舎ー薏苡
茴香ー憂ひ京

親當—慶安本二字加ふ

和漢—俳諧の句と漢詩の句とを聯句の様に聯ぬるもの

も鵄と烏が親子にてある事を、此程知りたるはといふ。これはもつての外なる僻事であらうと。いやしかと實なり、よそまでもない、われが直に聞いた、此十日ばかりさきに、庭へ烏下りてあそびゐければ、鵄もきたり、又堂鳩も飛來る、三鳥よりあひたるに、鵄烏に向ひ、父々といふ、烏うれしげに子か〳〵と呼ぶ、堂鳩證據にたち、うよ〳〵と答へたれば、まぎれもなき親子ではないか。

　世の中の親に孝ある人はたゞ何につけてもたのもしきかな　親當

○廣橋大納言殿兼勝公へ、相國寺の保長老より使僧をもつて、明日の和漢に罷出度く候へども、瘧氣のゆゑ御免の旨御披露願ひ奉るとありし時、彼僧を呼び給ひて、口上を御聞きあり。それは仄のおこりか平のおこりかと。

○宗牧へ或方より小角豆と茄子とを送りたれば、

　さゝき殿なすびの與一給はりてお使からと賞翫ぞする

○周桂入江殿に知音の人ありて、朝歸の時、宗牧行き合ひて詠める。

　かつぎ出る青苔色の頭巾こそ入江のあまのしわざなるらめ

○猪齋へ田舍よりおとづれとて、よくいにんと茴香とをのほする事ありし。言傳てられ

しやく―釋
酌

どうぶく―胴服、羽織

おと仕り候まゝ立よりて候へば、酒もり談議にあうて、さてぞ遲參いたし候といへり。酒もり談議とは何事ぞや。さればもはやたゝんとはねつくろひせしに、爰をば法然のしやくにて一つ申さんとあり。又たゝんとすれば、善導のしやくにてま一つ申さんと。

○長岡越中守殿豐前の國ひるがの神へ參詣あれば、神主悅喜不斜、賞し申せし座敷にて、太守の羽織を見、さても珍かなる唐物やとほめまゐらせければ、乃ちぬぎてつかはし給ふ。其當座の興に、

腫物にあらぬ我身のとうぶくをひるがの禰宜に吸れこそすれ

○或年の春幽齋法師坂本の壽齋といふ碁打をつれて、吉野參詣ありしが、かつての明神の前にて、そちが代にとて、

參錢をはまのやうにはまかずとも碁にはかつての神や賴まん

○義政將軍の御前に、同朋萬阿彌罷出でたる時、作意を御覽ぜんとやおぼしめされけん、尺八を投出し、それ〱車が行くと仰せければ、萬阿彌いそぎ立ち、ちやくとおさへざまに、失うてはなるまいと、取りて懷に入れしと。

○世の中はいづくにいかなるものが、親類にあらんも知らぬなど、かたるついで、げに

風流をかけ
ーはやし物
を興行し

られても取りてもかくれはあるまいがと問ふ時、されば右申せしはうそなり、實は今朝鳶が魚をくはへ來り、宿院の内にて食はんとする所に、松の上より烏飛び下り、これを奪ひ取り、木の上にてくらふ。鳶はひいるぬす人とさけべば、烏はかうたかうたというて、おのが德にぞなしたる。をかしげにて心ふかし、烏は烏中の曾參とあり。

○夏の天に數日雨なうて、民家干損を歎き、氏神の社頭に、風流をかけ雨を乞ふに、一滴も降らず。いつもふるが奇特やなど沙汰しあへり。かたくなゝる宿老うちうなづき、今度のをどりがうらは一向氣にあはなんだ、なにが大鼓をばてれつけ〳〵てつてれつけと打ち、鉦をばてんき〳〵やとたゝいて、笛をひよりやひよりと吹いた物、何として降らうよ。

○須彌の四州の内、天よりふり物おの〳〵かはれり。北州は瑠璃の雨、東州西州は瞻蔔花の雨、南州は淸涼雨、勅によりて和泉式部雨請、
　日の本の名にあふとてや照すらん降らざらば又天が下かは
此歌にて空かき曇り、大雨ふりし。

○京にてさかしき座頭、月忌の座數へおそく來り、内をばとく出でて候が、道にて鐘の

才智ー慶安本「才覺」に作る

○百姓の福力なるあり。惣領の子才覺あれば、笛を稽古させけり。明暮謠の、小鼓の、大鼓のとて、出入のたゆることなし。祖父は隱居の身ながら、こはそも何事ぞ、稼穡の艱難を忘れ、紡績の辛苦を無になし、我家の業をばよそに見て、身代のはてんずるをと悲しび居けり。かくて三年過ぐる冬十月藝者あまた集め、おびたゞしき囃を興行する座敷へ、頻に祖父を呼出せば辭退もかなはず出でぬ。孫一番ふいてどつとほめ、人みな聲をそろへ、さて祖父の歡喜さこそなど取りはやしたるに、祖父されば人の耳には笛の音のなにと入り候や、我が耳には田うらう〳〵とより外、別の音は入らぬと。

○鼬眉目よし、ま一度こい、顏見うと世話にいふを、秀句ずきなる人の門にて、いかき見めよし、めせと言ふ。なか〳〵買はうと呼び入れ、あひしらひ出でて歸るとき、いかき賣を招き、ま一度こい、かご見うと。

○和泉の堺にてこれへ參る道に鈍なる男あり。何やらん手に持ちて居たるを、横道なる者とほりさまにおつとり逃げ行く。やれ盜人よと呼はれば、結句とりはせぬ買うたとあらがふ。たれも極むる者なうて、とりての物にぞなりける。彼を見るに、忽ち我物を奪はれても、所に正路なる地頭なくば、淺間しや取られ損にこそならずんれと語るに、取

しりー修理、尻

さいしー妻子、祭祀

ゐどころー居所、尻

たうふくじー東福寺、豆腐

○若衆ぐるひをするというて、妻いろに出で腹立す。男たる者は若衆ぐるひをせよと、式目にのせられた神社をしりしとかけり。女房卽座に、其式條のむねを本とせば、そちのがいよ〳〵とゞかぬなり、さいしをもつぱらにすべしとあるに。

○京にて傍輩の中間行合ひ、そちは今誰のもとに奉公をするぞ。三條のお奈良屋にゐるは。おの字をつけていふを憎み、おならやはのくさい事をいふ。それならばそちは何とて我ゐどころを問うたぞよ。

○宗祇と宗長つれだち三井寺を見物の時、宗長いへるやうは、ちとぶさうぢなのとあれば、祇公それはよい前句さうなと候ひしに、乃ちとりなほして宗長、

　掃除もたらぬ三井の古寺

祇公又、

　坂くだりくしやばう〳〵とはえしげり

○信長公東寺のあたりを過ぎさせ給ふ事あり。馬上にてひたもの御眠りありつるを、沼藤六驚かし申せば、爰はどこぞ。右は六條さきはたうふくじと申したりつるに、おのしらかべかやと。

滿月の時は如何。片輪と片輪が寄合うたらば、重病ではないか。一僧出でて、いや月に一度の闇を愈さんとて候よ。

○靜にあゆみて額をうつてすよ。はしらでうつてすの。

○或僧冬扇を持ちければ、雪中の扇になんの役かあらん。僧しばらくありて、扇をつかひ、當話につまり、汗がひてさうよ。

○見ぬ戀をする時、あつぱれ敵の城かな。せめて見たい。

秀句

○もと同學たりし人のもとへ、廣韻をちと貸したまへといひやりたれば、此方にもいるとて貸さず。後に逢うたるに、以前はいなものを貸されなんだと恨みければ、光陰をしむべしとありけり。借主遺恨を含み、重ねて先のをしみての方へ、明朝齋を申さんといひやりぬ。必ずゆかんよし返事なりき。亭曉より起きて朝食をいそぎ用意し、内の者にも早々くらはせ、棚もと其外掃除をきれいにして置きたり。件の僧來り、までども更に飯をくるゝ音せず。何とて膳は遲きぞ。とき人を待たずとあれば、早や疾く過ぎたは。

廣韻―音韻の書

すみきつた ー澄きつた、角切つた

しと ー師と、尿

たゞの夫 ー忠信

つぎのぶ ー次の夫、繼信

○あつぱれまるい水かな。すみきつたの。

○車に片輪あるを見て、一人の僧は戒行がよいな、かたわがないほどに。一人の僧は、戒行がわるいな、かたわな程に。

○大善知識を見て、あつぱれ小便所かな。如何ほどの人がしとしつらふ。

○石上の松は座禪の僧に似たよ。ねいりもせずうごかぬ程に。

○漁人妬二梅花一、花見に舟をかられうずよな。

○あづまごとの歌いみじう好みよみけるが、螢を見て、

あなてるや虫のしや尻に火のつきて小人だまとも見え渡かな

吾妻人のやうによまんとて、まことは貫之がよみたるとぞ。

○津の國に多田といふ在所の候。同じく近き里に役所ありしに、人足ふたりとほる。關守のとがむれば、先に行くもの、是れはたゞの夫にて候と。關守さあらば八島軍をかたれ。それはつぎのぶにお尋ねあれと。

天然かたくみか。

○有馬の湯に三ヶ月のさし入りたれば、月の湯治は何の病ぞ。道理よ片輪な程に。十五

彼うりてかちにし事よ。

鶯も笠きて出よ花の雨　利休

賣りにくる程をしとへば我園のうぐひす菜とて音こそ高けれ　雄長老

○一寺の崇敬世に越えいつくしき喝食ありつるが、思ひもよらぬ病にさそはれ、夕の煙となれり。かの骨を東堂我前に置き、衆中の僧にむかひ、寒夜に燒き殘す一束の柴といふ句をいだせり。終に大衆の語出でず。時に東堂この葉ばかり殘つたよ。

○喝食あり。東堂に膳をすうる時、和尚あつぱれ月一輪かな。喝食ほしくもないのとて膳をとりぬ。

○よき若衆をともなひきたる僧を見て、あつぱれ黑雲かな。

あれがせうずよな。

○水上の兎月に驚く事はいかん。おづるも理あり、弓張月のある時は。十五滿月の時いかん。十分に引詰めて見よ。射手如何に。桂男。矢束は。十三やもあり、十五夜もあり。

ひかぬにつよき弓のいきほひ

けだものは小田のかゞしに驚きて　宗養

○會下僧に齋をすうる菜に蕨あり。終に服せず。施主如何なれば蕨をば食せられぬぞと。人の口やかうとて、大事候まい、けしあへにしてさうほどに。

花を折るかと人や見るらん

躑躅咲く木の下わらび手をあけて

○京の町にてちひさきあしだを賣る商人、こあしんだ〳〵というて先に行けば、其後から菜を賣者のつゞきて、なかう〳〵と。

われがれに似たひゞきがすまぬ。

○座頭の琵琶おうて來るを見附け、おどけ者が、なつとの坊はいづくより何處へおとほりぞ。わらの中にねてから、糸ひきに行くと。

見た所うまさうなりや此茶のこ名は唐糸というてくれなる

○宗長の連歌の座敷に、初心と見えし座頭一人ありつるが、麁忽に一句申さんやと伺ひければ、宗長連歌過ぎての事にせられよとありし。

○利陽にて鶯菜をもち、一人の女房うぐひす菜めせ〳〵と言うて賣れば、買はんとする人、そちは片言をいふ。青菜めせとはなぜいはぬぞ。鶯にあをとよむ聲ありやと。

しやくぜん―借錢
りやうそく―料足、錢
せいた―禁じた

○京に積善院といふあり。又建仁寺に兩足院といふあり。或時積善院兩足院へ入來の事あり。眞俗の物語、時過ぎて後、人の果報無果報は詮方なし、かりそめの寺の名さへ、我が住むかたをば、くちずさびにもしやくぜんゐんとこそ呼べ、又其方をばとりはづしても、りやうそくゐんと呼ぶけなりや。

○遠州の内かたはらに古寺あり。鷹野に出でける武士の候うて、思ひ寄らず立寄られたれば、住持とおぼしき僧、手づから堂のまへをすぎず。何のためぞやと問ひけるに、菜園なり、其節を伺ひ種をおろさんとすと。乃ち侍のいへるは、道場の庭に、なをまくさまんだの時いかんとあれば、老僧鍬の頭を押へて、せんだばかりもできさせ給へと。

○そなたは源氏の晩鐘をきかれた事はないか。いや貴所は、平家の落雁を見られたか。

○護摩堂の本尊不動の前に供への餅あり。人見てあの不動の餅を二つ三つこんがらと燒いて食うたらよからうな。新發意出てくひたくば食はしませ、誰ぞ無用とせいたかや。

○會下の寺あり。座頭兩人客殿にて平家を語る聲方丈に聞ゆる。東堂手を拍ち喝食をよび、面に琵琶を調ぶる音せり、平家かべいけか聞いてこよと。喝食走戻りて、へいけなり。つれべいけでさうと。

○山芋をば薯預といひ、ところを野老といふ。旅人山路を行き、樵のやうなる老者、鍬にて蔓のあるものを掘るあり。旅人たはぶれに、ところほるやらうと言ひかけゝれば、いや山のいもじよゝと。

すき─風流

　いもほりのことば心ぶかや。

○黄菊紫蘭咲亂れたる前栽あると聞いて、すきの人々集りければ、宿の主取囃し暖め酒を二色、燗鍋につぎ、右と左とにもち出で、なにと各はふる酒をきこしめすか、又濁酒を進じゆ參らせうかと。

○江州志賀の浦に姥あり。天然作意、うまれつきてかすり秀句をいふに上手なり。かすりを好む盲者あり。若狹の小濱より、はる〳〵と彼がもとへ會ひに行き、なにとなう宿をかりしが、飯の汁を一口すひ、此汁の實はなにぞと問ふ。姥それはくゝたちの汁候よ。

ひえ─比叡
冷え

人の口きらふとて。いや去年八月からなまいておいたと。

○鎭西より天台山にのぼる學侶ありしが、或時病氣をわづらふ。西塔の法師來り弔ふついで、此病をば生得筑紫風といふ。それは何とてと尤むる。しもからひえのぼるほどにと。客僧いや鎭西には天台山とこそ申し候へ。この故は、唯ひえのやまひぢやと。

〇生食を佐々木にたぶ。佐々木畏つて申しけるはと言ふを、佐々木をいけづきに賜ぶ。いけづき畏つて申しけるはといふて、いはん事なし。

たぶ―賜ふ

かすり

〇正月二日の朝西よりは針賣の來り、東よりは烏帽子賣の行く、途中にてはたと行合ひ、烏帽子商人より、はりの始の御よろこびと申したれば、針賣とりあへず、何事もおぼしめすまゝにと。

〇正壽庵といふ坊主のもとへ、はや齋出來て候、とくわたらせ給へと中間を使につかはす。彼使ゆきて、門よりしやうじわん〳〵と呼びければ、坊主をかしき事におもひ、いやづす〳〵とぞ答へける。

しやうじわん―正壽菴のなまり

づす―留守、𨀗子

〇武家の愁傷ありときいて、弔につかはす口上に、御親父逝去の事是非なし。併ながら生老病死の習ひ、いたつて歎きあるまじく候といへ。右の使者、生老病死を打忘れ、だんずるべうしと申しければ、されば親にて候者、ひりや〳〵にふりよにはてゝ候。

だんずるべうし―段尻拍子、山車のはやし

當意即妙なるうけあひや。

醫士―慶安本「醫師」に作る

木平家―木は生にて合の手をいへるなるべし

五き―御器

○小松の内大臣重盛公は釋迦の弟にてありし事よ。ちとも知らなんだと語る。うそさうな、時代も二千餘歳違ひたるものを。しても醫師問答といふ平家に、重盛の定業もし醫療にかゝはるべう候はゞ、あに釋尊入滅あらんやといはれた。

人をとゞめん言の葉はなし

佛だに逃れぬ道は別れきて　宗祇

○一向不文なる者平家を聞かんと行き、何としてあの風情の耳に入る事あらんやと、まことしからざりしが、彼聞きて歸りぬるまゝ、何と平家を聞かれたか。されば木平家は一段おもしろかりつるに、時々座頭のをめくでくたびれたと。

○土肥の次郎實平は、大手の木戸口に主從五騎にて控へたると敎へければ、弟子おもふ、控へ物こそあらめ、五きはいなものなり、せめて椀はまさりなんと、晴がましき處にて主從椀にて控へたると語れり。

○橋のゆきげたをさら〳〵と走り渡るを、やゝもすればわするゝ、そちは鈍なり膳にすわる皿にて覺えよといはれ。或時又橋のゆきげたを、ちやつ〳〵と走りわたると語りごとは。

兵主殿より返歌、

武士のいるやかぶらの兵すなをこ兵なりとて八束ぞやる

弘法大師名のみ残れり

くうかいのお汁のわけはかぶらにて

○大風に壁のおほひを吹き落されし時、めをかけらるゝ徳人のもとへ、俵を乞ひにつかはすとて、

御無心は蜈蚣の手ほどまうせども又このたびも俵十たべ

○或出家舊友のもとに泊り、頭巾を忘れて歸りたれば、其ぬしの方へ文をそへてもたせ送りつる。

行平のゆかりにたぐふお僧さま御立烏帽子殘したまひつ

返歌、

立別れいなばやなんと思ひしに形見の頭巾今かへりきぬ

平家

給ふ。されば時によりて見え候、あれへ出て御覽候へと申す。乃ち小高き處へ上り見給へども遂に見えざりければ、

方角もいざ白雲に目ぞくはるふじを見附のこうのいらねば

○此跡は大名にて威勢ありつる人なれど、忽ち落人となり、宿かりそめの寒夜に、身はすくみかねのごとく冷えわたれば、古疊をきていねられしが、狂歌、

淺ましや世は倒まになりにけり人にしかるゝ物にしかれて

○幽齋法印の御内なる松井といふに、振舞を御沙汰ある時、たび〳〵人をつかはし給へど遲し。料理の者、鹽鯛のやけ過ぎて、如何とかなしめば、いや昔よりありし事よとて、

こぬ人をまつ井の浦の夕食に燒きしほだひの身を焦しつゝ

○まりこの里といふにて、中間馬のくつを買はんとす。代を高くいひければ、主人馬上より、

くつのねは鞠子の里や高からんあすかひ給へ先にあり〳〵

○山崎宗鑑汁のまはしにあたりたる時、江州の兵主殿へ送る。

武士のいるやかぶらの兵すなをよつぴきしめて十二束たべ

ありく〳〵—

鞠を蹴る時

のかけ聲

たそがれどきの秋のぬす人

○卯月十日春可宇治に侍りしが、けふより茶をつみそむるといふを聞いて、

手始は色葉をえらむ宇治茶かな

○大晦日の夜半ばかりに雨のふりし。曉よりをやみて晴天になりしかば、春可、

去年は雨　日本ばれやけふの春

○越後の大守爲景公、國の中林泉寺へ年頭の一禮とて二月赴かせ給ふ。住持迎に出られける。折節庭前の白梅長老の衣の上へ散りかゝりたり。時に爲景の一問、落花の端的。和尚、作麽生。答へて時節梅花不借春風。爲景公云ふ、時節に不借春風、和尚一刀とて刃をぬきかまへたまうたれば、和尚云ふ、春風無手落花汝無手殺我。

○爲景公狩するついで、深山の巖穴に座禪の僧あり。彼に向ひ、我は弓箭を帶して來るさへ、物凄じき處なり、なにとしてかゝる峭壁には住するや。僧云ふ、我心があらうにこそ淋しからめ、心なければ淋しとも思はぬと。時に爲景公答ふる者はたそ。僧云、巖松無心風來吟　問へばこそ答へたれ。

○細川幽齋法印見附けのこうといふ處にて、宿主に向ひ、是より富士は見えぬやと尋ね

次へお出でありし時、少女かよひに出でたり。そちが名は何といふぞと問はせ給へば、雪と申上ぐる。跡より一人又まかり出づる。其名をお尋ねあれば、玉と申しけるにぞ、乃ち當座をあそばされし。

さきに出で友まつ雪のいろに又劣らぬほどの玉あられかな

○三藐院殿へ春可祗候して侍りし。御庭前の櫻漸くひらくあり。一句仕れと仰せあれば、

かすむ目にとほすや針の糸櫻

と、申したれば、さらば我も、

さかぬまをまつやしんくの糸櫻

○廣橋大納言殿へ春可まゐりてありしが、壁の根に、菊一もと咲いてあり。見事やなどほめまゐらする時、あれは壁の外菊畠なるゆゑ、傳ひて咲きたるなり。今一句と仰せあれば、

壁に耳かくす事をや菊の花

と申すにぞ廣橋殿、

鑵子ー湯をわかす器

三藐院ー近衛信尹

○近衛院御宇、頼政への難題、ひだりまきの藤淵、きりびをけ、頼政、

瀬はひたりまきの淵々おちたぎりひをけさいかにより勝るらん

○旅人在所の者に、此川をば何とかいふ。あひそめ川と答ふ。さらばこれを染めてたべと手拭を指出す。乃ち請取りて水に入れ、ひろげわたす。何とも色はないの。いや水色にそまりて候はと。

○東の野州常縁の前に宗祇ゐたまひしを、いくつにならるゝぞやと尋ねたまへば、とりあへず入道は六十三にまかりなると申されし時に、野州、

紫竹の竹のよはひながさよ

○越前と加賀の一向宗と取合ひの時、朝倉どの或會下僧にむかひて、敵も八幡大菩薩、味方も八幡大菩薩と念ずる。其一念は一般利生は如何にとあれば、僧いふ、味方は現世安穏、敵は後生善處と守らんとぞ答へける。

○禪僧先に立ちて河を渡る。山伏又跡より渡るとて、如何にお僧、いかい鑵子のと言うたれば、僧のいへる、河中でなくば一服申さうものを。

○木村の宗宜とて吉野の代官なりし。京都に家あり。茶の湯にて三藐院殿を請じ奉り、

むせ—噎
やせ—八瀬、瘠
はたさん—打ち果さん

この河は七瀬の河と聞くものをお僧を見ればむせ渡るかな

時に西行の返歌、

この河は七瀬の河と聞くものをめしたる馬はやせ渡るかな

○三十三所の札をうつ順禮、江州醒井の水のもとにのぞみ、麥粉を食せんと取出し置き、立廻る間に、暴風吹きおろし、迹なく散らしければ、

賴みつる麥粉は風に誘はれてけふさめがゐの水をこそのめ

○山岡道阿彌、坂本より京に上る。乘物八人にて侍あまた連れ、いかめしく見えつるが、大津にてむかうより、座頭一人來るにひしと行きあたり、棒のさき座頭の顏にあたり、打破り血流るゝ。心得たりといふまゝ乘物にしかと取附き、此内にゐるはいかなるやつぞ、是非出でよ、はたさんとのゝしるに、返事もなくやゝありて、乘物の内より、座頭座頭頰はいたむかと問ふに、腹立いやまし、散々惡口におよぶ。其時我は飛田檢校なり、中間過ちしたり、是非なしといふに、座頭乃ち聲をひきくし少もくるしからず、存ぜずして狼藉申したると詫びけるに、そちの學問所はいづれぞ、それを賴みてわびんとあれば、ひらに御免あれと、却りて手をすりけるとなん。

手ひき―手引、手挽

臼を癪の藥にひかばやと望めるを、七尾檢校受記一ゐあはせて、

檢校の目のよき茶臼求むるは手ひきにせんと思ふなりけり

○大陰核もちたる侍の、馬にて渡りたれば、雄長老、

のりくらの前にあまれる大○○○金覆輪とこれやいふらん

○虎狼野干といふ四字をかけて置きたり。亭主一向不文字なるを知りたる人、是は何といふ事ぞ。其を知らぬほどのうつけがあらうか。とてもそちが知るまい、もし讀みたらば、我ふるまふべし、其方え讀ずばわれをふるまへと、かけづくにしたり。亭尤とうけごひぬ。さらば虎はなにと。とらよ。狼は。おほかみよ。野は。きつねよ。干は。返答なし。亭まけてふるまひける。野干はと一言に問ふたらば、問ふもののまけになるべきを、二字にわけたる智惠作意あるかな。

○山中檢校死去のみぎり、とし四十八といふを聞いて、雄長老、

南無阿彌陀四十八までながらへて今ぞおもむくしでの山中

○西行法師修行の時、津國七瀨の河にて、麥粉をくふとて、頻に噎られけるを、馬上より侍の見附け、

○宗祇修行の時、山中にておもひよりなき人三人行きむかひ、一人いふ。
一つあるもの三つに見えけり
乃ち祇公、
類ひなき小袖のえりの綻びて
又次の者いふ、
二つあるもの四つに見えけり
又宗祇、
月と日と入江の水に影さして
又一人がいふ、
五つあるもの一つ見えけり
又祇公、
月にさす其指ばかり顯はして
右三句ともに聞きて後、三人いづちとも見えず失せにけり。
○誕一檢校ある座敷にて物語のついで、癪には兎角身をつかふよしと聞き、めのよき茶

又、
　高き物をぞやすくうりかふ
と云ふ句に、
　ふじの山扇にかきて二三文
又、
　今朝あけて雪を取出す箱根哉
同くいづれの年の始にやらん。
　武藏鐙ふんばつてたつ霞かな
○雪の日そとより人來り家に入る。見れば殊の外暗し。あらくらや〳〵といふ間に、鉈が足にあたれり。内々ほしかりつるにと思ひ、取りて懷に入れぬ。座敷に直りゐたれば、ひたもの赤くなるまゝ、さても恥かしや、人の見つらんと悲しければ、取出すべきやうなくて、案じわづらふ所へ、又人來りぬ。さきの如く、あらくら〳〵といふ時、乃ち取出し、是れ〳〵なたをさへ懷に入るれば、あかるうなるにすんだ、とて取出し渡せり。

を申しける。我と驚き、手をはたとうち、ま今のやうに、誓願寺にいつもいふ事よとなほしたり。

○名護屋陣とて太閤御所具足をめし、舟より海をのぞかせ給ひ、我影のうつりたるを御覽じて、

海の中にも武者ぞありける
釣針にかゝりてあがる甲貝

と仰せければ、乃ち紹巴、

○新田秀忠將軍江戸の御城にて、大名衆御振舞なさるゝに、御鷹の雁の汁を仰付けられし。再進しげかりつるを御覽ぜられたはぶれに、

振まひの汁や度々かへる雁

同元和九年の春、

山々の雪のあたまや春の雨

といふ前句に、

握りこぶしを出ずさわらび

ひだち―非難

と。作意のはやさ短舌にのべがたし。

○孔子道を行き給ふに、八つばかりなる童にあひぬ。孔子に向ひ申すやう、日の入る所と洛陽といづれか遠きと。孔子、日の入る所は遠し洛陽は近し。童、日の出入所は見ゆ、洛陽は見えず、されば日の入る所は近し、洛陽は遠しと思ふと申しければ、かしこき童なりと感じ給ひける。唯ものにはあらぬなりけりと人沙汰せし。

○京に智玄といふなま物しりなる者あり。又恵林といふ學者と東寺の門前にて行合ひ、智玄はいづくと問ふに、持ちたる扇をかけ、爰へ行くと答へたる時、それはあて字なりといへるに詞なし。扇をあけたるは一字をきり、鳥羽へといふ事なりし。早く察してあて字なりと、打ちたるひだち奇妙々々。

○紫野明月橋にて或俗和尚にむかひ、明月橋月なき時如何。和尚幸に大燈之灯有り。

○雄長老霜月の半、四條の橋を渡らるゝ。河上に法師一人水につかりて居たり。あはれさに立寄り、國はいづくぞ。下野のものといふ。

修行とて水に腰よりしもつけのなす野の原はいかに下らん

○法華宗の寺に千部の經ありける半、いかにもそこつなる男參りて聲をあげ、ふと念佛

百色ー百鳴、百數(宮中)

たちー立ち、裁ち　みにきつるー身に著つる、見に來つる

百色あるぞと。實におもひ、又とりて行きたり。

○戯に僧盲目の鼻を摑へ、如何なるか是佛法。乃ち曰く、世尊拈華の時はなをにぎる。

糸ざくら見れば花さく柳かな　宗祇

○京のたちうりへ惡黨來り、卷物どもを見、終に可然さなしといへば、女房藏へ行くまに、卷物一つぬすみ挾箱に入れたり。さて後に出したるよき內を銀一枚に乞ふ。やすしとて賣らず。その間に女房かぞへ見ればなし。隣家にいひあはせ、盜人一二町歸りし時、人をはしらかし、今のをまけんに歸り給へと。乃ち歸る。銀をうけとり、卷物はそれにあるにつくと、頻に爭ふ。挾箱を明けたれば有り。卷物をも取返し、銀をも戻したり。

事無爲なる作意也。

○攝津國布引の瀧にて、宗祇

此頃はたゝみをりつる布引をけふ思ひたちみにきつるかな

○太閤御所風呂に御入りありつるを、蜂屋伯耆守御垢にまゐらんとてふかれけるやう、知行くれい知行くれい〳〵と、拍子にかゝり興を盡されし。其儘蜂屋を捕へ、是非ふかんと仰ある。さま〴〵辭退せらるゝを、無理にふかせ給ふやう、奉公せい〳〵

關白殿—秀吉を云ふ

らんとするに、質に置きたる米一石なし。借主盜人をいひかけ、結句元の置きたる米にてなくば請取るまいといふ。其時亭主先錢を見んとてたゞものえり、一文もとるべきなしといふ。何事にやと尋ぬれば、我がいた錢が一文もない。元の米でなくばとるまいとなり。我も元の錢でなくば取るまいと。此作意分明なる哉、是にてこそすみたれ。

〇御意に入りて常にまゐりつけたる人の、關白殿へ出んとする時、小姓衆今程聚樂の法度あり、知らずや、やくると死ぬると、此二字申す事禁制なり、汝たくみ、殿に二字をいはするやうにせよ。心得たりと乃ち出づる。あんのごとく何事やあると御尋ねあり。其儀にて候、三條の辻に面白き物を棚に出して置き參らせた。何ぞや、楠にて仕りたる風呂と釜とを見てござあると。うつけをいふやつかな、木釜をたかばやけて役にたつべきか。それはあ御法度がやれた。

〇大阪にて鳥屋町を逸興なる男、鴫といふ鳥かはう、鴫といふ鳥かはうと言うて歩く。珍しき買手やと思ひよびよせ、雲雀をこれこそ鴫なりとて賣りぬ。山家に歸り見すれば、なか〳〵鴫にはあらず、うつけたりと叱られ、又はる〴〵大阪にもち行きもどさんといふ時、鳥賣それは物を知らぬ人の申す事よ、鴫は一いろならず二色ならず、百しぎとて

呑、香—蚤、
蚊

を見れば、上々の酒には麻がらを、中の酒には烏を、下の下くらはれぬ酒には洲濱をつけたれば、かの男ねだれんやうもなかりし。

　染屋に貫を高うやりたい。

　夏の夜は酒のおりにもさもにたり呑惡うして香こそわるけれ

　此夏はかなしとおもふ事もなしのみくふ事のふそくなければ

○尾州祐福寺に澤良といふ長老、所談の砌、こもそう一人來り庭にて聞く。澤良緣に上りてとあれば、心得候と緣に上る、兎角しくべきものなし。長老再普化僧と呼ぶ。やつと答ふ。其こもをしけ。

○山城の醍醐寂靜が谷といふにて、

　散る花の音きくほどの深山かな　心敬

　散る花は苔におとして風もなし　宗祇

○堺にて質屋に米を十石入れ置き、錢をもちて來ては、其代ほど米を取りて行き、度々の注文通に書付け借主に遣はす。或時錢をもたず來り、一石唯わたして給はれといふ。質屋心安くおもひ通につけずして一石わたしぬ。月迫になり錢を持來り、不殘米を受取

いゝがどく
そん―飯が
毒損

何と見れども先のちかさよ
日をえらぶ暦はしはす二十日ごろ

○座敷の興に物語をせんとする者あれば、傍より苦々といひて評したる時に、件の仁腹立し、此咄をそちどもにきけにてはなし、我は物語をふくしてあそぶよと。

○食を過す人に向ひ、餘り飯を多くまゐるが笑止なよ、臨時に米の入る事なれば、第一損なり、さりとて藥なればよし、大毒にて彼是惡しと。夫は誰人の指南ぞ。老釋迦の說なり、天上天下いゝがどくそんと。

○秀句ずきなる者、堺に逗留せしが、聚樂に上る大名衆なぶりて、何事ぞ珍らしき事はなきか。こそ候ひつれ、此比堺の大道にて物を賣るに、へうしにかゝりはやされあるきたる者候。うそであらう。いや先へせりかうと節にうたへば、後からたんほゝ／＼とうつて候。

○一目見るからむづかしさうなる者、紺屋に來り、この布を染められよ、我このみあり、肩には上々の佳酒を、腰にはかたのごとく中なる酒を、裾には下の下の、くらはれぬ酒をつけてよかるべしと言うて歸りぬ。其後日を經、染物出來たるや。なか／＼とて渡す

ぞと、人々卑みけるに、一人の作意には、唯物の直なと云ふ事にて有らうずと。又別人は唯物欲さうなんで有らうと。

後のが合ふなげな。

○九州に木山とて連歌の上手あり。八月十五夜に紹巴にて發句をせんと、月もなしといへり。紹巴の、わるい〳〵名月に月もなしはと申されし。まづするを聞給へとて、

月はなし日をそのまゝの今宵かな

○翠竹院道三のもとへ、脇指を持來りて賣らんといふ時、此ねすんはいか程ぞとありしに、賣主三百八寸と返答せしも。

○京の町にて、しだれ柳の物見なるをもちありく。人此柳を見附け、斷もなくおしてとる。こは何ぞ狼藉なり。知らずや柳はみどりといふ事を。實尤も道理ありと、乃ち棒をもつてかれが鼻をはりたり。大に血ながる。これはと怒れば、それこそ鼻は紅に。

○或人紺屋に來り、これの亭主を上手といふは實か、此きる物の形に笛の音をつけてくれよといひすてゝ歸りぬ。しばらく工夫し、上に日の丸下に鑓をつけ、後あつらへたる主に渡す。是はといふに、別に仔細なし、笛の音はひやり〳〵と吹くほどに。

柳はみどり
—緑、見取

おたいがい
—飯杓子

や。なか〳〵、いよがい又はおたいがい禁戒よ。

和尚は酒茶論の作者なり。

○甲州と越前と取合ひの時、越前の大守の前にて朝粥すわりぬ。末座より一段の出來がいに候と申す。其座におはせし東堂、なか〳〵國にはあるまいかいで候とありし。奇特なる作勢とこそ。

○幽齋法印或ところへ立寄らせ給ふに、家老の人立出で挨拶仕り、其座の脇に机に手習ふ雙紙あり。取りて御覽ずれば、それは我せがれの淸書にて候と申したり。扨々奇特なとほめ給ひつれば、御覽じ候かた、皆さやうに仰せ候といひすてゝ奧へ通りたる迹に、

なら坂やこの手をほむる親心とにも角にもうつけ人かな

○山寺に人いたりて、扨も〳〵おもしろき境地や候、大略八景も候はんと申しければ、住持の返答に、當寺は十景の古處なりと。さ候へば秦の始皇の地にもまさりたり、八景の外にはいづれを用ひられ候ぞ。されば檀那あり、麓に下り齋をはつて、こざけにも醉ひて歸れば活けいあり、さもなし、唯一時糟糠汁の風情なれば、ことに貧けいあるかな。

○さる大名の中間に異名を長棹と云ふ者あり。いかなる心持により、此名をば付けたる

かうし門を出でず—好事不出門惡事行千里
僧敲月下門—賈島の詩句

○豐後にて府内の城を廻國の僧見物するに、十月の末商人門の外に柑子を賣るあり。彼僧一つとりて食んとする。是はと尤むれば、かうじ門を出ずとあり、是は門外なり。やれ曲事やといつて扇をもち打んとする。こはそもいかに。僧は敲く月下の門といへり。
○伊勢の桑名に古諫とて醫者あり、天然と顏くせあしゝ。濃州立政寺より文叔といふ僧下向し、毎座對談し、後本山に歸る時、人問ふ。桑名にて古諫をばなにとか取沙汰する。されば桑名はつらのやすい處やらん、古諫を百つらといふ。美濃でならばやすく〳〵と三百はせんものを。
○靑苔を煎豆につけたる菓子、太閤の御前へ出したれば、幽齋法印に向はせ給ひ、何と何とありし時、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむす豆

○濃州鏡島にて、乙津寺梅の寺といふ。彼寺にて、

香がしまばこと木もにほへ梅の花　祇公

此寺の一代に蘭叔和尙とてあり。酒宴の座にて、正雲といふ僧に、一つ飮めとあり。禁酒と答ふ。何事に。飮酒はこれ佛戒なりと。して飯をも斷つか。飯をいましめの旨あり

や。されば兒か若衆なるべし。扨も奇特を占うたるが、ちとは目が見ゆる物かなと不審はれず、何の調子を伺ひいうたるぞ。されば六曜の占の外は存ぜぬなり、其内に草中螢が出てあり、知んぬ、螢は尻に光ある間さて申したるなめり。

○百合の花をいけたるを見給ひて、幽齋法印、

　床までもゆりにあげたる花瓶かな

○一人は寒山一人は拾得と、各に名をいうて出づる狂言あり。然るを二人連立ちたる。先の者、是は寒山拾得と申す者にて候と名乘しかば、次の者云はん事なかりしに、我等も其連にて候と。

　せめての事を云うた。

○法華の沙門と時宗の法師と知音にて、とり〴〵參會ありしが、いかゞはしたりけん、法華の沙門この頃栗毛の馬を求めたり、一段氣に入りて時宗くりげと名を付けたは。何の仔細に時宗は出たぞ。とかく此馬をどりたがる。乃ち時宗の法師、我も四五日以前に葦毛の馬を買うたは。名をば法華葦毛とつけたよ。いかなれば法華とはいふ。とかく彼馬口がこはさに。

○大陰囊をもちたる人あり。珍しきさまに沙汰しければ、見度き事におもふ者多かりき。或時客いたり連々承り候と所望し、是は常に人の申したる程はなしといひければ、左右であらうず、聞いては千金よりも重く、見ては一毛よりも輕しと候。

○宗長紫野に居住の時、延暦寺なる知音の坊より、人を出し、俳諧の發句望み候。此夕夜咄にたより、我人案じて遊ばんといひ送りければ、

猿の尻木がらし知らぬ紅葉哉

使とりて出しを又呼戻し、兒達もゐ給はんや。なかなかといふに、猿の面直されし。澤庵堺にて冬の當座、

猿の尻ぬらすや時雨松ふぐり

○僧の三人來るを見附け、途中に皮を敷き、此大河をば何として渡られんや。一人は此河に橋あり、心安くわたらうと。一人は瀬をあさあさと渡らんと。一人は乾た川を渡るに、何の造作があらうと。

○珍客は若衆なりし。座上に置き參らせて、相伴など歴々たる座敷半に、初心の座頭來れる。末座の人彼に問ふ。そちは占方の上手と聞く、この座上にいかなる人のおはすぞ

とあり、頓阿言下に、

　水鳥の浮べば月のかげふみて

○天龍寺の開山夢窻國師は超過福僧にてまします。僧形如何にも肩うすくすぼみたり。入拝顔を遂げ言上するやう、世間に貧窮の輩をば、なべて肩のうすい者とも、亦無力すれば肩がすぼうだとこそ申し傳へて候へ、夢窻の御肩輿さめてうすくすぼみたれど福分におはしますは如何と。さればよ、予が肩あまりにうすくすぼみて、貧乏神の居所がなさによと宣へり。

○面とはなぜに云ふぞや。面にかくる程に聞えたり。内に置く時は何と云ふべき。其はめんざうといはん。

○一休住吉に松齋庵といふ小庵を結びておはせし時、何者やらん、其名を書かずして、短册を送る事あり。

　あたら人深山の奥に住せばやこゝはうき世の堺ちかきに

返歌、

　身をみとも思ふほどこそうき世なれ深山も市も同じ隠家

洞家—曹洞宗

頓阿—和歌四天王の一

此心を得たまはゞ、生死岸頭大自在ならん。

○信長公堺の津へ御座なされし時、蠣とつめたと海鼠腸と三色を進上せし。其座敷に三條殿御入り有りて、

かきくれてふる白雪の冷さをこの綿にてぞ寒さ忘するゝ

○丹波の國大の原にて、洞家の僧一休に向ひ、如何なるか是れ紫野の佛法。桔梗、刈萱、女郎花、紫苑、龍膽、地楡。如何なるか是れ紫野の魔法。愛宕嵐に比叡の山風、奥は鞍馬の山颪。

○釋の頓阿桑門の風情し、内裏見物の折節、ある殿にて座敷より、修行の僧は何處の人ぞ。東の者にて候とあれば、乃ち

なにかあづまのはての思ひで

とあるに、頓阿

都にてまづ語るべき富士の雪

さらば座敷へと請ぜらるゝに、禮もなく座上になほられたりければ、又、

いやしきものはうへを恐れず

二字に略せり。

大將軍—星と同名なれば掛く

御所—慶安本二字なし

をばひがしにてやなされん、又都にて御越年やあらんなど評定ありしに、或者の申すやう、いや御年をば東にて遊ばされ候と。誰に聞きたるぞ。我等のよく存知て候、明年の暦に、大將軍東にあり、しかも此方に向つて大小便せざれと尊び書きてあり。

○太閤御所をば豐國大明神と祝ひ、吉田の神主に知行一萬石給うたるよし人の語りたれば、宮川殿、中々の事のや太閤御所は神におなりあり、吉田の神主は人におなりあつたよの。

○今の武藏の江戶、扶桑國の最頂たる御城の始めは、太田美濃守法體して太田の道灌といひき。名譽の武將拵へ構へけるを聞及ばせ給ひ、公方よりそちの城廓の景氣を寫して見せよと仰遣されければ、

わが庵は松原つゞき海ちかく富士の高嶺を軒端にて見る

○信長公濃州岐阜に御座の時、宮內卿、三位、侍從、武藤、四人に碁をうたせおはしますに、沼の藤六罷出で、此席は四句の文にて候と申上ぐる。一人は迷故三位殿、二には悟故侍從殿、三に本來武藤殿、四に何處宮內殿と指を折りて、時に御機嫌なゝめならずありけん、四句の文とは迷故三界に城、悟故十方空、本來無東西何處有南北。

三社の託宣—伊勢八幡春日三社の託宣といふもの世に傳はれり

武州江戸家康公—慶安本「將軍」の

醒睡笑 卷之八

頓作

○或大名の前にて、當時能の上手は誰にてあらんやと、各讃嘆ある中に、今春をほむる有り、金剛をほむる有り、人々心々なりし時、こざかしき者の申しけるやう、私は唯春日大夫を天下一と存ずると。いかなればさはいふぞ。春日を上手とは我等ばかりの申すにては御座ない、昔から神達も褒させられた物、三社の託宣に春日大明神とあり。

○尾州熱田大明神の祭禮に、貴賤參詣の袖をつらぬる。かしこも伊勢兩宮の如く禰宜あつまり、袂にむすぼゝれ、錢を貰ふ事かまびすしき程なり。さるまゝ百姓あまたつれだち下向するに、さても熱田の禰宜共は人でないぞといひつゝ屹度後を見れば、白張裝束に烏帽子きて金磨の扇末ひろがりをもちたるあり。大に驚き、そのまゝたゞ神半分の人よと。

○武州江戸家康公天下をしろしめされし始め、伏見のある屋形にて霜月末つかた來正月

り屏風にはなれてと舞うたる。

○堀河夜討を舞ふ時、判官殿といふを聞きて、其まゝ泣くもあり。何のあはれさに泣くやと問はれ、其事候よ、高館かと思うて泣いたと。

○一番に滿仲、二番にゆりわか大臣、三番にとがせがたちを舞ひけり。とくより行きて聞きたる者の歸れば、けふの舞はなに〱にてありしぞと尋ぬれば、さればよ滿仲といふ人、けんかいが島で勸進帳をよまれたるところを舞うたが、おもしろかつたと。三番の舞を始中終と合點したるも言語同斷。

○原殿といふ侍の前にて高館を舞ふ。そこで腹切れ龜井にゆきあたり、そこで、せごきれ龜井。

○人ありていふやう、判官殿と辨慶とは何の仔細ありて中がよかりしぞ、不審がはれなんだに、今日八島の舞を聞いて理がすんだ。なにとすんだぞ。辨慶は判官殿の若衆であつたもの。なぜにと問へば、紛れもない事よ、判官武藏をめされと、かくさずにまづさいしよに書きたるは。

○人々池の邊にあそぶ。蛙を見附け、塊をうつ。年ふけたる人、さやうのわろき手すさびをばせざれ、今こそ生れさがり、田の中堀の端にすめ、古へはあれも大名であつたものを。こくうなる事をいふ。まぎれもなし、夜討曾我に、さこそ尊靈蛙殿とてあだにもいはぬは。

○殊勝なる長老の十番切を舞ふを聞きて、落涙止まらず。後さて〳〵十郎五郎の兄弟は氣のみじかい人や、やれまちと堪へられたらば、殺さずとも敵が死なうものをと。

○大夫舞臺に出でて八島を舞ふ。去る間判とばかりにて官を忘れたり。鼓打あゝ官やあ官とはやし、つひに官をいひやまず。大夫聞きかね揚句に拍子を踏んで、せめにかゝりあふ。其官はほう殿の跡に下らせたまひけり。

○玉石とて能登に舞まひあり。和田の酒宴一番ならでは覺えず。去るほどに新左衞門といふ侍のもとにて舞ふに、あれなるは和田殿とばかりいうて、是なるは新左衞門を殘したり。主人とがめて、など舞にある名をば落いたるぞと申さる。いや其新左衞門はとく死なれて候と。

○磯部の庄司といふ人の方にて八島を舞ふに、庄司にはなれて三年になるを、行きあた

たゞのまんぢう—多田滿仲

國の—慶安本二字なし

⊙饅頭を菓子に出してあれば、これは小豆ばかり入りて位高し。我等ごとき者の賜るは、ありがたきとていたゞく。又砂糖饅頭は近來の出來物、なにの系圖もなし。よのつねの者はうまさのまゝ、奔走に思ふといひてくすみたり。其方はなにとして、その別をば知られたるぞ。かくれもない滿仲の舞に、貞純の親王の御子をば六孫王と申し、六孫王の御子をばたゞのまんぢうと申し奉ると。

○堺にて牡丹花のもとへ、くたりたる饅頭を送りければ、

　色くろくしかも傾く人くはず此まんぢうを馬になさばや

○或人のもとより饅頭を五つ送りたりしが、其席に人五人にあまりたれば、配當するに少し。一首をよみて饅頭を送れる人の方へ、

　名を聞くも六孫王のまんぢうを五つは食ひ足ずこそあれ

○和泉の國の堺、北の庄に御坊といふて、本願寺の末寺あり。彼寺建立成就し、平野といふ所より大頭のながれ、舞大夫をよび、堂の祝に舞はする。高舘をはじめけるが、破れた堂といふまへにて、あつと思ひ、やぶれただうがめいはの洞と。

　時にあたりての癈忘はなにの上にもあらん。

えたる。

○幸若の舞を聞き、さて〳〵おもしろのふしや、くどきや、中にもせめがおもしろきなどかんずる時、惣じて此舞といふ物は、誰が作りし事ぞ。こざかしきかほの人いふ。無案内や、仁和寺にて作りたるなり。ついに聞かぬ。庭訓に、仁和寺のまひつくりと書きたるは。

○景清を舞ふに、法性寺の八つの大鼓を、だう〳〵とぞ打つたりけると。聞く人八つならばつゞけうちに數を八つ打たずし、など二つはうちし。はら九郎大夫答に、八文字にうちたれば、八つにてござ候は。

○ある舞まひの奥州に下向するありし。道にて會下の寺にとまる。非時過ぎて大織冠を舞ふ。よめ入り詰めの半に、住持の長老落涙の氣色あり。侍者ども思ふ、なにのあはれしき事もなきに、不思議なる愁傷かなと。舞過ぎて件の旨をたづねければ、愚僧は舞に涙のこぼれたるにあらず、あれほど下手では、はる〲と下りたりとも、聞く者あるまい、かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに泣いたよと。

を押しつあげつ、笛ふくまねをし敎へければ、ちく〳〵うなづき、合點したる顔にて揚句にちやるるらと申さうと。

○舞はまひたし習ふ事はならず、なまじひにかな書を讀むもの、ある席にて敦盛を舞ふに、東國の毛虫にはあはんといへる平家なしといふ。人みな不審し、源氏とこそ舞ふべけれ、けむしとは何の事ぞやと問はれ、彼返答に、鑓のさやの事にてあらうまでよと。

○江州めかだの館にて、敦盛を舞ふ時、近江源氏の大將にといひしが、やれめがたは禁句よと思ひ、これのめかだはよのめかだと。

○和泉の國に松浦肥前守とて武士あり。彼前にて敦盛を舞ふに、命も知らぬといふ時、肥州を見附け、命も知らぬ松浦さま。

○釋迦は大工の子といふ、まことか。いや天竺淨飯大王の太子なり。さうではないと。さりとては。信田に、悉達太子は、高位なるばんじやうの位をふりすてたとあるは。

○伊勢海老をゆでてあかうなる時、いで朱鑓の柄をもゆでた物ぞと語る。海老は實なり、鑓の柄は朱塗にて塗りたるものなりと敎ふる。そちのがかたそばよ、鑓の柄の二間三間あるを、ゆでたがめづらしからう事は、それより大なる京鎌倉をさへ、ゆでもしいりも

○太閤秀吉公聚樂にて能を御沙汰ある時、本因坊見物する棧敷へ、雄長老狂歌をおくられし。

碁盤まで本因坊が能を見ば目は白黒くなりぬべきかな

舞

○人あまた朝食により合ひぬ。中に一人夕の大酒に、いまだ頭が重いとかたる。盃は何にてかありつらん、だる盃ではなかりつるかと尋ぬる。奇特やさやうの名をも始めて聞いた、五度入り七度入り湯盃、可盃、芙蓉盃、金盃、銀盃、鸚鵡盃、藥玉船七寶のやれびいどろの盃、猪口などといふこそあれといへば、判官殿最期に、高舘にて酒もりのありしとき出でたる盃にてある物を、え知らぬよなと笑ふ。そちほど物しりはあるまい。吾妻鏡のやうなる書にあるかや。いや高だちに龜井がのうだる盃を、武藏殿へおもひざしこれよと。

○烏帽子折をまふとて、山路殿が吹物の名をばなにと言ふやらん、名をば何といふやらんと繰返し〱舞へども、終に横笛出でず。人みな笑止に思ひ、むかうより扇を横へ指

はぬ、くろどりの百姓ぢやと。
○江口はよき謠なれど、其さまを賤うつくりてわろい。江口の君の幽靈までは大事ない
が、ころばかりして失にけりが農人のやうなと。
○當世は刀脇差數寄道具につけ、なにもみなにせ物あり。手苦勞物がはやるといふ物語
出でければ、今ばかりではなし、昔よりある事なり。人間の噂はおきぬ、佛の上にさへ
似せものがあつたればこそ、當麻に正身の彌陀如來げに來迎と作りたるはと。
○誓願寺の阿彌陀は、いかなるみぞぎにてか造りたるらんといふ人ありしに、榧の木に
て作りたるは。何として知りたるぞ。かくれもない誓願寺の謠に、春日の明神の御作
とかや。
○我はこのほど歯がぬけたとて悲しめば、歯のぬくるは命の長からん驗にてあると書き
たるは。いかなる書物にあるぞ。關寺小町に、おちても殘りけるは露の命なりけりと。
○宿老たる主人の前にて、關寺を所望せられ、いとゞしく老の身の強りゆく果ぞ悲しき。
○能登の徳宥といふ人のもとにて、海士をうたふに、今此經の徳祐にてをやれと思ひ、
徳祐さまとなほし事は。

みぞぎ―御衣木、材料

○和泉の堺に山本雅樂とて小鼓の上手あり。幽閑法印政所なりし時能あり。法印彼雅樂をまねき、そちは三輪をうたれよ、三輪の山もととあるなれば、言下に、かたじけなや、ことによみて見たれば、うたなりと申せしはしほらしや。

○實盛生國はといふ。一向すまぬ。何といふがよい。さねもり生得は日本にてあると。

○卒都婆小町に垢膩の垢づけると。これもわろい。くにゝよもあかゞある物か。五體の内にてもよくあかのある所は、うなじなるまゝ、くびのあかづけるがよいと。

○千手重衡に雪のふる枝の枯れてだにと。これこそそでもない事よ、よきのふるえとこそ謠ふべけれ。

○信長公へ客あり。御膳出づるに、是は一段そさうなる仕立やと仰せらるゝ。折節連一候うて、昔より大君のきこしめす物は、そさうなるが本と聞えて、兼平に、口惜の君の御振舞や候と申せしに、判官これをきこしめしと。

○和泉の國萬代の八幡にて能あり。實盛をしけるが、あつぱれ己は日本一の剛の者というて、きつとかたはらを見る。同じならびに國府の清水とて名所あり。又ならびの在所にくろどりといふあり。年ふけたる男我事を云ふかと思ひ、いやおれはがうの者では候

○京の丸山といふ處に人あまた遊びける。ふるまひの菜に醬出たり。風味ことに勝絶なり。このひしほといふ物をば、誰がたくみに作りそめつるやといふ。これこそかくれもない融の大臣より出來そめたるものよと。何ぞふみに書きてあるか。なか〳〵、すなはち融に、浦は其まゝひしほとなつてと。

○奧州にみてぐらといふ武家あり。彼館にて能に鐵輪をしかゝり、おそろしやみてぐらにといふを、ゆきあたり俄になほし、おそろしや股ぐらに三十番神おはしますと。

淺ましき神の居どころや。

○津のくに海士が崎にて神事能あり。野の宮をする時、うらがれの草葉にあるゝをかゆるとて、たてがれのくさばにあるゝとうたひしも、うらめしき作分や。

○錢を貸したる人の方へ、年のくれに使をつかはし乞ひければ、返事に三年四年利分をなしたり、もはやそなたの物をばおはぬといふ。貸主大に腹立し、對顏して本利ともにすませと。いや利分ばかりにてすまされよ、尺迦の時代から本利ともになす事はない。それは何としたる存分ぞや。されば能野に、佛ももとはすてし世のと作り、もとなさねば、佛さへ赦されたはさて。

月海上に浮では—月海上に浮んでは兎も波をはしるかと、竹生島の謠の文句

○蠟をつけたる馬二疋京へのぼる。山中の關にて、役をせよといふ。いや昔より惣じて蠟をつけたる馬に、役をしたるためしなしと、互に爭論なかばなる砌、沼の藤六とほり合せ、雙方の理非を聞き、向後はともあれ、まづ此度は役をゆるせ、幸ひ關寺に、らうにはやくもなしとあるぞ。

○昔は番匠の持つ釿も物をいうたとあるが、今は聞かぬの。そのやうなる嘘をばいづくにて聞かれたぞ。高砂に、しかるにちやうのうがことばにもとありごとはある。

○三五夜中の新月は宵よりくまなき空の色、寐られんものか、いざ行かんとなほざりならずうちとけて、語る宿にぞ集りぬ。亭しらかゆを煮て出だせば、月海上に浮かんではと、興を催しほめにけり。少時程ありすひものに、鰻調味しすゑたれば、あひにあうたるもてなしや、月海上に浮かんでは、鰻も浪をはしるかと、申せし人のゆかしさよ。

○楊貴妃の能に、大夫がしるしの簪をとかんとするに、面をゆうたる糸に、むすほれ、終にとけず。せんかたなければ、面ともに取りそへて渡す。わきが二色を手に持ち、しるしのかんざし面まで賜りとうたひごとは。

太夫のすがほ如何候はん。

津國云々ー謠曲高砂の句

はたはすー不詳誤あらん歟

心ばえや、さりながら、馬のよみたる歌はいまだ聞かず。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人のこの爲

●これこそ馬のよみたる證歌ざうよ。これは業平のにてはなきか。念もない、熊野にそも此歌と申すは、長岡にすみたまふ老馬のよめる歌なりとこそ。

○三好中納言殿にて大名衆に振舞あり。朝食過ぎ、酒二三返とほれども、つひに末座にある藝者に膳をすゑず。其時申すやう、殿樣達飯を參りて候へば、早々我等ごときの者にふるまひを給はるは、古より定まれる時宜で御ざあると。其時宜をば更にきかぬと中納言殿仰せあれば、楊貴妃に、君きこしめされつゝ、いそぎめしいだしと御座候は。

○かたのごとくの下手大工、能を見物に行きける時、わきが出でて、津のくに高砂の浦をも一見せばやと存じ候といひければ、かの大工ひたもの感じ居たるを、左右にある者ども、こゝな者は何事をうなづくやらんと聞けば、友達にむかひ、われは高砂の浦を見て、ひろいとばかり思ひたるに、今の人は一間せばいと言うたはおもしろい、何にも餘分をおきてさげすむべきものなり、これぞ後學やとて、はたはすかんじごとは。

妙な聞きやうや。

難波—謡曲の名

加世者—小者

花に鳴く云云—古今集の序の句

ふらではかなはぬとかいておいた。撰擇集にあるか。いや難波に雪は豐年の御調物と。

○ゆやにむかひ、是は平の宗盛にて候と自慢して申されけれど、熊野は一向さほどにおもはなんだればこそ、いやそれはこしぢ、我はまだとこないたほどに。

○津の國にて、ある侍の鶉狩してあそばんと、小鷹すゑさせ出でられけるに、萬代が池のあたりに人あつまり、大にいさかひする體なり。加世者を遣はし樣子を見せければ、かの使立歸り、道とほりの奉公人と、百姓のたごになひと口論仕り候が、百姓の方が道理左右に見えてござある。なにと道理とは。こゑもち少もさわぎ給はぬ程に。

○いな者どものよりあひ、小野の小町は美人にて、桃花雨を帶びたる風情ともほめ、歌の道世にすぐれ、をうなの姿になぞらへ、よわ〱と詠みたるなどほめけるが、勿怪な事は、氣が短慮に酒にゑうては人とからかひ、垣壁をも打やぶり、らつしがなかつた、大疵といふ。上戸とも下戸とも、短氣とも知らざりし、そちには誰が語りて聞かせたるぞ。關寺小町を聞き給へ、垣に喧嘩をかけ、戸には醉狂をつらねつゝと。

○なにといふいはれに、昔は花になく鶯、水にすむ蛙を始め、馬などまで歌をばよみたるぞ、人倫たる身をうけながら、五文字七文字のわかちさへ知らぬはと泣く。やさしの

あれに見ゆるの一句ー慶安本になし

申しけるやう、うらはしやくだの者で、何もいはうではおぢやらぬ。

○津のくに兵庫の浦にて、祭禮の能ありしに、船辨慶のはて跡白波といふを、やれ不吉やと思ひ出し、太夫聲をあげて、跡くらやみとぞなりにける。

　なほされぬはせめてよし。

○田舍人の上洛し、宿主に向ひ、某が京のぼり一世の始めに候、いづくをありき何を見ても合點ゆかず候まゝ、いそがはしくともつれてありかれ、處々を敎へてたべ、故鄕にかへり土産にせんなど懇に語ひ出づる。まづ四條の橋を通るに、是こそ謠にうたふ四條の橋、あれに見ゆるは五條の橋の上候よ。さてもうれし、熊野にあるめいしよを見たる事や。して〳〵其老若男女といふ處は、やがて此のあたりにては候はぬか。京の案内者も一圓不文字にありければ、理がすまいで返事するやう、其老者男女は、三年あとの大洪水にみな流れたと。

　渡りえてうき世の橋を詠むればさても危く過ぎしものかな

○正月廿五日法然の御忌を拜せんと、人あまたいざなひ知恩院へ參るに、目もあかぬ程雪のふりしを、さて憎き雪やといふ者ありし時に、一人が、昔より上人の靈前へ供物に、

語る。ついに聞きもおよばぬ、そちは何として其由緒をば知りたるぞ。采女にかいたほどの事を知らぬ者があらうか。何とかいた。雨は草葉をうつなりと。

○高雄神護寺の文覺は、聲の高い人であつたといふが、荒行をせられた奇特かよと。聲の高いといふ事を今迄は聞かず、書物にあるか。勿論誓願寺に、虚空に響くは、もんがくの聲とつくつたは。

○あの幽靈といふ者は、何とて足袋をほしがるぞ。實や死出の山刀山劍樹の嶮難にも入るものかや、不思議なる事かなと、獨言に言うて感ずる者あり。其方はいつ幽靈にあうて、足袋をはいたるをば見たぞと尋ねければ、いや是は過ぎつる夕暮に、あの松陰の苔の下なき跡とはれ參らせつる、松風村雨二人の女の幽靈これまで參りたりとあれば、彼兄弟の幽靈にはすんだぞとよ。其二人は僧にあうて、我跡とひてたび給へと乞うたはさて。

又極樂とはいへども、足のひゆる處やらん、たび給へとはうたうたかやとも。

○備後と出雲はならびの國なり。備後に尺田といふ山家あり。彼在所のうば出雲の三澤といふに、神事能あるを見物に行き、橋がかりのわきに居たり。高砂をする時、うばこそ當所の人なれ、知る事あらば申させ給へと、屹度件のうばが方を見てあれば、姥驚き

蛇に追れて何處かへるらん　宗鑑

○蚤といふ物も一廉の奴やら、謠に作つた。何にある。二人靜に、あとをのみ御芳野のと。夫ならば虱をこそ猶ほめたは。何にと。實盛にしらみあひたる池の面にとあるは。

○楊貴妃をつくるほどの者が、比翼の鳥はなんぞや、目のまへにある事を知らいで、ひよこの鳥とこそよけれと。

○楊貴妃を玄宗の后といふは、え知らぬ者のいふ事よ、そうべつやうきひは熱田から出られたと言ふがまことなり。長恨歌にしかと、楊玄琰が娘、玄宗の后とあるに。いやそれはむざとしたる事ぞ。幸ひ楊貴妃にぬしと懺悔して、われもそのかみは、淨海の勢せつたるがと言はれたもの。

○三輪に、ある夜のむつごとに、御身いかなる故によりとは、作意もないつくりやうかな、そうじて理のすまぬ文章や、たゞある夜の六つ時に、御身いかなるうへにのりと、なほしたらばよからうと。

作者めいわくの。

○宗養といふ連歌師は、いたはしや、あめの魚をくうて、それが祟りて死なれたよなど

左少辨になされたるは。

○佛には毛があるか無きものか。いやない、無け光佛とあり。いやある、けぶつぼさつといへり。互に論じて堂の坊主に判談をうけぬれば、有るにあらず無きにあらず。それは何事ぞ。熊野の謠に、末世一代けうすの如來とつくりたほどに。

○熊野侍は盃をさす段には、必ず謠ひてさすが法なり。祝言の時、ある人通盛のうきながら心のすこしなぐさむは、げに海邊のわざと謠ひたれば、さゝるゝ者、そのまゝ脇差をねぢまはし、親ぢや人のあなたにて聞かるゝに、海邊の事をうたうたるは、我を馬鹿にしたり、きくまいとて狂ひしかば、座敷の興もさめぬ。

○杜若の謠に、三河の國に著きにけりとあるは、作りそこなひやというて笑ふ者あり、何といふがよいぞ。にかはの國に著けにけりが本であるぞと。

水でとく膠のあやめ杜若にたりやにたとにためきぞする　雄長老

名にしあふ其八橋を來てみれば田ばかり有りて杜若なし

やせにけり此花の名や杜若　長頤

のまんとすればなつの澤水　宗長

日待—一ヶ月に三度朝日を拜み業を休む

に居るものの、やがて隣の在所一らをさへ知りたまはぬほどにと詰むる。熊野の事はおきぬ、紀州一國に一らといふ所なしと色をそこなひ爭ふ時、二人靜に一榮一らくまのあたりと候が、いな事やと申して大笑になせり。

○日待の座敷にて手拍子をうち、淸經の一門は氣を失ひ、力をおといてとうたふに、小姓ちくと膝をつきけるに驚き、なにゆゑぞと問ふ。其事よ、これの殿のらやくをわづらひ、さん〴〵なるを裏方のかなしがりて、祈禱のために日を待たせ給ふぞ、かしらを落いてはにが〳〵しきと呫くに、其まゝ心は眞如の玉かづら、心は眞如の玉かづら、あとらを長々とひきて、長き夢路やさめぬらんと直したるもをかしや。

○尾張の守といふ人のまへにて、ふと伊勢やと謠出し顏を見て、やれとおもひ、いせやあのごりよのうみづらに、たつとなほしごとはの。

○田村に千の手には千の矢さきとつくりたるが、是は不審な、手には五百の矢さきならん物を。それはそなたのおぞい、昔もあれを見よ、不思議やなといふたは。

○鵺をうたはせ聞いて、御殿の大床に伺候してはあしさうな、宵から行きて居たほどに、ひえてしとをしてがよからう。その仔細は、ぬえを射たりし後、官をたまふ時、すでに

うとく〳〵　有福

○あの月のゆくみちは、何に乘りてありくなれば、あれほど足が早いぞよ。馬にのらる。何に書きたるぞ。櫻のこのまにのる月の、しかもおもしろの春日や、あらおもしろのはるびや。

○山姥は福分の人にてあると聞いたが、耕作はせず、あきなひの音もなし、なにとしたる事にうとくなるぞと不審する。奇特をいはるゝ、言葉にはいへど目に見る者なし、其上不辨分限をまでいかにとして知られたるぞ。かくれもない山うばにつくりたるは、八木たう〳〵としてと。

○信長公の御前に連一檢校候ひつる時、傘持なにとしたりけん、傘袋を落したるを、曲事なりとて折檻あるに、連一申しけるは、物をおとすは昔よりあるならひと聞きてござある。なにをおといたぞと仰せの時、高砂の尾上の鐘もおとすなりと。卽お機嫌なほりぬ。

○信長公へ熊野新宮方よりの使者に寂靜坊といふが參り、御咄ある砌、連一出仕しけり。此座に新宮の使あり。何にても物語をせよと御諚あるに、追付けて連一、さて熊野に一らと申す在所の候や。いやなし。さては寂靜ば熊野の人にてはあるまじ、熊野

ざうさ——面倒

○京邊土にてある東堂の細工に、蟹びしほをするとて、鹽一二升を用意し、ふりかけ居らるゝ處へ、ふと檀那來れり。さてもよくぞおはしましたる、內々人のはぐくみのいろを見せ參らせたやとこそおもひ候つれ、其故は愚僧がしんせつのだんな、尼ケ崎に有り、某つかふ程は鹽を續けてくれんとの契約なり、されども道の程遠ければ、人馬のありきはざうさなる條、いつも蟹におふせて送らるゝ、これ御覽ぜよとぞ申されける。

○月次の初心講に入りてはあれど、慄ふ〳〵の風情なれば、指南する人あはれみ、一順の句を暦のうらに書きてつかはし、何となうわきに置き、見ぬふりし句を出すやうに言含めつる。うかとふまにはや句まはり、我手前になりぬ。あわてゝ句をわすれ暦のおもてを見つゝ、

かのとのひつじかまぬるによし

○おどけもの緣を行きちがふとて、小姓の口をすふ。わきより見たぞ〳〵と云ふ時、あまり肝をつぶし、旅ぢやにゆるせ〳〵と申しける。

謠

物の云々ー慶安本になし

私は高野聖にあらねども老においたる故にめさずや

○たふとげもなき出家の、檀那と一つ席によりあへる事あり。僧二聲三聲きやつきやと喉をかすりけるに、俄忽に魚の骨出たり。坊主其骨を手に取り、あらふしぎや、これは誰が食うたる魚の骨であらうぞと。

○或僧新しき小刀の大なるをもちて、鰹をけづり居ける所へ、知音の人思ひよらず來れり。あまりにとりみだし、小刀を鰹と思ひいそぎかくし、鰹を小刀と思ひさし出し、此比關の小刀をもとめた、御覽ぜよとぞ申しける。

物のきれぬ小刀であらうの。

○我が祕藏の紫小袖が見えぬ、しかとそちが盜みたるといふ。いや取らぬ。さりとては證據人ありとつよくいふ時、取りはせぬ、人の見ぬまにもらうたと。

○若き座頭のよばひして、垣へのぼりこえんとする處に、折節月のくまなき夜、亭主見附け、座頭は何事にといふ時、天へのぼりさうよと。

○京にていづれやらん、當宗の寺に日念上人といふありし。其弟子のいふ、是は不審な念佛の念の字ではなきかと。いや〳〵法然の然でこそあれ、なか〳〵念佛の念ではない。

申しけるー一本「申すなり」

のやうな。女房いや此程大なる猫がありくといふに、彼方肝をけし、にやうといふべきを、うちわすれ、ほそ聲になり、ねかうと申しける。

○若衆と二人寐ねてありし法師が、曉雨のふる音を聞き、なむ三寶とめて朝食をふるまはずばなるまい、そらねいりし、起きてかへるを知らぬふりにせんこそよからめと思案しければ、若衆そとおきて行く。もはや門の外へ出ぬべきと思ひ、心もとなさに起きて見ければ、いまだ門の内にやすらへるを見附け、仰天し立ちて居ながら、目をふさぎ高鼾をかき事は。

○高野の威を借り、諸國をありく聖の若輩なるが、一夜の宿をかりけるに、亭主は留守にて、若き女房の徒さうなるあり。兎角いひより、此夕あはんに定れり。然るに女房の指南するやう、そちは二階にいねよ。鷄が鳴かねば下司共をいねさせぬ法なりと語れば、聖われは幸ひ鷄の鳴きまね上手ぞと契約し、戌亥の刻も過るを遅しと、高野笠を手にもちはた〳〵としけり。女房やれ鷄がはや鳴げなはといふ聲を相圖に、其儘やどらうかと。

○高野ひじりのついでに、或公家方へ若き女房達なば、あそびにとてよび給ひつれども、年ふりたる一人殘されけるに、述懷、

女人けつかい—女を入れぬ事

弟子ちくと人の知りたる一山一寧といふありと、二串とりたり。時宗の開山一遍といふありと、一峯妙齋といふありと、大山一元のやれ、ひたものとりくひ、もはや田樂一串殘れり。師匠終に言句いでず。是は無念なりと思ひ、手を差出し、がつきめ弘法大師というて取られたり。

弘法に一の字はないの、十號の中に見えず。

弘法のついでに位高き上臈の、高野山は女人けつかいと聞くなれば、生をかへてならではと思ひ續けたまひて、小袖を施入ある時、

のぼるべき便りなければ高野山かねてしきおく法の狹莚

○小者のみめよきが奉公せんとて來れり。坊主心をよせ、常になれし若衆のねいるを伺ひ、忍びて起出づる。少人聞きつけ後よりそと行く。坊主足音に肝をつぶし、壁に大手をひろげ、足をまたげ居たり。若衆見て、何事にやと問ふ。蛛のまねしてあそぶと。

○亭主の留守となれば、常にかよひなれたる者あり。兼ての約束は、屋根からしのび來れ、橋をかけ置かん。亭主歸りたらば、屋根をありくは猫であらうといふ時、猫の鳴くまねをせよとしめしあはせて置きつるが、まことの折に男聞きつけ、屋根をありくは人

是界坊—能の是界、天狗也

師にならうかと思うて案ずるよと。

癈忘

○是界坊のおもてに上臈面をかけて出たり。橋懸へ見ゆるとおなじく、あれ〳〵をかしやと笑ふを、大夫聞きても今更歸らんやうなし。舞臺にていひける事は、そも〳〵是はぜがい坊の内方にて候と。

○神事能のありけるに、地下の庄屋のむすこにけいこをさせ、大夫になし、始めて舞臺へ出しける。自然わするゝ事もありなめと、論義のかしら書をかなに書きたり。兼平の御さいごは何とかならせ給ふらんと問ふ時、ちらと手の内を見てあれば、汗にながれ正體なし。肝をつぶし、兼平の御さいごは、むつちやとならせ給ひけりと。

○眞言宗の老僧、こざかしき弟子あまたもたれけるあり。山寺の冬の夕、殊に物すさまじくさびしかりつるに、豆腐たゞ一ちやうならでなし。是を田樂にしなぐさまんに、むざとくうては曲なし。さあらば一の字のつきたる祖師の名を、おの〳〵いうて食すべきにきはめられたり。嫡弟九曜曼陀羅の元祖一行阿闍梨は貴しと、一くし取りたり。次の

三更―午後
二時頃

日比は我身を何と思うたぞ。

○夜咄しする衆の中間ども供して行くに、比は霜月末つかた、身にきる物のうすみじかければ、膚は風の棲となり、糟糠汁さへ事たらねば、腹中のとぼしさよ。壁の下道の傍にちつことたゝずみ、頭も足も冷えのぼり、三更と過ぎぬれば、食氣漸つきはて、飢寒の愁やすからず。身のあたゝかにてこそ眠らんやうもなければ、せめてさんげの物語をはじめ、聲もをしまず申せしは、我が望は別にない、天下を十日もちたや、十日のうちに夜咄しする者どもを皆とらへ、成敗して見たいと。その席の相客に心ある人のさむらひて、中だちし、此旨をさだかに聞付け、

寒者不レ貪二尺玉一而冀二短褐一、飢者不レ願二千金一而羨二一飡一、

とあり。彼者述懐も理とこそ憐みける。

七夕の下部にかすぞやれ衾天の川原の浪にぬらすな

○連歌師のもとに奉公したりし小者、今度は町人のかたに居けり。友たる者尋ぬる。今は夙に起きず、宵よりいねてこゝろやすきかやといへば、そちがいふごとくなり。さりながら今の亭主も、時ならずうかと空を詠め〳〵するが、わるうしたらば、あれも連歌

隨なり。是ばかりはいと心うく思へど詮方なく、此米を萬につかふに、同じ多さにてつくる事なし。紙も同じ如くつかへど失せず。心ながく望をかけて、物詣はせんものよ。

○若き侍一段の馬にのり、かけさせて通るを、鉢ひらきどもの見て、其中の宿老がいひける、今の馬は我がにしたいぞ。何にせう。あれに乘りさつさとかけまはりて、はかゆきに鉢がひらきたいと。

○和泉の堺は一町々々に御用心と名をよびて、夜番するもの一人づつ必ずあり。其傍輩ども四五人あつまりさんげの夜がたり、時うつりけるに、南中の町の夜番が申しけるやう、我は金子を十枚もちたや、乘物にのつて、御用心が呼ばりたいと。

○都に候乞食ども、暑月の夕すゞみ、木の下に頭を竝べ、今こん盂蘭盆を、そちどもはいづくにて送らんや、ちと處をかへ、堺の津に行き仕舞をせんは如何にといふに、尤と同じ、五六人づれにて下り、爰に到れば其寺の乞食あり。かしこにおもむけば、其ところにもらひつけたる乞食あり。施餓鬼につけ靈前の供につけ、一飯も京の乞食の所得なし。すごすごと京に歸り上る。似たるを友の乞食行合ひ、堺にての樣子はなにとかと問ふ。そのことよ、堺へ下つて、さつと乞食になつたと。

る兩眼の外に、目を三つほしい、一つは背につけ、だしぬき、やみうちの用心かたぐ跡の方を自由に見たい、一つは膝頭につけ、夜陰の歩行あやまちなからん、一つは手のたけたか指の先につけ、能の時または風流、何にても見物の時、人のせいたけにかまはず、手をさし上げて見たいと。

なに事も心のまゝと願ふこそつくりやまふよ滿足はせじ

天神二十五首の內に、

賤の女が庭の木の葉にかきたえて明日の薪に嵐をぞ待つ

○山門に僧ありき。いと貧しくて、鞍馬に七日參りけれど夢も見ず、ひた物參り百日といふ夜、夢に我は知らず、淸水へ參れとあれば、淸水へ百日參るに、又我はえこそ知らね、加茂へ申せとなり、又加茂へ百日參りたれば、夢に和僧はかく參る、いとほしければ、御幣紙うちまきの米ほどのもの、確にとらせんと仰らるゝと見て驚き、あはれにかなし、斯程のもの何かせんとおもひながら、もとの坊に歸りて居たるに、知りたる方より物申さんといふ人あり。見れば白き長櫃をになひて、緣におきて歸りぬ。あやしく思ひ、使を尋ぬるになし。開けて見れば白き米と、よき紙とを一長櫃入れたり。見し夢の

○熊野のついでに、奥州よりなとりの老女とかや、世に聞えたるあり。有德の婦人ありて、けはしき道をしのぎつゝ熊野へ年參しけるが、或時のまうでに、權現直に告させ給ひし。
道遠し程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我も忘れじ
○武州岩筑の山下に、毎朝鉢をひらく者、其類二三人より合ひ、樣々物語しける中に、一人がいひけるは、今生の望、唯當城の殿になりたいまでよ、誰が屋形ともなにの宗旨ともいはせず、おつこみ〳〵鉢がひらきたいと。
鉢をひらくといふついでに、一路沙門和泉にて鉢にいでられし、心ある人内より、
何をがな參らせばやとおもへども達磨宗には一物もなし　一路
本よりも賜はらざるを得たるこそ本來空の妙理なりけれ
○瓦おち軒くづれ、とびらはありし名のみにて、舊苔道をあつく閉ぢ、藜藋ふかく茂り合ひ、枕にすだく虫の音も、きけば浮世にあきはてゝ、時雨も雨もすぐにもる門の下にて、身を過ぎし貧人のいふやうは、我がねがひは、白銀を今一貫目ほしや、唯此屋根ふいて住みたやと。
○數人あつまり居、おのが心々の望を語りつるに、ひとりはいふ、我はたゞ生れつきた

世の中はの歌—慶安本に無し

あをだ—板を編みて架とし竹を釣としたる乗物

ず、せめて煩になりと、癬か腹病をも病いで内損はなんぞや。

世の中は徳して人にほめられて損して人に笑はれぞする

○萬に鈍なりし男のしかも富貴なるが、男子を四人もちたり。雨中のつれ〴〵にあつまり居、おのれ〳〵心に望む事を懺悔せよとあり。太郎いふ、われは日本の岩石を金銀にして、その中へはいりて居たいと。次郎我は日本の海川を硯の水になし、文を書きやるほどの威勢をしたいと。三郎いふ、我は日本の草木を人になして使たきと。親聞もあへず、いづれも一廉の望どもかなと、うれしげに笑ひしを、惣領のいふやう、我は牛のへのこが四つほしい、三つは弟の三人にくはせ、一つはほめたまふ父に参らせたけれども、それは天のおそれあり。迷惑ながら我くふべきまでよ。

我も人もたけに及ばぬ事を思ひ、せんなき望みをするならん。

○熊野へ参詣する人あり。岩のかけぢを手輿とやらん、又あをだとやらんいふに、乗せて舁れたるが、谷のふかき事、千尋もあらんを見やり、さても一足ふみ損うたらば、五體は微塵にならん物よといひけり。彼二人のかきたる者、こゝな人は色々のくどきごとをいはるゝ。若し谷へ落したらば、今日のやとはれ賃を損にして取るまいまでに。

客の中より、しかも調子だかに、亭主もはや火を出せ、火を出せといふ。なまゑひなる者聞付け、肝をつぶし、いや〳〵今のは自火で御ざるぞと。

いやないひわけかな。

○葉おとそよ〳〵荻の上風

といふ句に、

神垣の内には人の米かみて

と出したり。てどまりが指合ひたとあれば、

神垣の内には人のかみて米

似合うたのぞみ

○荷且の事にても物事作勢ある人の煩に、醫者を請じ脈をとらせ、病は何と申す症にて候や。唯内損と見えたる由返答せられければ、彼病者さて〳〵口惜の次第や、外聞を失うたりと、繰言のやうにいひけるを、傍より生をうけた身に、上一人下萬民、誰とてものがるゝあらん、聞えざる怨みやうやと教訓しける時、いや病を免れんとにはあら

禁中—御所
あやまつて云々—慶安本に無し
獻々—酒

比丘尼のやうなる馬ならばこそ、乗られもせめといひはてゝ、やれと思ひつれども。

○禁中に御能あり。狸のはらづつみを狂言にする、狸が出でけるを、狩人なんぢ何者ぞ。我は狸の王なりといふ。何とたぬきの王ぢや、王ならば射ころいてくれうずと。

あやまつて一字けがす、恐れてもいひなほさんやうし。

○わたましの祝儀につかはす使をよび、主のをしへけるは、かまへて常の所に行くとはちがふぞ、一言にても麁末なる事申すべからずとあり。畏りて候とて行く。主人獻々をくむ。されどもつひに瘖の寄合ひたる如くなれば、主すまぬことに思ひ、貴所はいかなる仔細により無言の仕合せぞや、わめきざめくこそ目出たけれといふ時、さればとよ、さきから物がいひたうて、胸がやくる程あつたれど。

○越中には舞々に瀾座漣座とて二方あり。さる人大船を作りたる祝儀とて、數多あつまり酒宴なかば、舞々の出たりし。上座より其方は何がかりぞと問ふに、大なみ座とこたふ。舟のいはひに大なみはのといふ。いや瀾座漣座とて、もとは一つにて候ひしが、此頃二つにわかれて候とぞ。

○屋わたりの祝とて、人あつまり並居、酒宴興をつくせば、時うつり暮におよぶまゝ、

と出したるを、執筆神祇ちかしとて追返す。又直し申さん。
むらさき色の自在寳殿と。
せめて始の句ばかりならば、おためしかるべからん。
○後世を大事とねがふ人、我たのむ寺に入り、剃刀をいたゞき、法名を乞ふに、教鸞とつけたり。手をあはせて、ともかくも任せまゐらする身には候へども、うちきく所、心みだれ狂氣したるやうにこそとりなし候はめ、同じくは名をかへてたび候へかし。さらばつけなほさんとて、鸞行とこそ。
始のは物狂しきばかり、後のははてた。
○移徙の連歌に、
春の日は軒端につきてまはるらん
といふ句を出せり。宗匠けせ〳〵といはるゝ。執筆墨がくろうて消されぬといふ時、右の作者なにとやうにも消せ。又つけう程に。
○時衆なりし老僧、東山よりかちにて歩み、京へ齋に出でけり。今朝は雨の後にて道も悪く、我馬を迎にやらん物をと旦那のいひければ、とび狂ふ馬には何として乗り候はん。

人づけ―他人の命名、放火

ふ。百姓かどいであしよと大に腹立しけれど、とかくいひより酒をのみ飲せけるが、立ちて行きさまに、さきの腹立は互にねもはもをりないと。

はなぬりなした。

○新しく家を造り移徙して、祝半に座頭一人來りぬ。やうく酒も數遍めぐりければ、一句きかんとよび出し、名をば何とかいふ。比一と答ふ。屋わたりにひいちは禁物さうなといふを聞きて、いやくるしうも御座あるまい、人づけて候ほどにと。

○泉州堺の津より、呂宋わたりの商人住吉へ社參し、宿願に船の繪を書き、一の神殿に捧げ、神樂など參らせ喜びの酒宴するに、順の舞とて扇をさしたれば、其人うたふやう、せんかた涙にふし沈む事ぞ悲しきと、其助右衞門舟といふこそ紛れなく覆りたれ。

船ならで渡す瀨あらば七夕にかさばや天のかはらけの駒

○祈禱連歌の席にて、宗匠たる人末座の者にむかひ、思ひよりたる事あらばうかゞはれ候へ。庭の木草、空行く雲、目前の境界、いづれかことの葉にもる類あらんやと、勸めらるゝを種とし、かかりたる天神の裝束をながめ居たりしが、さらば申して見んや。

むらさき色の自在天神

や。四十八になるとあれば、大工の云ふ、もはや二つこそたらね、五十までよとおちつけたり。亭大に立腹し、遺恨に思ひ居けるが、作料を渡す時、米五斗遣はすべきと云ひしを、四斗八升やりぬ。是は二升たらぬと改めけるに、いや四十八になる年も五十になれば、四斗八升も五斗してすませといへり。

いひ損ひはなほらぬ

○松永霜臺、和州信貴の城におはせし時は、菓子をすゑて出すに、染付けにても南蠻ものにてもあれ、一廉の鉢なければ、座敷の興少しともてはやす事あり。名ある侍のもとに霜臺を請用し、珍らしき鉢を出せり。大に感じほめられける半ば、相伴の人、今日の振舞は、たゞ亭主の鉢びらきにて候と申しけるを、何とやらん言葉のえんあしゝといふに、肝をつぶし、さればこれの鉢をおひらきあるで候と。

○惣別茄子のかるゝをば、百姓みなまふといふなり。和泉にての事なるに、道のほとりに茄子を植うる者あり。へたらしき舞々のとほりあはせ見れば、大なる土工李に盃を添へてあり。ちと是をなん望にや思ひけん、畠へたちより、さらば一ふしまはんとい

せゝり作事—つくろひ普請

押廻し虚空をぐつとのみこめど須彌の中骨喉にさはらず

天台の云ふ、汝が在所何處なれば虚空をばのむぞ。時に禪、たそ〱腹の中にて物いふは。

○招月供一人にて天の橋立を見物の時詠める。

月の暮雪の朝のいかならんたゞ見るさへに天のはしだて

とよまれしを、小者聞きて、我等も狂歌を申さんやと、

酒の暮飯の朝のいかならん茶でみるさへに天のはしだて

○妙吉侍者に戀の歌よまれんやと尋ぬる者ありき。なか〱と返事せらる。さらばとて逢不逢戀といふ題を出すに、

わがこひは達磨大師の魏にあへる梁の武帝の秋の夕ぐれ

○連歌に身をやつし、心をそめ、臥すにも起くるにも、此事のみなりつる人の住家なる軒の下に、夜小便する音しけり。かの亭主とがめていへるやう、夜分に居所へきたつて水邊を下すは、人倫か生類か、植物をもつて打擲せよ。

○せゝり作事をする時、亭主大工と物語するついで、大工のいへる、御亭はいくつに候

○堺に智永とて比丘尼あり。或朝松茸の物見なるを一折、人のもとより送りたるが、勤行より歸り見て、めづらしやとよろこべり。下女の出でて、そこにあれば、蠅もせゝるに、とりておきたまへといふ時、いま〱しや、看經した手でとらうかなと。

○老人あり。我が年をかくして、いくつと問へどつひにいはず。或時子の年の人は誰も果報があると、いくたびも指を折りつゝ、そなたは何の年ぞと。仕合よき人數にいるがうれしくや侍りけん、われも子の年と語るにぞ、すなはち繰りて見、其年をいくつとさす。かの人だまされ、やすからず思ひ居けり。又他席になにの年と問ふ時、狼の年とこたへたり。

○天台、禪宗、時衆僧三人座を同うし、いざ大なる歌ようであそばん。尤なり。然あらば、時衆は歌道に心がけの家なり、まづ詠み給へといはれ、

　唐土より日本にひよつと躍りでて須彌の邊を遊行する人

又天台沙門

　須彌山に腰うちかけて大空を笠にきたれど耳も隱れず

禪宗

物なりさる程に――一本「物なる程に」

何なまうだととなへざるらん　時宗

金剛界胎藏界の春の花　眞言

諸法實相へだてあらじな　天台

○所の地頭と中のよき坊主あり。振舞によばれ、種々食物の咄ありしに、海月といふ物は精進めきたる物なり、さる程に、出家にも參らせたや、殿にいうてこれをばゆるしにせんなど語る。年たけたる弟子聞いて、殿へおほせあげらるゝついでに、生鯛の事をも賴入ると申したり。

○酒つくる亭主、町屋は空地なし、いかにもひろき處にすみたや〳〵と、明けても暮れても案じけるが、或時京の三十三間堂に參り、ねんごろに見物し、堂の前にくだり、友だちにむかひて、別にのぞみはない、我は此堂がほしいは。何事にや。酒部屋にしたい。

○當宗のだんな歸依する寺の普請あるに、行きて小壁下地をかきけるが、あやまちに繩きれ、高き所より落ちさまに、南無阿彌陀と叫ぶ。同行の者のすくひたすけ、心地少しいできたる時、かりそめにも題目をば念ぜずして、いかゞなればあさましく念佛をば申しつるやと問ふ。さればよ、さきのおちさまには、ていと死ぬると思うてあつたはと。

手前たらずば―暮しが立たずば
大乘妙典―法華經
濟家―臨濟宗

すむれども合點せず。ある時、十人の中より金子一枚與兵衛につかはし、手前たらずばかさねても合力せんずる、ぜひ受法せよかしと。與兵衛力およばず、大乘妙典を頂戴せり。各悅び、次でに女房をも宗旨になせやとすゝめの時、彼與兵衛申しつる事のをかしさよ、私こそ貧乏ゆゑ地獄におち候とも、せめて女どもをば、助けたう御ざあると。

たづね入る人はさまぐ〱變れども同じ櫻をみよし野の奥にてあるものを。

○雜談に心の奥の見ゆるかな言のはごとに氣をつかふべしともあれば難波につけ、常の心をいふなる事、このおもて八句にて工夫あるべし。

したやみやけらこが嶽の木々の露　濟家
いかなるかこれ秋の夜の月　曹洞
行きつくす江南數日雁なきて　儒者
西よりきたる風の涼しさ　淨土
そこにこそくせ物佛はあるものを　當宗

合力―惠金
影供―宗祖を祭る
ゆゑ―慶安本「條」
薄打―金銀箔をつくる職工

思ひ、教化すれども更に同心せず。しひていふ、汝經をいたゞきたらば、信心ふかき者と披露し、給分の外に合力をえさせんと勸むる時、あらかじめ領掌しけり。かくて十月十三日、御影供に諸檀那みなあつまれる座敷へ彼をよび出し、件の趣をひろめ、受法さするに、彼男其事なり、色々いやといへども、種々教訓のゆゑ、經を頂きてさふらふ、さりながら、頂きたる經を糸瓜とも思ふにこそと。

ありがたいと云うてならいで情のこはさはどちもまけまい。

○夫婦唯二人居て餠をやき食はうとする處へ、おもひもよらぬ者來りたり。よくこそわたり候やと呼入れしが、女房のいひける、なうはやうおめしやれ、又人がこぬさきに。

○男も女もまじはりて、いろ〳〵物語の有りつるに、一人云ふ、和泉の國には何ともをかしき名字がある。野尻のやれ、草部のやれと。又ひとりが大和にも、へぐりだにのやれ、馬の尻のやれといふ。腰より下の言葉ばかりなりと咄しければ、四十ばかりなる女房のさしいで、それより未だ聞きにくいがあると。何ぞと問はれ、生地殿とての。

○江州安土に薄打十人ばかり、みな當宗なり。いひあはせ與兵衞といふなかの使を一人かよへけり。これは淨土宗なり。そも奉公せんと思はゞ、日蓮の教門に入れやと頻にす

間是非におよばず、さし出しさまに、これはおそれをしうござあれども。

恐れはやすめ字、をしいは定であらうぞ。

雄長老

櫻さく遠山までの花見にはながくし日ぞもてや中食

中間のついでに、玄旨法印の御内に大ほとけといふ中間あり。いとまを乞ひ申し、髪を剃り、ころもきてありくに、大阪の道にて馬上より見附けたまひ、今のは大ほとけかや。なかくとこたふ。すなはち、

大ほとけあたまをそればまた佛是ぞ二佛の中間のはて

○一廉なる大名の東堂へ參られけるに、對顏の時、さし樽一對、昆布五束を臺に据ゑてもちありく。あの人體には乏少なる時宜やと心におもはれたるが、是は御持參とて披露しける。やにはにふと乏少とぞ申されける。

詞はこゝろの使とあり。

○當宗の寺へ、檀那のもとより、此者を目代にして庫裏に置きつかはれ候へと、年五十ばかりなる男をあてがへり。理知義に重寶なるが、朝暮高聲に念佛す。坊主心うき事に

玄旨法印―細川幽齋

當宗―法華宗

目代―代人

心―慶安本なし

あり―慶安本二字なし
ある―同本により加ふ
するやう―一本「聞き給へ」

醒睡笑　卷之七

思の色を外にいふ

○一村の庄屋たる者、餘郷に聟あり。かしこに惣領をまうけたる祝言とて、一在所皆行く。其中に若輩あり、上座より出す多少を見合せ、我も時宜をせんとおもひ、内より代二百つないで懐中せしが、百は少し二百はおほしと思案するまに、はや手前へきそひたれば、禮式を手にもちいだしさまに、目出たうとはいはず、御太儀でござれどもと。

○惣領の二十にあまれど、つひに嫁をむかふる噂もなきあり。ある年の暮に親たる人、彼をぢを呼びて、正月の小袖去年のも氣にあはずして著ぬといふ。今年のをば能くぬしにこのませ染め、小袖の紋に何をつけんと問はせければ、返事をするやう、唯造作もなく、家の端にひとりねする處をつけたらよからう。

○悴侍の遠路を行く時しきりに飢ゑたり。見ればたゞ一人つれたる中間、こしに飯をつけて持てり、石の上にだうと居て、おのれが腰にあるめしを、われにおくれよと。中

暁月坊―以下別項あるべし

いふ、それは一かうちかい事や、そのころ我は孫にはなれ、歎に沈みてありつるはとある。暁月坊にむかひ、そなたは奇妙なる作者なれども、あまり狂言にて證歌の名譽なし、いかゞといふ。言下に、

暁月に毛がむく〳〵とはえよかしさる歌よみと人にいはれん

いはざると見ざる聞かざる世にありて思はざるをば未みぬ哉

偏執―かたいぢ

奔走し―珍重して

し、なく聾ぬるでの木にてと申したり。

時にあたりて奇特なるうそや。
世の中はうそ許にて過にけり今日も又嘘あすもうそ〳〵
世の中の人の心のすき〴〵をわれに似ぬとて偏執なせそ

○ちとうつけにて、しかも富める人あり。常にともすれば腹鳴る事けしからず。是は何としたる病やと人毎に問ふ。口きゝて物しらぬ者云ひけるやう、昔なる神が味噌桶の中へ落入り、上らんとすればやはらかにて足のふみどよわく、あがり得ず、其まゝ死したるがかうの物になりたり。めづらしやと奔走し食ひけり、それを食ひたるほどの者の腹がなりやまざりつる、今も不断そなたのごとく、腹のなるは彼なる神のかうの物くうたる子孫にすんだと語りつれば、病者大に満足し、さては我腹のなる事たゞならず、家の面目なりと慢じくすみし。

○山林に猿どもたはぶれ居たり。十月末つかたにやありけん。柹のじゆくしたる四つ五つ残りあるをわれ食はん、たれ食はんと、くらひては多し柹は少し、所詮年老次第にくらはんといふ。老猿出でて、われは過去迦葉佛の時よりこの山に住むと。又ひとつが出で

まいと思ふ。うらやましや、さて祇園と清水との間は、いかほどの遠さぞやと問ふ時、扇に書いたる繪をひろげ、それは一寸ほどあらうまでよと。

○神妙にもなき人、集り居ける中に、一人いふ、雷の鮓をくうた人があるか。いやなし。左右あらう、稀な物ぢやほどに。してそちはくうたか。中々くうた。味は甘いかすいかと問ふに、ちと雲臭かつたと。

雲無心にして岫を出づとあれば、土くさいとせめて言へかし。

○伊勢の國をのぞきたる事もなうて、いくたびも參宮したるよしはなす者あり。そちは再々伊勢へと聞くが、さこそ海老を澤山に見られつらうこそ。宮川で見た、色が赤うて見事にあつた。海老は海にある物なり、生得色はあをく黒し、いりて後こそ赤けれ、宮川は河ではないか、うそさうな。いや御身はせばい事をおほせある、物好がありて海老をいつ〳〵河へはないたやら、お知りあつたかと。

○信長公岐阜に御座の時、沼の藤六尾州より只今參りて候と申上ぐる。何事も尾張に珍しき事はなきかと御諚あるに、されば鵺を木にて造りたるが御座候と申上ぐる。嘘であらうず、さりながら實か、其樣子を聞かんと仰せの時、あたまはさるすべり、尾はくちな

二人つかふとて、一人の名をば十人とつけ、一人の名をば五人とつけ置きたりしが、客の聞くやうに聲を高々と、やい／＼十人は山へ薪しにゆけ、五人は藪の竹をきれと。

いふに似ぬ心の内の拙さをはづる思ひのなどなかるらん

月も日もさやかに照すかひぞなき此世の人のうはの空言

空にけふ人ははづべき時雨かな

○俗も出家も貴も賤も、人は唯有るべき樣に振舞ふべし。其分に過ぎたるはかへつて其恥多かるべし。

何となみだの袖にあまれる

草も木も葉に隨へる露の世に　祇公

○七字の口傳、山門にはあるにまかせよ。三井寺にはあるべきやうに。安居院には身の程を知れ。いづれも同じ心なり。

東坡が三養、安分以養福、緩胃以養氣、省費以養財

○京邊土の事ならば幾度も見たいがやまひで、知らぬといふ處はなし、世の中の人の見たなどいふは、白河を夜舟にのりたるたぐひならん、某がやうに見覺えたる者はある

家の子―家來

○人の物語を聞いてよく覺え、洛中洛外知らぬ所もなきよしをいふ者あり。さてそなたは嵯峨法輪寺を見られたるか。なか〳〵、いかい大ひげであつたと。

○聟あり。舅のかたへ見舞ふとて或町を通りしが、新しき雁を棚に出し置きたり。二百にて買ひ矢を通し持せ行く。舅出合ひ雁を見て、是はと問ふに、我等の道にて仕りたるとあれば大に悦喜し、一族皆よせて披露し、ふるまひわめきけり。聟かつにのり、今一度もたせ參らせんと家の子にしめしあはせ、我は先へゆかん、後より調へ來れといひすて、先舅にあふと同じく、いな仕合せにて又雁を仕りて候といふ。舅いさみほこれり。彼内の者鹽鯛に矢をつらぬき持來れり、して今の矢はあたらなんだか。されば雁にははづれて、鹽鯛にあたり參らせたと。

○雨の手にて輪をなし、一尺ばかりのまはりなる眞似をし、これほどな大なる栗を見たといふ。そばからまつと減せ〳〵といへば、ひた物ちひさくしけるが、あげくに、そのやうにちひさうせば、いがで手をつかふ物をと申しけり。

長からん角豆の花は短くてみじかき栗の花のながさよ

○明暮うそに過をいひまはりたる者の方へ、思ひよらず客あり。常に淺ましき小もの

る言葉左右なと咎めければ、いやとよ、私の心持かくれもなきふべんしやと、述懐の旨を書きて候とぞ申ける。

うそつき

○播州に風の神とて宮あり。下り船船頭宿願して、順風をこふ。五日六日過れども吹かず。其感應なき旨を社人にことわりければ、巫、さればよ、さるかたよりのぼり風を所望あるまゝ、先其風を吹かせらる。此次はやがて其方望の風を吹かすべしと。

あたら正直の神を見事のうそつきにしないた。

○津の國兵庫の浦へ珍らしき大魚を引上げたるに、其名を知りたる者なし。此浦に物知りの太夫といふあり。かれに見せて問へば、これはほゝらほといふ魚なり、世に知る者なしと。即ち公方へ參らせんと持せのぼりけり。物知りの太夫を呼びて名を問はせ給へば、名をばくゝらくと申上ぐる。以前聞きたる者ありて、此先のいうたると違うたと咎むれば、さればぶえんの時はほゝらほ、今はさがりたればくゝらくといふと申したり。

とかく眞でなければ何も都合せぬことよ。

船—慶安本に依り加ふ

ぶえん—無鹽新しきをいふ

人の語るやう、そこの里に住むなる老人、山路を通ふとて道にて鬼に行合ひ、年頃うるさかりし目の上のこぶを取られ、一門眷屬までよろこび限りなしといふを聞き、あながちに是をうらやみ、はるぐ〵と其人のもとをたづねあひ、ありしおもむきを尋ねきはめ、瘤をとられん望みに、彼辻堂に行きまち居けり。案のごとく、何とも知れぬ者ども夜更け多くあつまり、どしめきのゝしり、酒宴をはじむる時、禪門圓座を腰につけをどりければ、また來しなり、約束を違へず來りたるが嬉しきに、以前の瘤をとらせよといふまゝ、ひしと打付けたれば、思の外なる災をもとめ、瘤二つの主になりて歸りぬ。

○眞言と天台と二院ならびてあり。眞言の寺の院主は學解ある僧なり。天台の院主は無學なりき。眞言の寺に飼犬の名を天台とつけて呼ぶ。天台の院に飼犬を眞言とつけたり。兩寺の意趣はれ難し。ある會合の席に、天台の院主、なにとてそれの犬を天台とよばるるや。いや唯別の義なし、大の字に點をうてば犬とよむ間、點大といふまでに候と。眞言の能化、そなたの犬を眞言とはなどつけられたる。されば犬のありきを見るに、先前足をはぬれば眞といひ、あとの足をはぬれば言といふに似たりと。

○ある侍のさし物にふへんものと書きたり。家のおとなたる人見附け、是はさし出た

ふへんもの—武邊者、武勇者の義

慈照院殿—足利義政
こびたる—ひねりたる
いげ—湯氣

れよとあり。かの僧馬桶を三度禮していふ。和尚樣のお定器と見え參らせた、何かこれではと云ひてしさりぬ。

○慈照院殿にめしつかはるゝ、明陶子、淵用白、干陽朱といふ三人あり。聞く人不審し、さのみ藝能のあるとも知れず、其形も一廉すぐれたる體なし、いかさま義政將軍の御意に入りたる事のあるにや、きゝのこびたる名やとさゝやき噂しけり。ある時萬阿彌御前に跪きてさふらひしが、いつより御氣色快げなるを見奉り、右三人の名の樣子を伺ひ申したれば、打笑せ給ひ、別の趣なし、明陶子は萬事才覺無比類者なり、されども妻に恐れ遁げ廻ると聞く、さてぞめいたうしとつけぬ。淵用白はとるてはうがくもなき者なれども、緣のすみぐ〜敷居のあたり、微塵もなきやうに掃除をよくするゆゑに、ゑんようはくとつくる。干陽朱これも十方手のあきたる無藝の者なり、されども酒のかんをする事を得たり。右曲左曲虎の尾などと、いげのたつやうを見て出すに、少も仕そこなはねば、酒のかんをようするとつけたはと仰せられし。世の常古事のあるべきやうに、するしたりしは、ちがうたりとて人皆笑ひけり。

○あるところに禪門目の上に大なる瘤を持てり。かなしきながら詮方なく過しけるに、

○關役所の難を遁れんに、つくり山伏にしくはあらじと、信長公天下をしらせ給はぬまでは、皆其相をまなべり。されば、にやある者、都は見たし關々をつくろはんやうはなし、兎角このまねせんと出立ち、東よりのぼり居しが、駿河なる清見あたりにて、馬に乘りたる山伏強力七八人つれざゝめき下る體を見附け、南無三寶先達にてやあるらん、さなくとも常の事にてはなさ、さうなり、とがめられては、如何ぞと思ひ、横道へかくれ、彼ときん鈴懸をぬぎ、ふるふ〳〵大路へ出で見れば、先の山伏一人もなし。是はいな事やと思ひけるが、上より下る馬上の山伏は、むかうより上るこそ本の山伏よと見やり、我はまさしき作り者なるに、とがめられては如何せんと恐れて廻り道し、いかめしき道具どもをば脱ぎてもたせつるこそ可笑けれ。

○誓願寺の木食楚仙今はの時に臨み、田舍よりいにしへ月次の友なりし人、文をのぼせ、此度死の別となりなば、追善に獨吟の百韵をつらね參らせんよしありければ、返事まではなくて、

我ための弔ひ連歌めさるなよそなたの口は輪廻めきたに

○東堂のもとへ客僧來りお茶を所望申さんと云ふに、東堂馬桶を出し、是にて茶をのま

下綱―下の役僧

おもひしにかはりて夏は冬ごもり炭焼翁すみもおこさず

○慈恵僧正は近江國人なり。座主の時、受戒行ふべき定日例の如く催し設けて、座主の出仕を相待つ處に、途中より俄に歸り給へば、供のものども、こはいかにと心得がたく、衆徒諸職も、これ程の大事、日の定りたる事を障もなきに延引せしめ給ふ、然るべからずとそしる事限なし。諸國の沙彌まで悉く參つて受戒すべきと思ひ居たるに、横川の下綱を使にて、今日の受戒は延引なり、重ねての催にと仰下しければ、何事に留行ぞと問ふ。使全く知らず、はやく申せとばかり宣ふぞといふ。各心得ず思ひ退山しけり。かゝる程に未の時ばかりに、大風吹きて南門俄に倒れぬ。其時人々みな打殺されなましと感じつる。

○旅の僧しばらく人の許に逗留せしが、ふと出でて行かんと思立つ。折節宿の主他行の刻なれば、借りて使ひ居たる、金柄の小刀を内の者に慥に渡す。主人歸るに請取つる者小刀は件の人とりて去しにやなしといふ。不審に思ひ此處彼處見廻しぬるが、傍の柱に彼僧の手跡あり。よめば歌なり。小刀慥に置くといふ。十の文字を一首の歌に書置し。

　こゝにきしかゝる浮世かたびの身にながき情をたのみてぞゆく

り。瓦やき彼親のもと行き、大に泣く。何事の愁にさほどまでかなしぶやと問ふ時、いな此後鬼瓦の手本がなうなりて、力おといたと。

○祖父が孫を愛して、額をさすりなで、ふびんのものや〳〵といふ。母立聞きをしければ、おのれはさていかほどの苦をうけうずよなと。

○堺の津より作城といふ座頭、讃岐にわたる。比は霜月寒夜の旅なるに、廣間に薄衣にていねんことをいたはり、局方より酒の燗を如何にも暑くし、十二一なる女房にもたせ遣ばし、是をふすまに著てねられよといへど、作城はまことの衾と思ひ、年よりぬれば、起きふすもむづかしきに、いねて居ながら、とてもの事にきせてたまはれとまうしければ、應というてぢきに頭へかけんことは。

名人のよりあひにては候はずや。

○世の中に推はみなちがふむね、よくあへる心の歌にやあらん。

夢庵

淋しさの種とは知らで秋風を植ゑてくやしき萩の一もと

淀川の楊枝が島にすむ千鳥はしにてなどかはを敲くらん

事ありや。七つ八つなる子が返事に、われをやしなへるは、雀の子をかふやうにせらると。さて〱奇特や、まゝこをばにくむものなるに、ためし少しと感じければ、いや物をいかにもちとづつくれらるゝ、多く食うたらば、咽にろがでけうかと思うてやら。

繼母のもりたる飯はふじの山汁をかくればうき島がはら

○隣より五つ六つなるむすこ元日に來り、小唄をうたはうといふ。夫婦ながらよろこびあいし、目出たや、謠うて聞かせよと所望しければ、とゝとかゝとはない中ぢや、錢が一文ない中ぢや。

侘人はうき世の中にいけらじと思ふ事さへ叶はざりけり

ちがうたり天地夜晝下戸上戸ゆきすみ鈍智ひとの貧福

貧法師

戸をさゝねども盜人ぞこぬ

とふも憂世によしや怨みじ

影淸く夜わたる月に秋の空

○瓦やく者の近所に、天下一のみめわろき娘を持ちたる人あり。彼娘廿四五にて死にた

たづな—犢鼻褌

いたいけ—

思ふ。一句の聽聞をのぞむ人さへまれなるに、有りがたきこゝろざしかな、呼入れて茶をも參らせんやと、彼に伺ひたれば、あまり長談議に、しびりがきれて立たれぬはというた。

○若輩なる僧若衆と二人いねたるに、僧目さめて、我腰のまはりひや／＼とする。さぐり見れば、何やらんぬれたるものなり。不思議に思ひ、若衆の腰のまはりへそとやりて置く。若衆又目さめ、腰の廻ひやめくは奇特やと、かの者をそと取り、坊主の腰のまはりへやりたり。坊主取りてすまぬ物に思ひ、そつと起きて雪院へもち行きすてゝけり。かくて夜もあけ下帯を尋ぬるになし。靜に案じみれば、昨日の晩風呂に入り、たづなをすすぎしぼり、袂に入れもち忘れたるを、何ぞと思ひ、氣遣しあげくに捨てける可笑さよ。

あちこちやりたる互の心をば何とおぼしめすや。

玄旨法印云はく、南都よりのぼらせ給ふに、山城の井手の玉水にて人下帯を垣にかけおき、水をあびける時、

山城の井手の下帯手にはづしあらふ○○○の玉がはの水

○繼母にそへる子あり。彼子をなづけて人の問ふ。なにと今の母はいたいけにはごくむ

錢にちがうて使ひにくさにと。

○知音の中に小姓の名を錢とつけて呼ぶ。其故はつかひよいといふ事ぞ。とくと聞いて戻り、又つかふ小姓を錢とつくる。始の人何とて一つ名を付けられけるぞや。そなたの汁なり。右のやうすを申されて、大笑ひありしなり。

紫式部

錢なうて戀する人のをかしさよ死ぬるとあはじ何の便に

右歌の心しりたるかたへ尋ぬべし。面のごとくにてはなけな。

○庄官たる者堤の祈禱とて發句をし、百韻興行の後、宗養のもとに遣はし點をこひければ、九十九句に點かゝり、發句ばかりになし。扨はいづれもかたの如く出來たる物よと思ひ、態と出立ち行き、尋ね聞くに、いやてんにはあらず、一句にてもよしと思はぬより、皆消したるなり。發句はよきかや。さればとよ、今の發句きれ字なし、常ならば沙汰の外なるべけれど、堤のためにせめてならんと、こればかりに、棒をあびせぬと申されし。

○法談は過ぎても、終に座をたゝぬ男ありき。道心者の老したるが、あながちにかんじ

ものぢや―慶安本により加ふ

人は平家の始ると、其まゝたちて一人もないにと。

○おどけ者天王寺の石の鳥居を見、我は此鳥居を造作もなくきりおとさんといふ。そばにある者なにとしてきり落さるゝ物ぞやと爭ふ時、件の男鳥居の上に上り、笠木を馬のりにして居けり。はやくきりおとせといふ時、則ち腰より錐をぬき出しておとしたり。取りて見れば、四つめ錐なり。これはと言へば、さればこそ石の鳥居を錐おとさうというたはと。

○文の上書に平林とあり。通る出家に讀ませたれば、平林か平林か、平林か平林か、一八十に木々か、其にでなくば、平林かと、これほどこまかに讀みてあれども、平林といふ名字はよみあたらず。とかく推にはなにもならぬものぢや。

○備前の國岡山に、そこにべといふ魚あり。餘國にまれなり。太守浮田直家より藝州小早川隆景備中笠岡の城におはしける時、彼魚を送らるゝ。隆景、侍に仰せ、夜中に備前よりそこにべが來たほどに、家老の衆に今朝ふるまふべきよし申せとあれば、かせ者まはりて、備前より今夜そこにべ殿お越にて候、今朝ふるまひあり、出仕あれとぞ申しける。各慇懃に出立ち參らるゝに、客とてはなし。出たる膳部を見れば、そこにべの

平家—平家
琵琶

くとまりたるを、さては今日の句よく〳〵出來けるよと得心し、宗長にむかつて手をおさへ、何と聞え參らせたかと申したるに、中々聞えたとあり。程經て又一句出し、其句もとまりたるまゝちと慢じ、又手をつき、なにと聞え參らせたかといふ時に、宗長きこえた、そこから爰までは聞えたと。

○和泉の堺に森河といふ太鼓打あり。又餅をつかせて商ふ。神事能の時がくやより太鼓を持ちて橋懸に出でたるを、人々見るとひとしく、あれこそかくれもない上手よと、土民のやうなる者ども指さす。さては我太鼓はよく人のほむるぞと思ひくすみ居たる所へ、又一人老たる百姓の來り見、あれこそいかい餅の上手よと申した。

○京より北國へ嫁入りしたる女房のありつるが、如何にも心こはき夫に添ひ、兼て母儀の方への便に、

打たのむ人の心のあらち山越路くやしき旅にもあるかな

○和泉の堺市の町に、金城とて平家の下手あり。正月初參會に出でて、祝義を申さんやと伺ふ。尤よからんとあり。琵琶を調べけるに、座敷靜まりたれば、我平家を眞にかまへ、皆人よくきかるゝぞと思ひ長々と語る。役人出でて、もはや平家をお止めあれ、

れしをこきんと呼ぶ。客聞き、是はめづらしや、此名の心を案ずるに、いにしへも今も若衆道にはあるまいといふ儀にや、いろ〳〵心をつけあんじけるが、師の坊にむかひ、こきんとは如何なる仔細ありてつけたまへると問うたれば、しばらく其いはれをかくす。籬の内の梅が香は、つゝむに色もいやまさり、猶奥ふかくおもひなし、頻に意趣を尋ねし時、院主の御坊さゝやきていはれけるこそうたてけれ。あの子が親はけしからぬ大きんにてありつるが、あれは又引替へ、きんが如何にも小ささに、こきんとつけて候と。

師匠の智惠ちやつよりも淺や。

○和州にくらが峠といふ彼山の頂に茶屋あり。根來衆とて少人を誘引し、參宮の時、茶屋の亭をあなどり、一向下輩にあひしらひしが、遺恨にや思ひけん、

山城の木幡の里の馬もがな

くらがたうけを君に任せん

水と草とのさかひ知られず

板たゝく馬屋の長の目は覺めて

○月次の會あり。宗長のおはしける其席の末座に、弟子たる人句を出しぬ。さしあひな

ふるぐすねふるぐすねとありし言葉は、なんといふ事ぞやと尋ぬるに、いやたゞふるぐすねはつかぬ物なるまゝ、連歌のつかぬ句あるを、我は申して候と。

日比の推量かたそばであつた。

○情ふかき兒のもとへ、折々かよふ僧ありし。暮におよびそと來れり。兒にこやかに夏衣よくこそとあれば、その言葉を聞くとひとしく、ふいと立ちて行く。兒の方より人をつかはし、まづ歸られよと呼もどすに、僧立かへりぬ。何とて物もいはずいなれしや。夏衣と始めておほせられしまゝ罷出で候ひき。いかなればと問はる。されば新古今に、

素性法師

惜め共とまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

とも候、此趣存知あはせてなりと、なくなく申されければ、兒聞きて、なかなかの事なり、

なつ衣ひとへにわれは思へども人の心にうらやあるらん

といふ本歌にていひつる物をとあるにぞ、僧忝しとも。

○物事心がけある人、山寺に行き、一夜二夜とまる事あり。少人の内みめざま世にすぐ

たらば、如何ばかり嬉しかるべきが、若し又もいきかへられたらば、其時の心うさ如何あらんやと、思ひやられてさへ泣くなりとぞ。

○宗祇有馬の湯に入りておはしけるに、人々よりあひ、歌など詠みあそびしが、爰に居らるゝ旅の僧も、若し思ひよりたる事あらば、いうても見給へと、傍若無人の作法なりし時、

　音に聞く有馬の出湯は薬にてこしをれ歌の集りぞする

○坊主同宿をつれて邏齋に出し。齋料に布施をつゝみ、童子にもたせ、坊主の前に置き、是は百文あり。後に亭主廿疋つゝみけるを持ちて出で、同宿が前に置く。坊主あら不審や、前後失念にてこそあらめと、歸寺の上に同宿にむかひ、我がをそちへやり、手前のをば此方へ取らんといふ。同宿難儀なるふりをするに、いよ／＼ほしく思ひ、我が分を投げ出し、彼二百文つゝみをとりあげて見れば、らふそく二挺ありけり。

○京より連歌の上手とて因州鳥取に下り、宗匠をせられしが、人の句を出せばあなおもしろき取合はせや、流石ふるぐすねやと感じけり。かくて三年の後歸洛せらる。指南をうけたる人々はなむけに門送りし、酒の盃めぐるひまに、たもとをひかへ、此年月

をつけ川を渡るに、中程にてだうど臥したり。買主氣をそこなひ、ばくらうが許に來り、存分をいひけるに、さればこそ川は鵜ぢやと申したは、鵜といふ鳥の、水を見て入らぬやあらん。

○久我繩手を葦毛馬鹿毛河原毛の三匹に荷を負せて行くに、宗長後や先やとあゆまれし。馬追ふ者のいひけるは、お坊主何か知り給ひたる。歌道に心がくる由あれば、其儀ならば此馬三匹を、おもしろく歌によまれよかし。

雨ふれは道あしげなる久我繩手日影に去ば末はかはらけ

○一休伊勢の淺間にしばらく住山ありし。常ならぬ人の樣に沙汰しあへり。山田の宿老たる人、親の志をつとむる時、齋をまゐらせけるに、白衣にて渡らせ給ふ。見るから驚き、これはいな者や、不思議の風情なるかなと、さゝやきぬるを聞きて、齋をはりに硯と紙を乞ふ。

きたりとよこゝろの內の墨染を世渡り衣うへにこそきね

○如何にもきつき姑の死したる時、嫁歎き、涙を流すことかぎりなし。さても奇特や常は中も惡きよし聞きつるにと、人々云ひ感じければ、さればとよ、此まゝにて死なれ

秋風とぞつけける—一本「秋風とつくる」
秋風心に—一本「かの弟子心に」

○我身を謙りなにはにつけ卑下する人、或時馬の庭乗しけるに、ふとく逞しく足きいてなど、人みなほめければ、いやおの〳〵御覧ぜらるゝ、かた腹は肥えて候へども、御目のまるらぬ影のかたはらは、一圓痩せて候と。

　曾我の十郎の馬なりと、片身さかうては痩せまいの。

○一天に雲盡きて、星まん〳〵と耀く夜、あたりの友を誘ひ、端居して慰む、口すさびに、明星ほど大なる星は、はてしもなうあるはといふ。じても我が屋根の上のは小いと。

推はちがうた

○洛陽に一嘯とて、名を得たる笛吹あり。弟子の無器用なるに名を秋風とぞつけける。秋風心に思ふやう、秋風は物にあふといふ縁あり、我笛を褒美してつけられけるこそ忝けれと、自慢かぎりなき折ふし、同學の者一嘯に問ふ。秋風とはなんの故につけ給ふぞや。別に我は所存なし、秋風はふく程あしき物なり。彼が笛も吹く程わるいほどにと。

○ばくらうの許にて馬を買ふ。眼爪髪鞍下其外そろうたるとほむる時、川渡りはよきかと問ふ。中々の事、川は鵜ぢや。目出度しとてわめき戻りしが、十日ばかり過ぎ、荷

〇義經東國下向の時、一夜の宿をかられけり。辨慶あるじの女房に、子はいくたり候ぞと問へば、てゝの子六人母の子六人、あはせて九人候とこたへしを、何とも當座にあたらず、明の日も案ずるとて辨慶道を七里あゆみおくれたるとなん。これはてゝに始めの腹の子三人あり。母にも始の夫の子三人あり。今夫妻の中に三人出來たり。てゝに別けてみれば六人、母に別けて見れは六人、されどもきはまりは九人。

子は九人あるといはいで。

〇僧俗呼びあはせ、いんぎんに齋をしてんげり。老僧だんなに向つて、今朝の追善は、六親の内誰人のため候やと問ふ時、妹聟の舅の日なり。

唯親の日といはいで。

〇はづかしき客あり。振舞なかばに酒を取りて來れとありしかば、千代といふ下司、調子だかに、かみさま錢五十が酒をか、百が酒をかと問ふ。興さめければ、そと呼び寄せ、人のある處にて、今のやうにはいはぬものぞと叱られしが、或時五つ六つなる惣領の子とりはづし井にはまる。件の千代しづかに歩みより、耳のもとに口をよせ、人の聞かぬやうに、わかうさまの井戸へおちあつたと。

と書きたれば、返事に、

わかめ得て古めを内に置ならばふため狂と人やいはまし

詮ない祕密

○田夫畠をうつをりふし、隣郷の百姓とほりあはせ、これはなにを蒔くぞといふに、彼はたうちこてまねきし、あ聲が高い、ひきう〳〵といふ。さては世にまれなるから物のたねをも植うるにやと思ひ、心得たりと近くよりたれば、いかにもおのれが調子をひきく、大豆を蒔く、鳩が聞くほどに。

○二郎大夫といふ百姓夫婦ともにつれ、河内の國今田の市にたつ。人多くあつまりたる中にて、知人に行逢つたり。さても二郎大夫はといふに、其まゝ返答におよばずはしり寄り、そゝと物をいうて給はれ。誰そにかくるゝか。いやむすこを内にねさせて來たが、若し聲の高きに目がさめずらうと。

○市にて物をひろふといふ題にて、

事出でて打やうたちのつば音に拾ひものこそわが命なれ

なりふし―慶安本四字なし
から―慶安本により補ふ

迷惑の―慶安本三字なし

だいかい―食器

心經―般若心經

ば、此後もあの隣りのいたづら男のやうに、身をもつなといふ事よ。迷惑の。

○おかたの方より、紅梅が使に參りたるよしいひあげけるに、何事ぞ。いやちと物の講をむすびたまふが、こなたへも人數に入り給はんかとの儀に候。きやうこつや、これ程忙がはしくいろ〳〵なるに、何の講ぞとあれば、別の仔細にあらず、悋氣講をおかたの大將にて、たれ〳〵結ばるゝと語るにこそ、悋氣講ならば我も二人まへまじらうぞと。

○武士たる人若衆と知音せられけるを、殊の外に嫉み妬み、ある時上﨟堪へ兼ね、表へ走出でいはるゝやう、やれそこな若衆めよ、もはや其儘これの家主になれ、明日からおだいかいを渡さうぞと。

○貧なる僧の打ほれて知音する若衆に、大名の執心せられ、定家の色紙を出されたれば、坊主もまけじとおもひ、弘法大師の筆といふなる心經をやりぬ。重ねて大名より刀脇差を金づくりにして送られしを見て、坊主の詠める、

　なに事も人にまけじと思へども金刀に手をぞつきける

○老人のもとへ器のふたに、紙をおして

　若和布をやるぞ慰にせよ

修羅をたつる一憤を發す

こし帝には三千の后あり。夕になれば羊の車にめされ、彼が行留る局の前に下りさせ給ひ、比翼連理のかたらひあり。されば羊は篠をこのみて食す、我がもとにやとゞまらんと、各局のまへに篠をうゑぬはなし。竹葉羊車過二別院一、今宵空聽半夜鐘と作りし詩は此古事にてありけり。されば君恩をうくる事、わづか其篠の一夜をかぎりにて、二夜とあはぬ中だにも、名殘は思ふ習あり。まして老らくの腰に梓の弓をはるまで添馴し中なれば、ねて思ひおきてあこがれ、袖は涙に朽ちはてゝ、つかの間もはやく終り、一つはちすの緣を結ばん事をのみ、くどきばかりに歎きけるを、隣の者をかしがりて、ふとうばがもとに行き、此程はひさしや、善光寺へ參り祖父にあうて候は。さていかなる有樣やといふ。其事よ、三途河の姥と夫婦になり、やくたいもなき浮世ぐるひやといふ。姥忽ちに氣色かはり、杖を持ちて十王堂に走り、あら憎の、うばが人の男を取りたるやと、木につくりたる形をさへたゝきて、恨み〳〵てたゝきごとは。

○夜半のころ、隣にいさかふ聲しけり。何事にやと夫婦ながら起きて聞き居たれば、男の徒なるによりおこりたる、悋氣いさかひの修羅をたつるなり。聞き居たる女房何の理も非もなく、夫のあたまを續けばりにはりけり。夫これはなんといふ狂亂ぞといへ

こひするに佛となると聞かませば我や淨土の主ならまし

○東にて都の若き商人と、其宿なる中居の女房に相馴れ、此頃むつまじくたはぶれ、男三味線をひきおもしろく興ぜしも、ほどなうかへる頃になりぬ。女やるかたなく名殘を惜むあはれさに、何をがなとて、一しゆの三味線をつかはし立別れんとするに、女、

片身とて緒付板をばさつくれてけさ行べいか味氣なの身や

○七十に近き姥あり。にあひたる者の方へ嫁入する。孫なる童牛にのせて行く道に、さはる荷物のあるを見て、彼孫牛に聲をかけ、のいて通れといひけり。姥これを聞き、そうて通れといはんこそ本意ならめ、のいては不吉なり、いや〳〵今日はゆくまいと、嫁入をやめけるも興あり。

悋氣

二人ねて見るとも船は狹からじ
夢をのせじとあらき波かな

○夫婦諸しらがまでそひたりし、祖父先にたち、朝一片の雲と上る。篠の一夜とてもろ

ちちくはい—鶉の鳴聲

○亭主の心に女房はよく寐入たるやと思ひ、二階に候下司のもとへそと忍びたれば、妻はよく知りて、火をとぼし後よりあがる。男きる物をかぶり、座敷の隅にうつぶしになりかゞみけるを、あまりの可笑さに、女房此なりは、其まゝ鶉のやうにといひしを、男ことばはなくてちちくはいと。

　づにはづれた鶉であらうよ。

その道—男女の道

○此方の宮法師殿、昨日花の本の一ふしは、何にくらべんやうもなや、耳をそばたてゝ聞く人ほめぬはなしと語る。母上宮法師は、何としてそのやうに聲はよく立つぞやと、ひとりごとを云へり。親ぢや人ほそ聲に、未だその道がなさといはれける時、そのかたがなうて聲のよくば、そなたが聲は伽陵頻ほどたゝん事よと。

○時宗の寺に長阿彌といふ喝食あり。やるせなく執心するもの言寄らん便もなきに、一首我が代りによみて給べ、送りたやと賴みければ、

　あぢきなき長阿彌陀ぶの決定は往生よりも望みなりけり

○赤根のうらに、島の表の小袖きたる若衆を見て、

　ほのぼのと赤根の小袖ひつかさね島隱れ行く尻をしぞ思ふ

語りつるが、でびたひにむかうば高く、そり鼻はひらめにて、頰先尖りたる女房の、内そとありくあり。あれは下司にてぞあるらんと、くはしく問ひければ、あれこそわが本妻といふに驚き、こは何の因果に、あれていの者にはそふ事やと笑ひければ、何事をいはるゝぞ、おちくちには目が見えなんだ。

○京の町を氣力の毒かはう〳〵というて歩く男の姿を見れば、如何にもやせ衰へ、いろせう〳〵と勞瘵氣なり。可笑きものに思ひ、或所へ藥をうらんと呼入れ、そなたの風情には、違うたる望なりと問ふ時、さる事あり、我等はそなたの御覽ずるにまぎれなし、某つれたる女どもの氣力あまりよく候まゝ、一服のませたうて尋ぬるとぞ申しける。

○老母老父と成人の男子三人一所にあり。さらでだにいぶせきはいりの小屋、春雨すさぶ永日なれば、暮しかねたるつれ〴〵に、老父むすこに向ひ、俳諧をして遊ばんものをといふに、男子尤と同じ發句をする。

てゝぢや者はゝぢやが者に打迷ひ

老父さらば附けんと、

それにつけてぞおのれできける

勞瘵—肺病

はいり—「はにふ」の誤なるべし

夫ー課役の人夫、守護不入の地は課役なる地
前栽ー植込み
かんばうだふれー妻をこわがる奴

人はたゞ十二三より十五六盛り過ぐれば花に山風

○治部卿が兒の手を取り、いろ〳〵さま〴〵に詞を盡せど、ゆめばかりも領掌せず。あげくに兒の利口こそ可笑けれ。われがしりは守護不入なりと。時に治部卿、にくさのまゝの返答に、それ程結構さうにな宣ひそ、守護不入のところから、さい〳〵夫のでたを、われがよく聞き參らせたぞと。

戀のみち

○妻夫いさかふ事あり。女房心たけく夫をうたんと杖をあげけるに、驚きつゝ前栽に飛下りにけ、山椒の木の下に隱れぬるを、妻緣の上よりいふ、いかほど逃ぐる所もかゞむ所もあらうずに、あのかんばうだふれが、山椒の木の根にかゞみ事はと叱られ、男ふるふ慄ふ、いや山椒の木ばかりではをりない、山の芋のつるの候に、とり付いて居まゐらすると申せし事のあはれさよ。

山いもは脊にも苦しからず、本草をよく見給へ。

○僧の落墮して居けるを、よしみある人なつかしく、見參のために尋ね寄る。越し方を

せいがいつて—盡力して

る人に、三十一字のさまを問ふ。それ歌には六儀あり、風、賦、比、興、雅、頌これなり、言葉のえんは、梅や櫻の花によそへ、思ひの色をいひつらね、とまりには、らんの、けりの、かなのと、それ〴〵に置く習ありと敎ふるに、造作もなく得心のぶりにて、其暮に詠みて遣はしたる。

　梅の花櫻の花に鷄頭花千松戀しなるらんけりかな

○子を置きたれば、それにたより、親さい〳〵寺に行く。僧衆よりあひては、それがにやけ、これがにやけと語るを聞いて、子息に何とやうなる物をにやけとはいふと問ふ。にやけとは、酒をいふと。宿に歸り妻にむかひ、兎角子たらんをば、人中に置かいでは物を知らぬぞよ、酒をにやけといふ事を敎へたはと語る。今度むすこ里にくだり、長々居ければ、寺より中間迎に來る。かの家幸酒屋なり。母の見て、やれあの使に、まづにやけのみをなりと食せよと。

○若き僧一夜の宿をかりけるに、十一二歳なる少人、同じ座敷に寐たるが、何事やありけん、亥の時許に、母よ〳〵尻に火が付いたはと頻に呼はる。あら悲しやと急ぎふためき、火をもち來り見て、大事もないぞ、お坊主樣のせいがいつて消して給はつたは。

こえだし―尻

にもれやすく、そばのかけはし及ばぬも、思ひを志賀の浦浪に、よせぬ人こそなかりけれ。かゝる折しも情なや、花に嵐のそふもげに、これかや梅千代やまひづき、一まづ里にくだりしを、涙とともに訪ふ人あれば、かたかしらなる親出でて、いひぬる時宜のうたてさよ。これの子息はこえだしに、はれものあれど大事ない。

御親父の時宜に戀がさめた。

○幸菊といふ一人子を寺にのほせ、物習はせけるが、久しく逢はぬなつかしさに、親雜餉をかまへ師のもとに行く。若き坊主の幸菊に向ひ、小穴々々といふ。又よの人も小穴と呼ぶ。そも奇異の言葉やと思ひ、近づきて問ひければ、これも此寺に下戸のから名を小穴といふと答ふ。さもあらんと合點し、重ねて夫婦つれだち、寺に參りし時、女房に酒をしひぬれば、よく知りたる顏に、彼親いふ、我等は一圓の小穴にて候、子もちはちと廣穴なり、しひたまへと申した。

○若道にはうとく／＼しく、歌道にはたど／＼し、文章にはくらし。かくてもよき若衆に千松といへるあり。かれにうちほれ執心あり。いかゞたよりていひよらんや。昔より歌は鬼神のおそろしき心をも和らぐる道とあれば、是なんしるべに思ひたち、其道しりた

ませの内―垣の内

と云はるる時、彼坊主一つは御膳に候と存ずれば、何とやなつかしさに、又はつねよりもよくなるが面白さにと申したり。兒腹を立て、なるが面白くば鐵炮をくはれよと。

若道不知

○久松といふ子を山寺に上せ置きたり。親見舞とて寺に到り、一夜の程泊りたるに、久松に寄添ふ老僧も若きも、すばり〳〵といふもあり、あかすばりといふ人もあり。彼親父一圓此道にうとし。不審はれぬまゝ、そと子息に尋ねけり。久松さかしく、此寺の習に、下戸をばすばりといふてせらるると語る。親聞き、實も〳〵、下戸は酒にあうてから、口がすばる程にとて、大に同心したり。或時夫婦つれだち寺に來る。振舞あり。酒の砌、後見の法師出で、久松殿母儀は、一つまゐらぬやと問ひければ、男のいふ、私は御存知の如くすぼりでは御座ない、女どもは、一圓のあかすばりにて候と申した。

よしくもれくもらば月の名や立ん我が身一人の秋ならばこそ

よしすばれすばらば若衆名や立ん我身一人のすきならばこそ

○紀州根來の岩室に、梅千代とかやいふ若衆、かたちをませの内にかくせど、其名は外

○まこと侘しき親をもちたる兒のありつるを、小師の坊あはれみて、是のお兒はおいとしやな、里が無力なれば、ちともはれがましき事といふには、何かおりめされぬ物はない、おぬしの物とては唯一いろある、しどばかりぢやのといひける時、いやそれも人が見ては、お兒のしどにはころ過ぎた、そなたのではあるまいといふ程に、あこが物ともはぬと。

○豆腐二三ちやうを田樂にせしが、人多なり。いざむづかしき三字はねたることを云ひて食はんと議せり。雲林院根元丹せんさんびん、さま〴〵いひつゝ取りて、みなになるまゝ、小兒たへかねて茶うんすんといひさまに、二つ三つとり事は。

○兒を呼びて伽の人など集め、振舞を出し酒宴の後、あまりに酔ひいねぶる間に、兒はかへりて見えず。夜明けて彼亭坊より兒へ、

待宵のふけ行くまゝの眠たさに兒の歸るさしりもせぬかな

兒より返歌、

歸るさをしられぬ事のうれしさよしりしられては物憂るべし

○兒の膳にかうの物のあるを、脇に居たる僧とりて食ふ。兒我祕藏に思うて置きたるを

○或時兒茗荷のあへ物をひたもの食せらるゝに、中將見て、それは周梨盤特が塚より生じて鈍根草といへば、學問など心掛くる人の、くふべき事にてはなしといましめける時、兒なか〳〵の事や、是は鈍になり、物をわするゝ草よのう、但しうそであらう、其仔細は、三年後にこの如くあへたる茗荷をくうてあつたが、今にそのうまさをば忘れぬほどに、食うたがましよと。

○山の大坊の猪の子の餅をつく、あまり人多し。兒たちは寐ていらるゝあたまに、一つづつ置きて通れと三位が下知するを、小兒聞きつけ、其まゝ居直り、頭を下になし、尻を立て居けり。餅くばるものそこつにさぐり、二つ置きてとほりぬ。

　じきにせばしゝにやならん猪の子餅

○兒を請じて、夜衣に新らしき紙の衾を出しきせぬるまゝ、兒の詠める、

　おそろしや思ふ中をもさけつべし夜の衾のなるかみの音

○貧々と世をふる僧の思ひに堪へかね、兒を請じ、大唐米の飯を出せり。是は珍らしきものやなどとほむる人もありけり。亭坊のいはるゝやう、せめての御馳走と米をそめさせたるとあれば、彼兒箸をもちなほし、さうかして大唐めしのやうなと。

きにげ—未詳

へ、そのやうに不得心な風情、影より人の見る目をもかへりみ給へとて、箸を二膳とり來り、一膳を渡し、大兒役にそなはた二粒づつおまゐれ、我は小兒役に、一粒づつ給はらんといふ。はさむに、大兒はともすればはさみはづし、小兒の矢さきはづれず、ほしりほしりと當りし事よ。

〇延暦寺にて下法師山へ行く時、兒にいふ、晝の飯をば棚に置きたり、九つなりてあらば、まゐれと敎へぬ。彼下僧案の外常より早く晝以前にしまひて、かへりみれば兒の飯なし。是は不審やと問ふ。疾く早くうたと返事せらるゝ。いまだ九つはならず、いかでかと申せば、いや今朝五つ前に四つうちたれば、九つなつた程にそれにくうたはと。

〇大兒と小兒と二人居て、菓子に出たるくし柿を賞翫あるに、大兒のは數少く、小兒のは多し。大兒同じやうにくふ柿の、そなたのは何とてはかゞゆく、我れがはいかなれば數が少きぞや。小兒の返事に、其方のは欲がきれぬ故に遲し。我は無欲なるまゝはかがゆくとあり。大兒重ねて、欲とはなんぞ。小兒敎へていへるやう、柿には核といふくせものありて、きにげをせんとする、それにかまひ、とかくする間費あり。其欲をさへきらせば、必ず物數をくふ德あり。

命にかへてをしきものかな

又膳にみな〳〵箸を置きたるに、鶴千代ばかり遲くおかるゝを、三位にらめば、

唯いつ迄もあかぬものかな

と、さても色をかへて、其折其時に合ふやうにとこそ指南したりしを、かりそめ坐りたる一膳の始中終に盡されし。無興々々。

○ある座敷にて、兒のとろゝ汁の再進を、ひたもの受けらるゝ時、三位目をひき睨みければ、兒、あごにさのみ科はないぞや、唯とろゝを睨め。

○老僧、小僧、兒、若衆云合はせて、隨意講のまはしはじまれり。ある席にて、兒汁の椀に酒をうけられたり。後見の法師目をきつと見出しければ、兒顏をおさへ、南無三寶隨意講はやぶれたよ。

○大兒のいへるやう、あの三上山が飯ならば、何とあらうのとありしに、小兒端的の返答に、湖がとろゝ汁ならばねらはれもせんやと。

○ある法師のもとより、二人おはして遊ばるゝ兒のもとへ、座禪大豆を少し送りたりし事あり。大兒嬉しげに手を出し、憚らずつかまんとしけるを、小兒ちやくと手をとら

再進—おかはり

端的—卽時

汁—慶安本なし

そとは—少しは

この程は誂へ鍋の多くしていられたもありいられぬもあり

○三井の寺にて、鶴千代といふ兒、三位にむき、隣の松若殿はあのやうに、そこ〳〵にて歌を詠るもけなりや、如何やうにも指南を受けて、そとは此道を心得たき事やなど語れるを、深切に思ひ、さらば其時のえんにより、いうてしほらしき句を教へ申さん、まづあひたや戀しやと思ひ給ふ人に逢うた折には、

待ちかねぬるに今ぞ嬉しき

又花など見て歸り給はん時は、

命にかへてをしきわかれぢ

又語りたやと思ふ人に別るゝ時は、

唯何時迄もあかぬものかな

鶴千代これを習ひすまして覺え居たるが、正月の祝に、はれなる座敷へ燗をすうるに、人より早く箸をとり上げける。三位にらめば、

まちかねぬるに今ぞ嬉しき

といへり。又芋をあしつけの上へおとし、挾みかぬるを見、三位にらめば、

し、暇ごひまでもなく、遁げて歸り、靜に火をとぼし見れば、麥飯にてぞ候ひける。

　ふたしなみなお兒のありさまや。

○大兒と小兒との前にて、小兒の年はいくつぞや。あこはみをつくしといふ。しほらしの答や、源氏によそへ十四よの。さて大兒はいくつぞやと問はれ、我はささげぢや、それは何事ぞ。ことし十八なると云はれた。

○兒にかくして坊主餅を燒き、二つに分け、兩の手に持ち食せんとする處へ、人の足音するを聞き、疊のへりを上げ、あわてゝ半分をかくすに、はや兒見附けたり。坊主赤面しながら、今程の有樣をおもしろく歌に詠みたらば、振舞はんといふに、

　山寺の疊のへりは雲なれやかたわれ月のいるをかくして

○比叡の山へ侍の子と、鍋屋の子と登山し、一つ寺に兒となりて居たり。或時煮豆を菓子に出したるが、よくいりたると生煮なると混りたりし。坊主面白き出來やうなり。これを一首づつ案ぜよとあるに、侍の子息、

　奥山に狩場の鹿は多くしていられたもありいられぬもあり

鍋屋のむすこ

○山寺に兒や法師まじはり、いろ〳〵の物語するついでに、正月ある事は五月必ず有るとなれば、萬を祝ひもつゝしみもせん物ぞと語る人ありしに、兒さては正月ある事は五月もあるよなう、あこは左右は思はぬ、正月は餅をさい〳〵見れもし食ひもしたが、五月の今日は、二十八日になれど、餅とては一つも見ぬほどにと。

○三位が物相と兒の物相と、同じ飯臺にするならべて置きたれば、よく〳〵徒然のあまりにや、三位が飯をもとりて食れけり。後三位來り食せんとするに無し。これは不思議なり、別にくふべき人はなきにと、穿鑿しける時、兒の云へるやう、汁かと思うて添へてくうたはと。

○兒はいくつぞと人の問うてあれば、年は十三になれど、御器は始めからのぢやと。

○齋の座敷にて、三位兒の膳に近寄り、ほしもなくと、むりに飯を澤山におまゐれと指南しければ、兒箸を持ちながら、ひたもの泣く。側に居る兒、何とてさやうに候やと尋ねしかば、飯をしひてくへといふ程に泣くと。三位が心附にてはなきかや。いや非時をくれまいといふ事であらうずと。

○兒といねたるに、法師口をすふとて如何ありけん、齒を一つすひ拔きたり。肝をつぶ

みをひき、米をしろめてつきうすや、誰もしるこの餅の音、きねの神垣へだてなく、なみ居て是を賞翫す。笑止は兒の餅にむせ、目口をはたけ悶ゆれば、父母は歎きに沈みつゝ、せん方涙なりつるに、山伏かけて通り合ふ。たのみて祈念するほどに、栗ほど餅が喉よりも、ひよつといづればいろなほり。心安さに兒のいふ、とても行者の奇特ならば、祈り出せし其餅を、ま一度祈り入れ給へ。

○大兒

大空にはゞかる程の餅もがないける一期にかぶり喰はん

小兒

大空にはゞからずとも餅もがな月のせいにて星の數ほど

○兒のとまりに來て、夜はやう〳〵更けゆけど、菓子をさへ出すよしもなければ、枕を取上げ、口にあて〳〵しけるを、そばなる者、それは何といふ事ぞや。わざといはうて齒に物をあてそむると。

○平清盛公大塔再興ありて參詣の時、恙なき齒を一つ手づから拔き、奥院に籠め給ひ、

高野山おろす嵐のこはくとも此のはは殘せ後の世のため

みのかさ―身の瘡、簑笠

腹は大鼓―滿腹の形容

村雨のふるとは見えで晴にけり其みのかさをそこに脱置け

本坊にかへれば、瘡みなあとなし。

○人ありて問ふ。兒の年はいくつになり給ふぞ。年はくしがきといへり。九四の十三はきこゆ。扨がきは。其事よ、いつも物がくひたらで、このやうにやせて居るほどに。

○七旬に餘る老僧、兒の數多ある中にて、同宿どもに、此十日も廿日も、一向食事がすすまぬ事よ。ひとへに是は年のより、困衰のしるしにやと語られければ、大兒申されたるこそ珍かなれ。今年はや十八になれど、ひだるさはまだやまぬと。

○大兒をたれ人の賞翫しけるにや、けしからぬ活計のありつると見え、いねて居ながら、あら苦しや〳〵といふを、小兒なにとて色となく、無病さうにはあるが、さほどに苦しいかや。唯食過ぎて身が熱するといへるにぞ、けなりやそのやうな煩ならば、われもちと持病にもちたいよ。

○大兒の小兒に向ひて、今日の腹はいかやうに候やと問はれける。返事に、腹は大鼓ぢやと。さてもよき事や、うらやましやとありければ、いや胴に皮がついて候よ。

○兒たまさかの里くだり、頃しも秋の半とて、民のかまどはにぎはへる。煙たつ田のも

○師が兒によりくロ說ければ、ともいへかくもいへいやなり、所詮昔そちが兒でありしを、わが思ひかけたるに、なびかなんだ故、今そちがいふになびかぬならん、報の程を思へとぞ。是非なうて過しつるも、ある時彼兒人なしとや思しけん、ちらと味噌をちとなめたるを、師が見つけて、一首、

むかし味噌兒をなめたる報にや今又兒になめらるゝみそ

○弘法大師入唐の時僧來て問ふ。如何なるか是しやうじ一大事。大師答へて云ふ、味噌よ味噌よ。

○報てふ事かろからじもの。

蚊遣たくけぶりに賤の先出て

月かくす山叉雪にうづもれて

○山門北谷に兒あり。惡瘡のいたはりに、根本中堂へ參籠す。七日滿ずれどもあへて効なし。うち恨みて、下向に短册を内陣へ投入れ參らせたり。

南無藥師衆病悉除の願ならば身より佛の名こそをしけれ

卽ち内に御聲ありて、

さる兒と見るより早く木に登る
やがて兒、
いぬのやうなる法師きたれば

○比叡山北谷持法坊に兒あまたあり。冬の夜豆腐一二ちやうをもとめ、田樂にする。老僧いひ出されけるは、各秀句をいうて食ふべしと。大兒やがて、われは佛のつぶりと申さん。みくしとりてのく。又ひとりは八日の佛とてやくしとりたり。後に小兒屏風のかげより出づるを見れば、髮をばつとみだし、たすきを掛け、左右の手にて目口をひろげ、われは鬼なり。皆くはうと、ありたけ取りたれば、詮方なさに坊主は古き手拭を頭にかぶり、手を指出し、乞食に參りた、一つあておもらかしあれと。

みくし—御首、三串
やくし—藥師、八串
おもらかし—御輿へ

老僧のはたらき三國一。

○兒より合ひのさんげに、大兒は虱がなく者ならば、いかばかり人中にて恥かしからうが、せめてなかぬで恥をかくすと。小兒は、いやわれは虱をなかせたい。其間なりとくはれいでくつろがう。
唯拈れそれこそそれよ唯拈れすはうの裏に綿がみはなし

鐃鈸銅鈸は音あつて香なし。栴檀香沈水香多摩羅跋香多伽羅香は香あつて音なし。昨夜のおならは香あり音あり。一段殊勝々々。

まぢかけれども知らず顔なる
秋を穂にこむる夏野の村すゝき　俊也

○貧々たる坊主の眠藏より、餅の半分あるをもちて兒にさし出す。請取りさまに、
十五夜のかたわれ月は未だ見ぬ
とありしに、師の坊、
雲にかくれてこればかりなり

○ふと人の來りて兒に向ひ、法印はいづくに渡り候ぞと尋ぬれば、護摩堂にかきして御座るは。かきとは何事ぞ。經陀羅尼をよみてといふ事よ。それをばかんきんとこそいふ物なれ、あこもそれ程の事は知りたれど、ひもじさに、かんともきんともはねられぬは。

○ある時宗長笠寺に參られし。坊中に立ちよれば、兒のありしが、ちらと木のそらに上るを見附け、
ひだるさと寒さと戀とくらぶれば恥しながらひだるさぞます

ひだるさ——慶安本歌なし

れば、嘉例のよきにあづくるよし。
○坊主餅を一つもちて出で、二つにわり、兒三人の中にて秀句を云うて食れよとあれば、小兒此餅は三日月で片割あるよといひ、やがて取りけり。次の兒はや月は山の端に入るよといひ取りてけり。大兒に向ひ、そなたは心なにとあるや。其事よ、月入りて後なれば、我胸はやみのやうなと。
○振舞のありし時、あふを稀とや、兒大に食を過し、起きて居るまでもかなはず、ひらに臥してうなり居けるを三位見附け、食胸になづんで苦しむには、大根をおろし其汁を飲めば胸くつろぐといふ。ちごに其よし言含めければ、近頃よからん、さりながら何たる薬にてもあれ、口へ入れんやうはなし。おろしてなりとそのまゝなりと。胸の上に置く了簡をしてたび候へと。
○兒を請じて謡うつ舞うつすれども、隣寮の坊主をけつく呼ばず、腹立千萬にて居けるに、誰人のとりはづしてやらん、そこつの音しけり。夜もあけば兒もかへらんとこそ思ひしに、さはなくゆる／＼ととじめ、朝食のあげくに、又さゝめきあへり。憎しとおもふ心やありけん、隣より呼びかけ、お座敷へ申し度ことの候。法華經に曰く、簫笛琴箜

れしを、我もちと其類火にあうて見たいよと。

餘義もないのぞみですよ。

○叡山の兒も三井寺の兒も、里にくだり居られけるが、折々出會ひ、他事なかりし。山にすむは三井をなつかしく、三井にすむは山をなつかしく思ひゐたりしが、或時たがひに懺悔物語するは、山は朝一合半、夕一合半のげぎやうなりと。三井は朝一合、晝は一合、夕は一合なれば、同事ぞやといふに、叡山の兒、三井のをうらやましといふ。いかなれば汁と湯とが德になるほどに、しるのついでに鮭といふ魚をとるには、必ず其時節約束あり。夜そと雨降りて明方に北風の吹きたる朝、澤山にあがる物といふ。夢庵の堺に御入ありつる時、濱邊に出入する者あり。折をたがへず參らせける。かくありつるにおそなはれば、讀みてつかはし給ふ。

夜の雨けさは北風ふくとうの汁のおとづれせぬぞあやしき

○兒里へくだる宵に侍從を賴めば、紙につゝみたる物を渡し、是は我が祕藏なりと。手本候や、いつくしき繪など候や。いや白箸なり、これは世にたくさんなる物に候。何とてさやうに重寶めさるゝぞ。仔細あり、此箸をすわりたる日、つゞけて五度物を食うた

餘義もない以下—慶安本なし
山—叡山
げぎやう—あてがひ

月を題にて以下―慶安本なし
かぶる―かぢる

しこきが起合せ、いかほどのすしも見たれど、これほど腹に飯のないすしをば見た事がないと。

○大兒と小兒と額をよせ合はせ、をかしき物語して遊ばれけるついで、大兒くちずさびに、餅はくふ時核がなうて、おもしろい物ぢやと有りしを、いや唯われは餅にさねがあれかしと思ふよ、植ゑておきてならせて喰ひたい。

○八月十五夜の月にむかひ、坊主あまたあつまり、兒もまじはり詠め居けるに、大兒、あれほどの餅を抱へて、そろ〳〵くはゞ面白からうのと呟きける時、小兒されば大さはあれ程でもよいが、あつさを知らぬと。

月を題にて　雄長老

圓かりしなりもかくるや天人の夜毎にかぶるもち月のはて

○今朝とくから北谷へ大兒のよばれておはしたるが、春の日の長きも、遊ぶ時には短くおぼゆるは、常のならひ、夢ばかりに事さり、夕陽西に入相のなる比、我すむ坊に歸り、起きて見つ寝てみつ、苦しさうにいたはられけるを、小兒見かね、そなたの煩ひは心地いかゞあると問はれし。唯けふのもてなしの餅を食過して、胸のやくるが苦しいといは

物相―かたにつめて打抜きたる飯

○年の暮になれば、家内上下の定器どもを、侍従誂らへんといふを聞いて、小兒かたはらに侍従をまねき、いはれけるやう、あこがをばいかにも御器を木うすに、そこをくりてひろう誂らへてと頼まれけるに、いやそれは飯をもりきりにする時よかるべし。此山のはいづれも〳〵物相にて候へば、うつは物の大小にはよらず候と、つぶさに語りければ、いやたゞあがいふ如くあつらへたまへ、自然粥といれぶつじ時があるはよのと。

此兒を代官にほしや。

○尾州に笠寺の觀音とて、人あまねく尊めり。昔この寺に兒あり。宗長 參詣の砌、

兒みんとさして來れば笠寺のへやの隅にぞひつ据ゑて置く

兒すだれの内より、

ひつすゑて晝はおけども瀟湘のよるの雨にはひらく笠寺

○三伏の暑き日に、坊主他行の事あり。夏の夜は宵ながら明けやすき月の、ふけても未だもどられねば、兒みなくたびれ、おびも解くや解かずにいねたる所へ、老僧歸り來りて、さて〳〵爰な子達がなりは、其儘すしをしたやうなはと申されける時、兒の内にか

醒睡笑 巻之六

兒の噂

○叡山西塔に、兒達よりあひて、思ひ〳〵の物語り時うつりしに、ひとりが言へるは、この若道といふ事は、昔たれがたくみ出したるぞやと、さも恨めしさうに、問はれけるを、この道は高野の大師弘法といふ人、これの御影堂に殊勝がほして居らるゝ坊主の、唐までありき廻り、かやうの難儀を仕出されたると語る者あり。なか〳〵憎くやと思ひしが、ある朝院主も同宿も留守なりしに、小法師が兒をよびて、此お佛餉をお大師へ參らせ給へとをしふる時、彼兒もちて行き、さあこれ食うてまつとなんぞたくめと。

○ふるまひの菜に、茗荷のさしみありしを、人有りて小兒にむかひ、是をば古へより今に到り、物讀みおぼえん事をたしなむほどの人は、皆どんごん草となづけ、物忘するとてくはぬよし申したれば、兒聞いて、あこはそれなら喰はう、くうてひだるさを忘れうと。

佛餉—佛に備ふる飯

どんごん草—鈍根草

ひものー檜物細工

○野人春のあたゝかなるに思ひたち、山家に行く、道に櫻の花莟みてありしを、老人杖にたすけられたるが休みゐたるに問ふ。是はなにといふ木ぞや。櫻の木といふと敎ふるついで、ひものやうにつかふなるかばとは、この木の皮ぞとよ、世にある人はおもしろがりて、此木をもてあそび、歌によみ、連歌にくふうめさるゝなり。歌とは何事ぞ。さればとよ五文字七文字に言葉をつゞけ、三十一字に心のいろをあらはすなどと、所まだら云ひ聞せければ、得堪へぬ物がたりやと、領掌のふりにて別れしが、五六日も過ぎ山より里にかへる時、見れば花みなみだれたり。こゝこそ申しどころよと。

いきしなにつぼうだ花がきしなにはゐじかつたりや桶とぢの花

會下僧ー禪寺の無役の僧

○關東より會下僧の上り京にすまれしが、ある町人と會合す。振舞過ぎて碁始まれり。僧の俗にむかひ、いざ〳〵よつてごろじらうと申さるゝ。俗すこしも合點ゆかぬふりなれば、見らうといふことだ。それも猶心得ぬ體なれば、汝愚なるかな、目前の境界にてあるはと。

ふかう―不孝、拭かう

○下京にかう〴〵風呂とてありし。此名はなにの仔細によぶぞやと不審しけり。さる事あり。ふかうにおよばぬといふ事なりと語れば、おもしろき事に思ひゐたりしが、さる處にて、この風呂のいはれいかゞなどいふを聞きて、それこそ知りたるしかない、ふくに及ばぬと申されし。

○大名のもとに能あり、人あまた見物に行く。内はつまり高壁のそとに居て、はやしの音ばかり聞く。ひるの過に芝居へくばる饅頭の外へおちたり。山ふかき奥にすむ者ども見附け、是はいな物や、唯今生れたけであたゝかな、天人の玉子であらうず。さらばあたゝめてかいをわらせうとて、綿につゝみ懐にもちありく。日をかさぬれば青くなるまゝ、天人の玉子ではない、むくりこくりが玉子にてあらうず、かいをわらぬ先に殺せと、かりまたにておそれ〴〵射きりたり。さればこそ申さぬか、中に黒血のかたまりが候は。

○年の比八つばかりなる小者、冬日の朝いかにも寒につかうまつるゆゑん、なが〴〵と下より上へひたもの云うて通る。心ある人不審に思ひ、今の者の行きとまる處をつけて見せければ、鎌田屋徳庵宿に入つて不出。

註

鈕—鍔の上下の際にて刀心に貫き鍔元を固むる金具

あたれと。

○しか〴〵人中へ出たる事もなき十四五なる小姓、給仕をするに金作の脇指さしたる人ばかりへ、しげく茶をはこびて、餘の方へ目も見かけず。末座の人かれが心を推し、我が脇指を一二寸ぬき、そこな若衆、此鈕にも茶をちと飲ませあれと。

○犬をすき飼ふ者あり、名を呼んで鳴子の露といふ。なにたる仔細にかくいふぞと人の問ふ事あれば、月にも闇にもほえかゝるまゝつけたり。陸奥の人ありて聞き、おもしろやと吟じ、我犬を鳴子の露とよぶ。其故を問へば、よく人にほえかゝり申すはと。

○山に兒三人あり。師の坊難題を出し歌をよませける。

小兒には　　擂糊木

宇治川のはしの柱のしげければすりこぎとほる槇の島ぶね

中兒には　　菜樣くらふ

鳰の湖なみそふ月のかげ見れば今宵ぞ秋の最なかなりけり

大兒には　　藤花

あら怖や藤の花くふだう龜があこが尻をもくじりたがるは

ふんぎやあ
たれー踏み
かきたれの

え、内に歸り客ある砌、小刀をもちひて常にいひをしへたる小者、竹若よ、思ひきやおもひきやと云ひしかば、おつと答へて、こづちを一つもちて出たり。これはと問ふに、此外になにも重い木はおりないと。

○飯後の湯出たるに、風味ことにかうばしく、大にすぐるゝなどほめけるを、女房聞きつけ嬉しげに、暖簾のひまより顔さし出し、お湯のかうばしき理りや、たき物をくべたほどにと。座にゐたるみな〳〵も、耳にしみてぞ感じける。中に一人うらやみ歸り妻にかたれば、それしきの事をば誰もいふべきものをとあざ笑ひぬ。ある時知音をよびならべ、飯の湯を以前のやうにとゝのへて出し、人々かうばしやとほめる時、女房はゞからず、お湯はかうばしからう、柴を三束くべた程にと。

○腰元に使はるゝをさなきが、あやまちに硯箱をふみ割たり。おつとのきつく叱らるゝ時、あるじ出て、やさしや硯箱なればぞ、ふみかいたれとありしを、其座に聞きたる男、かゝる花奢なる事やあらんと、わが妻にかたるに、いつにても、それ程のことばのえんはあらん物をと、かろ〴〵しげに言ひけるが、わざとにてはなくて、天然の怪我に、我が子硯箱を踏割りてけり。父にらみける時女房、やさしや硯箱なりやこそふんぎや

べく盃ー底に穴ある盃
しもにおかれぬー下に置れぬ、霜、下

酒は生得下戸なり、一口も咽喉へ入り候はず、只めしでならば飲みたう御ざあると。

○其身の分によりては恥ぢかはしき人の、ある時ていしゆ、七つ八つなる子息を呼んで鼻紙をこひけるに、かれ庭に行きわらを一筋とりて來る。親、それがいるものかと目をしければ、がてん〳〵、客人鼻紙の事の、それならばなんどにあると。

下主の文づかひや。

○堺にて故藥師院といふ醫者あり。客に對し、べく盃を出せり。院主興をもよほし、此盃の名をみづからたはぶれに夏菊とつけてこそ候へ、其故は、しもに置かれねばなりとかたられしを、其座にありし者殊の外に感じ、他席にてはなすやう、べく盃を夏菊とはげにもなり、したに置かれぬ程に。

○ある人とぎやに行きて遊びゐたれば、亭主、彦次郎々々々と呼ぶ。おつと云ひて出でたるに向ひ、思ひきや〳〵といふ。心得候とて小き砥石一つ持つて來る。此珍しの挨拶やと感じ、其意趣をたづぬれば、

思ひきやしぢの端書かきつめて百夜も同じ圓寐せんとは

とも詠めり、その言の葉のならひを、はし〳〵かたりし時、聞きたる人おもしろくおぼ

我ならで此ふる雨に誰かこん誰とは人をふりて待つかは

雨のついでに、惠心の僧都坂本にて法談ありつるに、一時かきくもり大雨ふりしきり、かり屋の板間あらくもり、聽衆立ちさわぎぬるを見給ひて、

昔より傳へてきくも今見るももり屋は法の障りなりけり

かく詠じ給ふに虛空に聲ありて、

もる雨にぬれても法をふかくきけ雲も涙を惜まざりけり

○山家に候婿が、市に出で用をとゝのへ、日の暮れてより、しうとのもとに立ち寄る。しうと、先づ洗足を參らせよとあれば、せんそくを夕めしの事と合點し、此方にてはやとくせんそくいたいたと。さらばあんどうをまるらせよといふ。是も行燈を知らねば、くひものの事やと思ひ、これはかゝるお時宜、あんどうを給はるほどならば、せんそくをこそたべうずれと。

油つきあんどんげなる光哉　春可

○屋根葺いかゞしたりけん、ふみはづして落ちたり。目をまはし忽ち死ぬる氣色なるまゝ、人々不憫がり、あいすを酒にて與へんと用意すれば、かの葺師息の下より言ふやう、

合點し—慶安本に依る一本「ぞんじ」

油つき以下—慶安本十四字無

てとめられ、二ぐはあしきとて戻されたと。

○質屋の娘嫁入りし、夫婦のなかもよかりしが、かりそめの事をも、九々の詞をはなさずつかふ。たまさかなる客のまへにても、とかく九々にて物をいふ。詮方もなきはづかしさに、かの女をばさりてけり。妻家をわかれ行くにも、猶をさなきよりいひ學びたれば、三四十二でよめいりし、四四十六で子をまうけ、四五二十にてさらるゝよと。

四四ならば十六つれて行くべきに九九にもるゝか獨走るは

あだばなは二九の十八さゝげかな

○聟入してよろこびの盃かずめぐりたるに、祖父出合ひ初對面の時、婿のいふやう、なにと下戸にて候やといひけるに、しうと、親である人は、堅糟にもゑはれ參らすると。

○手ならふ子供あまた候に、坊主ひるねの床より、雨は降るか降らぬかと問ふ時、田夫の子息見ていふ、こぬか雨がふり參らすると。坊主むくと起き、小雨ともきりあめともいはず、こぬか雨はくせ事やと、立ちながら腹を一つ踏みけり。あらいたや、みなしばらをくはせられた。

〇たそがれ時に、何の音とも知れず、はたくとなる。歌よむ人の子息は、たよく水鷄の聲にやあらん。侍の子息たりしは、物の具の音ならんと。農人の子は、麥うつ音であらうずと。

五月雨にかたつき麥を乾かねて宇治の里人宵ねをぞする

再進をもる人—給仕

〇山ふかく住むびんばふ人、くになかへ出でけるが、折ふし宿に客あり。麪子をふるまふに行きあひ、人なみ〳〵に膳をすわりても、更に合點ゆかねばくふべきやう茫然たり。唯座上を見あはするばかりなりし。再進をもる人にむかひ、此お名はなにと申すぞと問ふ。給仕我等が名をたづぬると思ひ、彌二郎と答ふ。すでに山にかへりにたる友とぞかたりける。今度彌二郎といふものを喰うたは。めづらしき事やとうらやみて過ぎしが、件の者ども二三人つれだち、ある市に出で素麪をほして置きたるを見つけ、あれよ〳〵、なま彌二郎があるは、ゆで彌二郎にしてくはせたいなと。

〇ぬしやの子息、手を書きならひて執筆をするあり。祈禱連歌よりもどりたるを、貴人のかたよりよび出し、會席など趣をたづね給へるに、誰は十句、それは八句とかたり、又其名は知らず、内あかの小袖きたる人、五ぐ出されてありつるうちを、三ぐはよしと

殿―慶安本なし

慶安本天の橋以下―三十七字无

○大和の傍に十市殿とて大名ありしが、世におちぶれ吉野のにじつかうにおはせし時、あたりの者共を振舞はんとふれらるゝやう、此いく幾日にたれ〳〵女中ともに渡り候へとなり。山がつのよりあひ、女中とは御器の事なるべし、牢人にてましませば、椀などもあるまじ、てんでに持ちて行けやといひつゝ、御器をわたしざまに、これは我等がはげ女中〳〵と申してさし出した。

二人静ににしづかうといふ正字を辨ぜず、いろ〳〵に書きたるあり。彼の瀧の東にある村を東川といひ、西にある在所を西川といひ、如此書くなり。

○堂前にふりたる松一木あり。老僧少人にたはぶれ、あの松は男松であらうか、妻松であらうか知れぬよ。歌よみの子息出で、妻松にてあらん、月のさはりになる程に。土民の子、いや男松にすうだ、あれほど松ふぐりのあるものを。

天のはしだてにて　　雄長老

橋立の松のふぐりも入海のなみもてぬらす文珠しりかな

○あきんどの持ちたる子を見て、これの息子はことしいくつぞや。親のいひける、あれはそらね十三というて定のね十二ぢやと。

い文字ぐさり―上にいの音ある詞をいくつ共續けゆく遊

つらにひが―恥かしくて頰に火をたく様也

はいで―山出し

がわるいよ、しかも米かみをくはせたはと。

○少人あつまりゐて、い文字ぐさりをかきけるに、菊千代丸いかきと讀みあはする。後見の法師少納言いひなほし、いがきの事の面白くかゝれたりと感じけるに、菊千代、こなた少納言殿は味噌こすいがきをさへえ知らいでと。うたてや、つらにひが。

○住吉ときく松原に、ときは文月七夕や、

おほせうれしき宮參り　おのづからなる手向草

そめ帷子のいろこがれ　花やかなりし少人たち

やすらふ影も物ふかく　知るも知らぬも浦の浪

心をよせてたちきけば　あな淺增やくちなはを

一つ見附て言けるやう　鰻にしたらば五十せう

かまぼこならば大板が　五枚あらうと程を差た

○酌をする者、酒をほかとこぼしたれば、亭主、その給仕は此ほどのはいでにて候ゆゑ、聊爾を仕つて候とあれば、かの酌ちくと手をつき、我等はいでては御座ない、伯父の馬にのりて參りたと申しけり。

大師講地藏講にもよばれねば月にふたゝびもの思ふかな

○京にてある武士と見えたるが、人らしく馬に乘りとほるに、坪の内より鞠をけいだしたれば、中間肝をつぶし、餓鬼め覺えたるぞといふまゝ、鑓を直しつかんとしけり。主見て、やれ誰が扶持人やら知らぬに怪我をするなと。

○手ならふ小姓四五人あり。坊主、けふは雨の内もの淋しきに、中絶えてといふ題にてこしをれ案ぜよとあれば、歌道を心がくる人の子、

梅は過ぎ櫻はおそし中絶えて花めづらしききさらぎの末

喝食のありしが、

釋迦は過ぎ彌勒はおそし中絶えて聞くぞ稀なる法の一聲

農夫の子、

早稻ば過ぎ晩稻はおそし中絶えて米めづらしき七月の比

○商人の子を寺に置きたれば、毎朝とく机にかゝより、いで店たさうやれといふ。師の坊主聞きかね。寺林に居るはなにの用ぞ、蓬生麻間、ためざるになほしと、よきを學び、惡きをなほさん爲にあらずやと、つらを一つはりけり。頬をかゝへ、あら痲おほせ

東堂—禪寺の役僧

くせはなほらぬ—慶安本に依補ふ

どこぞしらうとのやうにとしかる。何といふがよきぞと問ふ。鷹のおはらうまいといふがよい。

○和泉の堺車の町に、商人禪門になりたるありしが、貴人のさし給へる刀脇指にても、上臈若衆の小袖、おび、はかまにても、見るほどの物に代をさし直をつくる事、天然かれがすきなりき。時にあたりあさましかりしかば、常に崇敬せし東堂あり。そちにをしへん大事あり、聞かんや。なか〱と申す時、自今以後物のねをさすべからずとあれば、手を合せをがみ〱、さても忝き御意に候、唯今のお詞は百貫仕らうと存ずる。

くせはなほらぬ

○山の一院に兒三人あり。一人は公家にておはせし。坊主年に二度物思ふといふ題を出せり。

はるは花あきは紅葉の散るをみて年に二度物おもふかな

一人の小兒は侍にてありし。よるは二度物おもふといふ題なり。

宵は待ちあかつき人のかへるさに夜は二度もの思ふかな

いまひとりの兒は中方の子なり。月に二度物思ふといふ題にて、

せんさんびん―湯桶に似たる器、金屬にてつくろ。

いひやろ―飯、言

お臺―飯

○小者を語らひて若衆にもち懐きていねたるに、小夜中の比から〳〵と笑ふ。法師、なに事ぞ、今つきもない時のわらひやといふ。されば我木綿布子をしたてんと、うらおもてをば持ちてあり。綿の入れんがなきを思ひいだしたれば、をかしいと申した。

○山中の者里に出て、振舞に素麪あり。見始めなれば名を知らず。給仕せんさんびんに汁をもちつぐ時、此お名は何と申すぞと問ふに、せんさんびんと答ふ。其後は彼男、さうめんを見るたびせんさんびんのもてなどいひけり。

○とろゝ汁の出たるを、座敷に古人ありて、今日のことづて汁はいつにまさり、一しほ出來たるなどいひほむる。これは珍しき言葉やと、其仔細を問ふ。さればよ、此汁にてはいかほども、飯がすゝむ故いひやるとの縁に、ことづて汁といふならん。聞えたる作意やと感じ、やがてとろゝをとゝのへ客をよぶに、ことづてを問はれ、おだいやるとぞ申しける。

○津の國の内小妻といふ處は、海邊にて漁人おほく住めり。いづくよりとなく大鷹一もとそれて來り畠にゐるをとらへ宿に歸り、大なるかごに入れて置きけり。二十ばかりなる惣領の子が、何をがな鷹のゑどにせうやれといふを、親聞きて、ゑどとはなんぞや、

一亂に一戰
爭の時に

お出しあれと申されしかば、刑部かしこまり候、其由申し聞けんとて座を立ち、年寄衆に、皆よられよ、局より仰せられ分候とふれたり。何事ぞとあつまりたる座にて、別の事になし、お洗足といふものを出せとなり。此返事いかゞせんと、談合さまぐ＼なりしあけくに、一のおとないひけるやう、一亂にうせたと申されよ、此儀天下一の思案といつて、つぼねへ御洗足を出せと候へども、一亂にうせて御座ないと。つぼね聞きもあへず、あゝけうこつやと申されけり。刑部けうこつといふも聞き知らねば、又むづかしき事やと思ひ、いやけうこつもおせんそくも、一度にうせてをりないと。

○人里とほき寺あり。手習ふとて少人あつまりゐる。ころは秋のはじめ、たそがれ時のさびしきに、かりがねのわたる聲きこゆ。はしり出でかぞへ見れば、かず六つぞありける。歌よむ人のむすこ、

空よりもむつかり聲の聞ゆるは雲の上にも歎きもやある

其座の人々感じあへり。又あけのひる、雁五つつれてわたる。土民の子、昨日ほめられし方をうらみ思ひ、

空よりもごきかり聲のきこゆるは雲の上にも汁事やある

さもとらしき—然るべき

やと覺えつゝ、本國に歸り、態とちかづきの友をよび振舞ひ、かねてより小姓にいひをしへ、お茶をもみぢにたて申せとあり。人々、さすがに此度上洛のしるしありと感じ、事のおもむきを伺ひたれば、こくよくたて申せといふ事だよと。

あながちその人のとがにはあらず、物毎にたゞ國の風による。

○客を得たり。とりあへず振舞ひに、源氏のお汁をせよとこそ言附けけれ。めづらしき汁をくふべきやうに待ちゐたれば、ゆふがほの汁なり。こは何のゆゑに源氏の御汁とはいふぞや。源氏には夕顏の卷あればなり。これこそ安きもてなしとあんじ、宿に歸りて後、ふと客を見かけ、めしを申せ、お汁には源氏をせよとあり。汁の出くるまで待ちえず、何ものを源氏のお汁とはいふぞと問はれ、ふくべの汁のことよ。

夕顏の棚の下なるゆふすゞみ男はてゝら妻はふたのして

てゝらは膝だけある著るものなり。ふたのとはゆぐの短かきをいふとや。

○山中に殿あり。國なかにてさもとらしき武家より嫁を呼ぶに、おつぼねの仲居のおはしたのなどあかくとともし、祝言の事すめり。二日三日たてども、つひに行水とも風呂とも沙汰せず。物まかなへる刑部左衛門といふをよび出し、御つぼね、ちと御洗足を

活計―栄耀
ちくと―少し
だうふく―羽織に似たる衣
沽却―賣ること
聞き―慶安本に依り加ふ
あり―慶安本二字無し
あな―同本に依り二字加ふ
こうよう―紅葉、濃う良う

山しやなどいひければ、其事なり、殿ゆゑに活計ばかたの如くするが、されども上戸をきらひなるまゝ、下戸のまねするにくたびれたと。

○師走の十日頃一條の辻に、大酒にゑひ、餘念もなくいねて居る者あり。又其日鳥羽より用をとゝのへにのぼりたる男あり。これもちくと醉うたるが、かれを見附け、そちの在所はいづくと問ふに、舌まはらず、わけもなきこわつきにて、尼が崎といふやうなり。不便なるかなと車にのせ、鳥羽につれ行き、便船をたづね乘せてやりぬ。彼の者を旅人のやどに舟よりあげおく。醉醒め是は何事ぞ、我は京の六條にて、あまがさき屋といふ者にてこそ候へと、あきれたゝずむ。件の意趣を語り聞かするにぞ肝を潰し、中々にて、船賃旅籠の營にだうふくを沽却し、恥かしきさまにて宿に歸りつるも一笑。

人はそだち

○東の奥より都にのぼりたる人あり。さる古寺に立寄り院主に參會し、物語など時過ぎけるまゝ、菓子持出て小姓を呼び、いかにもお茶をもみぢにたてよとありしを聞き、客なにたる仔細にやと問ふ。たゞこうようにといふ事なりとあり。あなおもしろの言の葉

げけるが、やれ我は下戸分やと肝をつぶし、盃をうつむけ、糸底にてうけさまに、長老のかたを見ければ、目を見出さるゝ。あつというて元のごとく持ちなほし、たぶ〳〵とうけけり。歸山の後しからるゝ時は、私は兼日の法度のごとく、小盃にと取上げ候へば、御目もとちがひ候まゝ、扨は上戸なみに御ゆるし候やと存じて。

○酒といへば見るもいやと思ふ下戸ゐたり。亭主はれなる客にても、三返の上銚子を出したるためしなし。その內證を知りたる故、衆中に振舞のある時、亭出で、中酒なんべんとほり候やと伺ふ。三返とほりしをちと氣にかけてか、返を重ねんと思ひ、はや四返とほりて候と申す人あり。亭、それは一返過ぎた、さらばお湯を參らせよとぞいうたる。

○飯後の酒三返とほりて亭主出で、今度は中でうけさせられよと言ふ〳〵、肴とりに立ちたる間に、上座の客人、四つ目を左へ直しおきぬ。銚子をもちて出でたるに、すなはち飯器をさし出しうくる。亭主、それはといへば、かさと汁とを指さし、なかでと仰せ候まゝ、斟酌なしにうけ參らすると。

あいた客人とこなたは申さん。

○大名の氣に入り、あなたこなたと振舞にはづれず、供しありく者あり。人そなたは浦

諸白―上酒

一堂請用―一寺の僧残らずよばる

裸の次に、雄長老の裸でおはせし處へ、客來りければ、私は母者もの手織の儘罷居り候とありし。此手織のたけ幅こそ、大なる苦勞にて出來候へ。されば忉利天に登り安居の法とて、父母恩重經を說き給ふ、母に十恩ある中に、囘乾就濕の恩といふあり。

　子をはごくむは親の憐み

とある前句に、

　狹筵のぬれたる方に身をよせて

物の理知らずんばあるべからず。

○山中山城方へ紹巴のおとづれられし時、振舞有りてひたもの諸白をしひて、前に見えつる天目にてと有りける時、

　なら酒や此天目に二つ三つのめと仰せあらばとにも角にも

○寺僧二十人ばかりある寺を一堂請用の時、住持觸をまはし方丈によせ、衆僧皆上戸なり、明朝のざしきはれがまし、大器にてめい〳〵ひかへなば見苦しからん、びんばふ鬮を取らせ、せめて一人は下戸分にせんはいかん。尤もと同じ、長老の侍者鬮をとりあたれり。酒は唯二返なる條、始めより汁器と衆議相約せり。彼の侍者ふと汁の椀を取上

うさもなく走りこむ、あまりに殘り多し、鶴首のやうにつくりて持ちたいと。
○酒をのむも時によりてたゝる、たゝらぬとあると言ふは、眞かと人の問ふに、さる事もあるべし、さりながら粥をくうて酒をのめば酢になるといふ。大なるうそ。索麪をくうて酒をのまねば蟲になるといふ。實の中の實とこそ。
○何にか思ひたちけん、一期酒のむまいと神文し、二十日ばかり後しきりに呑まんといふ。女房、こは勿體なし、天命をばいかゞと敎訓しけるに、いや神明は人の心を見ぬいて、何としたりとえこらへまい、やがて呑みたからうものをと、とくからしろしめされ、けつく大慈大悲の御むねなれば、一つ呑ませたいとこそ思召されんずれ。
○神無月の半、木の葉の散るも時雨めきて、空さむげなる時しも、さかやの亭主立ち休らひ、門のほとりを見居たれば、二十ばかりなる下﨟一人走り來り、さか林のもとによりたゞ一重きたる木綿帶を解き手に持ち、うへに著ようか、したに著ようか、下に著ようか、上に著ようかと獨言をいひしが、わざくれしたに著よやといふまゝ内へ入り、酒にかへ、よき燗にあつらへ、腹一ぱいのみ、裸にて出で行きし。
ゑひざめてはなにとあらう。

恨を散ぜんと盃を持ちてたち、燭臺のもとにさしあげ、ちりが御座あるげなと明境にうかゞふ。東堂見給ひ、やれ半分あるはと叱らるゝ時、實にいつも輕う御座あるがと。

○藥さへすぐれば毒となるいはれあり。まして酒の性は熱たり。そちのやうに大盃をもつて數をつくさば、いかでか脾胃の損ぜぬ事あらん、急度誓文をし盃を定めよと敎訓すれば、さらばひやしる椀で三盃づつ呑まんと誓せしが、三日も過ぎざるに飯後の酒出づる。私にはひやを下されよと所望す。則ち冷酒出しければ、汁の椀にてうけ〳〵、三盃つゞけて呑みたり。興さめがほし人々あしくいふに、我は神文すこしもそむかず、ひやと汁との句を切り、ひやしるわんで三盃のめうと申したは。

○酒半に亭主出で、この返をば右手より候はんといふ。兎も角もとて飯器に受る時、其は左ではをりないか。中々、此方からは左、其方からは右なり。亭主よりの指圖なれば、容はおほせのまゝに受くると。

○小機嫌のよき折節、さんげ物語をしけるが、ひとりいふやう、此五體をつくる神にても佛にてもあれ、誂へたい事があるは。何たる望ぞや。さればよ上々の酒をのむ時、しづかに嚙みくだき吟味せんとこそたくめど、いかにも口へ入れば、そのまゝ咽喉へざ

なきまゝ——一本なき早
早

せうやう——仕方

れば、目をさまし、これは何もののしけるぞや、身の内大略はゐうたれども、頭がいまだゐはぬほどに、酒をよくめぐらさんと、態と片くらさがりに寐て居るものをとしかりけり。

○朝食のうへに、初獻にはかさにてとほし、二返には中の椀、三返には汁の椀にてもらせたり。四返目には花やかに飯の椀にてつがせんと、たくみすまいて銚子を先に出し、後より亭主出でて、時宜をいはんとおもふ間に、とくはや飯の椀にてこぼるゝばかり請けたれば、亭主いはん事なきまゝ、扨かよひ盃でよう御座らうものをと。

○きとしたる人の許へまゐる度、酒を給はるに、如何にもかろく七分ばかりつぐ酌取あり。理のすまぬ事に思ひたくみ、ある時折りたる木をつゝみ、上に伽羅二兩と書きて、かの給仕に持參しける。あけて見大に腹立し、にくい奴かな、あいつに今度からせうやうがあるとたくみ、盃にこぼるゝほどつぎもりけり。

にくまれて德をしたるたくみあたらし。

○東堂へ參れば必ず盃出でける。しやくをする小僧、ついに酒を十分につぐ事なし。ある暮がた方丈にまゐる、案のごとく酒あり。例にならつて小僧六七分もりたり。客遣

かし—慶安本により加ふ

なにとて—の四字慶安本になし

断するなと、おなじ心の友みな目まぜをせし。三返目に亭主出で、いかほど参りたるぞと問ふ時、態と氣にうけさせんと思ひ、はや四獻とほりたるといふ。我等は稲荷を信仰のものなり。めでたう銚子を取れやといふ。稲荷を信じたまはゞ今一獻とほされよかし。何とて、いなり殿は四獻々々といはるゝ程に。

○上戸たる人のうへには、四返目の大事といふあり。傳へずんば知るべからず。祝言、無祝言、酒三返とほるはさだまれる例なり。また四返の境目をこせば、五返はいふに及ばず。されば座敷毎の時宜に、はや三返とほりたる銚子を、取りたまへといふは世の常ぞや。亭主器用にて銚子を出す時、こなたは目をふさぎ、手をあはせ、いやはや正體がをりない、中〳〵にといひてかまはぬがよし、給仕大なる盃を取りてつぐべし、それも知らぬふりよし、大方七八分もつぎたらんと思ふ時分、これはこれはといひ〳〵盃に手をかけよ、はやお手がかゝつたといふ。是非に及ばぬふりに受取れば、とてもの事に十分につげといはん、これを四返目の大事相傳とぞ。

○酒にゑひて歸り、いねたる體、敷居に肩を置き、あたまを下にさげたり。才覺なる子が見附け、さて血がさがらんものをと思ひ、枕を取寄せ、頭をあげ、よきに直し置きた

底知らず―大酒家

年の内云々―去年とやいはんを飯椀にかけたり

生得―うまれつき

いやさやうには申さぬ。下戸といふかや。いや其のさたも御座ない。推したく中戸といふらう。いやさ申す噂もをりない。さて何と言ふぞや。唯世上には底知らずぢやと申すと。

○年の内の立春に、目出たしとて奉公の衆各出仕をとげけり。即ち飯器を盃に出し、これにて一つづつのおとほりと定む。古老の人二盃うくる。それは何とてと咎められ、畏りて候。

年の内に春はきにけり一年を去年とやいひわん今年とやいひわん

と吟じて、時の興をぞもよほしける。

○花のもとに歸らん事をわするゝも、霞の内の酒ゆゑや、巽あがりの夕雲雀、調子ちがひに謡ひ舞ふ、あまの羽衣きにあへる友どちなれば、盃のかたぶくかずも時うつりて、さりかねて夜をふかし、あけの日も尙いねてゐる。これをいふかや二日ゑひと。七つ八つなる息子あり。おやはなにとて身を知らぬ、せめて一日よばれかしと。親腹を立て二日ゑひとのあひだ句をきり、ふつかよいといふ事なるものを。

○ふるまひの席にて、今日のていしゆは生得下戸なり。酒を三返のうへはしひぬぞ、油

いやあまりさむきまゝ罷出でさまに、たき火にあたりて御座ると。さあらばこゝへうせよ、かいで見んとあり。是非なうて參りたれば、隱がない、熟柿臭はと御諚の時、萬阿彌、左樣なる儀も御座候べし、柿の木を焚火にあたり參せた程にと。

○伊勢參の坂向ひに出たる者内にかへり、胸をなで額をとらへ、あら苦し〳〵と、時すぐるまでかなしがるを、利口なるむすこあり。てゝはそれ程くるしい酒を、よいころに飲みもせでと申しければ、目を見いだし、おのれはこざかしく何をしりがほに、此醉のさめんが苦しやというて遊ぶよ。

○亂舞時過ぐる酒盛に、正體なく呑醉ひたるもの、愡ひに家に歸らんと思ひ、たどる〳〵歩みたるが、ころしも師走寒のまへ、雪も霜も白妙なる水堀のありしを渡りかゝり、ひたもの踏迷ひふかき處に入りぬ。やう〳〵首ぎはばかりなる水に、溺れながら眠りゐたれば、氷身をとぢても知らず。やどには人皆歸りたるに何とて遲きぞやと、あたりの者までもよほし行きて見れば、堀のかたへに人のあたまの見ゆる。立ちより氷をうちわり、言葉をかけければ、件の客人、たぞ、夜もあけぬに門をたゝくはいな奴といふ。

○主君たる人の酒につゝよきあり。機嫌のよき時小姓に、われをば世上に上戸といふか。

大樹―將軍

に、目の舞振のをかしさよ。私は非㆓下戸㆒上戸にてなし。狂歌を申して無事の媒とせんのみ。

目出度屋那下戸濃立多類倉毛南之上戸能倉裳立和勢禰
土毛

僧欺き咲ひて、歌の内に有㆓上戸最屓㆒閉口せよ。件の者怕日場に指出たる事越度なるかなと赤面して錣係處に、叉霞苧一閑人出て云、僧の慣有㆑道、自無㆑筋事を申し、試に伺はんとて、

世中爾酒飲人和見天楚與記得飲奴人裳仁具之登和見須

僧止㆑忿、俗略咲、互に問訊し欲㆑退。時俗向㆓沙門㆒尋㆓居所㆒。僧予は正路山の無欲坊也。汝は如何なる者ぞ。俗云、名字寐起、名は樂兵衛。聞人哄と笑つて立去りぬ。

○尊氏將軍五世の孫義政公の御時、洛中洛外酒を禁じ給ふ事あり。萬阿彌とて同朋のさふらひしが、いかゞして呑みたるやらん、つらもどこも赤漆にてぬりたる風情なるが、御前に跪きたり。大樹御覽じつけられ、おのれは酒をくらうた面ぞや、と仰せあれば、

別行。且執釋迦之指南、如星如月守爲所以者何。論智則義無不達語、斷則習氣無餘智。斷具之能利世間爲世尊重。故曰世尊彼金口。正法念經云、於佛所生癡壞世出世事燒解脫如火。所謂酒一法也云々。智覺禪師云、若不誡飲酒永斷智惠種。俗云、順僧指南可飲酒打翻烏有先生境界。送登七寶山、空手無益。入栴檀林採其葉何斟佳酒。飲數盃如渡得船。及無清樽者餔其糟而歠其醨、勝餘甘美。東坡山城薄酒不堪飽。勸君且吸杯中月。天地中間有人無不賞酒者。天若不愛酒、酒星不在天。地若不愛酒。地應無酒泉。天地既愛酒。愛酒不恥天。李太白不言乎、晉劉伯倫作酒德頌。其辭云、枕麴藉糟無思無慮。其樂陶々たり。唐白樂天作酒功讃酒德頌。次之。略云、吾嘗終日不食、終夜不寐、以思。無益。不如且飮と云も果ぬに、十德衣禪門疎忽罷出、抄者觀音參の次而人群集何事ぞやと、立寄鎭性聞居けるが、僧はいつもの長談議、在家は酒の論足も膝も痺きれ、鼻のもとは物干棹の一節を謠ふ聲もせねど、頭を鼓の打つ様

臣佐使各借酒力播功能。如是無情草木土石懐酒恵。有情而不慕酒者劣木石。歐陽修貯一壺。醉號醉翁。張旭擧三盃妄傳草聖。此砌相客參度。僧云沙彌戒經第四過失強飲酒者、增長殺害說。夫飲酒有初中後、初人飲酒、中度酒飲酒、終には酒飲人。所謂輕次重三也。醉則濫殺無罪。智論云、一切寶中命爲第一。諸罪中殺生爲第一。諸善中殺生戒爲第一云々。涅槃經云、須爲心師莫心爲師。終日沈醉凌雖々。止醉狂。皆在自己一心。心一法如春野馬。持心不禁酒淳可堅。俗云、一朝之忿忘其身、殺人被殺事時中、天云皆前世酬也。雜集論、明業有過去現在未來三義、順生業順現業順後業。辨此因緣。先罪招禍。因果經欲知過去因見其現在果。欲知未來果見其現在因。以不了此義故、沈論二十五有六趣四生惛々。分明哉不味。因果善惡倶宿報難遁。爾唯酒過負事無謂。布袋和尚者彌勒之化身、常然市中飲酒。楚屈大夫者以獨醒被放逐。宋蘇大夫者以不飲爲不能。僧獨醒而不飲則放逐之徒耶。不能之徒耶。僧云、弟子某甲無別解

擧帆。五湖大浪如銀山滿船載酒撾鼓過異曲同工哉。八月九月人苦長夜。臨酒宴者不覺漏聲迭移。莫謂秋宵唯爲一人長。子瞻云、洞簫聲斷月明中。惟憂月落酒盃空。又宜四時者酒也。春者花亭我醉送殘春。夏者酌竹葉酒掃暑迎涼。秋者林間煖酒燒紅葉。冬者數盃溫耐雪中春吟心懐。郭弘爲漢帝寵愛。帝問云、欲封卿郡邑何地好。弘好飲。對曰、若封酒泉郡實出望外。果封酒泉郡。郭弘上戸故望足成酒泉郡主。寶祿千槌一手柄哉。下戸德被寵謨有乎。僧云、三十六失第二現多疾病過出。雖有十種嘉名、以過爲毒。寶云酒損云内損之類也。曹表抄酒是爲用藥何飲醉成病。心法酒性喜升。氣必隨之。痰鬱上溺溢於下肺受賊邪。加之寶鑑四此盡。不得已而用之、豈可持賴此藥、日々飲酒乎。酒助火生痰傷肺氣。俗云夫五温假假和合身從來病器也。六因七情猶在下戸。必酒不事。醫家酒禦風寒冷氣、同號寸風離。史記、鹽食肴之將、酒百藥之長書。諺酒鹽云是君臣正義保世謂賦。酒辛能散、苦能下、甘居中而緩、淡利溺速下。又藥劑君

古迹、耽酒放逸後必有悔。失自正念違本心。故作不應作、言不應言、無惡不造云々。已迷利根背聖賢義、孰若懷石入淵。俗云、學一篇不兼二道、同片闇。如來藏中、酒之德極夥、而不可勝計。上四王天有天漿名曰花酒。下須彌山北巨海底有阿修羅界。彼阿修羅採四天下菓、醞四大海飮之猶不足。故飜阿修羅曰無酒。去れば盡乾坤一時變作醉乾坤。則沙門無處措手足。李白意在酒、則所見無非酒。漢水皆葡萄醱。麴蘗高臺皆糟丘。白之胸襟亦大矣。又題邀月亭曰、擧酒勸明月。聽我歌聲發。馬子才興　酒一曲對物乎。叫口荷肩。曉夜棹舟。道路雖別。好酒一般也。僧莞爾云、金言逆耳行有理。佛子勝鬘末法中有持戒、如市中虎云々。梵網經若自身手廻酒器飮酒者、五百世無手。何況自飮乎。麁茶淡飯飽即休。如何迷一旦味作舌根罪。樽前被勸醉迷闇必矣。俗云、諸惡莫作衆善奉行七佛通戒也。其禁可有淺深。殺盜婬妄性戒過重。飮酒遮戒過輕。譬漢土法令因罪多少、如有笞杖徒流死五誅。重過上重過可飮酒輕罪、萬歳萬秋順風

鼻蔗也。涅槃經云、酒爲不善諸惡根本。若能除斷則遠衆罪云々。又正法念處經云、若人以酒與戒人若寂靜人寂滅心人禪定樂者濁亂彼人墮叫喚獄。俗云、隨衆生欲種々說法不可限一隅。昔日聞分別功德論云、祇園有比丘栖經六年。優波梨往問所須。答唯思酒。優波梨曰、待我問佛。遂至園問佛。有比丘病思酒爲藥不審可否。佛言、我所制法除病苦者。優波梨復往索酒令歡。病尋平復して重て爲に說法得羅漢果。佛讚優波梨汝問此事使比丘病差。又使得道云云。大聖釋迦令得以酒爲藥、飮者剩得羅漢果、使優波梨得道。以此思酒功甚莫大於焉。靜案理、賤貧漁父行狀、家々晒網牽船、破笠鶉衣、矮屋茅店、行酒既醉事願も、道逢麴車口流涎、恐明朝雨天者、忽解簑衣當思深切さよ。淵明圖、謝幼槃田家酒熟夜敲門、頭上自有漉酒巾。老農時問桑麻長ずることを、提壺提榼來相親。一樽徑醉北窓臥す。蕭然自謂羲皇上人。件晉陶醉漢、生涯米穀一石瓶に入れ置き、以爲四時樂。又彈無弦之琴消憂。呼之爲第一達磨。僧云梵網

倫錦歩障五十里張。其中にして酒宴興を盡せり。季倫住宅椒蘭沈香類粉とし、壁塗さるまゝ望門薫じ渡れり。以蠟代薪朝夕燒火。如是奢比愷倫奢侈云ふなれば、飲貧不飲豐るとも難云。王屑酌盡一杯酒、老夫顏亦紅、靑醒たる樣逢人空耻し。無小無大不好酒者非人。衰老霜供白。愁顏酒借紅、坡翁も云へり。非復三五少年日把酒償春頰生紅、山谷にも書たり。僧云、試金以火、試人以酒。古云、列白墮飲賊酒被擒。目名擒奸酒故惡名傳萬世耻哉。四分律飲酒擧十過失。中身壞命終墮三惡道云々。愚人夏蟲飛入火、智人秋鹿泣入山。無作空死後必有悔。俗云ふ、僧家號般若湯、專用之何事。曇橘州蜀英也。性嗜酒諸方謂之酒曇。或芭蕉泉禪師以杖荷大酒瓢往來山中。馬祖黃壁皆愛酒而無一點執氣。馬子才請君醉我一斗酒。紅光入面春風和戲、蘇氏酒以紅爲貴譽たれば、老年枯槁榮衞乏身憎可飲物。功名富貴到頭如夢。因物興懷何如對淸風明月飲酒自和僧云人無遠慮必有近憂。歡樂極兮哀情多。諺今甘蔗後

妄語。飲歌不如眼前一醉。是非憂樂都兩忘見えたり。鰥寡孤獨者稼穡之艱難紡績之辛苦、得酒一盃時、人境俱忘歡喜大咲。而作掃愁箒。尋花入山、求月臨江。是何人。陸氏云、方我吸酒時江山入胸中、三千世界在于爰。實人間極樂域乎。僧云、汝如猩々醉能言。狒々吻笑人、誦文不解理、生善者飲無過。汝生平修善有何事乎。釋氏要覽律引云、酒有二種、一穀所成二木酒卽草根果作者。人俱好飮之犯三十六失。第一資財散失出。白居易三百人得扶助、纔室中糧不出三十人。餘皆爲詩酒費。中比武家倅者飮超世。有時主伴腰脇差計也。刀如何人問。運在天吾刀在質屋闕事仕合哉。狂歌に

住荒須上戸之宿濃板庇佐加毛利勝仁降時雨哉

東坡招明月至芳樽、酒村已遣門生致、無直身爲人間行路難乎。俗云、福宿善果有不可依才不才。震旦王愷富者。又石季倫云有福者。二人共大酒。彼等長酒之餘、春有百花、秋有月、夏有涼風、冬有雪。人間好時節、撰風景之地、立柱掛戸帳。王愷紫絲布歩障四十里張、季

震旦—支那にて印度を云ふ

丘生。與君歌一曲。請君爲我聽。鐘鼎玉帛不足貴。但願長醉不願醒。是佳酒明立若無青州從事、督郵風味可足。故東坡薄々酒勝茶湯。又李白、白酒初熟山中歸。可謂醉亦文章醒亦文章。僧曰、文殊問經偏爲除疾苦少酒赦之。徒飲徒興あらず。又事林廣記引用初著酒味後知酒失、聞非一片。予暇之日考見十八史。至禹時儀狄作酒禹飲之而甘之、云後世必有以酒亡國者。遂疏儀狄、如案桀末喜紂妲己寵愛、一生酣飲而果失天下。此等皆待樂裏苦類也。又鬼問目連經、我受此身常癡無知。何罪所致。答言汝爲人以酒施。今受業報、果在地獄。梅花一去無消息。亦有春風喚得歸。去諸法實相不生不滅不々生、不々滅、而行因緣業亦不失、繇之思之。俗云、昔堯帝累千觴則其仁傳萬古、孔子傾百榼則其德溢四海。杜康造酒。魏武帝歌云、何以解憂。惟有杜康酒。汝向所謂失天下亡身者酒也、此事如何。佛五時說畢涅槃經遺穗說云、涅槃諄云、誠哉此言。僧教化諦聽々々也。既未曾有經制五戒云、若有飲酒悅心生善。飲不犯戒能忍佛不

薩埵也。不辨此位漫何伺理。沙彌戒經に、飲酒有三十六失說。乃至此四身心散亂失出不言而可知矣。唐太宗。三鏡中、以人爲鏡可以明得失、最合頭狂歌。

酒和唯飲爾波須磨乃浦閑之飲波明石能浪風楚立
時々吟之不如免譖。

俗云、身心散亂可依人性、强不論。纔聞、文殊經云、不得飲酒、若合藥醫士所說多藥相和少酒多藥得用云々。貴許、廣大慈悲。以何衆生得人。無上道善巧飲酒一盃今者已滿足哉。又不見道事林廣記清談、昔儀狄造酒而美。進之於禹二飲而甘之。酒可以供祭祀可以奉賓客、皆禮之所不癈者。如詩所謂、爲酒爲醴、以治百禮。又謂、我有旨酒以燕樂嘉賓之心。皆是物也。去神前酒臺盤諸天獻有三木。婦人愛呼九獻、王侯將相者以酒成治國之策、士農工商何不別飯後必謂中酒飲之。傍人云、大過無益與行不足寒、不醉不醒中酒。此砌大酒老翁出來飲酒爲醉唯亂酒。唐李太白將進酒云題、岑天子丹

也。僧云、汝比遠師止爲類、色心倶天地雲泥、如遠公勤了傍飲。其二道之中易學飲勤、不奈何。廬山集、眼空四座麒麟捉。心在百年鸚鵡盃。煩惱即菩提、有犯者生死即涅槃無火入者是歟。成實論、酒是實罪耶。答罪。所以者何。飲酒爲惱衆生故而是罪因。若人飲酒則開不善之門、以能障定及諸善法如植衆果云々。倶舍云、莫輕小惡以爲無殃、水滴雖微漸盈大器有、非異人作惡異人受苦報惡業所競責歸一人也。俗云、去比法相比丘有聞、夫十波羅密行前五波羅密福行後五波羅密智行第六惠、波羅密根本智、根本智者無分別智也。僧不謂文字言句認心他人思出迄止。李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。正李太白醉中主上禮儀亡却此非無分別智境界乎。蘇子云、客喜笑洗盞更酌。黄子云、客至徒須飲。逢明起自斟。貴富賤貧得容興思。酒外以何盡愛耶。僧云、小智菩提妨哉。前云十波羅密根本智竟。初地入心斷麁煩惱計也。以已下四波羅密後得智細煩惱地々斷、十眞如悟解至十地

共無過。偕云、汝寄安心者好致處也。因性好酒、辨義亦依怙。長阿含經飲酒說六失、中有惡名流布失。佛在世鄰國惡龍蜿、或時大雨或時大旱令惱亂人民。其國綸髮梵志詣佛所詳奏。即婆竭陀比丘云弟子遣。輙降伏惡龍。國民悅酌美酒、醉失正路田畔睡臥。蝦蟆小蛇比丘在腹上。佛與舍利弗通見。自今已後我弟子必不飲酒。制法從是起。梵網古迹、酒者迷亂起罪之本。昔是伏龍之勢、而今不禁蝦蟆。乃至四逆從此而生。又一切聖不飲酒者以諸聖者具慙愧故飲令失正念故云々。聖者有恥。增世人分過酒有耶。俗云、聞說、晉惠遠居廬山下持律精苦過中不受密湯。而作詩換酒飲陶彭澤。送客無貴賤不過虎溪。廬山記、遠師送陶元亮陸修靜不覺過虎溪。因相與大笑。今世傳三笑圖。禪月作詩云、愛陶長官醉兀々。送陸道士行遲々。買酒過溪皆破戒斯何人。斯師如斯羅什曰東方當有護法菩薩。勗哉仁者遠公譽。論曰、遠師有大功於釋氏猶孔門之孟公焉云云。既遠師一宗元祖破飲酒、而過虎溪。此事膾炙人口。寔古今絕勝

五戒—殺生
飲酒、妄語、
盜偷、邪淫

官悔愁耳。夫人笑其人猶在。王大歡喜自佛末利持五戒犯飲酒其事云何。世尊曰、似此犯戒得大功德無罪者也。然則飲過飲修善。僧云、汝愚也。如文取義、三世諸佛怨夫人不飲酒尉官命忽滅、以飲助。見惡全善而破持也。毗婆沙論以有一鄔波索迦稟性仁賢受持五戒專精不犯。後一時爲渴所逼、見一器中有酒如水。遂取飲之。犯飲酒戒。時有鄰雞入其舍。盜殺而噉。復犯邪行戒。告官訊問拒諱復犯妄語戒。如是五戒皆由酒犯。一波起處萬波隨來哉。酒戒破四戒同滅。可思。十地論、膽蔔華雖萎勝餘諸花。故破戒諸比丘猶勝外道有。彼持戒者既落過、況一生無戒而酒愛、外觀解於無一毫者歟。俗云、某若時側耳傾心有聞未曾有經云、祇陀太子自佛言、向受五戒酒戒難持、畏脫得罪、今欲捨戒受十善法。佛言、飲酒時有何惡耶。答曰、國中豪族雖時々相率賚持酒食共相娛樂。自餘無惡得酒念戒不行惡也。佛言、若如汝者終身飲酒有何惡哉。五戒中飲酒戒許太平樂飲物也。又酒中那有失、醉則不驚鷗東坡云へり。然者眞俗

三木—御酒の借字

毓金谷等作亦謂之乎。人無更少時須惜年、不常春、酒莫空。小野篁作勢最有感哉。又昔人思寐夢、吟詠歌。

酒瓶爾我身遠入天涵波耶醬色仁志骨和成共
夜光玉登云共酒飲天醉鳴詮爾豈如兎那棠

角連兩友、一人開瓊筵座花、一人飛羽觴醉月、莊氣空聞天乙女歟、立舞袖鸚鵡盃思方指、飲戻鸚鵡返、榮期酒飲三木不言、大德自今已後酒少宛參。僧曰、汝對持戒勤修僧侶、頻勸飲酒、甚以奇怪也。酒是世尊大禁處、梵綱十重禁者以酤酒戒、第五波羅夷罪。況取手自飲、勸人與事罪過不輕。般舟讃云、唯知目前貪酒肉、不覺地獄盡抄名。愚夫顛倒而樂暫時沈醉、不期當來苦果者此猶熠燿宵行矜怨火。一俗云、扨飲酒佛戒耶。一陣既敗忽如得後詰、珍重々々猶飲、聽未曾有經説、末利夫人弟子。守戒法。或時波斯匿王遊獵大餞事。修迦羅云尉官斬。夫人聞之。酒饌調至王所共飲。王瞋歇乞命、莫殺尉官。王明日見顏色憔悴。夫人何患問。言昨日餞火所逼怒殺尉

清流、林茂碧深、花奇紅酣。異木累葉、群草飛英、不是境待人乎。惟時可惜酒不愛、對花啜茶、殺風景一哉。但願得美酒朋友常共斟、柳文書。又花間に置酒清香發。李白詩、花間一壺酒、獨酌無相親、今更思當。僧下戸、友伽無詮方。僧曰、我好處在餅、哀振舞人、飽滿而慰。宴安鴆毒不可思見物。俗云、飢不撰糟糠實哉。素問云、天食人以五氣、地食人以五味。其氣味無取相者、唯飽望足故。風味好、那堪把酒對西山、山谷愛、何無興飩抹食噎餅。僧曰、心不同如面、貴賤好惡爭一般。每物愛易不知其惡。汝賤餅我所賞也。烹茶煮餅坐僧房。又羹餅臥北窓、保此已徼幸書儒者有候。人間萬事醉如泥、訕酒貪著右流左止。俗云、從釋提桓因賜蕊蕣、種子唯五道論之中初而已。酒德輕誤無愛好者、却堪羨。愚也恒願清酒置不論、得酒醪一樽霜朝雪夜變寒爲溫轉憂爲樂。去晋賈謐云於金谷園聚二十四友、各作忘形友結莫逆盟遊良有以也。加之吟詩作歌舞、如詩不成罰依金谷酒數以文盞三盃續盛之。或酒宴席詩、不才身野詩難詠。可愧罰

て送りければ詠みてつかはす。

思ひきや落すたづなの濱風に浪より高き名のたゝんとは

○美濃の岐阜に宗湖とて、連歌の上手家まどしかりし。堀池といふ福人のもとに質を置き、毎年うくる事なく過ぎし。此冬の小袖をば、何とかせんと思ひつらね、

倉の内に何なる河のあるやらん我おく質の流れぬはなし

是を送りければ、堀池、詩つくりて酒をかはれたる廬山の遠公にも、心さま似たりといとほしがり、質になにやらん添へて、もどしたると聞く。

上戸

○雲静に風條をならさぬ日を幸、一瓶を携東山に出づる俗あり。又痩黒みて白髪たる抖擻の僧始より八坂の塔に休ひし。是も靈山の方へ歩む。二人道づれし語り行く。清水奥の千手堂舞臺の　にて、彼提物を開き、飲て進僧、僧曾不取合。俗云、生得酒嫌歟、又有　否。僧曰予元來悪客也。俗云、此靈地也。衆峯環峙萬水

木葉ちる宿は聞きわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

といへる秀歌よませしは、汝が信をいたして我に志し、祈り申せし故なり。されば此たびはいかにも活くまじきぞと仰せられける。

○光源院殿、京都四條道場に陣を取りて御座ありし時、夜九つの太鼓をねぼれ、七つの時打ちけり。公方より御使ありて番の僧を召す。さだめて折檻に及びなんと、慄ふ〱参りければ、やうす御尋ねありつるに、さん候、深く睡り入り目覺め仰天仕りての故と、ありのまゝ申し上げければ、案の外御機嫌よくて、

此寺の時の太鼓は磯の浪おきしだいにぞ打つといふなる

とあそばされ、僧には方兄をあたへ給ひぬとなん。

○三條三光院殿十六歳の御時、禁中にて懐舊といふ題出たりつるに、何ともよみにくしとあれば、一座みなおもしろき顏に見なし、誰も題をとりかへ詠まんといふ人なかりしに、

程ちかき我むかしさへ戀しきに老はいかなる涙なるらん

○宗長法師あるかたにとまり、曉いそぎかへるとて、下帶を忘れ置かれしを、もたせ

光源殿―足利義輝

とあそばされ以下―慶安本に無

方兄―錢

ちて、墨にそまりければ、

世のなかを花もうしとや思ふらん白きすがたを墨染にして

と此歌詠みて兒死にけり。明の年のなき日にあたり、師の坊主、

去年のけふ花ゆゑうせし兒のためいまうちならす鐘の一聲

と詠じ、靈前に備へければ、卽ち返歌あり。

花ゆゑにとはるゝ事のうれしさよ苔の下にも春は來にけり

○大内殿在京の時、京より御臺へ、

なびくなよ手馴れし庭の糸薄いかなる風のたよりありとも

大内殿御臺の返歌、

風もなしなびかぬものを糸薄君を思へばこゝろみだるゝ

○左衞門尉藏人賴實はいみじきすき者なり。和歌に志ふかくて、五年が命を奉らん、秀歌よまさせ給へと、住吉に祈り申しけり。其後年經て重き病を受けたりける時、祈るとも死にければ、家にありける女に、住吉の明神つき給ひて、兼ねて祈り申せし事をば忘れたるか。

てさへ、危かるべき渡世ぞかし、何として添ひは果てまし、別にあく色もなけれど、唯歌をすけるに厭きたり。いとまを遣すといふ時、隣なる農人の、稲を荷ひながら立ちより、亭主左右な言はしましそ。うらが處の子もちは歌をも詠まず、夜からよるまで働きぬれども、不便さはこれにまさりたり、なにも皆前世の約束と見えてあり、女房衆亭のいふ事にとりあはず、たゞ詠みたくば歌ようで、そのひま〳〵に働きたまへといふに、彼の妻夫にはとりあはず、隣の男にむかひて、

　ほに出ていねとや人の思ふらんはかなの我や秋を見ながら

○建仁寺の開山千光祖師在唐の時、老母のうへを悲みて詠み給ひし唯此一首、集に入りぬるとなん。

　もろこしの梢もさびし日本のはゝその紅葉ちりやしぬらん

○頼朝公より、慈鎮和尚へ、何にても用の事あらば、文を委細に書き越し給へとありつれど、終に便もなかりしゆゑ、此歌を送り參らせられしとなん。

　陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬかきつくしてよつぼの碑

○深草に薄墨の櫻とも、墨染の櫻ともいふは、兒あり、手習硯の水に、白き櫻の散り落

　廻りくる春々ごとにさくら花いくたび散りき人に問はゞや

といひたりけるぞやさしき。

○越前守の時に、高忠といひける侍の夜晝まめなるが、冬なれど帷子をなん著たりける。雪のふる日歌をよめとありければ、この侍、何を題にて仕るべきぞと申せば、裸なる由を詠めといふに、

　はだかなる我身にかゝる白雪は打振へども消えせざりけり

と詠みければ、感じ給ひて、著たる衣をぬぎて取らす。北の方もあはれがり、うす色の衣のかうばしきを取らせけり。

○朝夕に木をこりて、親をやしなふ孝養の心天に知られぬ。梶もなき舟に乘り向の島に行くに、朝には南の風吹き、北の島に吹きつけ、夕には又舟に木をこりゐたれば、北の風吹きて家に吹きつけつ。かくの如くする程に、年頃に成りて公に聞召し、大臣になしめし仕はるゝ、其名を鄭太尉といひける。

○事たらず世をわびてすむ人の妻あり。天然と和歌に心そみ、たち居に此事のみなれば、夫いふ、その風流はかゝるまづしき身に、さら〳〵にあはず、二人がともにはしたなく

色にはみせていふ事はなし
春秋を草木にうつす天津空　　兼載

○後柏原院崩御なされし時、三條の桶屋が娘、

およびなき雲のうへなる歎きにも天が下とてぬるゝ袖かな

○木こりの斧を山守に取られ、心うく思ひつゝ杖つきて居ける。山守見て、さるべき事を申せ、取らせんと言ひければ、

悪きだに無はわりなき世中によきを取られて我いかにせん

と詠みたりければ、山守返しせんと思ひて、うゝと喚きけれどもえせざりけり。さて斧を返し取らせてければ、うれしと思ひけりとぞ。

○かくし題をいみじく興ぜさせ給ひける御門の、ひちりきを詠ませられけるに、人々わろく詠みたるに、木こる童の曉山へ行くとていひける。このごろは篳篥をよませさせ給ひたるを、人のえよみ給はざんなる。童こそよみたれと言ひければ倶して行く。童あなをかし、かゝる事ないひそ、ざまにも似ずいま〳〵しといふに、などかならずざまに似る事かとて、

律家―律宗

もなし。又百首かさねて上げ參らする包紙に、

かきすつる藻屑なりとも此度はかへらでとまれ和歌の浦浪

此一首とまりてあり。彼蜷川の新左衞門親常心ざしのほどこそ、

うぐひすの羽風に花の打散りて

いとはるゝ物のにくしとは見ず

○周防の太守大内殿の北の御方在京の程、ある内にふみ二つのほせり。御臺へのをば取りちがへて、おはなといふ女房たちへやり、お花のをば御臺へあげまゐらせし時のかへり事に、

思ふかた二つありその濱千鳥ふみちがへたる跡とこそ見れ

○鎌倉の中納言爲相は定家の孫なりし。相模の稱名寺といふ律家の寺あり。かしこの庭に山々にさきだち、いかにも早く紅葉する楓の木の候に、短冊をつけらる。

爲相

いかにしてこの一本のしぐれんけん山に先だつ庭の紅葉ば

其翌年よりつねの色にかへり、紅葉をぞとゞめける。

炎王宮―閻魔の廳

敎月坊―定家の弟
印地―石合戰と領地とに掛く

母問はれければ　我がおとなしく寺のぬしになりたらば、それ〴〵を參らせたいとこそ候よ。

○博奕の上手二人、一度に死して炎王宮にいたる。靑鬼立ちて、先にとほる者をとらへんとすれば、私は辨說なし、おとほし候へ。跡なる者口きいたり。なにも御尋ね候へと申すにぞ、さらば二番の男をとらへ問はんとて、赤鬼立ち寄りたりしを、彼のばくちうち、鬼の尻をそと知らぬふりしてつめりけり。鬼がいふ、爰な人は晝なるにと。

鬼も十八といふ事あればおくゆかしや。

○敎月坊例の狂歌を持せ定家のもとへ、

敎月がしはすのはてのそら印地としうち越さん石一つたべ

よねを五斗參らせられし。

定家がちからの程を見せんとて石引分けてなからこそやれ

○鹿屋の夕顏といふ題にて、夢庵

賤屋とて思ひやつさじ夕顏のはなのかづらに露のしらたま

○新續古今を撰ぜらるゝ時、其歌人の數に入りなん事を望み、三百首よみて上げければど

聞けば、和泉式部がいにしへ丹後の國にての事とかいふ。
○牡丹花の、兒にて机にかゝり、いかにもしとやかに手習し給ふを見つけ、ある人うしろより、
ものをもいはでものならふ人
といひしに、筆を持ちながら、
口なしの花のいろはやうつすらん
○丹後の國に鉈の庄とてあり。彼處の百姓同じ百姓に米を貸しぬ。乞へども遂になさず。狂歌をよむ。
借錢を乞へどもくれぬ氣の毒やなま木に鉈の庄のものかな
幽齋公御聞きあり。其風情なる土民の上には、何として言ひけるぞ、やさしやと感じ給ひ、米を三石つかはされし。忝しとて御禮に參り、其座にて何とぞ申せとあれば、
日本さへ及なき身に三石をまゝにせよとの御意ぞめでたき
○江州坂本にある母のもとへ、年の暮の文に、叡山より兒の書きてやりけるは、小袖一重、料紙十帖、帶一筋參らするとあり。使に問へばなし。重ねて見參の時、その旨趣を

三石—三國にかく

見る人に身をわくる花の匂ひ哉　宗祇

待ちをしむほどや心の花ざかり　同

○和泉の堺に森川といふ太鼓打あり。數寄を心におもしろくおもひ、煎餅をちひさくわりて菓子に出しわる。茶をたてて、わびつゝも客を送りていで、お禮なしで御座あるといふ。知音の者あり。珠光紹鷗などのいはれさうなる時宜めきて、お禮なしとはなど言ふぞ、唯お出忝しとばかりがよからうと意見しければ、さればよ我も身ながら片腹いたく思へども、浮世の數寄者たる人結構に會をし、一軸花入興をつくし、極上別儀の濃茶うす茶、式法過ぎて門送りし、路地のくゞりに手をおさへ、お禮なしで御座あるといはるゝがけなりさに、せめて食ふまねしてあそぶと。

○久しく相馴れし夫婦の中に、おもひよらずいさかふ事ありて、妻にいとまをやりぬ。家をはなれんとする日、けしからず大雨ふりしかば、相馴れたるわりなき友あつまり、いたはしやなどいふに、

降ばふれ曇らば曇れてるとても濡さで行かん袖ならばこそ

と詠みしを、あはれと、え去りがたくてとゞめけるこそ心あれ。これを誰そとしづかに

宿札―誰それが宿りたりといふ事を記して宿屋の前に立つる札

行き、浪人の後太閤御所薩摩御陣立あり。庶子のなにがしも御供し、宿札をもちて行く。折節兄の家とも知らず行きたり。宿とりを主人伺ひ見れば、件の弟なりし。さすが昔の床しくて、

大ばをば茶にさへ厭ふ物なるに何の縁とて宿をかるらん

庶子よりの返歌、

大ばをば茶にさへきらふ物なれど心砕けは別儀あらじな

○住吉の花のさかりに、少人を誘引したる方へ、

色もなき此一枝をおくるなり人のこゝろの花の見たさに

返歌、

水莖をかきならすべき方もなし人の言葉の花にせかれて

○又いつの春やらん。住吉にて花のもとに、顔をつゝみまはして居たる人のもとへ、

よしやきみ霞の衣おほふとも匂ひをもらせ花のかほばせ

返し、

匂ひをもいかで漏らさん人しれず身は埋木の花し咲かねば

音なしに咲初めかゝる梅の花匂はざりせばいかで知らまし

といひけるを、主人聞付け馬上より、其者のいにしへを問へば、

花ならばおりても人の訪ふべきに成下りたる身こそ辛けれ

とよみし、いよ〳〵主人感にたへ、やがて侍になし、身ちかう情をかけつるとなん。

○和泉の堺に宗椿とて手書のありし。源氏を寫すこと廿三部、廿四部目の朝顔の巻にてむなしくなりぬ。牡丹花かれが心のほどをあはれみて追善のため、

筆にそみ心にかけしちぎりにや折しも消えしあさがほの露

○町屋の棚に面をかけて置きたる。のぞみの人有りて立ち寄り、それなる上臈面を見たきよしこひければ、暖簾の内より、いかにも色くろく逞しき男の、手にもちさし出しさまに、代は五百でおぢやらしますと言ひけり。いやこれはおどけ者よと思ひ、それに候鬼の面を見たいとこふ。又さし出しさまに、大きに頰をふくらかし、おそろしげなる聲をして八百とぞいひたりける。その物々に心をなしたる、やさしき人の作分にやあらん。

○藝州に大場といふ侍あり。兄弟の中如何の仔細にや、庶子家をつぎて惣領は筑紫に

二字飜案に返し、

靡くまじませの内なるをみなへし男山より風はふくとも

と書きてつかはし、國の内花藏院といふ比丘尼所に走入りて、むなしきあとを訪ひしとなり。

○普光院御所へ重寶の劍を進上す。即ち科人を召出し、きりて見んとひき据ゑたるを、あなた此方へなほして斬れとある。其時かの科人、しばらく待たせられよ、存ずる旨を申さんと、

洗乾す賤が襤褸のさほづくみ引直さねば斬られざりけり

是をきこしめされ、やさしき者の心やとて、命を許されけるとなん。

○備中の國高松の城守を清水長左衛門宗治といひし。先の太閤羽柴筑前守殿の時、大軍をもつて水攻にし給へば、諸勢の命を乞ひたすけ、小船に乘り、河にうかび、切腹の時、

をしまるゝとき散りてこそ世中の花も花なれ色も色なれ

○伊勢より熊野へ參詣の武士あり。おとなしの天神といふあたりにて、一木の梅さき、ふかき匂のもれ來るを、供したる人夫とりあへず、

時、あたりに馴れし女房あまたとぶらひ來り、とてもかなはぬ仕合なれば、身に添へん物をもなど認められぬぞや。いな殿ほどをしき物のなにかあらん。殿を置きて行くからは、なにも身に添へんとは思はぬと語るを、ひそかに聞き、やるせなき心つき、ながき別れまでに添ひし事よ。

○大名の扶持を受くる座頭あり。茶をひかせられしが、呑みて見給へばあらし。おほきに機嫌そこねしに、

粗くとも我とがのをと思すなよ茶臼に目なし碾人にもなし

このことわりにて事すみぬ。

○美濃の國に石谷といふ侍あり。齋藤山城守と同心にて鷺山の城に籠れり。寄手は齋藤新九郎とりまき、やう〳〵落城におよぶ砌、かの石谷文武に心がけの功あるををしみ、矢文を射、使者をたて、是非出られよ、未練にはなるまじきとことわり、返しに、

命やはうきなに替ん世の中にながらへはつる習ありとも

同時妻女のかたへ、

靡くなよませの内なるをみなへし男山より風はふくとも

如是院―一本十如院守―慶安本一字加ふ

に問へとおほせある時、おはしたに右のむねを尋ねらる。聞く者をかしがりて、名を存じたる者なしと申せば、女院のおほせあるやう、われはこれを推した、鬼の耳搔であらずと。

時頼禪門

思ふべし人はすりこぎ身は杓子思ひあはぬは我ゆがむなり

○細川幽齋公の姉御前に、宮川殿とかやいうて、建仁寺の内、如是院といふにおはせし事ありき。長岡越中守殿より、大津にて米を百石參らするよしの文を見たまひ、その返事に、

御普請の役にもたゝぬこの尼が百の石をばいかでひくべき

とありしを、げに斷やと、卽ち車にて送り給ひし。

○さきの宮川殿子息雄長老頭痛のなほると聞き、とつがはへ湯治し給ひし時、おとづれ人をつかはし給ふたよりに、

御養生の湯入の心しづかなれやとつかはとして上り給ひそ

○夫の心俄にかはり、妻に暇をやるといふ。とかくことばはなく出でていなんとする

醒睡笑　巻之五

婬心

○夢庵は常に牛に乗りて遊行ありし。月しらけて興ある夜、野に出らるゝに、牛芋畠へひきゆく。畠主腹立しわめきければ、こらへよ、歌を詠みてそのことわりを聞かせんと、

月も見ずいもが子供の寐入たを起しにきたは如何あるべき

○もとは都に住みて子ども五人持ちしが、住侘びて筑紫にくだりし。或時妻の方への文に、絹十疋、綿百把まゐらする。たゞし僞なりとかきたり。その返事に、

心ざしあるかたよりの僞は世のまことより嬉しかりける

となんいひやりける。女房のおもはくためしなうこそ。

○昔語に、女院へある時おほきなる杓子をあげける事ありし。御覽じ始めなれば、なにとも御知りなくて、左右へ御尋ねあれども、おなじく存ぜずと申さるゝ。されば下司

敷島の道をたづねばすぐにゆけ入江小島に舟よせずとも

○夢窓國師住吉參詣の時、

来て見れば爰も火宅の内なるを何すみよしと神はいふらん

明神の返歌、

松風の聲の内なるかくれ家はむかしも今もすみよかりけり

○京の町を大根賣の、大こかうく〵というて通りける朝、書をまなぶ僧の、三重韻を見て居たるが、彼の大根うりをよび入れたる。大根をめずかと問ふに、いな、そちがうる物を大こといふ、大なるかたことなり。元魂痕の韻にいつて根にすうだ、相構へて此後は大こといふべからずと敎ふる。商人、こゝな坊主はなりふりも人がましきまゝ、大こを五十本も二十本も買はるゝかとおもうたれば、一向錢も持たれぬけで、つきもない事を言はるゝと、散々悪口して出けり。

参るべけれど目も見えねば、いかでか参らんといふ聲すなり。打驚き、何のかくは夢に見ゆると、思ひまはすにあやしく、夜あけ奥をよく〳〵見れば、置きたりし地藏を思ひ出て見出したりけり。これが見え給ふにこそと思ひ、いそぎ開眼し奉りけるとなん。

佛にも實の慈悲はましまさず思ふ人をぞおぼしめさるゝ

世中は幼き子の面ぎらひみしがなきにぞ音は泣れける

竹馬をいまは杖ともたのむかな童あそびを思ひ出でつゝ

○或者戀慕したる若衆の東國に下るを、かなしみの涙とともに大津まで送り、なく〳〵しる谷越をのぼる。清水の南に若松が池と云ふあり。其邊にのぞみ思ふ、命あればぞかかるうき目にもあへ、不ㇾ如身を投けて死なんにはと、帶をとき池に入り、頭ぎはまでつかりたるが、思案かはりて急ぎ陸にあがり、

君ゆゑに身を投げんとは思へども底なる石に額あぶなし

○石山寺にて連歌興行の事ありし時、公家達の交りなれば、少しなほしたき言葉をも恐れていはず、膝を立てとほしけるが、大にこりはてゝ、宿にかへりてかくなん。

今よりは望もなしやこの御會連歌も膝もむりやりにして

定家卿

昨日までかけとたのしみし櫻ばな一夜の夢の春のやま風

○宮づかへする侍あり。人まねして清水へ千度詣を二度したり。後傍輩と雙六をうちまけて、いたくせめければ、われ持ちたる物なし、清水に二千度參りたるあり、それを渡さんといひけり。聞く人笑ひけるを、勝ちたる侍、渡さばえんと、其日より精進し、三日といひける日清水へつれまゐりいふまゝに文かき、御前にて師の僧よび、事のよし申させ、二千度參某に雙六に打ちいれつと書きて取らせければ、請取り悦びふし拜みて出でけり。まけ侍は思ひかけぬ事にとらへられ、牢屋に居にけり。とりたる侍は德つき、司に成りて樂くぞありける。目に見えぬものも誠をいたしとりければ、佛あはれとおほしたりけるなんめりとぞ、人いひける。

○山科の道づらに四の宮河原と云ふ所、袖くらべとて商人のあつまる宿の下司ありけり。地藏を一體作り、開眼をせず櫃に入れ、世の營に紛れ程經忘れけるに、三四年過ぎ夢に、大路を過ぐる者聲だかに人を呼ぶ。何事ぞと聞けば地藏を呼ぶ。おくの方よりいらふるなり。明日天の帝釋の地藏會し給ふに、參らせ給へといへば、小家の内より、

○一休住吉の牀菜庵に居住の時、

住吉と人はいへ共すみにくし錢さへあれば何處住みよし

○客をえて食の用意をしけるに、亭主はしりまはり、たまさかの來臨なるに、いかなるめづらしき物もがなといふ。七つ八つなる子ありて、とゝ〳〵、納戸に鳩がたんとあるは。

○大名の前にて座頭のひた物ねぶるを見給ひ、何の仔細にそれほど眠るぞとあれば、昔より春は蛙が目をかりると申し傳へて候。それはよき目の事に候はんや。我等のやうなるあしき目をもかり候は、よく〳〵蛙のよりあひに、目のはやる仔細御座候やと申しける。

○ある庖丁人のいひけるは、誰も常に山の薯蕷より、野老は一倍おもしろいものと仰せある、我等はさやうに一向おもはぬ。其仔細は、野老と薯蕷とを調へて出すに、にがきところはいつもかへる事あれど、わるういはるゝ薯蕷のうまきが殘りて、かへりたるためしがない。

○後京極攝政殿にはなれ給ひて愁傷のあまり、

後京極攝政殿―藤原良經

普光院—足利義教

年よらば—慶安本歌及び夢庵無し

膝をつき起したれば、目をするかた〳〵に、やれ〳〵談義の座敷かとおもうたよ。

○一人は兎も角も世を過しかねず、一人は手前おとろへたると、舊友兩人出合ひ貧なる身の、しみ〴〵ととぼしき物語にて立ちたる跡より、

ある時はあるに任せて過ぎて行け又なき時はなきに任せて

とよみて送りし返歌に、

ある時はあるに任せて過ぎしかど又なき時はえこそ任せね

我世帶あがを雲雀の如くにてさがる事こそ矢よりはやけれ

○普光院殿御影に、

面影はうつすもやすしとにかくに命は筆もおよばざりけり

年よらば飯やはらかにそつと〳〵酒は過ぐとも獨寐をせよ　夢庵

憂き事も嬉しき事も過ぎぬればその時ほどは思はざりけり　西行

捨果てゝ身はなき物と思へども雪のふる日は寒くこそあれ

あらず—あらん

人を送りて—慶安本此連歌無し

がひがあらずと。

　　人を送りてかへる夕暮

　身はいつの煙の爲に殘るらん

正觀音經に、毘舍利人民平復如本と說きて、現世に五種の鬼病を除き給ひし阿彌陀なり。天竺、百濟、和朝に傳ひ來りし善光寺の如來と拜したてまつる。彼堂の柱に虫の食うたりし歌、

　待侘びて歎くと吉よ皆人にいつをいつとて急がざるらん

○莊周が夢に蝶になりたるとやせん、蝶が夢に莊周になりたるやせん。

　百年は花にやどりて過してき此世は蝶の夢にぞありける

○親鸞聖人の和讃に、すなはち往生すと書き給へる詞あり。然るを參詣の中に まつたき姥のありて同行の人にむかひ、唯今の一句を聽聞せられ候や、おすなもおはちも御往生との上は、ましてわれらが往生をやとて感淚をぞ流しける。無量壽經若人無二善本一、不レ得レ聞二此經一といふ世尊の金語にあへり。

○はれがましくなみ居たる座敷にて、ひた物ねぶる者あり。そばに居たる人笑止がり、

候は如何。兼てよりいひつけけるをとて叱らるゝ。いや祝儀に料足三貫參りたるはとしけるにぞ、そんならばいでおきて發句せんと。

○本願寺の門跡、ある冬堺の津に下向ありし時、男女みな〳〵迎ひに參りぬ。門跡輿よりおりて、住吉大明神にむかひ、手をあはせ念誦し給ふを見、ひとりの姥宿に歸りあの住吉といふお人はなにとしたお人やら、本願寺さまさへ、お輿からおりてをがませられたと。

護念經の一心不亂聞得たり決定の儘。

西行内宮のふしをがみにて、
何事のおはしますとは知らねども忝なさに涙こぼるゝ

○親である人お聞きあれ、錢をせぬとは、かたことなり。もつともらしきいけんなれど、そちが錢をばうらがせぬか、いはする事をおもへたど。

○母におくれたる者背栢のもとに來れり。愁傷のほどおしはかりぬ。わづらひはなにてなど問はれける時、はじめ血の道にて候を、醫師の見そこなはれ、風の療治をせられ、藥ちがひにて候ひつると申あへり。背栢法印、おう〳〵いづれ一度は、たれも藥ち

たしなみし—貯へたる

宗祇—戰國時代の連歌の名人

り。

　弟子の口上正直なるかな。

○學もすくなう療治も秀でたる覺えなき醫者の、田舍より堺の津に來り、日をかさねてもしか〴〵崇敬する者なければ、たしなみしお足もとぼしくなり、すご〳〵と舊の舊里に歸らんと思ふ曉、

　假染のすまじき物はやぶくすし自然乞食となるぞ悲しき

○宗祇東修行の道にて、人謎をかくる。

　ちやんきのもんきなに

祇公富士の雪といへり。其心は何としても解けぬとなり。件のなぞをかけし人、見るが内にきえて跡なし。

○夢庵堺の津におはしけるに、方々より年の内の立春、又元三の發句などあまりのぞみおほかりしかば、内の者に、かまへて誰より申し來るとも、所勞の事ありといふて取次ぐべからずと、かたく制し休息ありけるが、正月五日の朝とく、いまだいねておはせし所へ、内の者そとうかゞひけるやう、さるかたより、子日の發句所望の由申しこされ

學解―學問
見解

なしみありて、そちは涙にむせぶぞやと問ひければ、さればとよ、あれへ行く男を見れば、かちんのかみしもを腰につけ、傘をうちかたげ、ふところにさゝらのやうなる物の見えたるは、うたがひもなき説教ときなり。あの人の胸の内に、いかほどあはれに殊勝の事のあらうずよと、おもひやられて袂をしぼると。

たゞありの人を見るこそ佛なれ佛といふもたゞありの人

いざさらば泣いて手向けん七夕に涙より外身にもあらばや

○富士の人穴の勸進というて、門々をありく者有り。不思議や人穴の上に堂が建つか、又常燈をもとぼさんとの事やと問ふに、彼聖おのれが口をがばとあきて、此人穴のくわんじんなりと。

○長老達四五人休座の物語ほど過ぎ、あげくに一文は無文の師とて、學解なきも法輪に望は常の習ひなり。誰が身の上もおのれとは知らず、くせがあらば互にいうてなほさんと、其癖々をいふ中に、一人はそと座を立ちて歸り、うつけをつくし、われ〳〵のはぢをあらはすなるべしと自讃し、弟子にむかひ、左はありながら、我にもなにぞ癖があるといふかと問はれければ、いやなにとも癖は別にない、唯談義の下手ちやと申すといへ

阿彌陀佛の六字の名號を信者に授け緣を佛に結ばしむる事

御馳走—一本「御奔走」

殊勝な—三字慶安本無し

掛絡—禪僧の用ふる袈裟

とて名ある侍の屈請せらるゝ其刻、弟子祐光師の長老にむかつて、振舞とあれば、何方も崇敬のあまり賞味を專とす、しかはあれど、一言の褒美もなければ、亭主氣を失ふ風情まゝあり、明朝のもてなし超過ならん、相構へて失念なくほめられ候へとあれば、異議なく合點し、卽ちかの殿に臨めり。歷々と座列す。幕をあけ給仕膳を持つて出で、きつとつくばひたれば、長老報恩寺殿々々々とよびかけ、汁も菜も見もせいで、御馳走と申されたり。弟子祐光にらみければ、うなづいて、わすれぬさきにと。殊勝な。

○下總の國とかや聞く。墨染の衣きて掛絡をかけたる僧行脚す。又武士の馬上にて行くにあふ。かの僧愚鈍なり。覺えたる事とては、天下泰平國土安穩、此一語の外は知らず。さるまゝ彼侍をむづかしく思ひ、掛絡をはづし懷に入るゝ、卽ち馬より飛降り、敵を見て旗を卷くとは如何とありし。言下に、天下泰平國土安穩と武士問訊す。

運は天にあり、もちあはせたる竹鑓にて大敵を拂つたは。

○長岡越中殿、伏見より雄長老のもとへ、旗棹をもらひに使者のありし時、狂歌、

呉竹のふし見にはあらではる〴〵と京まで切にのぼり棹かな

○途中にひとりの姥やすらひ、物あはれさうに泣きゐたり。行きあうたる者、何事のか

にはすうだと。

○唐船の謠に、身もがな二つとあるを、一人はいもがな二つとおぼゆる。一人は身もがな二つとおぼえいさかひになり、此在所にて問はん人なし、寺に行き住持の僧に問はんとて、二人つれだちかくといふに、彼僧本をよむまではなくて、一番うたひ給へ、聞いてすまさんとうたはせて後、一處には身もがなとあれども、唯いもがな二つがよい。如何なればと尋ねければ、日本人も隨喜せりとあるほどに。

○酒の出たるを一口飲みて、扨々よき御するで候とほむる。人みなわらふ。腹立して、我が物を知らねば、かならず人の金言をえ聞かぬぞや。かやうによき酒をば、昔から御するといふが本にてあるぞよ。それは誰に聞かれたるぞ。いや楊貴妃に、先天上の五するとつくつたは。

唯有

○伊勢の桑名に本願寺とてあり。一代の住持秀海長老は、七日以前より死期を辨じ、春の時正法說の後、十念をさづけ、高座にありながら合掌して命終す。秀海存日に報恩寺

五すゐ—天人の五衰

十念—浄土宗にて南無

雑役馬

人がいふ、あれは口わき白し、鮎なりと。つれのいふ、鮎ではない、鮎ならば飯がつきてあらんものを、あれは鯖であらうず。先に鮎といひつる者、いや／＼鯖ならばおはれてをらうが、一つありくほどに、なか／＼鯖ではないと。是をおもふに、一人は鮎の鮓ばかりを見附けたり、一人はさし鯖ばかりを見附けたればなり。

○昨日日吉太夫墨田河をして皆に泣かせたはと、語るを聞き、つひに能といふ物を見た事もなき者、あけの日早朝に行きしが、翁せんざいふをしまひ、三番叟の時さめ／＼と泣く。見る人是は何事にやと問ふに、あの墨田河があはれさに泣くといひしは。

○連歌する人の小者正月の末に寄合ひ、おもふ事さんげ物語の後、朝とくよりともし夜更くるまでつむる辛勞、いやにはあれど、さりながら今一季あさらうか知らぬ。

○借錢を乞ひに、幾度人を遣はせどもなす事なし。さらばとて直に行く。これの亭主道善に逢はんと言ふ。亭主出でて、道善は留守に候といふ。いやそちは道善ではなきか。扨こゝな人は、亭主の道善が直に逢ひて、留守といふをうたがはるゝかやと。

○馬を買うてひき來れば、見る者ざうやく／＼といふ。いやあまりのざうやくでもあるまい、始めの騎馬の子ぢや。件の男をかしがり、騎馬にてもあれ、荷馬にてもあれ、ざうやく

きゝたかく—慶安本「ききたくば」
心を深く—慶安本「心をまがふ」

聞きわけたる事はなかりし、隣のかゝのあめやさめと泣るゝほどに、定めてあしき事ではあるまいと思うて泣いた。

○人皆連歌をしならふとて、一順の月次のなどとてはやらかす羨し、我もちと稽古せんとおもひたち、宗匠する人にむかひ、大體一句のしたて如何なる心持にて工夫いたし候はんや。されば此道を學ばんとすれば、いと深く藻屑もよらぬ和歌のうらなれば、言葉みじかうきゝたかく、心を深う、物あはれに、花奢風流につくやうに。彼人聞くと同じく、はや合點まゐりて候、一句申さん。

くびぎはや二季の彼岸に茶香杵

心はと問はれ、されば水をわたるに、くびぎはにおよぶは深ければなり、物のあはれは二季の彼岸、花奢風流なるは茶と香と、つくやうには餅つく杵。

○十月の五日は達磨忌とて、例年禪家に法事あり。其つとめにあはせんと、喝食をむかひに人をやりたり。御親父は庄屋なりしが、迎の僧に出ていふやう、あすはそなたの達磨忌の、こなたは又麥まきなり、いそがはしくて人ひまなし、えやるまいとぞ申しける。

○山より里に出る者二人つれだち、ある河の橋をわたるとて、水底をありく魚を見、一

としければ、

あさがらやかたきの手棒鷹すゑて

○山家の者とて老いたる姥の、杖にすがり京に出でたるを、ある者ゆきあひ、そちの年はいくつぞ。百に一つ足らぬとかたるにぞ、さて〳〵めいじんやと、幾度もほめゐけるを、始めより道づれしたる者、何事あれば感にたふる。さればよ、いきめいじんとはあれをやいふらんと。

○夜も未だあけやらぬに、中間なる者戸をあけ、さてもおびたゞしく雪の降りたるはといふ聲しけり。亭主聞付け、如何程ふりたるぞと問へば、されば深さは五寸ほどつもりて候、幅は知れぬと申したり。

○或僧若衆のかたへ、

君をのみ戀ひ暮しつゝ手すさびに前なる山の花をこそ摘め

此砌聯句を心得たる出家居合せ、對のむねにて返歌したりし。

われ虱たいあかしつゝ足もんぢやう後の藪の竹をこそきれ

○ゆうべの說經に姥の泣れつるは、なにの哀をわきまへてぞと問うてあれば、なにも我

のめ—慶安本「くふ」

くすし—醫師

すうだ—極つて居る

かせ侍—やせ侍

○酢をおほくすへば皺がよる、大毒なり、かまへて酢をおまゐるな。左右もあらう、なにとして知りたるぞ。鼻のさきなる事をお知りあらぬか、我も人もちとづつ飲めとこそ思へ、年のよりて見苦しうなるいはれに、一年中のきはまり月を、しはすとはいふならん。

○神農といふは百草をなめ、もゝたび死して百たび活とやらん。人は皆くすしの上手とほむるが、我はいさゝかさも思はぬ、たゞ下手にすうだと思ふ。さてそちは神農の療治を受けたるか。いや推にも知り易き事がある。目の上の瘤をば誰もいやがる物にてあり、ぬしが額にある角をさへえ除けなんだもの。

○田舎のかせ侍、長陣の慰みに俳諧をして遊ばんといひつゝ、

人はらんほうをしてさへ送る世に

とあれば、さらばつけ申さんとて、

われらは野兵糧だにもなし

又ある人の句に、

おもきかろきは戀にこそあれ

懐紙—連歌を書きたる也

きもあへず、其米をば持ちて堀へ棄てよ、又おのれは早くくだしを飲みて、念佛の腹になきやうにせよと。敎のごとくくだしを飲む。明朝とふ、なにとくだりたるや。小者、なか〱はやなむあみだまではくだり、今一字くだりかねてや、腹中がぶつ〱といふと。

○小文字ある出家、俄に連歌を稽古せんと思ひ立ち、ふと都にのぼり、心がくる人のもとに頼みより、先づ床を見れば懐紙あり。あれは連歌。いやなか〱。賦何木連歌とあるを、くばるはなんぞもくれんがうたとよみ、理のすみたるといふ顔つきも、奇特の客とや申さん。

○宗長杵の神へ參詣の刻、

つくやうに守らせ給へ杵の神
米をばもたず連歌なりとも
ぐなり〱と秋風ぞふく

證歌の候や。なか〱とて、

わが戀は松を時雨のそめかねて眞葛が原に風さわぐなり

しよく―卓、食
やつさがり―午后三時
逆馬―入王
非時―僧家の食事

見のはゝきにくからず、侍從殿のはめづらしすぎた

○老いても文を好む人あり。机によりかゝりゐられたれば、文盲なる者來り見、こなたさまのそくさいにあるこそ道理にて候へ、昔から机による人は養生の藥になり、命もながき物やと、うらやむ事限なし。そちはえならぬ時宜をいふ、なんのいはれぞ。いやめいはしよくにありと。

○上手の碁が、今朝めし過よりやつさがりになるが、いまだ一番はてぬといふを聞きて、それは逆馬になつた物であらう、はてまいぞ。

雄長老

王故に歩をも馬をもたて置きてかくきやうの外に使ふ金銀

美濃の國に野瀨といふ碁打いまはの時、

碁なりせば劫を棄ても活べきに死ぬる道には手一つもなし

○法華宗の寺につかはるゝ小者、飯米を買うて來り、つきしろめ非時を調へて、坊主には參らせず、おのれ一人喰ひけるが、物語するやう、此米を持ちて來る途中にて、ある者念佛を申しかけて候まゝ、氣味がわろかりつれど、是非もなく飯にしたりと。坊主聞

○俊藏主といふ出家の子をもちたりしが、俊首座になりたる時、母の人にむかひいへるやう、おれがむすこ坊主始め俊上すというて聞きよかつたに、ひた物錢を入れ、揚句に今は一の俊すそになりたのと。

○なにとて芍藥をば歌によみたるなきぞと、不審する者あれば、それこそよみたる歌あれ。

　難波津に芍藥のはな冬ごもり今をはるべと芍藥のはな

○猿牽めが來たはと子供のいふを聞き、姥が出て、左右は惡ういはぬ事ぞ、おさるまちとて、人のとりをかぎりにおまちあるは、あの人のことでこそあらうずれ、勿體なさうにと。

○主は馬上にあり。中間鑓を持ち立ちながら小便をする。主見附けしかりければ、其返事に、人肥えたるがゆゑにたつとからず、手鑓をもつてたつとしとすといふ。主聞き、それやうに仔細ある事ならばせんかたなし、奇特な奴ぢやよと。

○兒のあそびに草合あり。一方より蘩蔞とて出さるゝ。侍從わきから笑止なる顏にて、いやこれははこくさとなほしたり。

○木鎌をもちて山へこそゆけ

といふ句を出せり。

宗匠きがまは如何と申さるゝ。古歌の候。

行きやらで山路くらしつほとゝぎす今一聲の聞まほしさに

○なにへんともなき者ども、三人つれだち清水へ參り、みちにて先に行く男、あの清水の觀音はなに觀音といふ物ぞ、奇特に人のたつとむ事やと。次なる者が、定めて釋迦か藥師か親類の觀音であらうまでよと。後なる男あたまをふり大に感じ、とかく物しりとつれだたねば理がすまぬと。

○中風を煩ふ者あり。醫者のもとに行き、脈を見せければ、藥ばかりにては治しがたき症なり、ふじ三里に灸をすゑられよといふに、いづれもかさねて談合候はんと、いそぎ宿にかへり、さて〳〵うつけたるくすしの申されやうや、富士はきゝ及ぶ大山なり。其ふじ三里が間に灸をせよとは、如何に病がなほるとても、抑もぐさが續くものかと。

雄長老

灸すゑて富士に煙はたやさねど猶ちか〴〵と足曳のやま

「雄長老」の三字及歌―慶安本になし

なれば、とくからおきて山にゆく者もあり、海にうかぶ者もあり、市にたつもあり、奉公に出仕するあり、日のくるればいづれも皆我宿々にかへりよるほどに、さてぞよるといふなるべし、又日ひんがしに輝けば、そめやはそめてかけ、ぬる者はぬりてほし、穢き物をも洗ひてほすに、いづれも残らずひるほどに、さてなんひるとはいふものよと。

物しらずか勞察やみか。

○盗人物をとりすまして、人なき所にあつまり、それ〴〵に資財をわけどりにしけるが、唯今までありつる身のくびが見えぬ、異な事やといふ。一人つらをふり〳〵、あら不審や、誰もこのうちにぬすみさうなる者はないにと。

○若輩なる者ども三人つれだち、長谷寺へ參りしに、宿のげす客にむかひ、行水をとるべきや、まづ入道をめされんやと問ふ。一人が傍に行き手まねきし、今下女の入堂をめさるゝかというたは合點ゆかず。つれ聽きて、それこそわれがよく知りたる事よ。此跡高野參りの時、男の髪を剃りて坊主になりたるを、さてよき入道やとほめつるが、今も入道になる者はないかといふにてあらん。又一人出て、それならば兎角、入道は若い者でいらぬといへ、無理になれとはいふまいぞと、呟きけり。

しつらい—失墜、損失
しあて—考へ當てた

まひに雁の汁をするとてやとひければ、亭主にも問はず客人のいくたりあるにも構はず、むざときりたるに役にたゝず。亭主大に腹立しければ、かの庖丁人、其儀ならば別の雁をきらしやれよ、此きりたるは手負なり。ありまの湯にいるれば治る、大事ないと。

○こしをひく人をみて、そなたの足は、つれに片足みじかいと問うてあれば、いやかたあし人のよりもながいというた。

　これはなにとしたる返答ぞ。

○ばくちうちが夜半過に宿にかへり、女房を起し、一世の間に、これ程うれしい事にあはぬと悦び、ふしまろび満足するまゝ、さては今宵ばかりは、ばくちにかちたる物よと思ひやり、いかばかりの仕合にや侍ると問ふ。返事に、今宵もばくちにまけ事はまけた、されども此まへ五百目に買うて、もちたる脇指を、二貫目にしかけてやりたるまゝ、一貫五百目のまうけをしたはと。

　たゞしつらいさうな。

○日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやと思ひ、われに折角思案し、ていとしあてたはとかたる。なにと工夫したぞ。たとへば朝に

さいぐう―齋宮、粢喰ふ

不祝言、飲むと喰ふとにもれたるやあると、物語するを聞いて、さればこそ天照太神も内宮外宮と建せられたと。それは何たる仔細ぞやと問へば、ないもくふ下もくふといふことよと。それならば富貴の人のくふむねはなきかや。それこそ飯酒はおんそろがのけて、さいぐうとたち給ふは。

天平十三年、皇太神於内宮南大杉下、行基持念七日之夜、神殿自開け大聲にて唱曰、實相眞如之日輪照生死之長夜、本有常住之月輪灼破煩惱之迷雲。

○月次の連歌の會に、

かま鷺は山の途中に飛びおりて

といふ句を出せり。宗匠たる人、つひにかま鷺のことばをきかずとあれば、本歌ありとも申すまじく候や。

うつり行く雲に嵐の聲すなりちるかまさきのかづらきの山

○一句出したるに、執筆、舟が近い〳〵といひけるを、とくと思案して、

舟でなし中くりあけた木にのりて

○手負には有馬の湯ほど藥はないと、人みないふを聞きたる庖丁人あり。さる所のふる

鼠戸—鼠木戸

金輪際—大地の底

て候者、かたのごとく弓を仕り候と。

○奉公を仕らんといふ。何も能はなきかや。鼓の胴をつがんといふ。それは難波かゝりか千草かゝりかと問ふに、されば私箸をけづりまるらするに、中はほそくて、両の端がふとう御座るほどに、大略は鼓の胴をもつがんやと申されし。

○能を見物せんとて芝居錢十文つかはし、鼠戸をば入りしかど、一圓おもしろき心なかりしかば退屈して、そとへ出度きよしをいふ。番するもの是をさらにゆるさず。さあらばいかほどにても、錢をやらんとわびたるに、百とりてぞゆるしける。彼の男やう〳〵垣のそとに出で、笠をぬぎてから世上をながめ、ふたつ三つあたまをふりて、あけくに百ではでものぢやと。

○愚なる女房の夫にむかひ、さら〳〵なき事をいひつゞけねたむ事あり。何といひふくめてもきかず。詮方なさに、其儀ならば大なる誓文を立てんと、扇をもち座をたゝくたく、下化衆生して金輪際におつる法もあれ、さうではないと喚きければ、女房まことに思ひきもを潰し、それやうに恐しい事はいはぬものぢやと。

○神々の祭禮といふも、佛閣の祈禱といふも、主のとぶらひ、親の年忌、いづれが祝言

やにはに棒をふりあげ、打殺さんとしけるを、北原より、やれ彼岸ぢやにおけ、ひらに彼岸ぞ、たすけよと呼ばはる。さらばとてたすけしが、彼南原の男、さて〳〵つひに彼岸といふ物を見なんだに、今日はじめて見たよ。彼岸が姿はそのまゝのいたちぢやと。

○折々柳原の道三へ出入の人あり。病者にむかひ、瀉するか、結するかと問はるゝを聞きゐて、ある時其仔細を問ふ。瀉することはくだるなり、結するとはくだらぬなり。これはこびたる事やとおもふ砌、親類の中なる商人來りて、明朝藝州へまかりくだるが、御用の儀は候はぬやといふ時に、なにと藝州に瀉する、やがて結せよと。

○兒に髪をゆひてまゐらする侍從、ある朝、われをば何ほどふびんに思召すやと問ふ。兒櫛のはに水をつけ、その雫を落し、此露ほど大切なるよしあれば、曲もなや、なむぼう奉公いたすもいたづら事やと、ふかくうらみける時、

露といふ心を知らぬはかなさよ消るばかりにおもふ我身を

僧都源信

人の身を露の命といひけるもつひには野邊に置ばなりけり

○始めて奉公をする人あり。主人ちかづけ問ふ、何ぞ藝があるかや。されば我等の兒に

武蔵鐙の心
―伊勢物語
「武蔵鐙さすがにかけて頼むにはとはぬもつらしとふもうるさし」

曾而那以合點

○何のとりえもなき者あり。ほど近にさすがなる侍のすまれけるへ、明暮に出入する。武蔵鐙の下の句の心や、問ふもうるさき様なりしかば、小姓にいひをしへ、件の男來りたらば、長數珠といへとなり。案のごとく暮がたに來れり。小姓出て、殿のいつも噂を仰せある、なにとやと尋ねければ、そなたをば長數珠ぢやとは、くるにくたびれたといふ事なるを、彼男はさか様に得心し、さうであらう、くるがおそいといふ事のと。

人の上ゆふつけ鳥のしだり尾の長物がたりこゝろあるべし

○無上の果位にのぼらせ給ふ釋迦だにも、二月十五日の夜の雲にかくれたまひし有様を、見ても知れとや寺々に、ことわりがほの涅槃像、かくるたのみも後の世を、知るや知らずや參りける。なかにことさらかたくなゝる姥が、うなづきいふやうは、しやかも果報な人や、やれ今日のねはんにおしにあつた。

○山中にて衣更著中旬に、農夫二人つれだち出で、一人は山の北原、一人は南原一町ばかりをへだてゝ畑をうちけるが、南原にいたち一つはしり出たり。見附けしを幸ひに、

ひいまでにてよからんものを、後のりよく〳〵が長過ぎて聞かれぬ、古流なり、とかくまけよく〳〵と、これをや、草つとに國かたぶくとも申しつべし。

○道の傍にはにふの小屋あり。かれに住む者、夜半過ぎて人しはぶきをし、しづかに通る音を聞附け、女の聲にて内にいふ。なにものぞ、さて此路のわろきに、いまゝでいねずしてうとく〳〵とありくはと。男の聲にて、あれやうに今時分ありくに別の者があらうか、ばくちうちか、數奇者か、連歌士か、三色の内でなくば盗人であらうまでよと。

○風呂に入りて聞き居たれば、一人吟ずるやう、山高きがゆゑにたつとからずと。一人耳をすまして、心がけたることや、庭訓をよまるゝといへば、一人、あれは庭訓ではない、式條といふ物ぢやと。

○ある者山路を行き、不思議に白鳥をひろうたり。更に鳥の名を知らず、人にむかひかくとかたる。聞く者それは時鳥であらうずといふ。いや大なる鳥なり、なか〳〵小鳥ではない。さりとも時鳥にすうだ、たゞとる山の時鳥とて、昔からある事よと。

かけぢ―がけ路

たれば、疑ひもなき白鳥なりと、切りてなかを見るに大概小豆の風味あり。今年あづきがたかい〳〵というたは道理かな、いくらの白鳥か、此ごとく喰ふほどにと。

○人のかよひもまれなる山中にて、座頭の琵琶を負ひ、岨のかけぢをつたふあり。薪をひろひ居たる賤の男これを見附け、むかうの谷に友達のゐけるを高聲に呼び、やい〳〵あの杖つきむしの出たを見よ、あら珍しや、つひに一期に見ぬ蟲やと呼ばはる時、此十年ばかり先に、あの蟲が此道へ出てあつたが、その年そばがよかつた、今年もさてはそばがよからうずよと。

○鳶は木にとまりゐて、蘆邊にすむ鷺にむかひ、そちほど色白くいつくしき姿は無し、如何にもものいひが粗相にて賤いはといふ。鷺腹を立てゝ、そちは鳥の中にても、四十八鷹の内に入て、空をたちまふ風情のよさ、そしらんやうもなきが、物ごしのくどさ、ながさ聞かれぬ、我がごとくこと葉ずくなならば、よからんものをと、こなしこなされ、かくてはこらへられず、誰そに批判をうけんと、おのれ〳〵が土産を用意するに、とびは例の腐りたる鼠をもとめ、鷺はかい〴〵しくとびをどる鰌をとゝのへ、鷲の棲むなる峯に飛ぶ。二鳥の聲を聞きて、鷺はいかさま言便みじかく當風にあへり、鳶はなにとや

兼日より―前日より

家高―氣高の意

○人ありて晝は振舞に行くといふ。一人いふ、ふるまひにてはなし、ふれまひがよしと、二人の論つひに果てず。折ふし廻國の沙門あり。理は左右方ともにあきらけし、予が決するいはれを聞け、兼日より人をまはし文をつかはしよぶや、よばるゝをばふれまひといつて其くらゐおもし、自然天然と行きがかりに、とりあへずふるまひふるはるゝをば、ふるまひとよんで、くらゐかろくよし。

○始は富みて世を過しける人、俄に落ぶれたればせんかたなく髮を剃り、なにのあてことはなけれど田舎にくだり、傘をさしかけられ、位だかなるふりをしてありく。人是を見れば、なにとしたる家高ぞや。ひとりがいふ、唯公家といふ人であらうまでよ。いや一とせわれも在京して、公家たちのふりをも見たりしが、あれやうなるは見ぬと。ひとりがいふ、くげでなくば十けといふであらうずと。

○山家にはれがましき客を請ずるとて、白鳥をもとめにつかはす。使、鳥のすがたを問へば、たゞ白き鳥なりとをしふる。心得て市に出でたづぬるに無し。あの棚に白き卵のやうなるものあり。是をしりめにかけ、白鳥かはう〳〵とよばはるまゝ、かしこき亭にて、白鳥をうらんとよび入れ、まんぢう廿を一貫にうりけり。取りて歸り庖丁人に見せ

功者めきたる―利口らしき

の頭巾といふ物ぞ。一人、いやこれはありけうがりのあたまかくしといへば、すこしもまことにせず、唯奥の山の刑部兵衛こそ、若き時殿の夫にさゝれて京へのぼりし者なれば、かれに見せずばすむまいと、はる〴〵持ち行き見せたれば、是こそ賀茂のまつりに能といふ事ありしが、一番に出た三番叟といふ物よ、これ〳〵、されども顔から額がうせたほどに、必定三番叟のぬけがらといふ物ぞと。

○柘榴を見て、一人はざくろといふ。一人はじやくろといふ。あらそひつひにやまず。あたりのものゝしりに問ひければ、二つながらかたことなり。にやくろといふがほんのこと。

○山中に祝言の事あり。たこを買ひにつかはす。使そのかたちを問ふに、功者めきたる男、つるにいぼあり、いかに似たる物、わるうすれば見ちがゆるとをしへけり。堺の津に出て大道をたづぬるに無し。ある横町にをしへのごとくなるものありとて、穂俵をぞ買ひける。山に歸り彼功者に見せければ、これは蛸ではないいかぢや。いやたこにすうだ。さらば殿の御目にかけ、理をすませとて見せ參らせたれば、蛸でもいかでもなし、からざけといふものなり。

市二郎慶安本によりて補ふ

たうど―差當り

ひやうふつと―慶安本無し

と云はれた―慶安本により補ふ

殿の舍弟候よとかたる。さればかりそめ見たる體、あにごより舍弟の器量はましてなどほめけり。その一座過ぎて市二郎親にむかひて、われになにとも名がなくば大事もないが、幸ひてゝの市二郎とつけておかれたに、やゝもすればうつけ者が來たりては、市太郎の舍弟々〳〵といふ、たうどこれが氣の毒やと。福右衛門きゝて、さあらうずる、それほどの事をばこらへよ、世の中はふせうばかりぞ、われがまへでも福右衛門といふ名をばいはずして、ひようふつと市太郎殿の御親父とさへいふ程にと云はれた。

○山ふかく住む者、二人つれだち國中に出でけり。ふるまひの膳部に、螺の壺入をすうる。珍らしき物かなとて、二人ながらかの螺殼を懐中して歸りぬ。一人はへふぐりといふ物と、一人はまどひきといふ物とあらそひ、峠の若太夫こそ、かゝる物をば見知らんずとてさし出したれば、よく見知りたるがほに、造作もなく、へふぐりでもまどひきでもなし、にかはづけといふ物によ。

○何者ののぼりくだりにおとしたるやらん、信濃國の山道に烏帽子あり。ひろひきたり、かやうの姿なる物世にためしなし、いかさま天人の道具か、山姥などの寶かや、老たるも若きも、是を見よや拜めやと、かちはだしにて走りあつまる中に一人、是は禰宜

すうだ—極つて居る

知れず—慶安本「知れぬ」

あり—慶安本により補ふ

めければ、そなたよりわれがうみの母にて、よく知りたり、あれは二十になるにすうだといふ。二十でこそあれといさかひ果てず。かゝるところへ年至極の姥來り、何事をいうてからかひ給ふぞ、あのお五の年ならば、なにのまぎれもない事が、われが處にある、とりて來て理をすまさんと、急ぎ内に行き、大なるふくべを一つとりて來れり。こは何物ぞやと問ふ時、これでざつとすうだ、あのお五のうまれどしに、此ふくべがなりてあつたと。うばが年代記にていよ〳〵知れず。

○道ゆきぶりに蛇の竹にさしてあるを見、先なる者、いかいへべうがあるはと。次なる者、いやこれはへべうではない、ぐつねふといふものぞと、互にあらそひしが、此上の山寺に物しりの出家ありと聞き、それに行きて理をすまさんとかしこにいたる。坊主見て、どちもわるい、これはまむさうといふものにすんだと、二人ながらこゝろにはすまねど、物しりの批判なれば、あまりにちがふまいと合點す。

○一生よみかきの望もなく、唯富貴して世を送る人あり。名を福右衛門とつき、惣領を市太郎、弟を市二郎とてあり。貧者あつまり、手をつかね、ひざをかゞめもてはやしけり。ある時市二郎を始めて見たる者、これはどなたにて候やと問ふに、あれこそ市太郎

つひ―慶安本なし
お五―娘御

目をば子にやるべし、子に遣すといひし五百目をば後家にわたし、それをもつて寺參の香花にあて、そちは一圓子に打ちかゝり、心の儘に馳走せられ、安々と世を送れ、もし子があひしらひあしく、氣にあはぬ事あらば、こちへ知らせよ、曲事に行はんと下知ありつれば、聞く者皆涙を流さぬはなかりき。かくて座を立たんとするに、件の親がいとこたる老人とて、書物を一通持ちて出で、周防守へ捧げていはく、さだめて一度は子と後家と、出入あらん事うたがひなし、これを上げて申せ、後家にいひわたしたるは始めの日附なり、そちへ書置は日附後なりと申せし、今仰出さるゝ御下知を謹んで承らんため罷出でたり、親が存じたりし心底と、御批判の趣、すこしも違はずと、手を合せ禮して感じたり。

いやな批判

○母の娘にむかひ、そちは早や年二十になれど、つひに聟をうむすべさへ知らいでと叱りけるを、隣なる家主の女房居あはせて、それやうにあひだてなさうに物はいはぬものぢや、これのお五はことし二十にこそならるれ、智慧もつく時分があるものぞと言なだ

板倉周防守―慶安本五字なし
申す樣―慶安本なし
才覺―機智
周防守殿―慶安本「所司代」とあり

て、おもふさま馬追を叩きたり。其上に町奉行へ出て、馬追に辨させられよとあれば、九兵衛聞いて、尤もなり、さりながら辨させたらば、又そちをも叩きかへさんずるはいかに、たゝかずば道理至極せんものをと申さるゝにぞ、たゝかれんがいやさに口を閉ぢぬ。

○京にて銀子三拾貫目持ちたる者、命終る時妻にむかひ、我が先腹の男子六歳なり、十五まではそだてゝ、十五にならば銀を五百目わたし、いづくへも商につかはすべし、残る銀はそちまゝにせよと、遺言して書物をし渡しぬ。彼子既に十五になる時、右の後家銀子を五百目子にやり、いづくへも出よといふ。子、さりとも難儀なる旨、所司代板倉周防守へ申上ぐる。母と子とを呼び出し、委細にいはせ聞給ひて、其町の年寄どもにかの親の行跡はとあれば、一同に申す樣、世に越えたる理知義者、又才覺もあり、公義の御用をとのゝへ、町の重寶にて御座候へと。周防守殿後家に問ひ給ふ、その銀子は元のごとくありや。なか〳〵あり。さては汝が夫、日本一の思案者なりしぞかし、其故は、一人の親として子に物のをしからんや、女房に取らするといはずば、銀子をみな遣ひすつべしと、工夫の上にていひ置きたるなり、然る間、後家に取らするといひし三拾貫

大樹―征夷大將軍

ちは歸れとて戻されたり。後かのゐざりを、物取らせんとなり、參れやとよびよせ、ふびんの姿なるに、あれにこゝなる釜を取らせよとて、失せたりしほどの釜をやりければ、彼ゐざり悅びあたまにかぶりて歸る。さては件の釜をぬすみたる事、うたがひなしとて下知せられる。

○そちは生得貧乏なる體を見およびしが、今はひきかへて、けしからず有德になりたるよし風聞するは、實かと問ひければ、なか〳〵の事や、我等ごとき者をも、富める人の内にさたするかよ、惣別無力にて人の物をばかりかり居たる身の、當時わづかの貯へあるを見て大にいひなすよなう、是をおもふに、牛には大なる角二つあれども、見つけたれば目に立てず、若し馬に角あれば、ちひさけれども目に立てて、名をたかういふ心是なるべし。

○葛かづら先へ這はずと後へ這へ

紹巴の非言に、御國元のくずかづら御折檻か尤々と。

○そのかみ大樹より仰付けられ、彦坂九兵衛駿河の町奉行なりし時、藥院のとて藥のつつみ紙を馬につけくだりしが、馬田へころび紙をぬらせり。荷物にそひたる侍腹立し

紹巴──連歌の宗匠里村紹巴

かくなるものかさすらへの果
この神のかへり北野に跡たれて

此附句執筆かきとむると同じく、社頭震動し暫くやまざりつるは、神も大に納受したまふにやと、人皆感じ申したるよし。

○陰極つて陽生ず。

あたゝかになれとて寒き春の雨

陽きはまつて陰生ず。

寒かれとあたゝかに降る秋の雨
蛬そのおや〱はいかならん

といふ句あり。紹巴の非言に蛬の先祖御尋ね詮なく候。

○人ありて所司代に出で申上げけるは、我等の家へ常に参る乞食の候、ゐざりにてあればふびんに存じ、折節は庭のすみに伏せりなどいたし候ひつるが、外より盗人の入りたるとも見えざるに、飯を仕る釜の失せ候、案ずるに彼のゐざりの取りたるものならん、いかがと申せば、多賀豊州聞いて、其ゐざりはいづくに居るぞとたづね、さらばそ

ありがたき
ー慶安本此
句なし
枉惑なるー
道にはづれ
たる
ひて買はん
ーひては籤
てなるべし

所司代へ罷出で、始中終を具に申しければ、多賀豐後守下知せられけるやう、扨は鼠は盜人なり、盜人の居たる家なる間、闕所せよやとて、家財をこと〴〵く取り、しちおきに出されけり。

ありがたき心の水晶なり

窮鼠還嚙猫とあれば、にくむ處枉惑なる鼠根性なるかな。

○九重の内、油の小路通りに、何事やらん雜人あつまり、かまびすしく物あらがうていあり。沼の藤六行きあはせ、立寄り樣子を聞きゐたるに、一方は丹波より荏をもちて、賣りにのぼりたる商人なり。一方は京の油屋にて亭主なり。亭主は荏をひて買はんといふ。丹波の者は昔よりひずに賣りつけたり、今更何事にひては賣るまいといふ。口論はてず。時に藤六近頃さしいでなれ共、洛外にてはともあれ角もあれ、都の内ならばなかなかひてとる事はなるまい、其仔細は、いろはにゑひもせす京と定れり。ひずに買へと。

○親子諍　子が僻事と云ふ題出たれば、　徹書記

落葉かきに親子いでての諍ひはちよりなりけりからさきの松

○北野の神前にて祈禱連歌あり。

かいけつ―かき消す

念もなし―とんでもない

いけつやうに失せぬ。唯の人はそのおとゞの靈鬼に逢ひて、さやうにはいかで言ひてんやとぞ、時の人感じ奉りし。

○京にて家を買うたる者、其家につきたる廊下あり。これをもこぼし取らんとす。賣主、念もなし、我は家一つをこそ賣りたれ、廊下のことはおもひもよらずと、牛角に理を言ひつのりて、一向すむべき道もなければ、互に公議の沙汰となる。所司代多賀豐後守掟して、廊下はこれ通路のためなり、後につくれる家の方へつくべしと下知せられたり。

○春のころ野遊に人あまたさそひ出で、このもかのもを見る折から、胡蝶の三つ連れて飛ぶを、蝶ならば二つか四つこそあるべけれといふに、兒のうちより、一つをも千鳥といへる名のあれば三つをもてふといふべかりけり

○平安城にて質に具足をおき、うけむとする時に見れば、鼠が糸をくひたり。うけぬし難儀におもひ、いろ〳〵理をいうてなげき、さらば利足をなりとも、すこしはゆるされよとわびけるに、質屋さらにきかず。剰へ鼠を一つ殺して、これが藏にゐて具足をくらうたる科人なり、然る間成敗して候ともたせつかはす。しちおき口惜き事に存じ、

敷より直ぐに家をいでよと。

○刀のうりかひありし。もちぬしは二尺三寸にあまりたれば二尺五寸といふ。又買ふ人はいや五分や三分ながくとも、二尺三寸というてあらそひけるが、めきゝするうへにこそ、其ならひはあらんずれと、鍛冶のもとに行き聞きてあれば、兩方ながらよく見られた。これは二尺四寸といふものぢや。

○河原の院は融の左大臣の家なり。陸奥のしほがまのかたをつくりて、潮をくみよせ、鹽をやかせなど、さま〴〵可笑しきことをつくし住み給ひける。大臣うせ給ひて後、宇多院には奉りたるなり。延喜の御門たび〴〵行幸有りけり。院のすませ給ふ夜半ばかりに、そよめきて人の參るやうに思され見させ給へば、緋の裝束うるはしくしたる人の、太刀はき笏とりて、二間ばかりのき、畏り居たり。あれはたそと問はせたまへば、ここのぬしに候翁なりと申す。融の大臣かと問はせたまへば、しかに候と申す。さはなんぞと仰せらるれば、家なれば住み候よ、おはしますが辱く所せく候なり、如何仕るべからんと申せば、それはおとゞの子孫の我に得させたれば住むにこそあれ、我おしとりて住むにはあらず、禮も知らずいかにかくは怨むるぞと、高やかに仰せられければ、か

死にけり。其女の夫理不盡に、態と殺さんとて落ちたるものなり、是非こらへまじきといひ所司代へ出る。伊賀守殿、餘儀なき存分なるまゝ、幸ひ手本あり、右家主の妻を我が女の居たりし處に置きて、そちの屋根にあがり、最前のごとく落ちかゝりて、にくしとおもふあひての女を殺せとあれば、言葉もなく歸りつる事よ。

○板倉伊賀守殿、齡七旬にあまれば、功名かなひとげて身を退き、嫡子周防守殿次で天下の所司代たりしに、上京にある家主あひはてけるに、二十あまりの子あり。母は繼母、其惣領には家を渡すまじ、我に跡をしれと夫の遺言なりといふ。惣領は眼前の親子たる我をのけ、別に誰か家をしるべきやといかり、所司代へ雙方出けり。互の意趣をいふ口上に、妻の申すやう、後家と書きてなにとよみ參らすると。周防守のちの家とよむとあれば、其儀ならば我等のしらでかなはぬ事にこそと申す時、まづ立ちて歸れ、かさねてせんさくしすまさんとなり。宿に戻り、公事かちたり、さらば尼にならんと親類いひ合せぬ。再び裁許とて又決斷の座に出でたるに、そちは髪を剃りたるかとたづねらる。なか〳〵、二度夫を持ち、うき世の望あらばこそとおもひさだめ、出家のすがたにまかりなりて候と、其言下に周防守殿、さらば出家とは家を出ると書きたるまゝ、此座

板倉伊賀守―慶安本「御所司代」とあり

周防守殿―慶安本四字なし

周防守―同本「所司代」とあり

周防守殿―同本「所司代」とあり

目安―告訴状

板かへし―板屋根の葺きかへ

て、御身ははや家をも請取り、讓をも取りたれば、今この家と少も殘れるものを、妹の子に聟をとりて渡せとの遺言なるよし言ひければ、其子、我はさせる讓をも取らず、此家も財寶もえこそやるまじきと、座敷をけたてゝ立去りし後、結句家を請取らんといふ使を立つるゆゑに、老母腹を立て、燒いては棄つるとやるまじきものをとあれば、町衆あつかひに入り、さきに母のいひわたされたるすぢめに、教訓するもとゝのはず。惣領目安を認め所司代へ出にけり。伊賀守其趣を懇に尋ね問ひて、對決に及ぶまでもなく大にいかりて、孝は百行の始めなれば、不孝百惡のもとゐなるべし、たとひ母のいふ所僻事なりとも、孝の道を存ぜば、獨ある老母に隨はぬ事あらんや、諺にも、親ものに狂はゞ、子は囃すべしといひならはせり、其上是は母の理至極なり、亡父が遺言をそむくといひ、老母の命にしたがはざる不孝不順の過と云ひ、旁以て曲事なり、汝ごときの者を其儘洛中におかば、又よの人にも惡行あらん、はや〳〵京を出よ、延引せばはからふべき事ありとの下知にて、言葉もなくうせ行きぬ。

○綾の小路にて板かへしする日、家主の女房屋根にあがりしが、いかゞ踏はづして落ちたり。となりの女房其下にゐあはせ、あたまの上へころびかゝれば、くびの骨ちがひて

膝のもとになつけ、火燵にあたらせ、菓子などとりくはせ、心やすくおもふかほばせの折、そちは伯父のもとに居たいか、また母のところに居たいかと問はせ給へば、伯父のところに居たいといふ。さらばもとの處へゆけとありし。をぢと後家と子の手をとりうばひ呼ぶ。子はなく〳〵をぢのひざに居けり。伊賀守下知せられけるは、まづしばらくをぢのかたにあづけよ、とかく子は伯父になづいたほどに、後はともかくもあらんと、やはらかにいうてもどされし。

○京にて猫をうしなへる者あり。厨子小路にいたり、身をやつし尋ねしが、ある所にて不思議に見附け、これは我猫といふ。亭主出てそちがといふ證據は。又汝といふ證據は。惜く欲くのあらそひなれば、是非終にわかたず。板倉伊賀守是非のあひて二人對座させ、件の猫を座敷の中におき、もとの主も、今の主も、手に鰹を一ふしづつ持ちて呼べ、生れてよりそだてなれたる方へこそ行くべけれと。案のごとく、始めうしなひし者の膝の上へ、なく〳〵行きし事よ。

○京矢田の町に夫婦の人ありしが、夫さきに立ち、妻歎にあけくれ一週忌も過ぎぬ。後家、惣領の子と其妹を呼び、なき人の事かたり出し、涙をおさへつゝ惣領にむかひ

に、伊賀守、事の多さに忘れて候、今思案するに、時は盂蘭盆、科は瓜一つ、是ほどの裁許は初にすべかりしかど、瓜賣の慳貪なる心根がにくさにのべつるぞ、飢に望みたる者を見ては、まねきても與ふべきに、せんかたなき者をとらへきて、錢一文の事にくびをはねよとはなんぞ、慈悲をせさすべきために、此中はやしなはせたり、いそぎその者ゆるしかへせと下知あれば、其席にありし人、みな頭をかたぶけ、感涙をながさぬはなかりし。

○下京に、ちと有德なる者男子を一人持ちたり。彼二歳の春母にはなれぬ。繼母にそはんをいたはりながら、さすが男やもめにて送らんよしもなければ、かさねて妻をもとめ置きしが、惣領すでに六歳の春、父病の床にふしぬ。かなふまじき事を得心し、兄にむかひ、我子幼稚なり、そちへとり養育成人ののち、家をわたしてくれられよといひ置き、終にむなしくなれり。遺言のごとく、子を伯父の方へよびとらんとするに、繼母いふ、我腹を出ぬばかりに、いかほど辛苦して年月そだてたるぞや、その上此後又夫にそはんにもあらず、髮をそりあの子をそだて家をもりたてんもの、なか〳〵そちへはやるまいと怒り、雙方伊賀守の前に出たり。いふ處いづれも理あり。それなる子爰へ越せよと呼び、

結縁—供養

造作する物—面倒な事をするもの

くしつるものに、過錢として三貫文いださせ、以前の百姓に扶持ありし事よ。

○慶長七年七月七日に、せなかに負籠などいふものをかけつる人足、やせくろみ竹杖にすがり、京の町をとほれば、見る人、あなおそろしく、げにやらん、この頃は地獄の釜のふたもあき、罪人聖靈となりくるなると聞くが、さやうの者にやといひあへるに、此者みせによりて瓜を一ついかほどといへば、二文とこたふ。腰に只一文あり。盆の結縁とおぼして給はらんやと。其分にもせんとあり。卽ち瓜をとり、かしらよりかぶりくらひて後、はさみたる錢を見れば、おちて繩ばかりぞ候ひける。瓜の主人慈悲とおぼしめしゆるし給へかしと歎くに、此人天然と慳貪にて、沙汰の限、すりのたぐひとおぼゆるなり。出させ給へと町の人を催し、やせたる男を追立て、板倉殿垣の内に引きすゑ、右の樣子具に訟へ申す。人足もありのまゝ言上す。伊賀守聞き給ひ、何れも事の實否を糺明すべし、先づこの者を瓜賣に預くるぞ、二時の飯をそちあたへ、晝は町としてよきに番すべし、ゆるがせならば我をうらむなとて歸されけり。只一文の事にいらぬ儀をいうて、造作する物とは思ひながら、一間なる所におしこめ、番をすゑ、毎日の食をぞあたへける。六日七日に及べども、糺明なければこらへかね、おの〳〵參りて御糺明あれかしと申す

肩衣袴―上下

右の趣を申せば、此事いかにと尋ねとはるゝに、侍も陳ずべきやうなし。伊賀守雙方を開きて、詮ずる處是は十疋の料足さへ取れば、茶屋もいひ分あるまじきかと問はる。なかなか別の仔細候はじと申す時、さらば烏目とらせよと、十疋をつかはしてぞかへされける。侍には、御邊關東の人といふ、京伏見は、故鄕にて知音などある所にかはり片通りなれば、後に返辨せんなどいひ、物の代をすまさず過ぐる事はなるまじきぞ、以來其心得あれと、異見してぞもどされける。

〇山科の百姓薪をこり、負ひたるまゝ山より直ぐに京に出でて賣る。さるほどに彼薪の上にさして置きたる鎌をうちわすれ、宿に歸り漸く思出し、右の薪かうたる人のもとに行き、件のよしをいひてければ、主人出合ひ、われは薪をこそ買うたれ、鎌をば買はず、何事をほれていふやらんと、一向とりあはねば、是非なうて所司代へ申しけり。雙方よびいだし聞きての上に、伊賀守、先づしばらくほどあらんに、肩衣袴をぬぎゆる〳〵とゐると氣をくつろげ、ぬぎたるをとりよせ、そともたせつかはし、此肩衣袴と、そちにある鎌をかへておこせよとあれば、女房うたがひなく思ひわたせり。其ごとくなる鎌を五六挺まして出し、百姓に見分けよとあれば、是ぞ私のなれとて取りたり。其後鎌をか

方江戸に參り、大相國御前の沙汰になれり。其砌京の所司代下向あり。御まへにはんべられし。此裁許いかにと御諚あるに、謹んで造作もなき儀と存じ候、幸ひ札の上にて亭主がかりたる刀をながし候はゞ、又山伏がかりたる家をも、みな山伏がに仕るべき物なりと申し上げられしかば、大相國御感甚だしかりし。當意卽妙の下知なるかな。以$_{二}$正理之藥$_{一}$治$_{二}$訴訟之病$_{一}$、挑$_{二}$憲法之灯$_{一}$照$_{二}$愁嘆之闇$_{一}$といふ金言もよそならず。

さすがおくかとおもふ守家

一腰の刀ならではしちもなし

○大佛の前にて、わかき侍の小者二人つれたるが、茶屋によりひたもの餅をくひ、時宜なしにたゝんとする。亭主、錢はといふに、一錢のあてなし。いづくの人ぞ。我は關東の者なり、賴たる人の使に京へのぼる、今朝は夙出でたり、やがて返辨に及びなん、此度はかけられよと。亭主返答もせずあざわらつて、かくるとは二文や五文の事候よ、十疋は過分なり、錢なくば脇指を質にとらんと。侍、主の使に行く者のまる腰はいな物なるべし、許されよとわびてもきかず。侍ほどの人料足なくば、くふまじきにてこそあらんめ、とかくわやくなり、いざ板倉殿へ行けと、町の年寄をつれだち所司代へ出づる。茶屋

さすが云々

—慶安本「歌なし」

「從一位の右大臣」「源家康公」「板倉伊賀守」─慶安本十八字なし

花に心をそめられしも尤ゆゑあり。

雪ならば幾度袖をはらはまし花のふゞきの志賀の山越

自今以後勝劣をあらそはず、中をなほりて、同入和合の床に勤學あれと、しづめてこそ御歸りありけれ。

○從一位の右大臣征夷將軍源家康公天下を治め給ふ。この御代に賢臣義士多き中に、板倉伊賀守京都の所司代として訟を聞き、理非を決斷せらるゝに、富貴の人とても、へつらふ色もなく、貧賤の者とても、くだせる體なし。然る間上下萬民裁許を悅んで、奇なるかな妙なるかなと、讃嘆する人ちまたにみてり。一滴舌上に通じて大海の鹽味を知るとあれば、其金語のはしをいふに餘は知りぬべきや。しかる時、越後にて山伏宿をかりぬ。其節國主の迎に亭主罷出づるに、かの山伏のさしたる刀、こしらへといひ、つくりといひ、世にすぐれたる物なるをかりて行き、いまだ宿に歸らざるあひだに、一國德政の札たちけり。去程に亭主かへりても、刀をかへす事なし、山伏こらへかね、しきりにこふ。宿主返事するやう、そちの刀がりたる處實正なり、されども德政の札立ちたる上は、此刀もながれたるなり、さら〳〵かへすまじきといふ。出入になりければ雙

角よろしからねば、

　昔よりきどく有馬の湯ときけど腰をれ歌はなほらざりけり

○市のたつ町のかしらに小宮をたてゝ、えびすの作りたるあり。立寄るもの、あらいつくしのえびすやとほむるを聞いて、あれをえびすとはいはぬ物ぞや、きびすといふがほんなりとからかふ。町奉行へあげてすませと、雙方出でたりければ、どちも大事なし、木にて作りたるはなんどきもきびす、紙に書きたるは、いつとてもえびすといふべし。

○比叡山にて、北谷の兒は雪に過ぎたる物やあらんと愛せられし。又南谷の兒は花にまされる詠めやあらんと興ぜられし。かゝりし程こそありけれ、後にはあなたこなた心なきに心をつけ、いさかひになり、花をばあしくいひちらし、雪をばいなものに言消し、雪のかたよりは、花をほむる狼藉の類をよせてかたんといふ。又花のかたよりは、雪をほむるうつけどもを、たゝばたいてのけよと、互にいかれる心たけく、山のさわぎことの外なりし。西三條逍遙院殿つたへきこしめされ、わざと山におのぼりあり。雪にめでられしも理あり。

　花ならば咲かぬ梢もあるべきに何に譬へん雪の明ぼの

うつけどもを—慶安本「うつけものを」
たゝば—同本「たゞは」
心たけく—同本「心しげく」

醒睡笑　卷之四

聞多批判

○貴賤袖をつらね、われも人も數珠つまぐる體を見、被官たる者、やさしやひうがんとて佛參りをつかまつるよといふを主聞附け、ひうがんはかたことや、ひがんといへと。これはかゝる事われらもはや五十にあまれども、ついにひうがんとこそ申しならはし候へ、彼岸といふは聞かず。主大に腹を立て、あひてに足らぬ事なれども、あまり汝あらそふがにくき程に、地頭に儀を得よやとて、彼批判を聞きたれば、雙方に理あり、彼岸は春と秋とにわかてり、秋は收納のいとなみ、月は夜田かるいそがはしさに、如何にも言葉みじかきを要とし、ひがんといふよし、春は四方の山並打霞み、百嚩の鳥のいろ、花ならねどもかうばしく、隙ありげにも胡蝶まひあそぶ、いとゆふ織ぬれば、ひうがんこそよろしからめ、あなかしこあらそふ事なかれ。

○西三條逍遙院殿、御養生に有馬へ湯治ありし、其時歌の點を望みて參らせあぐる。兎

地頭―領主
儀を得よや―解釋を求めよ
いとゆふ織る―かげろふのもゆる
西三條―實隆

一身いづれの處にか隱さんと書かれしを、右の歌に引合はせて衣の袖をしぼりにき。

かいけつ――かき消す

證果の身――悟を開きたる身

きりて、皮を左右へ引きのけたるより、金色の菩薩のかほをさしいだしたり。一人は十一面觀音と見る。一人は聖觀音と拜奉りつる。見るまゝに寫し奉り持參りたれば、御門おどろき、別のつかひをたてゝ問はせ給へば、かいけつやうにうせ給ふ。

○天竺に一寺あり、住僧おほし。達磨和尚僧どもの行ひを見給ふに、念佛するあり。或房に八九十許なる僧、只二人碁を打つ外は他事なし。達磨件の房を出で他の僧に問ふ。答言、此二人若より圍碁の外する事なし、仍つて寺僧いやしみ、外道の如く思へりと言ふ。和尚聞きて、定めて樣あらんと思ひ、彼老僧の傍にて碁打つ樣を見れば、一人は立ち、一人は居ると見るに、忽然として失せぬ。あやしく思ふ程に、立てるは歸り、居ると見れば又居たる僧失せぬ。さればこそと思ひ、圍碁の外他事なしと承る。其故を聞き奉らんと宣ふに、答言、年來此事より外はなし、たゞ黑勝つときは我煩惱勝ちぬと悲み、白勝つ時は菩薩勝ちぬと悅ぶ、打つに隨ひて煩惱の黑を失ひ、忽ちに證果の身となり侍るなりと云々。

山のはにさそはゞ入らん我もたゞうきよの空に秋の夜の月

解脫上人の、世に隨へば聖あるに似たり、俗にそむけば狂人のごとし、あな憂の世中や、

ほぐし―火串

やなぐひ―矢を盛りて負ふ具

○大和國の龍門の聖といふあり。聖としたしき男の、明暮鹿を殺すにともしといふ事をしける。闇き夜ねらひがりに出でたり。目をあはせたれば、鹿ありとておしまはし〳〵するに、慥に目をあはせたり。ほぐしに引掛け、矢をはげ射んとふりたて見るに、此鹿の目の間、例の目の色に變りければ、あやしと思ひ弓を引きさし、矢をはづして火をとり見るに、鹿の目にはあらず。ちかくより見れば身は一定の革なるが、靜に火をふき見れば此聖の目うちたゝき、鹿の皮を引きかづきふし給へり。こはいかにといへば、ほろほろと泣きて、わぬしが制する事をきかず、いたく鹿を殺す、我鹿にかはりて殺されなば、さりとも少しは留りなんと思へば、かくて射られんとして居るなり。男ふしまろび泣き、卽ちやなぐひ皆うちをりくだき、髻切つてつかはれてゐける。

○昔もろこし寶誌和尙といふあり。道德おはしければ、帝彼姿を影にかき留めんとて、繪師三人を遣し給ふ。三人めん〳〵にうつすべきよし仰せふくめらる。和尙へ參りかく宣旨を承りまうでたるよし申せば、しばしといひて、法眼の裝束し出合ひ給へるを、三人各かくべき絹をひろげ、既に筆をくださんとするに、聖しばらく、我まことの形あり、それを見て寫すべしとあり。左右なくかゝず御顏を見れば、大指の爪にて額の皮をさし

をつけ參らする中に、權梗坊とて、勇猛精進なる老僧のよめる歌こそ殊勝なれ。

天をさへかけりし梅の根につかば土よりもなど花のひらけぬ

たんざくを木の枝にむすびて、足をひかれければ、すなはち綠の色めきわたり、はなさく春にかへりしことよ。人々感に堪へで、かの沙門を、神とも佛とも手を合せし。梅はこれ我が愛木と賞ぜさせたまひ、

いづくにも梅だにあらば我とせよたとひ社はありとなしとも

梅あらば賤しきしづが伏家にもわれ立ちよらん惡魔しりぞけ

○さしもたつとき老僧のもとへ、松茸のさかりなるを人のおくりたり。とりはやし賞めゐける處に、そこつなる小僧の出でて、松茸一つ取上げ、これはそのまゝ、これの地藏のあたまに似たはと申しければ、老僧淚をながし、衣を著し、地藏のまへに參り、今小僧めが申せし狼藉を、まつぴら我に對してゆるし給へと悲しまれしは、思ひやられてありがたや。

○栂尾の明惠上人は、春日大明神直に御言葉をかはし給ひしが、

けがさじと思ふ御法のともすれば世わたる橋となるが悲しき

闇にはすめると、あはれむ者もおほかりし。又悪性の者あり。うたがひおもふ、あれはどおそろしき處に、何としてひとりはすまれん、たゞ女房のある者よと、嵐冷じき冬の夜立聞をしけり。彼僧終夜の語に、そなたがゐればこそ、此寒夜にもあたゝかなれ、いとほしの人やといひけり。紛れもなき夫婦にこそと、人あまた押入りて見れば何もなし。坊主の愛せらるゝものは何ぞと問ふに、これなん我が伽なりといつて、三升ほど入る大徳利をばいだしつる。

○禪に一路とて得法の僧ありし。和泉の國大鳥の邊に草庵をむすび、友もなく星霜をおくらるゝ。財寶とては手とりとかやいふ、ちひさき釜に口のあるを所持し、朝夕の煙を立てられき。ある時たはぶれて、

手どりめよおのが小口のさし出でて雜炊にたと人にかたるな

身をかくす庵ののきの朽ちぬればいきても苔の下にこそあれ

月は見ん月には見えじながらへてうきよをめぐる影も恥かし

○百三十年あまりの跡かとよ。筑前國宰府の天神の飛梅、天火にやけてふたゝび花さかず。こはそも淺ましき事やと人皆涙をながし、知るも知らぬも集りて、思ひ〳〵の短册

さやるせなし。そと口をあけ給りぬ。そろ〳〵寺にかへるに、それはなんぞ。常のごとく經にて候といふ。さらばちといたゞかんとて手に取りふりて見、まことにお經やらん、内に五ぶ〳〵といふ聲がする。

○僧俗よりあひての物語に、今程は事の外鮒がやすきよし、坊主のいはれけるを、俗いふ、奇特な事や、こちさへ知らぬとあてたれば、いやわれは知らぬ、寺中の取沙汰ぢやと。

○ある出家、ふかくかくして鱠をくひける處へ、ふと檀那來れり。爲方なさに皿ともにあたまへうつぶけ、手にておさへたれば、頰からおとがひへ汁のながるゝを見附け、こなたには腫物ができまゐらせたかと問ふ。おうといへばよかりしを、あまりに膽をつぶし、いや俄にぬたなますができて候といひけり。

淸僧

○人跡絶えたる山中に一字の堂あり。甍やぶれては霧不斷の香をたく境界なれば、世にあらん人の晝だにも立ちよるべきよしもなきに、いかなる不惜身命の行者なれば、此佛

世のするゑは墨の衣も武士の奴となれる法ぞかなしき

中峯和尚修行記　身著二法衣一思染二俗塵一

黒染の衣に似たる心かと問ふ人あらばいかゞ答へん

遁世の遁の一字を書きかへて昔は遁れ今はむさぼる

○坊主いつも鮎の名をかみそりとつけて、箱に入れもとむるを、常の事なれば小者よく知りたり。ある時彼僧河をわたるに、鮎のおほくありくを見て、小者後より、御坊樣いつも祕藏して、こなたの入物にあるかみそりがありくに、足をきり給ふなといひければ、坊主、今は八月なり。かみそりがいかほどあるとさびようほどに、足はきれまいぞといへり。

やせ―矢瀬

○昔よりやせの寺は禁酒なり。寺中に酒を好む僧のたくみて、經箱をさゝせ角をとり、いかにも結構に塗らせ、上に五部の大乘經と書き付け、それをかよひにしけり。酒を取りてくるに人それはと問へば、是は五部の大乘經なり、京にいたゞかん事をねがふ檀那あり、其故に折々もちて行きかよふとこたふ。あまり京がよひのしげければ、人あまねく推してけり。ある時内の者經箱をもちかへる途中にて、酒のにほひをきゝ、飲みた

めうー妙、寺にて女をいふ

○天に日なしとおもひ、ぬたなますを喰ひぬる處へ、だんな來り見附けたれば、ちと物よみたる僧にやありけん、よき砌の入堂なるかな、こゝに歴劫不思議の法味あり、まづ天地のあひだに七十喉とて、時のうつるに應じ物のかはり行く奇特を申さん、田鼠化して鶉となり、雀海中に入りて蛤となり、鳩變じて鷹となるといふ事あるが、愚僧が菜にすわりたるあへもの、變じてぬたなますと眼前になりたる、此奇特を御覽ぜよと。

○ある僧喉痺にてはなく、喉をいためる有り。心やすき人の見舞ひ、なにぞ物のたちて苦しめるにやと問はれけるに、さのごとし。さらばかやうの事よくまじなうて、いやす修行者あり、かれをさそひきたらんと同道せり。時になほす人、竹のをれかや、魚の骨かや、その物により觀念かはれりと。僧息の下より、竹ではあらうずれども、まじなひは魚の骨の心持にて御沙汰候へと。

○或檀那寺に參りしばらく雜談し、たちさまに、明日無菜の齋を申さんといへば、庫裡からめうが楚忽に出でていひける、幸ひの事や、あすはお坊樣の精進の日ぢや。

僧の方より檀那をよばんに、いふべき仁義ではなりないか。

○仁王經　比丘　地立　白衣　高座。　白衣は俗なり。

籍のあて字歟

勤行不退―つとめを怠らぬ

ひもよらぬだんな參りたり。少しも色をたがへず、世界みな不思議を以て建立す、されば連々山の芋が鰻になると人のいうてあれど、さだめて虚説ならんと疑ひしが、これ御覽ぜよ、山のいもを汁にしてくはんとおもひ、取寄せおきたれば、見るがうちにかやうになりて候は、何事ももの疑ひめさるゝな、これ御覽ぜよとぞ申されける。

○ある一人坊主、烏賊をくろあへにしてたまはる處へ、ふと人來れり。口をぬぐはん料簡もなかりつるに、そなたの口はなにとて黒いぞや、鐵漿をつけられたかと問ふ。いやあまり寒さに、只今燃えさしを一口くうたと。

○一日の精進を千日ともおもひ、こらへかぬる人はまゝあり。さるあひだひとりの老人、他事なき知音のもとに終日物語し、暮におよんで座を立つ時、明日は我親の日なり。無菜の齋を參らせんやと亭のいひければ、手をあはせ、まつぴら御免あれ、私の親の日さへ難儀するに、そなたの親の精進までは、のういやゝとぞ申しける。

○信心ふかき人山寺にまうで、ある僧坊に宿をかり、本堂の觀世音の通夜しけるついで、老僧に對面し、此寺家に法師いかほど候や、中にも勤行不退のかたやあるなど、委細に尋ねければ、老僧の返答に、此寺にたふとい者は我親子、隣の坊主の聟しうと。

喝食―小僧

落墮―還俗

學跡―跡は

○僧俗ともにまじはり語りなくさむ座敷にて、ある坊主急に咳をしけるが、喉より痰のかたまりたる樣なる物をはきいだしたり。そばにゐたる男の取りて見れば、蛸なり。是はいなものが出たと、口をそろへていひければ、されば喝食の時くうてあつたが今出た、つねに蛸はきえかぬるといふが誠ぢやよ。

○都の寺に檀那朝とく參り、本尊を拜し、茶堂の傍にて數珠を繰り、佛名を念じけるが、爐にかけたる釜の湯おびたゞしく煮えあがりて、蓋をたゝく。釜と蓋とのあひだになにやらん見ゆる物あり。蓋を取りたれば蛸なり。これはなにぞ、蛸ではなきやといふ時、坊主の返事、さる事も有るべし、ゆうべ蛸藥師の水をくみよせて、茶の湯をしかけさせたほどにと。

○大名の家に奉公の望をかけたるが、漸く調ひぬれば、奏者について出仕をとげし次手に、せがれを御目にかけたきむね申しふくむる。卽ちつれて禮儀すみけり。時に主たる人、そちは近き頃の落墮といふが、成人の子はなにと、養子かと問はれて、いや喝食でのせがれと申し上ぐる。

○學跡をものぞきける程の沙門、鰻を板折敷の裏に置き、ながたなにてきる處へ、おも

○窮貧の沙門にて、年もまた至極せるが、しかと給仕の人もなければ、自身しろき手拭にて頭をつゝみ、魚の店にのぞめり。折節なにも魚の類なく、たゞ鱏といふもの大と小とぞありける。亭主お出あれ、それに候てふはんなりの魚はいく〱らにてあるぞ。小はやすく大は高なるよし。合點で候、小をば其方のいふごとく買はうず、大なるをば寄進せられよと。

○鮨を反古につゝみ燒き、飯にそへて食せんとする時旦那來れり。坊主れうけんなく膳をもちて立ち、酒を出しふるまひぬ。其後種々思案し、ある時反古に大こんをつゝみやきふるまひて、以前のにまぎらかさんとたくみ、件のだんなを請待する。即ち領掌し時分に來りしが、かの燒く體を見、座敷へ率爾に入らずたゝずむ。姥のあるが出ていふ、いやあれは鮨ではをりない、大根ぢやに御座あれと。

　このまへのがいよ〱鮨にすうだ。

○あまりに齋をくひ過して、腹便々と歸るさに、もちたる數珠をおとしながら、うつむかんやうなきまゝに、足の指にて挾みつゝじゆず御免あれと申せしも、ちとじだらくの類かや。

さうけ―ざる

在家屋―俗人の家

いふ物を買うてきたれとて、代を三百わたしけり。すなはち買ひもとめて來りぬ。をりふしあしく客のある座敷へ、くだんのうつけ、によつとさし出しけるに、老比丘せきめんし、其からざけを、すぐに泉水へはなせと申されたり。

○いもほり僧のありつるが、秋も最中の月澄に、百姓出でて田をもりゐたり。夜ふけ物おとせぬみぎり、笠をき、白き帷子をはしをりたる男、さうけと小桶とを持ちて來りぬ。百姓ふしんなる物に思ひとがめければ、かの男いふ、俗人鮨すくふに、なにのくせごとがあらうぞと。

○板がへしをせんと屋根葺二三人やとひ出し、すでに板をまくりけるが、ふきし天井をのぞけば、摺鉢になからほどなますの見ゆる。お坊主、ほこりがするに、これなる膾を取り給へと。坊主きいて、それは門前の者が、昨日もてきて質においたが、まだうけぬものぢやよと。

○ひそかにつかはす使の小者、ひさしく病にふしけり。せんかたなくて坊主みづから魚屋に行く。いかにも夜ふけしづまりたるに、門をたゝく音せり。內よりたれ人ぞと高聲にとがめければ、在家屋から魚かひにきた、戸をあけよと。

めいのもの—在銘の刀、姪女の者
世度卑—未詳
てゝ—父

ばぬ。

自墮落

○洛陽に壽桂といふ坊主墮落し、姪女なりける比丘尼を妻にもちて居けり。越方の等閑なきに宿を尋ねおとづるゝが、かの壽桂案の外隔心し、内へよばざりければ腹立のあまり、

元理

祕藏して人に見せぬはめいのものあまくになれば身をもはなたず

○世度卑なる出家あり。一人の弟子にいふ、明日は吉野の花見に行かん、先途程遠し、曉よりおきて出立を用意せよ。心得たりと夙におき、酒飯とゝのへ戸を叩きければ、坊主いまだ夜ぶかなりとておきず。さる程につね〴〵弟子にかくし、いねざまには燒味噌と號して鷄の玉子をとゝのへ、肴に用ひて酒をのむ事を心に無心に思ひゐけるが、その時こらへかね、夜がふかいか淺いかは知らぬ、やきみそがてゝはもはや三番ないた。

○つねに人みな干鮭は、身をあたゝめてよき藥などいふを聞きて、われも養生にくひたき事やとおもひ、老比丘、うつけたる中間にむかひ、藥にちといる事あり、からざけと

さもとらしき─然るべき人柄なる
扶持をえん─御助力に預るべし
ゆがけ─弓を射るとき右手の指にかけて弦を持する具革にて作る

けるが、態と一筆、針三本、千松なかすな、火の用心、かしくと書いたり。

○さもとらしき女房の下司などつれたるが、清水寺にまうで來て、舞臺のこなたかなた立ちやすらひしが、順禮のやたてをさし、侍めけるあるを見つけ、下司をつかはしたのむやう、ちかごろはゞかりおほえ候へども、人のくれし文のかへり事を、たれたのまん者もなし、ひたすらに扶持をえんとあれば、とやかうの斟酌におよばずかたはらにいたりぬ。女房懐より料紙とりいだしわたし、いろ〳〵のぶんを好む。かの順禮はいろはをさへならはぬ者なりしが、今度西國物詣の樂書をせんまでに、筑後の國の住人柳川のなにがしと、これよりほかは一字もなし。くろみすぐるほど、紙一かさねに書きくどきたる文のうち、いづれも〳〵、筑後の國の住人柳川のなにがしと、うはがきともにこれなれば、戀のさめたる風流や。

○文盲なる人、ゆがけを借りにやるとて紙をひろげ、手のひらに墨をつけ、ひたとおし、うでくびのかたに細きすぢをまはし書きて、これをお借しあれというて、もたせつかはしたり。見るにうなづき、ゆがけをかせといふ事の返事せんといふまゝ、皿と椀のなりを書きて戻しけり。かりにやりたる仁がつてんし、さらはぬといふ事の是非におよ

年よれば腰にあづさの弓をはりしわのいる矢にしよぞ少なき

莊子壽者多辱

長かれとなに祈りけん世のなかのうきめ見するは命なりけり

をしまれぬ身の殘るかなしさ

あやにくに道ある人はとゞまらで

樂天今朝向鏡看疑是逢別人

ますかゞみむかひて見れば我すがた知らぬ翁にあふ心地する

老にけり今年ばかりと詠むれば花よりさきにちるなみだかな

○とかく當世は、文章のみじかきがはやるといふを聞きて、侍ひたる人のかたより、知音の僧へつかはしたるとなん。

送進する十八本松茸恐惶謹言。

平井の伊賀入道

圭侍者へ

○又商人、遠島より古鄉へたよりあるといふ時、妻のもとへ、文ならびにいんしんをし

賢。耆婆殿まゐる。釋迦判。
○かせ侍のもとより知音の方へ文有り。ひらき見れば、筆たてに日の字ありて、其下に四五斗たまはり候へと書きたり。何とも合點ゆかぬとて文を返しぬ。後に見參して、以前の文の内なに用のありつるぞ、つひに讀みえずして、本意なきよしかたられければ、そなたは隨分の人にてあるか、七日のぬかといふ字さへ見しりあらぬかと。
○祖父と祖母と何事をかいさかひけん、さうなく祖母を追出しけり。しかはあれど、老たるをあいするものなければ、日にそひて互になつかしく思ふ折節、魚をうる商人來れり。祖父よろこび、其里のそれとたづね、この文をとゞけて給び候へ、もし又返事のあらばたちよりて、とりたび候へなどいひふくめけるが、姥文を見て、あめやさめと泣き、久しくもあはぬに文章のあがりたる事やと感じ、返事とてたのみわたす。商人かへるさに祖父にわたしてあれば、とちほどなる涙をながして手をはなさず、商人あはれさに文のやうを尋ね聞く。祖父のかたよりは、いばらに小石をつゝみそへつかはしぬ。うばがかたよりは、其中へこぬかをつゝみそへてかへしぬ。むばら戀しとあるに、むばら戀しくばこぬかと、互に通ふむつまじさ、よむも書くも同じ心なる。濱の眞砂の數々や。

隨分の人―相當の人物
さうなく―ためらふ事なく
あめやさめと泣き―さめざめと泣き

せゝりがき—ちよこちよこ書き
尊鎮門跡—青蓮院宮、御家流の本家
擧狀—推擧狀
御領掌—御承知
ぬしは—本人
竹はし—竹端

ひ寄らんたよりもなければ、せゝりがきする人をかたらひ、文を一つ書きてくれられよ、ぶんしやうの事はわれこのまんとなり。ともかくもと筆を染めうかゞひ居ければ、おれはそなたにほれたげな、戀の心かかしらがいたいと。

○青蓮院殿へ出入する筆匠あり、尊鎮門跡に言上するやう、別して御中よきその某殿へ、擧狀を一通下されよかしと。御領掌ばかりにうち過ぐる。折々是を望めば、あまり去難きまゝ心得たりとて遣し給ふ文體、此筆匠それへ參り候、ぬしは上手と申し候。

さはらずしてすうだ。

○侍たる人右筆をよびて、此ほどは久不懸御目滿足仕候とかけと。それはいかゞ候はんとて、筆をもちゐけるに、それならば、よくきこゆるやうに、此程はおめにかゝらず、本望に存じ候。

○さる處にてしやかの文を見たはとかたる。聞く人感じ、聲聞緣覺羅漢の內、誰々へのあて所ぞや。耆婆が方へのふみなり。さては竹はしに梵字か、文章いかにやと問ふ。其事よ、紙は日本一の播摩杉原に、烏飼樣をもつて、いかにも墨をかうかうと、此程は久不懸御目候、四五日以前靈鷲山の麓にて風をひき、咳氣散々に候。藥一二貼可給候

外陣―內陣に對していふ、表

棟札―新築の事由をかきたる木札

ぎこつなき―不骨なる

を下座より、なんぞ書物に候やと尋ぬれば、なか〳〵の事、靜の舞に、臣も君も此舞をかんせぬ人はなかりけり。

○ある男二三人つれだち、誓願寺にまゐりけるが、外陣にある額の六字を見、せいぐわんじの額ならば三字こそあらんめ、何ぞ三あまりたるはといふ。一人が、あれをえよまぬか、せいぐわんじとのさまと、かきたるはと申したるこそをかしけれ。

○一字の御堂造立すでに成就し、棟札をかゝんと法印出でて筆を染め、いはれけるは、此おもてにあらゆる佛菩薩、ならびに日本の神々をかきつくるはとあれば、かの大工、わたくしをも諸神のうちへ入れてあそばし候へといふ。法印大きにわらはせ給ひ、なにとてさやうにみちもなき事をいふぞと尋ねられし時、我も神の內なるまゝくるしからず。なにとして神にはなりたるやと尋ねらるゝに、大工かしこまり、わたくしこそ若狹のかみにて候ほどに。

文之品々

○根來にて岩室の梅松とかや聞えし若衆に、ぎこつなき法師のおもひを寄せながら、い

あり〳〵—鞠を蹴る時のかけ聲
大いん—大醫
にやく—脈
もちやけ—

庭へ行くまい、殺生禁斷ぢやにと。

○京よりいたらぬ者ども連立ち石山寺に參り、緣起を所望してよませ聞き、抑この石山寺は、前に湖水あり、うしろに山あり、峯に塔あり、谷に塔あり、二王門あり。既によみはてぬる時、一人が申しけるは、誰人の建立とこそ存じつるに、扨は飛鳥井殿のたてさせ給ひて候よのう。その願主は、なにの合點よりいふぞや。其事よ緣起の次第が、いづれの言葉にもなにありかあり、あり〳〵とよまれたほどに、さうかと思うて。

○そちの親の煩は、何にてありつるぞと問はれたれば、其事に候、我等が親のやまひを京の大いん達に見せたれば、にやくをとりて見、病はやうかんぢや、やいひの灸を百やうにしたらよからうとて、ひたものすゑたれば、揚句にしきよく仕りて候と。

○こびたるかほの亭主いふ、餅をやいて食ひたいと。いくつ燒き參らせうと問うたれば、昔よりさだまつてある事よ。心經にも、もちやけ六つくはうとこそ。

○夏の振舞に、燗をしたる酒と冷酒と出し、いづれをなりともと酌するもの言ひけり。座上になほりゐたる宿老いはれけるやう、今時こそ酒を自然冷にて飮む人あれ、昔は大名小名おしなべ、燗をしてのまぬはなかりしと、まことらしくいひてうけられける

下風—しもかぜ

中酒—饗應の中頃に出す酒

こもとありき、麥飯とはなにぞ知らぬと語る。麥のめしの事と聞き、さらば又行きてくはんと思ひ、庄屋が家に入りつれば、人を出し、俄に下風の起り難儀さに、火にあてあぶる由いへば、かの代官、その下風ならばあぶるまでもなし、其儘すゑよ、くはんとぞ申したる。

○ある者のむすこ百人一首を、本にむかひたう〳〵とよみければ、親にて候ふ人申されたる。やれしづかによめ、それやうなる物は、反點のならひがむづかしいに。

○古田織部の數寄に出さるゝほどの物をば、其道をまなぶも、まなばぬも、天然と賞翫し、もてあつかひしゆゑ、中酒の座敷へ用ひられつる盃までも、なべて人織部盃といひふるゝ。さるまゝ京に三八といふ者あり。扨は盃をばいづれもおりべといふ物ぞと合點しゐたり。あるとき三八が顔あかく、機嫌よさうなるを、人見つけて、そちはあらけなくゑひたる體ぞといへば、道理かな今朝のふるまひに、汁の椀のおりべで、つゞけさま三盃のみたるもの。

○東寺のならびに遍照心院といふあり。つくり庭をあまり人の見たがるいやさに、番衆置れたれば、竹杖など持ちいましむる。望のかた、そと見度しとて立寄れば、いや〳〵

○南無の二字ばかりをいかゞしてかは見知りたる、其餘の文字はやみなる男、天神の名號のかゝれるを見、なむあみだ佛とよみ數へければ文字あまれり。あげくにいふ、此念佛はちとながいよ、融通念佛か知らぬと。

蓮生法師

約束の念佛は申すまでぞかしやらうやらじは彌陀の計ひ

極樂に剛のものとや思ふらんにしにうしろを見せぬ熊谷

にしにむかつてうしろみせねば（異本）

○永玄といふ禪門あり。人來りて、そちの名の永はながいであらう、玄はくろげんかと問ふ。いやしろげんといひし。知音する者きゝつたへ笑止におもひ、此後源を問はゞみなもととといへ。がつてん〱。案のごとく源を問ふ時、むなもとと答へつるこそ。

○了有と名をつけて、了はと人の問はゞ耳かき了とこたへよ。こう〱覺えやすきよい字ぢやと迄はほめつるが、了はと問はれみゝかきで御座ると言ひけり。

○一圓不文字なる侍、小知行の代官になりてわめきありく。ちと卑墮涙とおもふ折節、庄屋のもとに立寄りたり。麥飯の候出し候はんかといふに、いや嫌に候とて立ちぬ。そ

融通念佛—融通念佛宗にて唱ふる念佛、先づ「彌陀所傳融通念佛、百千万遍、決定往生」と唱へ次に念佛十遍するを儀式とすといふ

知音する者—知人

卑墮涙—ひもじき

おほく御まゐるな、つれ〴〵草のあへ物も、すぐればどくぢやと聞いたに。

○のり物を乗物といふも、又魚をぎよぶつといふも、一つことにや思ひけめ、十人ばかりつれだちて振舞のかへるさに、くだんの者いひけるは、おの〳〵はぎよぶつぢやほどに、さきへ御入あれ、われ〳〵はかちにて候ほどに、靜にまゐらうずよと。

○禪宗のだんなと、一向宗のだんなと寄合ひ語りゐる、なにといふ事に、お御堂の、御よりあひの、おさんだんの、おすゝめのと、なににもおの字をつけてはいふぞやと問ひければ、こちの宗旨ばかりおの字をいふでもあるまいぞ、そちの家にもおの字を附けていふはと。なに物につけたぞと。をしやう樣といふはさて。

○人あつまり居たるついで、膏粱の美食とてあまり活計も過ぐれば、脾胃の虛損となる。されば口々所レ嗜不レ可レ隨也とも、書きたるはといふ時、膏粱の美食といふ物を見た事がない。肉食の事よ。それならば我等がとなりの亭主は、いかい肉食をする人ぢや。して なにを喰ふぞや。毎日餅を七つ八つほどづつ喰ふ。

○京都四條の河原にて、將棊の馬をひろひたる者あり。何とも知らで主に見せたれば、是はすごろくの碁石といふ物なりと。

奉納の爲催す連歌

こばかしたがる—氣取りたがる

たり、われはけさとくより先程まで、連歌の有りつるを聞きてゐたり。面白い句のありしよ。

おぼろ〳〵に鐘ひゞくなり

老ぬれば耳さへもとの我ならで

是に心なぐさみぬと、立行き給ふ其けしき常ならねば、侍も心ありけり、跡をしのび送りけるが、つひに見失ひぬ。まがふべくもなき北野の神ならんと沙汰しあへりき。

老ぬれば人の教を初音にてわれとは聞かぬ山ほとゝぎす

いつの日のいつの時より聞きはてん我すむ山の入相の鐘

○人ありて作善をつとむる毎に、僧と同じく大俗列座し齋を給はるを、何者の言出しけん、鬚僧とこれを呼ぶ。此ひげそうといふを覺えそこなうて、しかもこばかしたがる者あり。堺にての事ぞとよ、ある禪門十德の袖の長きを著、知人に行きあひぬ。いづれへと問ふに、禪門今朝はひらのやへ齋ありて、會下僧に行くはと。

○ちと假名をもよむ人のいひけるは、此程つれ〴〵草をさい〳〵見てあそぶが、おもしろう候よとありしかば、其座にゐたる者のさしいで、かまへてくちあたりよしと思うて、

時宜―挨拶

祈禱連歌―神佛に祈る事ある時に

○御札のごとくと文をよむ。かたはらに聞く者問ふ、御札のごとくとは何といふこゝろぞや。人のもとへ文をやりたる其返事のことばぞと教ふる。しばらくうなづきゐて、大道をありくに、知る人はたとあふ。さてもおひさしやと言葉をかけたれば、ぎよさつのごとくと申しけり。

○人客を得て菓子に蜜柑を持出で、これは庭前のにて候といふ。客とりて見、さて〳〵新しや、店などにあらんはいかでかやうには候べきと、大に感じけるを、おもしろき時宜とや聞きなしけん、今度客にふるまひのあげくに、麩をにしめて重に入れ、其席へもち出で、これは庭前の麩で候と申したは。

○八景のうちに遠寺の晩鐘とは、村里とほき山寺に、入相の鐘のころ、つく〴〵聞くもおもしろやなどいふを、こびたることと思ひゐしが、ある時客に寺へ行き、夕陽西にかたぶく頃より碁をうちはじめ、火をともせども立つ事をわすれたるに、初夜の鐘も早やとく鳴りぬるとはいはいで、もはや皆おたちあれかし、遠寺の晩鐘もとく鳴つたと。

○此四十年許以前、江州永原に祈禱連歌ありし。其日京より永原へ行き、侍一人道の邊の石にこしかけやすむ砌、杖をつきたる白髪の老人、靜にあゆみよりていろ〳〵の事か

五明―扇の異名

こゝな人は、字の事を問ふにといへば、字はすな地ぢやと。

○風呂をば、いづくに有るもせんたうと言ふとばかり心得て過しけるにや、ある大名の内風呂をたかせて、人々入りけるなかば、なにと風呂はたつやと尋ね給ふ時、くだんのがてんしや、いづれのせんたうへも入りまゐらせたが、これやうにようたつせんたうはをりないとぞ申しける。

○あなたこなた年頭の禮にありきけるさき〴〵にて、持參の扇を見ては亭主のことばに、五明はかたじけなやと禮あるを聞き、さてはなにゝても、正月の持參はみな五明といふものなりと合點し、其身はもとより塗師の上手なりければ、上々の茶桶を持參するに、たもとより取出し奏者にむかひ、是は我等の五明で御座あると、持ち行くほどの處にていうたと。

あたき殿の發句に

ひらかぬは風のつぼみの扇かな

三光院殿

秋風を腰にさしたるあふぎかな

禮儀―謝禮
隔心―不同意
遠侍―控所
書きやう―垣樣

とかたる。謡はなに〱などとありしかば、しかとは存ぜず候、なにもとうふごしに承りてあるほどにと。

○月迫になり殿の臺所とゝのひがたし。せんかたなさに家老の人たくみ出し、有力なる百姓のもとへ行き、そちは貞心に事をさたする條、重寶の者なり、歳の暮の祝に名字を遣るべき旨なり、目出度事やといふ。いやたゞ今の分にて、御許容あるやうに御取成を頼むといへど、とかくいひなし、同心させけり。さりながら、それは禮儀いかほど入り候はんやとたづぬる時、三十石ほどがよからうとあれば、なか〱隔心のけしきなるまゝ、さらば二十石にても苦しかるまじきになりぬ。さて名字は野々村といふべしと。さらば御禮申さんと、老父名代に惣領をつかはす。遠侍までは伴せしが、彼家老が袖をひかへ、是非きはまる處十石になされよ、よく思案仕るに、野々村とたまはりても野野は生得家に傳はる、村ばかりこそくだされけれ、十石の外はとゝのへまいとぞ申しける。

○昨日は一日妙圓寺といふ寺にあそびつるはとかたる。ついにきかぬ寺なり。妙は妙法の妙にてあらうず、ゑんは。ぬれゑんぢや。いやとよ書きやうは。蕨縄のまはしがき。

雑掌—雑餉、間食

うつひ—内障眼

さへえ知らいでと。

○小豆餅のあたゝかなるを、夜咄のもてなしにいだす。その席に奥山の者ありし。中老ほどの人餅を見る〳〵、とかく夜食はおほく食ふが毒にてあるよしいふを聞き、さては餅のことぞとおもひ、彼山賤在所にて、晝の雜掌に大豆の粉をそへ餅をいだす時、かまへてみなお聞きあれ、さる人のいはれしが、此夜食はおほく食ふが毒にて候と。

○目くすしに出んとする人、酩をかくべきあてもなければ、つゝみ紙を澤山に折りて人を頼み、みな〳〵紅梅散と書かせもつ。風眼にも、うつひにも、一つ銘ばかりうちし故、あなどり笑ひけるまゝ、旅宿にて銘をたのむ。いかゞ書かんと問へば、牛黄圓とのぞむ。目のくすりにはいなものやといはれて、それならば木香丸と所望した。

○山家に信國の脇指をもちたる者銘をしらず。淨土宗の僧によませたれば、しなけきと讀む。しなは信濃のしな、けきは舍衛國のけきといひつる、あさましさよ。

○侍めきたる者の主に向ひ、おかべのしる、おかべのさいといふを、さやうのことばは女房衆の上にいふ事ぞとしかられ、げにもと思ひるけるが、ある時主の上﨟にともして、ふるまひより歸りたるに、主人座敷の始終を問はる。朝食の上にはやしの候ひつる

不都合なる事といふ。さればこそ唐から本の文字はあらうとまゝよ、まゝはゝと書くがよい、なぜになれば、くへどくはねどたゝきたがる。

たゝいてはすりたゝいてはすり

髪惜むうひ子を膝にだきのせて

○服部といふ侍に文字を問ふ。つひに名字のこたへやうを知らず。人をしへてふくべと書くと。ふくべとはへうたんの事かや。なか〳〵。ある者御名字のはつとりとは、それこそへうたんとかき候。親當

世中に書くべきものはかゝずして事をかくなり恥をかくなり

親當―蜷川新左衞門

○いろはをもよまぬ者ありて、常に人の酒飯といふは何事ぞや。酒はさけとよむ、飯はめしとよむぞ。忝しと覺え、ある振舞の座にて、今日のもてなしは、酒飯ともに出來まるらせたとほむる。かれがそだちをよく知りたる者あり。酒飯とはなんぞ。酒はさけ飯はめし。さてともにはと問はれ、椀折敷で御座あらうまでよと。

○物かく者をたのみ、文一つあつらへ、宛處をとへば、新のくと書きて給はれ。新六とこそかゝるれ、のくというては知らぬ。さてそなたはあさましや、六日市のむいの字を

次郎四郎―次、痔

すまぬ―分らぬ

はといへば、返事なし。さだめて磯邊の磯なるべし、がひはとたづぬれば、よからうやうにと。しりがひがよからうといふ時、せめてむながひのがいにしてくだされよと。されば時賴禪門も、

よみかきのことさらいるは弓矢より急度注進急度囘文

○中間どものあつまりて、人の名苗字を沙汰しけるが、一人いふやう、おれが殿は名を三度つかれたが、皆こしから下への事ばかりぢや。始めに次郎四郎、二番に次兵衛、三度目に修理太夫を、しりの大夫と噂したり。

○奉公する人の問ふやうは、某がたのみたる殿を下野といふ者もあり、野州といふやからもあり、いづれがよいぞや。どちも大事なしと、大に合點せしが、ある座敷に出でて、しもつけの花のいけたるを見つけ、きつと手をつき、さて／＼この野州はよういかり參らせたよと。

○遊興參會の物語に、此家中のおとなは伯耆下野とて兩人あり。されば伯耆なれば伯州といふは聞えたが、下野は野州といふがちつともすまぬと。

○物はかゝねど利口な者に、てんびんとは何とかくぞや。繼母とかくとこたふ。それは

なゆ―なゐの訛

じゆしん―地震の訛

ねつする―滅するの訛

近衛殿―三藐院信尹

料足―錢

中書―中務卿の唐名

といふを聞き、文盲なる者口眞似し、さき〱にて、來春はおぼしめすまゝに御座らうと申せし。

○三人行合ひて一人がいふ、さて〱昨日のなゆは。又一人いふ、なゆではない、じゆしんがほんぢや。今一人が、なゆやらじゆしんやら知らぬが、世はねつするかと思うた。

○手跡の讃歎ある席にて、口あればいふ事と、伏見院殿、又後奈良院殿、後柏原院殿のは、皆勅筆とおほせ候が、近衛殿のをばなにとて、勅筆とは申さぬぞふしんな。

我身の恥をわれとあらはす

犬櫻さかでも春を送れかし

○ある侍中務になられたといふ時、百姓ども祝儀とて、料足十疋宛つなぎあつめ、禮に持出しが、又廿日ばかり後、訴訟のむねありて中務に參る。門の傍に並び居て聞きければ、客人のわたり候が小姓をよび出し、中書は内に御入あるやと問はれしを、百姓目まぜしさゝやきいふ、中務がほどもなきに中書になられたは、南無三寶百疋出いてつくばはうずよと。

○始めて奉公に出つる侍のありしが、奏者する人に御名字はと問はれ、磯貝と答ふ。磯

せきはん
赤面の誤訛

○元日にかんをいはふ處へ、數ならぬ者禮に來る。亭主膳を出せといふに、そのまゝまゐりたり。亭嬉しげに、積善の餘慶ぢやなど感ずるを聞き、さてはかやうに下には芋大根を盛り、中に餅、上に豆腐くゝたちを盛るをば、積善のよけいといふ事よと覺えて立ち、件の者又さるかたへ行く。膳出たり。見れば今度のは、豆腐とくゝたちを下に盛り、中に餅、上に芋大根を盛りたり。箸をもちてほめけるは、さても此餘慶の積善は、一段あたゝかに出來まゐらせ候よと申しけり。

○同じやうなる者三人ともなひて貴人のもとに行き、まづ上座の者とく罷出で候はんを、我等の子持が乳に癰出來、なほりては平癒し、平癒してはなほり、正月より此三月まで、それに取りまぎれ參りおくれたると言ひければ、次に座したるが膝をつき、こゝな人はお前でさやうのかた事を申物か、なほるとはへいゆ、へいゆとはなほる事なり、一つことばをくり返し何事ぞや、さやうの丈尺かさねてつかはしますなといふを、其次の者聞きて、さてもお身の丈尺ことばはなんぞ、大工やなどのうへにこそ言ふことばならんめ、御身達がかたことをいふを聞いて、おれが顏はそのまゝせきはんしたりと。

○人皆歳末の禮とて持參しゆく。たちざまに、來春はおぼしめすまゝの御しうぎ申さん

艮―東北
比叡山―平胃散のなまり

いたはしや本來無東西、何處をなんぼくといふ大事をも知らいでと笑はれければ、神主、私は佛歌、神歌、道歌を、ぶつかん、じんかん、道かんにて理をすまし參らすると申す時、彼武士、それはふかい事、おもしろさうなと感ぜられたるにてすうだ。

不文字

○朝倉の山椒を一袋もたせ、侍のもとへ音信に遣しけり。折ふし彼侍途中にて行きあひ、文そへて上げければ、そちの見るごとくなるまゝ返事に及ばず、又一袋の御重寶悦び入り候よし、使聞届け道の二三町も行きしが、よく〳〵思へば、今のことばがすまぬ、今一度ことわらんと、息をつきかね走りもどりぬ。馬をとゞめ問はせけるに、今の一袋は御重寶では御座ない、朝倉と申す山椒にて候と。

これなんふしぎの御重寶。

○脾胃の虚したる人にやありけん、平胃散を調合し服せん事を望み、常にたのめる醫師のもとへ、比叡山のはうを書きて給はれと申し送れる。醫師やがてさとり、比叡山の方の義承り候、王城より艮にあたれりと返事しけり。

金といふ云

云―金合令

皆同字と思へる也

ひきざい―取りまはしにする菜

庭訓―庭訓往來

式目―規定

○金子と書くべき處に合子とかきたり。これはと不審しあへれば、金といふ合の字を、時々はせしむると讀むすべをさへえ知らいでと、けつく慢じごとは。

○あへものの菜をば、なん時も本皿には盛らず、鉢にても重箱にても盛り入れて、ひきざいにしたがよいと、庭訓にあるといふ。いづれの文にありやつひに見ぬ。かくれもない、あへてもつては、後日の恥辱をまねくといへり。

たんぽゝのあへ物くふやしたつゞみ

○脈とては浮中沈をも辨ぜず、七表八裏九道二十四の名をさへ、知らぬ程の醫者あり。脈をとりて後病者に問ふ。胸はいたむ心ありや。なかく〳〵あり。左様であらう脈に左様候。さて足はひゆる事ありや。いやあたゝかな。左様であらう脈に左様ある。頭痛ありや。いやなし。左様であらう脈にあうたと。此作法にてもおくすしさまではある。

病人となりて、藥を申しうけんはこはものぢやの。

○地藏講の式目といふ外題を見、大藏といふ人は地くら講とよむ。武藏といふ人は地さし講とよむ。又傍にのぞきゐたる或泉坊は、式目の式を或目とよめり。聞事の。

○武士たる人、ある神主にむかひ、そちは神道を心得たるや。いや白張きたるまでに候。

摩訶の下―心經の名は摩訶般若波羅密多心經なれば也

一切くやく―心經の文句

ていか、知れぬと言はるれば、さる事候ふ。右の脇ちといたくて、後ふるひ給ふ間、さだめて腹ぎやていにて候べし。心得たりとて薬を遣したれば本復してんげり。醫者、武將に逢うて右の趣を語りけるに、さたのかぎり、そいつは觀音經を一部いうてあつたと。

始よりおこりといふがよからん。入らぬ御使のこびたるにて、主殿まず恥なかゝれた。

○美濃國うるまの大安寺に、般若坊とて狂歌に名を得たるありし。知音たる人のもとより、此冬の暮行仕合なにとかなどいひ送りたれば、

心經の摩訶の下なる般若坊ことし一切くやくなりけり

○武士たる人の、殿とのといふが、殿の字の聲はでんと敎ふる。又月といふ字の聲はぐわちとをしふる。此二字をならひ得て、いかさまはれがましき處にて、言ひ出さんとたくまれけるが、或時館に座敷能のはじまりしを、物見のため人多くあつまり居けり。其砌、彼の武士威儀をけだかくかいつくろひ、殿原よく〱、それにゐる者どもを、みなえんから下へ月こかせよ。

せんないたしなみさうな。

いやこと―餘計な言葉

はらすぢ―笑ひ事

ちくと―少し

腹ぎやてい―掲諦々々波羅掲諦、波羅僧掲諦、觀音經の偈の文句

と附けられし。これはみじかいのと申す時、祇公、そちのいやことにあるかなを足されよとありつる。

○堺の中濱に道海とてとめる者あり。ちとはれがましき客を請じ、朝食の膳を出し、末座にきと手をつくね、言ひける事こそはらすぢなれ。西宮に人を遣す、大風頻に吹いて新魚無なり。鹽魚買來不及力。たゞ西の宮へ人をやりたれば、大風が吹いて新しい魚がをりないと言はいで。

○坊主と弟子といひ談じて、つねぐ\愚人をあいしらひし、その風をあてことにし、ちくと文字のある客の時、弟子出てではゞからず、水邊に酉あり、山に山を重ねんやとは酒をいださうかというた。師匠が返答に、ノヘ夕夕、人が多いに無用といふ。賓客頓にさつし、玄出牛一とは畜生めぢやとて、座敷をたちたる仕合なり。

○ある武將のうらかたに、瘧をわづらへる事あり。侍を使として醫者のもとへ、文までもなし女ども瘧病にいたはりぬる間、藥調合の義たのむといへ。畏り候ふとて立ちけるが打ちわすれ、次にて瘧の名は別になきかと問ふ。ぎやへいといふぞ。うなづき行き醫師にむかひ、ぎやていの藥をと申しけり。をかしく思ひ、腹ぎやていか、はらそうぎや

しろく——四六

おき、態と人を呼び振舞ひけるに、中間が打ちわすれ、をけらをほりて參りたと。亭主よういふかほにて、そこに白朮せよと。

○作意ある人の犬あり。名を廿四とつけたり。廿四々々と呼べば來る。なにとしたる仔細にやと問ふ。しろく候へば。さて實にも〳〵と感じ家に歸り、しろ犬をもとめ廿四と呼ぶ。いかなる心持ぞと尋ねられ、しろう候へば。

○革細工のかたへ侍のもとよりとて、太刀に文をそへ持來る。開き見れば、此日々念を入給り候へと有り。つひによむ者なし。亭主わざと侍のもとへ行き、直に尋ねければ、それこそ誰も知るべき文字よ。かしらの日はついたちのたち、次の日は二日のつか、太刀のつかを卷きてくれよにて、すみたるものをとなり。

○宗祇東國修行の道に、二間四面のきれいなる堂あり。立寄り腰をかけられたれば、堂守のいふ、客僧は上方の人候や。なか〳〵と。さらば發句を一つせんずるに附けて見給へと、

新く作りたてたる地藏堂かな

物までもきらめきにけり

うかべたる—考へ得たる

くすめり—出かし顔したり

や。

○笛のゑはちゞみゑか、末のゑか、何れがよいといふに、されば定家のかなづかひにも、源氏などにも、ちゞみゑを書きたるは。いやよこゑがよい。何とて。笛は横にして吹くほどに。そばに居たる禪門うかべたる體をし、げにも〳〵尺八の八もよこゑぢや。

○備後國に久代とて如形の大名あり。土生といふ侍を藝州元就へ歳暮の禮儀に遣されし。對面あつて、出雲の國に、雪はいかほど降りたるぞとあれば、彼の土生手をつき、雲州の雪は馬足不立にして、恰も鐵をのべたるが如しと申上げたり。大に氣色損じ、今より以後此者使に無益とぞ。唯出雲は大雪にて、馬のかよひも御座ないと申さんものを。又彼の土生在鄕に住む侍なれば、過半耕作などしけり。或五月雨の晴れ間に、鋤を杖につきしづかにありく。百姓行きあひ、いづれへと問ひければ、田水見行とこたふ。田の水を見に行くといふうたはまし。

○醫者にむかつて、白朮とは何を申すや。をけらといふ草なりと。こびたる事におもひ、客をまうけたる席に、中間彼の草を緣のはしに持出で、白朮を掘りて參りたりと言はせ、其處にをけらといふてくすめり。近頃文盲なる人感にたへ、歸りて中間に敎へ

醒睡笑　巻之三

文字知顔

○或人小姓をかすなぎ〳〵と呼びて使はるゝ。客不審に思ひ其故を尋ねければ、さる事あり、春長と書けり、かすは春日のかす、なぎは長刀のなぎよと。

○元三に利口なる人禮に來れり。亭坊智德なきゆゑ、こびたる顔に仕なしたがり、對面を遂げ祝儀を述べ、なにと煮餅を參らうか、やく餅を參らうかと問ふ。客たゞ煮餅を給はらんと。さて膳を据ゑ、齋進を出し強ひける時、客未だ持餅が候と。無理に一つ盛りければ、あら咳病やと。

○振舞なかばに亭主、鹽打大豆々々々々〳〵と呼びければ、鹽打豆を持ちて出でけり。又一度呼ぶ時、いやなしと申したれば、不及力々々々〳〵とうなづきたり。客大に感じ、家に歸りて人を請じ、次第を忘れ、始めに不及力を出せといふ。鹽打豆を出せり。かさねて乞ふに、最早ないとこたふる。鹽打大豆〳〵々々々々と。あとをさきへ入らぬ文字あつかひ

○二條院和歌好ませおはしましける時、岡崎の三位御侍の歌讀にてさふらはれけるに、此聞え高きによりて、清輔朝臣めされて殿上にさぶらひけり。いみじき面目なりけるを或時の御會に清輔いづれの山とか、このもかのもといふ事をよまれたりければ、三位これを難じていはく、つくば山こそこのもかのもとはよめ、大かた山毎にいふべきにあらずと難ぜられければ、清輔申していはく、つくば山迄は申すべきならず、河などにもよみ侍るべきことこそと呟きければ、三位あざわらひて證歌奉れと申されけるに、清輔のいはく、大井川の言に躬恒が序かける時、大井川のこのもかのもとかける事、まさしく侍るものをといひたりければ、諸人口を閉ぢて止みにけり。あながちに物をば難ずまじき事なり。

○革草履を穿きてありくもの、あやまちに足を蹴破り、ことのほか血の流るゝを見て、笑止やいかにといふものあれば、いや苦しからず、昔より革緒に塗る血とある程に。さてよいさくやと人々ほめければ、われもほめられんはやすき事なりとたくみ、足をやぶり血をながす。何としてと人の問ふ時、いや是は大事なし、昔もいろはにほへととある程に。

人屋―牢獄

遊行上人―時宗の長首

佛法を傳へん爲渡れりと申せば、御門其姿あやし、かみかぶろにて衣のていたがへり、佛とは何者ぞ、怪しきものなり、返すべからず、人屋にこめよと閉込めておく。此僧、惡王に逢うて悲しきめを見る、我本師釋迦滅後なりとも見給ふらん、助け給へと念ずるに、釋迦丈六紫磨金の光を放ち空より來り、獄門を踏破りて僧を取去り給ひぬ。ついでに多の盜人皆迯去りぬ。此由を申すに、帝おぢおそれ給ひけりとなん。其時わたらんとしける佛法、世くだりて漢の代に渡りけるとぞ。是は始皇のかしこだてによつてなり。

○秀次關白殿より遊行上人へ遣し給ふ。

上人は霞の衣きりの數珠あまけはなれぬそら念佛かな

返歌

水鳥は水に入りても羽もぬれず海の魚とて鹽もしまばや

秀吉太閤この由聞召して、秀次の御もてあつかひ更に詮なき作法やと御噂ありしが、はたして上人には一字建立ありてつかはされし。今の法國寺これなり。

名僧となのらずとても善知識身をふくにこそ人は秋風

○老父あり。唯さへかすむ目もとの暮方に、二階よりおりんとする。下にむすこの居けるを客人かと思ひ、ひたものいんぎんに請じけり。後に私で候と申せば、そちとは始よりわれも知りたれど、汝がやうなる公界知らずには、ちと仕附を教へんとて、それにいうたよと。

○花見の興のかへるさもたそがれ時になりぬ。道のほとりに人のたちたる姿ありければ、頭を下げ手を合せて禮をする。伴の者あれは石塔なりといへば、彼人いふ、當世はあれ體の人にも禮をしたがよいと。

○力はさのみなうて、手のきいたるをたのみにし、相撲を好く男あり。又手をとる心はすこしもなくて、唯力のあるをうでにし、相撲を好む坊主あり。雙方名乗合ひ、僧と俗といくたびとれども、力のつよきにより手を役に立てず、坊主かちとほしければ、俗腹を立ち、見物のおほき時、負けてのきざまに高々と聲をあげ、いかほどの坊主ともすまふとりたるが、あの入道ほどすしくさいやつにあうた事がないと、悪口許に勝ちしをかしさよ。

○秦始皇の代に天竺より僧渡る。御門是はいかなる者ぞ。僧云、釋迦牟尼佛の弟子なり、

公界知らず—世間見ず

すしくさい—やつ—腥を食ふ奴の意

朱をまぜて漆ぬるてのもみぢばはまづ秋風にまけてちるらん

○日本第一の智者と額を打ちて諸國行脚の僧あり。小喝食かれに向ひ、土の上に一文字を書き、此訓をこふ。種々によむ、終に當らず。喝食土の上に一文字は王にてあり、汝愚と。

しらぬをば知らぬといはで醜さはよくしりたるを忘れたる顔

○ある僧小者を一人つれて錢湯に行き、帶ときふためきて、頭巾かづきながら小風呂に入りぬ。常に何事も利口をいふがにくさに、小者も見ぬふりし、二風呂めに頭巾をとり給はでといひければ、騒がぬていに、あたまをさぐりて、もはやとらうかなと。

○人の親の大事にわづらふ時、針立の上手とてよび來る。針立すなはち天突の穴に針さす。息女あまたまはりにゐて見る内に、氣色かはる。父親の顔の色が變りたるはと、はしばし泣くを見て、針立目を見出し、何事にむざと泣くまいと誡しめ、針をぬくと同時にさあ泣けといふ。わつと泣く紛れに出でて逃げたり。

○目醫者あり。其身の目はくさりてゐながら、目藥は天下一なりと自慢し、一度させばかすみはるゝ、二度させばまけも切るとなど廣言せしを、扨そなたの目は何とて治らぬ。さればわが藥妙なればこそ頰先にてとゞめたれ、さなくば頤までもくさりなんと。

こばして―氣取りて見て―此二字慶安本なし

○ぬからぬ顏したる男、大名のもとへ參る。何とて久しく見えなんだぞ。手をついて、此一兩月は癲癇氣に取紛不參仕候と申上げし。友達と座を出づるに、そちは咳氣をこそ煩ひつれ、ありのまゝ申さずしていらぬ病の名をいひつる事よ。いや咳氣は初心に誰も知りたり、ちとこばしててんかんといはいでは。

○古道三洛中歩行の折節、ある棚の傍に、青磁の香爐おもはしきあり。立寄り見てうつけたるふりに、此かうろんいくらと問はれければ、内よりなにとはねても銀二枚と。

○和泉國に鹽穴といふ侍あり。馬上より錢のおちたるありと見附け、馬をとめ中間にあれなる物をとりて來れと。中間とりあげ、是は柿の蔕で御座あると。われも柿の蔕とは見たよ、されども馬がおそるゝ程に、それにとらせた。

○出家のさまかへて武士になりたるが、馬にのり遊行する道に、何やらん珍しく、赤漆にて塗りたる物ありと見附け、小姓を招き取寄せけるに、小姓わたしざまに、これは伊勢海老にて候と申したるに、そち體さへ知りたるいせえびを、我が知らいでをらうか、これは朱のさしやうの珍しさに見るよと。

雄長老

○濃州の岐阜に不動院とて眞言宗の老僧あり。正月の菓子に國の名物なる枝柹三つすゑて出し、其分にて毎年時宜調へぬるを、おどけ者よく見知りて、あまりにしはき働きをよく見、例の菓子出ける時、あら珍しや賞翫申さんと、一つならず二つ迄くひけり。院主は苦々しき事に思はれ、あのていならばみなくはれん、さらば愚僧も相伴仕らうと、取りてくはれける心の内ぞをかしき。

客退出のあとに、せめてもとをひいたと。

○我等は雜炊嫌ひなりと常にいふ者あり。晩がた雜炊半へ來る。ちと申さんずれどお嫌ひなるまゝ是非なしとあれば、なにと此雜炊に胡椒はいらぬか。いやいらぬ。それならばちとたべうと。

○有錢の家主あり。夏六月下旬の頃、遊山翫水の歸りに、我が門の下を見れば、黑犬のゆたかに肥えたるが、餘念もなく四足を伸したるを見附け、主人の語るを聞けば、けなりの黑犬や、夏米を蟲のくらふも知らいでと。

賢達て

ぜー錢のぜ
げぎやうー
あてがひ
かんそー寒素
そともー少しも

○念者が若衆にむかひて、眞實そなたをいとほしいといひければ、若衆の言葉に、にの字をえいはでいとしくはぜと。返答に、さやうの事を聞けば戀がさと。

○紀州根來に小谷の西原と云ふ人、かたの如く有德なりし。中間おかんとする時、内の者にいひわたすやう、給分をばいかほどねぎりて定めよ、日に三度の食物はほしいほどくはせんと、かたく約束をばしながら、一向左はなく、げぎやういかにもかんそに、ひもじさやるせなし。案に相違したるむね訴訟しければ、さればこそ始めより食はほしい程と定めたは、腹一ぱいくはせうとはいはなんだと。

　いづれ身をもつ人の工夫はそともくづがない。
　吉野川その水上をたづぬれば檜原が雫槇の下露

○貧僧ありて弟子まゝにすれば、案の外おほく酒をとりよする。所詮今よりは錢二十には、ゆび二つあたまにあげんと定めけり。ある時指二つ鼻のわきにあてゝ見する。振舞過ぎて問ふ。いかなれば今日の酒はおほかりつると。今日のは二十にてなし。其故ははなの中にして、ゆび二つを兩にあてられた程に、はなを十文になし、三十がとりよせたるはの。

藝者—藝人

ひよくと—ふと

と問はれしかば、されば候よ、此百錢の口をきらうか、さらずば腹をきらうか、其思案を仕ると申しあへり。

○ある藝者の親子つれだちて貴人の前に侍りしが、子にて候十四五歲なる者、大名の御座あるまはりにありし脇指ののしつけを取りて見、ひたものほめければ、親がいひけるやう、さやうにお腰の物などをむざとほめぬものぞよ。大名はひよくと下さるゝ事がある物ぢやにと。

○若衆あり。念者にむかひて、今夜の夢に雞のひよこを一つ、金にて造りわれにたびたると見たとぞかたられける。さて〳〵われも只今の夢に、其ごとくなる物を參らせたれば、いやというて、それよりやがてお返しありたと見たことよ。

○雨ふる日のさびしさに、よしある方に尋ね行き、上戸の二人よりあひ、しゆ〴〵はなしども、時すぐれど、さらに盃の噂もなければ、客やうすを見きりいふ、貴所の酒でも我酒でもなうて、大酒がしてあそびたいものと。

○殊更ちひさき土工李に古酒を送るとて、

天の原ふる酒見ればかすかなる三かさものまばやがてつきかも

まとはれけろ—過料をとりたり

われは始よりふるまはずに寄れといううたはとて、まはとずとのあひだに句を切たるぞをかしき。

○客來るに亭出て、飯はあれども麥飯ぢやほどに、いやであらうずといふ。我は生得むぎ飯が好きぢや、麥飯ならば三里も行きてくはうといふ。さらばとてふるまひけり。又ある時件の人來る。そちは麥飯ずきぢやほどに、米の飯はあれども出さぬといふ。いや米の飯ならば五里行かうとて又食うた。

○美濃の國にてある侍の内に、丹波助太郎とて大欲心のいたづら者あり。誰にても目下なる人といへば、ねだれて物を取る者なり。ある時在鄕にて百姓、助太郎がありくを見附け肝を消し、いかにも隱れんとしけるを、そこなるはどこの者ぞと問いふ。たゞ地下の百姓と答ふ。そのまゝ助太郎、われに禮を百姓といふや、思ひもよらず、せめて二百せよとぞまとはれける。

○伊勢の桑名に喜藏庵とて、いかにもしはい坊主のありし。たまさかに賓客の來れり。對面の後眠藏に入りて再びいでず。客不思議に思ひ、そこらあたり尋ぬるついでに、めんざうを見られたれば、脇指をぬき、百つなぎたる錢繩の口にあてゝ居けり。こは何事ぞ

藥を一度のまず。年至極し既にいまはの時、知音の人竹田の牛黄圓をあはせあたへんといふに、すこしも口をあかず、齒をくひしばり居たる時に、こざかしく、此牛黄圓、錢の出る藥にてなし、たゞぞく〳〵、というて聞かせたれば、口をがばとあき、飮みけりとなん。彼國の左禮ことばも、宗惠が牛黄圓でたゞぢやといひけるはこれ故ぞや。

○ある寺の住持弟子にいひつけぬるやう、客あらんたびわすれざれ。まづ盃を出しては愚僧が手の置處を見よ、額にあらば上の酒、胸をさすらば中の酒、膝をたゝかば下の酒、此掟そむく事なかれと示す。一度や二度こそあらめ、人皆後は見知りたりしに、させらぬだんな參詣する。例のごとく、酒を一つ申せやとて膝をたゝきしかば、だんな手をつきて、とても御酒をたまはらば、額をなでてくだされいでと。

○わが門に立出でて遊びゐければ、ふと知音の者の通るに見參したり。やれめづらしや立寄りたまへととむる。嬉しくもあひたり、ちといそぐ用のありて行く、此度は許し給へといへども、さりとはたまの事なり、ふるまはずによられよやと、しきりにとゞめしかば、去りがたくて立寄りし。かくて待てども待てども茶をも出さず、日も暮かゝり目もくらうなる程なれば、客腹立し、人をうつけ者に仕なしたるはといふに、さればこそ

ふるまはずに―振舞はんに、振舞はずに

心計やなどといふ處へ、豆腐は〳〵と賣りに來れり。亭主豆腐を買はん、さりながら小豆の豆腐か。いやいつもの大豆ので候と。それならば買ふまい、めづらしうあるまいほどにと。

亭主の口上作意あるやうにて、とかくきたなし。

人性欲ㇾ平　嗜欲害ㇾ之と、淮南子にも書たり。又蜷川新左衛門親當が歌に、

紫の色よりもこき世の中のよくには恥をかきつばたかな

○家主朝食を喰ふ處へ、常によりあふ人來りぬ。なにとめしははや過ぎたるかと問ふに、いまだし。あらおたのもしやとてかまはず。また人來る時、めしは喰はれぬかと問ふ。はや過ぎたりといふ。あらおこゝろやすや。

とかくくれまいぢや。

君子に三の費あり。飮食その中にあらず。幼なうしてまなびて老いて忘るゝ、これ一つの費。君に功あつて輕く背く、これ二つの費。久しくまじはりて中絕す、これ三つの費。

○三河の國に宗惠といふて有德なる者あり。生涯のあひだいかなる煩あれども、つひに

あやかし―綾貸、妖怪

徳政―平均徳政債務を免除する法令

何も時の筈にあはぬを、太郎左衛門がでゐのゑばしとぞ。

○岩千代とて十四五にてうつけたる子あり。門より走來り、かゝよく〳〵錢をひろうたといふ。母がようひろうた、其錢はどこにあるぞ。いやひろひごとはひろうたが又おといたは。

正體なく身をもつものは、岩千代が拾錢とやいはん。

吝太郎

○人ありて無心の申事なれど、はれがましき處に出候條、貴所の綾の小袖を、そとのまお貸しあれと文をやりたれば、返事に、やすきほどの御用なれど、それへ小袖を貸したれば、人の聞きてわれをあやかしといはん、また貴所をもあやかりとや申さんなれば、態とまゐらせぬとこそかきたりけれ。

○和泉一國、徳政のゆきて、貧なるものはくつろぎたるといふを、一路

徳政をやりひつさげてつく〴〵と思へば物をかりの世間

○すぐれてしはき者のたま〳〵得たる客あり。何をがなと思ひても在郷の風情なれば、

ていど—慥に

鍋とり公家—公卿を罵る詞

風流—はやし物

に仰天し參りて申す事よと。

○ある者饂飩の出たる席に、かたのごとくたまはり、揚句にいふ、方々にて實ばかりを下さるれども、終に此花を見た事は御座ない、こなたにならではあるまい、とてもの思出に見參らせたいといふ。何事をいふぞやと問へば、誰も知りて申すは、うどんげのはなと。

○京にて盜人にあうたと興さめがほし、隣家の者あつまり居たる處へ、沼の藤六立寄り、何が失せたと問ふ。鍋が見えぬといふに、其とりては我が知りたるといふ。扨々聞きたやと立出けり。手招きして亭主を傍によびのけ、これはていど公家がたの御内の者がとつたぞ。なにとて。昔からなべとり公家とてあるほどに。

○七月風流を、他郷にかくる。太郎左衛門といふ、地下の年寄なれば、彼が許に集りならしけり。狂言をする者、うつけたる土民に、此ゑぼし風流に入物ぞ、そちに渡すといひをしへ、即ち出居におきぬ。かくて一兩日も過ぎ、風流をかくるみち〳〵も、ゑぼしはあるかと問ふに、中々あると答ふ。唯今狂言に出る時ゑぼしをこひければ、太郎左衛門殿のでゐにあるとの返事は。

西淨—雪隱

家のおとな—家老

○石州に板持といふ侍あり。かたのごとくなる大名なり。されどもうつけ比類なし。ある時西淨に行き、やれへびがくひついたはと、高聲にわめかるゝ。人みなあわて行けば、木履にて陰嚢をふまへたり。

御一種も平等だうりと聞えて侍り。

○件の板持馬にのり坂をのぼりける時、胸懸ひたものさがれば、鞍と馬のかしらとの間大に延びたり。やれ勿怪が出來たはとよばはる。郎等ども何事やと尋ぬれば、俄に馬の首が長うなつたはと。

○同じく板持かたへ客あり。家のおとなの若狹守出合ひて座敷に請じ、主人は他行に候ともてなし、よきに相計ふなかば、ふと障子をあけ、みづから頬を叩いて、若狹よく〳〵われはるすの分ぞと。

とらへて置かんやうもあるまい。

○都一條あたりにて、中間夜に入りねいり居ける間に、ちやくと長刀をとりたり。目さめ肝を消し、殿を呼出しいふやう、事の外盗人がはやる體に候、刀の用心をめされよ。まづおのれがもちたる長刀を失はぬやうにせよ。されば其長刀をとくにとられて、それ

たくらだ—阿呆
かいさま—さかさま

のさやばかりに刀をそへてさしたり。こは何としたぞといふに、きもをつぶし、さやを抜き、ふいて見つたゝいて見つすれどもなし。揚句にいふ事は、おれなればこそ鞘を取られぬ。

○ちとたくらだのありしが、人にむかひて、われは日本一の事をたくみだいたはといふ。何事をかと問ふ。さればよ、臼にて米を搗くを見るに、勿論したへさがる杵はやくにたつが、上へあがる杵がいたづらなり、所詮上にも臼をかいさまにつり、米をいれて搗かば兩ともに米しろみ、杵のあげさげそつになるまいと、思案したりといひはてぬに、さてつりさげたる臼に米の入れやうはと問へば、まことに其思案はせなんだに。

○振舞の時亭主出て、なにも無調法に候ゆゑ、そさうにちやんといたいたといふ時、あいさつの人箸をとりなほし、まことにこれよりほか、ちんとさせられやうは御座あるまいと。

○さかしからぬ者いかゞしたりけん、取外して井にはまりし事あり。人こぞり梯子などさげ早くあがれといふに、我は一世の面目をうしなうた、あがりても人間はなるまい、これからすぐに高野へのぼると。

○盗人にあひて、これはどちの方よりいかていの者のしわざぞ、いかさま内より引手ありやと種々算段ある所へ、こざかしき者ふと來りて、此盗人に入りたる者こそ、我よう知つた〳〵といひけるまゝ、なに者ぞ聞かせてたべとあながちに詫びければ、そとさゝやきていふやう、此盗はものがほしさにはいりたりと。

數寄にゆき—茶湯に參會し

○さるかしこき人、數寄に行き路地へ入りたれば、植ゑたる竹の先を包みたるが何本もあり。つく〴〵見て、あら奇特や〳〵と感ずる。相客ふしんに思ひ、何事やらんと問うたれば、其事よ、あれほど長い竹のさきへかゝる梯子のあつたが不思議ぢや。

○思ふどち四五人いざなひて清水へまうでしが、茶屋に腰かけながらひたもの餅を喰ふ。をりからひとり俄にいひ出しけるは、やれ〳〵頬がすくみ、口のあかれぬやまひが出たはとてかうべをさげ、難儀なるさまなりしかば、人みな肝をけし、こはいかなる事ぞとうかゞひ見けるに、編笠をきながら餅を喰はんとせし故なり。編笠の緒を解き、頬をさすりていかゞあるやと問ふに、彼男しばらく思案して、祕事はまつげぢやと。

二十五日—天神の緣日

○十人許つれだちて、北野へ夜ぶかに參詣しけり。二十五日の群集なれば、おしおされ下向する道すがら夜もほのかにあけぬ。友達の中に一人腰のまはりを見れば、脇指

道行ぶり—通りがかり

常住甲—不断づかひのかぶと

ぶたしたまぶたを、我が手にて開きまちけり。目くすし、それまでとゞく目はうをもたぬ時に、手をあはせ療治を申したと。

○龜はいかほどいくる物ぞ。萬年いくるといふ。分別ありがほの人龜の子をとらへて、今からかうて見ん物をと言ふ。かたはらの者あざわらつて、命は槿花の露のごとし、たとひ長壽をたもつも百歳をいでず。萬年の命をなんとして心みんやといへば、げにもわるう思案したよと。

○道行ぶりにむかうより來る者を見れば、百八の數珠をくびにかけ、高野笠の樣なるをきてあゆむ者あり。うつけものこれを見附け、手をうつてかんずる。そなたがきたる笠は事の外大きや、何としてそのじゆずをば、うなじにかけられたと問ふ。いやこれはまづ數珠をくびにかけて後に、笠をきて候というたれば、とかく物をばきかいではと。

○三好中納言殿へ、むかし甲を持ちて來り、見せ參らせたる事あり。是は異な物や、あまり甲の鉢大なりなど褒貶の時、ちと鈍なる客人手に取見て、扨々結構に御座ある、めしおかれてよからんと申す。いらぬ物を何にせうぞと仰せあれば、唯常住甲にさしられよと。

けんにようもない―思ひもよらぬ

蒲生飛彈―氏鄉

審し、なにが見えぬぞ、とも〴〵たづね見んといへども、いやちともものがと祕しよして言はず。あり〳〵てのち、唯今爰におきたるえぼしが無いと。そちがあたまにきて居るはと、わらふ時にぞさぐり見て、實にけんにようもない所にあつたよ。

○振舞の汁に大いに見事なる筍出たり。人みな大竹にならんものを、むざと食捨てんはをしいなど沙汰しければ、さるうつけ、いや竹は大事もない、大木になり、ひき物につかふべき松茸をさへくふほどに。

　　落行く河の末も知られず

　筍は本よりふしのあらはれて

○蒲生飛驒殿所勞すでに一大事なるとて、人々あつまり氣をのみ居たりし中に、うつとり二人頭をあはせさゝやきけるは、せめて飛州のことぶき、三年つゝがなかれかしと歎きけるが、一人いふ、よき毒をとゝのへてあげたい事ぢや。それはなにとしたる分別ぞや。さればよ、たかい毒をのめば當座に死なず、三年してしぬといふほどに。

○京の町にて、人あまた二階にあそび居けるが、目藥は〳〵といふ聲を聞き、其座にありしうつとりふと立ち、目くすし殿と呼び寄せ、一さじそれから申しうけうと、うはま

の魂を招きて己が口に藉りて其意をのぶる

所帯ようて―身上の持方上手にて

きする―くらはせる

ほれ者―間ぬけ

わき―能の脇

ぶぞ、心安く思へと。さらばとて池を掘り、鮒をたくさんに放し、毎日食を投げあはれむ事年久し。朋友よりあふ度に、汁にせよかしとすゝむれどもかつてゆるさず。かゝりしが、主人をうつけと見なし、あるとき推して鮒をとり、汁にするさへをかしきに、子にむかひ、まづ汁をすうて見よといふに、うけとり、あつたら親ぢや人に、しほがないと申すことは。

○うつけらしき友達どものよりあひ、おのれ〳〵が妻のうはさをかたる。なかに一人いひけるは、我が女房は手きいて、所帯ようて、すがたいつくしく、愛敬あり、いはんかたなくおぼゆれども、とかく心が短慮にて、月々に一度二度われをたゝくにくたびれた。又ひとりの男も、それ〳〵われが子持もそしる事は努々とないが、ともすれば頭を杖にてきするにあきはてた。今一人がいひけるは、とかく女房にたゝかるゝは、日本一のうつけ者ぢや、さて〳〵そちどもはほれ者やとわらふ時、先の二人、何卒女に叩かれぬ身のもちやうがあるかや。中々祕事がある、知りたる者があるまいというて、揚句にはきものはかずに逃げたがよいと。

○わきに出づる大夫、樂屋にて目に佛をうしなひ、物をたづね廻る風情あり。人みな不

口よする―神子の死者

○今春禪風毎朝の看經怠慢なし。ある朝艮方にむかひ、手を合せ數珠をもみ、そのものそのもの〳〵と許りにて、神の名も佛の名も、更に出ざりしかば、側にある者春日大明神かや。それ〳〵其を春日々々と。是は健忘とて大智の上にもある病なり。あやまりにあらざれども、時にあたりては、うつとりのやうにて此部に入る。

○ある長老の高座にて諷誦をよみをはり、施主の高悦といふ二字の內、一字よみを忘れ施主高々と何遍もいひて、あげくに、施主高よろこぶといはれしも、健忘の病なるべし。

○おり湯に入りたる者いふ。此湯あつくてたまられず。かうの物をはやくもち來れ。なんの用にと問へば、飯のゆのあつき時、かうの物にてまはせばぬるうなる程に。

ほしいのかうの物といふ題にて、

義經の命にかはる繼信は今もほしいのかうのものかな

○ちと利口になき廿あまりの惣領あり。父これをさそひ外面に出て遊覽す。折ふし頃は五月のすゑ、澤邊に眞薦しげりあひたるを見、親ぢや人、此ちまきの木に實はいづるかやと。

○男子一人あり。親の弔とて神子を請じ口よする時に、神子、親人は鮒になり水にあそ

小便當―小器用
うつとりにし―亭主を馬鹿にして

ち、いづくのうつけめぞ、是非はりかへさんとわめく時、専十郎いふやう、藤五郎いかいるなか者があるは、初心ものぢやと。

風呂たきのわが身はすゝになりはてて人の垢のみ落すものかな

○下手なる長談義の席に、よはひ五十にあまる女房かたびらをかづき、聴衆みな〳〵立ち去れども、つひに一人立たず居たり。長老高座よりかんじてほめんとおもへる刻、彼女房、唯今目さめたるかほにて見あげ、昨日の長老のまだ御座あるはと。

うつとりがふたりある。

○利根をよそにあづけたる亭主、なまじひに小便當にて、つかふ者のあまたあれども、うつとりにし、あさおきなどする者なし。或時中間の名を呼ぶまではなく、われは寝てゐながら、夜はほの〴〵とあかさかやと舞ひければ、内の者きく〳〵、待てしばし、待てしばし、夜はまだ深きぞ、しらむは花の陰なりけりと。よい返答の。

○或人錢をうづむ時、かまへて人の目には蛇に見えて、我が見る時ばかり錢になれよといふを、内の者聞居て、錢をほりてとりかへ、蛇を入れて置きたり。件の亭主後に掘りて見れば蛇有り、やれおれぢや、やれ見忘れたかと、幾度もなのりつるこそ聞事なれ。

遲齋―僧の路を行きて食を乞ふこと

ゑのこ―犬の子

へ入られたる大ひげの男、此程のりし船の船頭に、よく似たと思うてあればそのまゝようたと。

○堺の正法寺に惠雲とてけしからず犬におそるゝ坊主あり。珠旭といふ寺僧とつれだち遲齋に出しが、途中にゑのこあるを見附け、そのまゝにぐる。珠旭彼僧をとらへて、あれは犬ではない、ゑのこにてあるぞ、われとつれだち通れといへば、いやとよ、子があればおやがある物といふ〳〵逃げてかへりごとは。

○藤五郎とてこざかしき者と、專十郎とてうつけと、ともに田舍の者、在京するに同宿なり。二人つれだち講堂の風呂に入らんとす。藤五郎此ほど專十郎がうつけををかしく見つけ、さいはひの事や、小風呂にてあたまをはらんとたくみ構へて、專十郎、京の習に、風呂に入る者はかならずあたまをはるぞ、腹をたつるを田舍人といふ、はられてもこらゆるが都人ぞといひ教へ、小風呂にともなひ入れ、おもふさま目と鼻のあひだをはりけり。專十郎いふ、藤五郎はやくはせたはと。沙汰するな〳〵とて、又一つはりてけり。藤五郎又くはせたはと。專十郎おもふ、われればかりはられて、かへらんは本意なしと案じ、老人のよほ〳〵と入る者をまちて、おづ〳〵一つはりたれば、彼あひて大に腹を立

出居—客間
餅つくと云云—「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」
すうだ—濟んだ、極まつて居る

くらと問ふ。一つ一文といふ。天瑞ちく／＼合點し、一文とはそらねぢや、たゞくはう。

夜から起きてほれたなり、物のいりたるもちをたぶまゐらせう仔細はの。

○座頭の出居にやどをかりて、いねたるをうちわすれ、よびも出さず、つきたる餅のあたゝかなるを、家内の人ばかりくふ座敷へ、

餅つくと目にはさやかに見えねども杵の音にぞ驚かれぬる

○夜ふけ三更のをはり、奈良の都に火事出來す。ある家主いそぎ二階にあがり火もとを問ふ。隣の者みな橋本のかどより三間目よといふ。それは我が姉の許なりと肝をつぶしそのまゝはしると思ひ、だうどおちて腰をうちをりたり。日を經わづらふ。人みまひたれば、かまへて此後になにと大切なる人の家が燒くるとも、二階からすぐにお走りあるな、おつるにすうだ。

最明寺時頼禪門

恐るべし用心もせでくやむなよ火ごと盗人さては後の世

○ある人風呂に入りてゐけるが、俄に顏色かはり、あら苦しや、ふな心があるというて吐逆する。こは何事ぞ、海はなし船はなし、異な病やと不審しければ、されば只今是

まなか三尺

むいた—蒸した

吉光—粟田口吉光刀鍛冶の名工

○腑のぬけたる仁にえびをふるまひけるが、赤を見て、これはうまれつきか、又朱にてぬりたる物かと問ふ。生得はいろが青けれど、かまにていりてあかうなるといふを合點しゐけり。ある侍の馬にのりたる先へ二間まなか柄の朱鑓、二十本許もちたる中間どものはしるを見、手を打つて、さても世はひろし、きどくなる事やと感ずる。なにをそなたは感ずるやと問ひたれば、其事よ、いまの鑓の柄の色は火をたいてむいたものぢやが、あれ程ながい鍋がようあつた事やと。

三月盡を　雄長老

春の日は長鑓なれど篠の葉のひと夜ばかりになれる石づき

也足の判に、さゝの葉鑓石づきになれる、三月の名殘よくいひつゞけられたり。作においては吉光にこそ。

○美濃國立政寺の老僧に天瑞といふありき。始めて京へのぼらんと用意するを見、人しなんするやう、京はもののそらねをいふ處ぞ、たとへば一錢にうるべきをば十錢といふ、其心得をしたがよいとをしへたり。それていの事をばぬかるまいぞとうけごひ、やうやう都にのぼり祇園あたりにて、ちと望にやおもひけん、餅を出しだる棚により、此餅い

涙ありとなり。

かくてこそ神は正直のかうべにやどらせ給はんずれ。唯大人はうかとしたる體にて、色々の事をいはせ聞き、其よきを行ひ悪きをすて給はんが肝要なり。時の威におそれ、たまく゛も御氣に入る事計こそ申さんずれ、國のため人のためによき道は申さぬなり。大臣重レ祿不レ拯レ諫、小臣畏レ罪不二敢言一、下情不二上通一此患大也。と後漢書にあり。

雲はみなはらひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな

といふ歌吟じつゝ、太田道灌つれにいへるやう、勝て甲の緒をしめて候よ。

○大名のもとへ客あり。振舞に湯漬出たり。其席へ又客あり。それにも膳をすゑたり。又客來あり。膳を出せとあれどもつひに出しかぬる時、物まかなふ者をよび出し、何とて手間もいらぬ事のおそきや、湯を得わかさぬかとはをぬかるゝ時、手をつかねて、湯は御ざるがづけが御座ないと申したるにぞ、どつと笑ひになりにける。

艀

大名は大耳
—諺

これは勿體なき御諚に候、たれやの人さやうの事をば申上げけるぞ、世上には只猿が顔が殿様に似たとこそ申し候へ。大名聞給ひて、ゆゝしくも申したり。さこそは侍らんずとて、いさゝかも憤りなかりしは、下劣の申しならはす、大名は大耳なれや。

○少年にまなびざれば老後に知らずといへり。貴人とあるはをさなけれども、我意にまかせそだておこなふ故、大略は文字言句にうとき人まゝ有り。然るあひだ、さる大名の直筆にて、連書を廻さるゝ事あり。わかき侍のもちありき、返書をあけながら、さて今度の御使に罷出てこそ肝をつぶし候へ、日頃存じにかはり、あれやうにこなたの殿に、人のおぢひろめくことは御座ないと申しけり。さて何というておそるゝぞと問はれしかば、其義あり、こなたの文をひらきては、そのまゝあつこはいでいでと、さき〲にて感ぜられた程にといへば、さぞあらんとばかりなりしも、大名に似合ひてあり。

○大相國御前に二徳かしこまりぬ。いかなれば汝は、此ほど見えなんだぞと御諚ある。されば九世の戸の文珠より參れといふ告により、參詣仕りたるよし申上ぐる。なにと文珠にあうたるかと御尋ねあり。中々お目にかゝつてお言傳が御座ある。何とあるぞ、言上せよとあれば、二徳めに目かけてたもれ、とゝさまかゝ様と申しければ、そのまゝ落

卯月―陰曆四月

寄せさゝやきて、みづからひげをとらへ、弓矢八幡ぞ、日本物ぢや。

○河内の國に交野といふ所あり。かた野の御狩とかけるこれなり。彼領主に大塚彦兵衛とかやいうて、あたりまで崇敬の人ありき。宗祇と入魂他にことなり。卯月のはじめつかた、祇公たちより給ひ休息のほど、ありしいろ〳〵風流の物語に時うつりて、なにと祇公はいまだ郭公のはつ音をば聞給はぬや。いな夢にだもおとづれずとあり。大塚さらばわれ發句を仕りなかせんとて、

なけやなけわが領内の郭公

とあれば祇公の脇に、

孫子をつれてなけ時鳥

第三をする人なし、迚の事にさた候へとあれば、また祇公、

とにかくに御意にしたがへ郭公

時にあたり人の心をやぶらんは、興さめて見えぬべし。祇公のあいさついたされ候かな。

○かたちことに痩くろみてわたらせたまふお大名ありしが、近習の侍にむかはせたまひ、予が顏が猿に似たと人みないふと聞いたが、まことか、うそか。臣うけたまはりて、

下されまじき—食すまじ
がしゆつ—我執、我儘
こえよ—本のまゝ

ことしよりをしよほしよの二心うすくなりせば國ぞをさまる

千金の携にもまされりと褒美ありし、尤奇なるかな。

○太閤の御時、二徳といふ者別して御氣に入りたり。ある朝生鶴の汁を食せよとあれば、愛宕精進をいたす、下されまじきと申上ぐる。己がしゆつな、何事をいのると。私はたゞ太閤樣の御宿願に候。何事をいのるぞ。臆病にならせらるゝやうにまもらせられよと。臆病でよからん事は。さればあまり命しらずに、鐵砲のさきへもかまはせ給はねば、若あたりて果てさせられては、私はなにとならうと存じてと申上げければ、さもあらんとの御氣色なりし。

慈悲の目ににくしと思ふことはなし咎あるは猶哀れなりけり

ともあれば、天下の主に似合たりとや申さん。

○大名の世にすぐれて物見なる大鬚をもちたまへるあり。あまりに鬚をまんじ、來るほどの者に、我がひげをばなにといふぞと問ひたまふ。たゞ世上に殿樣のおひげを見るものごとに、から物と申さぬ者は御座ないと申しあへり。大名うちゑませたまひ、げに誰もさいふよと、ひげをなでゝゝして、そこなる者こえよとまねかせたまひ、身ちかく

さればー此三字慶安本なし

紹巴ー連歌師里村紹巴

其次のものー烏

○信長公に對し、公方御謀叛の時節、御出馬ありて上京放火なされし事ありし後、連一検校御前に候うて、今度御陣洛中のさわぎ、上下おぢ恐れたる事、前代未聞と申上げければ、さあらうずる。扨その恐れたるやうすはと仰せあれば、されば上京に火かゝると見て、二條に候ひし者の妻、まづ我子をさへ連れてのけむと思ひ、三つ四つなる子をせなかにおひ、走りふためき、四條の橋のもとまで逃げきたり、あまりくるしく、ちと子をおろしてやすまんと思ひ、地の上にだうとおいて見ければ、石臼にてぞ候ひける。

○護明僧正の母上幼少にてわかれ、つひにあはぬをうらみの歌となん。

　春雨のをやみもはてぬこはいかにふりすてられて濡るゝ袖かな

○紹巴のかたへ烏丸殿其外公家達の御入ありて、樹木など御覽あれば、桃柿のもとに人のなりをまね、弓と矢をもたせたるおほし。烏丸殿あれはなにの用心ぞや。されば鳶のきてはなり物をあらす威しなりと申されたれば、烏丸殿、鳶かや、其次のものの用心ではないかと、時の興にはあいらしやと人みな申せし。

○濃州のたいねんといふ人、徹書記年頭の祝儀に參られ、土産を懐よりとり出し、上られつる。取りで見給ひければ、

四德齋—しと(尿)臭い

とうざんせう—東三條、唐山椒

こうし—小路、小牛

ふらふまゝ、その旨を工夫ありて、齋名を與へたまへと乞ふ。僧ほめて、人に一德ある事まれなり。それならば唯四德齋といはん。

いやな齋名の。

○名字の讃歎する時ある者のいふ、昔より今に公家には草や木の名をつき給ふ事や。なにと。すゝき殿、松の木殿、竹の内殿、藪殿、葉室殿、柳原殿など。いやまだある。誰そとへば、とうざんせう殿とて。

○傍より申しけるは、お公家衆は鳥獸の名をこそつかせ給へ。まづ烏丸殿、鷲尾殿、鷹司殿、猪熊殿といひければ、又そばの者、まだあり。たれぞや。萬里のこうし殿の。

○小姓の名をかけがねとつけて呼ぶ人あり。なんのゆゑぞやと主に問ひければ、唯の時は我まへにゐるやうなるが、少なりとも用のあるとなれば、はづすといふ心なりと。

○相撲とりあり、雄長老のもとに出でて、なにとぞ名と名字をつけて給れと望みしかば、荒磯浪助、ついでに名乘をこふ時、堅苦と。

貴人之行跡

優曇華―三千年に一度花さき實のるといふ木

坡谷齋―はこ（糞）臭い

○年八旬にあまり、はじめて男子をまうけ、悅かぎりなし。ある東堂のもとにつれ行き、優曇華の花まち得たる心ち候、此子に名をつけてたび候へかしと申しければ、やすき事とて千代もとつけらる。老父なゝめならずに思ひ、やどにかへり、あたりの人をまねき、酒などもりながしけり。その座の中にまた東堂へ出入る者ありて、千代もとつけられし仔細を如何にと問ひし時、さればとよ、八十にあまりての子なれば、ぬしが子ではあるまい、たゞ人の子にてあらんと思ひ、さてちよもとはつけたよ。業平の歌に、

世中にさらぬ別れのなくもがなちよもといのる人の子の爲

とあるはと返事なり。

○才智のたらざるをばかへり見ず、高慢したる體の者、和尚の席に詣でて、切りに齋名をこふとき、なんぢ何事ぞ、修行底の德功ありやとのたまへば、さん候、東坡山谷のやうにこそあるまじく候へ、およそ詩聯句の道にはくらからずと申す。和尚にくき心とやおぼしけん、めでたうは、さらば東坡の坡と山谷の谷をとりあはせ、坡谷齋とよばんとなん。

○又東堂にむかひ、それがし若年より心にかけ、碁、將棊、連歌、弓法の道を心得てさ

見る—海松

ずんぎりといふ字は何と書きまゐらするぞや。直切と書くと教ふる。さらば書いてたまはれと所望し、火燧袋に入れて持ちぬ。齢ふりてかしらを剃り、みづから名を道ずんと呼ぶ。聞く人皆珍しや、つひに聞きたることもない名というて、ずんの字はと問ふ。直切のずんの字をさへ知らいで、物かきだてはおやめあれと、けつくに。

○禪門になりたる者にむかひ、名をば道見といふべし。人ありてよみを問はゞ、道はみち、見はみるとよむと答へよ。かしこまりて候、ありがたし、見るといふ物は、そのまゝひじきに似たる物の事で御ざあるほどに、中々忘れは仕まいといひしに、ある人そちが名は道はみちであらうず、見はと問へば、見はひじき。

○ちとおどけたる禪門、法名をこふに、われらはうかとしたよびごゑはいやで御座ある、二つながらはねた名をつけてたまはれとのぞむ。心得たりと順欽とつけたり。順はめぐる、欽は欽明天皇の欽の字ぞとをしへければ、手をあはせて、それは王樣のおなの字なり。又用明天皇と申すも候かと問ふ。中々それも同帝王にてあるぞ。とつくと合點仕たるとてかへりぬ。人、順欽の二字を問ふ。順はめぐるなり、欽は用明天皇の欽の字よ。すりちがうた。

棄恩入無爲の志—出家の望

峯入—修驗者の大和吉野郡の大峯葛城山等に分入りて修行すること

七夕にかしつと見えて木幡山けふはかちにてこゆる旅人

○東西わきまへざるをとこ、年も六十にちかづきければ、棄恩入無爲の心ざしを思ひより、菩提をたのむ寺にまうで、しきりに法體の望をとげんとす。住持の僧すなはちかみをそりて、名をば法漸とつけたり。法とはのり、のりはそくいひのこと、ぜんとはやうやく、やうやくはかうやくの事と、道すがらおぼえ家にかへれば、人みなあつまり法名を問ふに、法漸と答ふ。法の字のよみはのりを忘れてそくいひと、漸の字のよみはやうやくを忘れ、しばし工夫し、かうやくとこそ申しけれ。

○佐渡に本覺坊といふ山伏あり。治部卿とて弟子をもちしが、ある年名代と號し峯入させけり。雲に臥し岩を枕の難行事終り、本國に歸りぬ。師の本覺對面の時、治部卿申しけるやう、今度は先達憐愍を加へられ、名を替へ大夫になされて候と語りければ、なにと大夫になつた、曲事なり、われさへさやうに大なる名をばつかぬに、中々のことなり、さりながら本山にて、つきたる名をよばぬも又いかゞなる條、たゞ中夫になれとぞなほしける。

○いかにも文盲なる者の、さすが時々寺に出入するあり。茶をもらひて飲むたよりに、

訓とあればそむかず、たふとみあへり。よきみぎりを見合せて、僧のいはれけるは、そちの名を畠山右兵衛佐といへば、何とやらんいひにくがる程に、下をうへになして、山畠助兵衛というてはいかゞあらうずと直しければ、ともかくも、あしきことはよも宣はじとて合點しけり。

○かたのごとく人のもてはやす侍ありしが、いろはよりほかには、假名書の文をさへ讀むことなし。ある時地下人參りて、我名をかへたきよし望みければ、れいのいろはをかたはらにおきて、い兵衛とつけうかや、いやそれならば、ろ兵衛とやつけん、いやは兵衛、に兵衛、ほ兵衛、とつくれども、いやたゞ今すこしながうて、はねた名をつきたう御座あると申したれば、さらばへとち左衛門とつけうずといへり。

○心うきたる侍のひくわんに、五十にあまるものあり。名を彌十郎とぞいひける。あるとき主たる人、かの彌十郎をよび出し、そちは年よりも餘に名がわかいほどに、けふからは右馬丞になれやとありし時、ゑみを含み、いひ〳〵わらひければ、きやつ右馬丞とつけたれば、いさみてはやいなゝいたよと。

○細川右馬丞殿へ松月の參られたれば、七夕の馬といふ題を出して、

○人ありて沙門の家に入り、ほつたいして後戒名をつけん事をこふ。住寺の僧問ふ。なんぢが心にのぞめる意旨は無きかや。たゞ私のねがひには、ねうだうとつきたう御座ある。そも何といふ仔細ぞや。さん候、我が親は法華宗にて候。また母は浄土宗にてありしほどに、ねう法蓮華經のねうの字と、なまいだうのだうの字をとりあはせてねうだうだと。

○雄長老の小者に鳥をさす上手あり。前大樹御耳にたちし、内々尊意の旨長老承はり及び申され、辱き儀なり、樣子たち聞き罷出よ、名をば松若といふなる、此まゝにてはいかゞと伺ふ。さらば伯耆になれとありければ、それはあまり分に過ぎてと恐れたり。大事なし、幸ひ柄さしはうきよ。

○河内の國の内山のねぎといふ所に、さのみ事もかゝで世を送る百姓ありしが、われとわが名を畠山の右兵衛佐とつき、まんじくすみ、いやおうの返答をうちければ、人みなをかしき者にいひなし、褒貶はすれども、誰ありて無益と數ふる者もなかりしに、親類の者ども聞兼ね、あたりに物など讀みたる僧のありけるをたのみ、右兵衛佐と引合せ、つねづね出入をいたしければ、麻にそふ蓬はためざるになほくなるいはれにや、僧の數

まんじくすみ―增長しきつて

慶安本巻二を巻一とす

ありー慶安本になし

東堂ー禪寺の僧役の名

とうー唐、藤

醒睡笑　巻之一

名津希親方

○いろはをも知らぬこざかしき俗あり、ある東堂の座下に參り、われ〳〵年もなかば更け、若名にてあらんもいかゞに候。何とぞ左衞門か右衞門と、名をつきたきよし望しかば、東堂、大方そちのつきたいと思ひよりたるを、いうて聞かせよとあれば、さらば日本左衞門とつきたきよし申しけり。東堂あざわらつて、さやうの大なる名はめづらし過ぎて、愚僧まで人の褒貶せんずるはいかにとあれば、くだんの男、いやあまり大なる名とは存じ候はず、とう左衞門とつきたるさへ御座候は。

○豐前の國の太守長岡越中守殿、京より壁ぬりの上手を一人つれて下向あり。過分に知行をも給りしかば仕合比類なし。とてもの義に名字を下され、名をつき替度き旨懇に申しければ、心得たり、一段望神妙なり、かくこそあるべけれ、つけてやらんとて、藁の朝臣鏝次下地壁右衞門と。奇妙々々。

を鍛ふる時の鑿

に教へし。あくる朝、やれ松千代昨日の事はと問ふ時、日本のかなしみは、みな爺の悲しみやといへり。

被官—下役

かなとこ—鍛冶の金屬

官の候うて、それは目出たし、鬼は外へふくろは内へと、申しならはして候ほどにといへば、侍大に悦喜し、小袖を一重つかはしけり。如何にも鈍なる傍輩是を見、我にも夢物語せられよかし、氣にあふやうにいうて、小袖をとらん物をと思ひゐつるが、彼主人ある朝、又此ゆうべわれがあたま落つる〳〵と夢見たはとかたるに、彼鈍なる男ふと出て、それこそ目出たきまさ夢〳〵とぞ申しける。

○尾州に米野與兵衛といふ武士あり。たゞ事ならず物忌する人なりし。熱田大明神を信仰し、折々參詣の度、先へ侍をはしらせ、右の方に不吉の物あれば、右へ向きてたんぽぽといふ。すなはち彼人顏を左にし行き、左の方に不吉の物あれば、左へむきてたんぽぽといふ。すなはち彼人かほを右になして行く、奇妙の仕合なりし。ある時の參りに、道に雁のいきたるがえ立ずしてゐたり。すなはち右の與兵衛、急度雁をつかまへ、是はかりがねいやなもの、かしかねなればよいが、又とりまはし、是はがんすまぬ物いま〳〵し、唯もていて捨よといへる、をかしや。

○鍛冶屋の土佐といひて西洞院にありし。物いはふ事人に過ぎたり。年の暮に孫の七八なるを近附け、元日に我が顏を見、日本のかなとこは、皆ぢいのかなとこといへと、懇

崩れさうなり。亭主あやふき事に思ひ、下主にむかひて、もし五ケ日の内に、あれなる薪がくづれば、くづるゝといふな、薪がめでたうなるといへと教へけるが、はたして元三のかんをいはふ時崩懸れり。亭主なう與二郎、薪がめでたうなるはと呼ぶ。與二郎はしりきたり、任せておけ、與二郎がをらう間は、何ともあれ、めでたうはなすまいぞと。

○大晦日に六つになるむすこをちかづけ、元日の朝わが頭巾を手に持ちたらば、とゝのあれともかうも頭巾を持たればといへと教へおきて、明朝頭巾を手に持ち、かぶりたきをこらへ、あちこちし見せければ、むすこ、てゝはともこもせうと仰せあつたが、ともかうもえおしやらぬのと。

○陸奥の者を中間に置きたり。亭主大晦日に明天早朝には、何事をも祝言許いふべし。あやまつて不吉の儀いはぬやうにとぞ敎へける。件の男手水をつかひさし、餅ぶんだしなされよ。燒き申さうといふ。亭大に腹を立て、いろりのきはにありし木をうちつけたり。中間かさねて、爰な旦那のなげきしなさるゝはの。

○人にすぐれて物祝ふ侍、今夜の夢に、梟が家の内へ飛入りたると見たはとあれば、被

○春の始の朝より、千秋萬歳とも又鳥追ともいふかや、家毎にありきて慶賀をうたふに、千町萬町の鳥追が參つたというて、ある門の內へ入らんとしければ、戶のわきに子をうみて人におそるゝ犬ありしが、不圖むかうずねをしたゝかくらひけるまゝ、あらたのしやといふを、いたさにあらかなしやと。

○元三をいはひ、膳部とりあつめ、目出たいなといろ〳〵したゝめてすわりぬ。盃あなたこなたとめぐるなかば、十ばかりなる惣領、ふと座を立ち、親の汁に殘れる鯛の頭をとりて、手がひの犬をよび、これはとゝのかしらぞくらへといふに、七つ八つなるむすめのはしり行き、母のくひ殘せる魚の骨をもちて出で、これはかゝの骨ぞ食へといひし。無興の。

○こびたる禪門山林に行暮れて一宿せり。亭坊向顏の後、其方はいづれの道をか心にかけ給ふやと問はれ、打成一片歌の道に嗜ありと。さあらば我が身老衰せり、松鶴の齡によそへ目出たう發句をとありしに、暫く案じて後、

此寺の坊主を松につるすかな

○町人の物いはひするあり。大晦日に薪をかひ、庭なる棚につませけるが、何とやらん

ほたけ—穂丈

歳徳の方—暦の上にて其年の大將軍星塞りの方と相對して明の方と云ふ百事に福ありとしてまつる

大略腹を煩ひ給ふ事あらんと申合へり。無興の。

○和泉國に大島といふ在所あり。其庄屋が惣領の子六歳なり。こゆみに小矢をとゝのへもたせけるが、元日の朝矢を一つはなし俵にいつけて、とゝよ〱俵をゆふたと。親大によろこびて、さて〱めでたや、ことしは尺のほたけもながく實のりて、をさむる俵のかず〱をいはん事よと祝ひぬ。もはやこれにておきもせで、今一度矢を射て見せよと望み侍り。むすこほめられ、心よげに又射たりしが、今度は門の戸にあたれり。とゝよあれ見よ、戸をゆふたはとぞをしへける。射たといふ事、わらはべの詞にゆふたといふにや。

○商人元日に惠方より持來る若夷を、むかへんと思ひまちゐたれば、あんのごとく歳徳の方よりうる者來れり。家の内へ呼び入れ、うけんといふに、折しも其朝小雨ふり、版にすりたる紙ぬれけり。賣主一枚取つて見て、是はめでたい、懐へ入れ、又取つて見ては懐へ入れ、やうやくみなになる時分、ちとぬれたる一枚あるを、是はなまめでたう候というてわたしたり。うくる者とりて見、このゑびすはぬれて候はといひければ、それこそそちでおあぶりあれと。

祕所にゆく—死す

清明流—陰陽博士阿部晴明の流派

むす子たちかしらかたかれいしぼとけ

○窮貧の者ありて五つ六つなる子にむかひ、あす元日の明方に、われ〳〵錢を手にもち、目にあててゐる時、あれとゝの錢のなかからめを見出いて御座あるはといへと、ねんごろに敎へおき、あけの日錢を目にあて、むすこが方を見れども、いとけなければわすれはて、夢にだもおもひ出さず。あまりたへかね、ゆびにて錢のまねをし、しきりに千代松よ、ゆうべからをしへたる事をいへといふ時、ちとかたちをおもひ出して、とゝのあなの中から目見だいてやと言うたる。そのとし祕所に行く。

○江州の坂本に侍あり。元日の夜　湖をひきかたむけてのむと夢見る。目さめて思ふ、水は方圓の器にしたがふなれば、おもふに思ふ事かなはんといふ告げなるかやと。此心うらにてよかりし物を、わが身はひえの山風にふかれ、行道とほく土御門を尋ね、占方の上手といふにたちよりぬれば、清明流の博士、まづ夢の相をおかたりあれ、其言句にたより吉凶を申さんと、件の樣をありの儘なり。時支干をかんがへ調子をはかり、書籍をまいつひらいつして、あげくに、まづ案じても御覧ぜよ、寒夜には水を一口二口のむだにも、腹中にあたるはならひぞかし、いはんや湖水をみなのむとあれば、よきに養生なされよ、

せんと―專ら

あさましや云々―麻增や今年は子どもに緒與れて

小僧やがてわきを仕らんとて、

　坊主を見ればはひにこそなれ

とつけたり。いらぬいはひごとや。

○有馬の湯に入ける者、宿主とかたるついでに、鷄ははねおとをばた〳〵として、とつてかうと鳴くといふは、まことかやといふ者ありしに、宿主いやとよ、ありまの鷄は一向よそのとかはりて、元日の曉より歳のくれの夜あけまで、はおとをかさ〳〵として、かつけかうと鳴くなりとぞ。身を思ふから道なき事を。

○信濃國より出づるなるからむしとも、又はまをともいふ麻を、せんとつくるところあり。其一村に行きかゝり、商人一夜のとしをこゆるに、所のならひにや、元日に宿主のいふことば、あさましや、ことしは子供におくれてと二三度こそ申したれ。おもひ内にある事を、色外にいはふことばぞや。

○行暮れて旅人立寄り一夜の宿をかりし。亭主出合ひ物語の序に、客は如何なる藝能の候ぞ。ちと歌道を心得てありと。さらば幸の仕合なり。子をあまた持ちたるにいはうて、發句を沙汰あれかしとのぞむ時、

尊勝陀羅尼｜佛が帝釋帝に向つて說きし所にして一切の惡道を淨め、一切生死の苦惱を除き念誦するものをして增壽、利福を得しむと云ふ

その分にてよかりしを、猶うたてしき事に思ひつゞけ、うらかたする人のもとに行き、過ぎにし夢を合されよといへば、書物取出し算などおき、あけくに過し夜の夢のやうさだかにかたり給へといふ。さる事よとありのまゝつげければ、卜人つく〴〵思案する體にて、のちたゞ養生をめされよ、いき身ぢやほどに、ほんはあるまいと判じける。

○商人の常に祈念を賴みて行通ふ寺あり。四國のかたへくだる朝、今日舟の出づるまゝ暇乞に參りたる由いひければ、院主の口上、とくより田舍への下向ときゝて、祈禱の旨ゆるがせなし、今朝もとくから起き、尊勝陀羅尼をいかうよみたるぞなう。

○六十におよぶ僧ありしが、歲の暮に風を少ひきければ、元日にてもあれ、たき火によせ、せなかをあぶらんには過じと思案し、ひとりある小僧にいひつけて、火をたかせけり。小僧、みられぬ今日のせなかあぶりや、正月とてわがごとき者共の、互にあそびくるふ日なるにと、腹を立つ〳〵薪をくべ、ひた物火をふきければ、坊主のあたまよりきたる物にいたり、こと〴〵くはひにまぶせり。老僧つく〴〵見て氣にかゝり、小僧にいはうて、はいかいの發句をせんとあれば、なか〳〵よからんといふ時、

小僧めがふくとくわれにふきかけて

鬼は内福をばそとへ出すとともとし一つづつよらせずもがな

也足の判尤興あり。されどもたとひ年は一二よらせ候とも、福をそとへ出さん事、いかゞと申すべくや、一笑々々。

○貧乏神とわりなき知音の者ありしが、ちと酒にゑひて壁にもたれ、ゐねぶりしけるみぎり、肩から物が何とも知れずどうと落ちけり。目をさまし手をあはせ、やれ〳〵嬉しい事や、此年月かたにゐたる貧ばふ殿が、今日といふ今日おちて、我身をはなれたよと合點せしが、たれいふとも知れず、あまりおほくよりあひ、そちがゐねぶりするあひだ、油びやうしを蹈むとてとりはづし、ひとりおちにき、いまだはてはないぞといへり。なにと心にいはうても笑止や。雄長老

大なる柹うちはがな二三ぼんびんばふ神をあふぎいなさん

也足の判、柹團扇は貧乏神のつくといへば、二三本にてあふぐ事いかゞ、彌增に長居すべくや。

○ある者正月二日の夜、夢におもひよらず、我身に癩瘡いできたるていを見、目さめつく〴〵案ずるやう、かれをば物よしといふなれば、仕合なにはに物よからうはしかやと、

也足―也足軒中院通勝足利時代の有名なる歌匠

柹うちは―澁團扇

いうた—慶安本「申した」

大どし—大晦日

雄長老以下慶安本無し

神をうちわすれ、やう〳〵酒をのむころにおもひ出し、仰天し膳をあげ座敷を立ちざまに、さらば福の神で御座る。おいとま申し参らするというた。

○和泉國に寺門といふ在所あり。一人の百姓名を好みて、びんばふとつきたり。又一人は夷とつく。其所の地頭、元日にもしびんばふ禮始にや來らんといやがり、出ちがひて氏神へ参りしが、下向する道にて、夷に行逢うたり。夷はどちへ。そなたより出て参ると。あら氣がかりやと歸りいたれば、又びんばふに行逢へり。貧乏はどちへ。殿へまゐると申しつることよ。忌むといふ字は、おのが心とかきたり。

びんばふの神も出雲に行くならば十月ばかり物は思はじ

○ある女房のもとにつかはるゝ下司の名を、福といふ有りき。大歳のゆふべ下司にむかひ、そちは宵から宿へゆきてやすみ、あすはとくおききたり、門をたゝけとひまをやりぬ。夜もふけすぎて、五更におよべどもきたらず。されども門をたゝくおとせり。すはやと思ひ誰ぞといふに返事なし。あまりにたへかねて、福かやれといひければ、いや與三郎でござる。なにしにふくであらう。福はよひからよそへいた物をとぞつぶやきける。

雄長老

かん／＼雑煮

や、われ／＼がうりかふ藥種は、みな法華經の肝文にてあるよなと、彼坊主をひた物をがみしも。

○剃髪染衣の僧祕鍵をならふ。眞言は不思議なり、觀誦すれば除二無明一と敎へけるに、いやそれはかたことさうなと疑ふ。大師の言葉これなり。そちは又なにとよまんや。彼僧我はたゞ勸進すれば、もみをもらうであらうとなほしけり。

祝過るも異な者

⊙けしからず物毎にいはふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日の晩いひをしへけるは、今宵はつねよりとく宿にかへりやすみ、あすは早くおきて來り門をたゝけ、内よりたそやと問ふ時、福の神にて候とこたへよ、すなはち戸をあけて呼びいれんと、ねんごろに言含めてのち、亭主は心にかけ、鷄のなくと同やうにおきて門にまちゐけり。案のごとく戸をたゝく。たそ／＼と問ふ。いや與三郎とこたふる。無興なか／＼ながら門をあけてより、そこもと火をともし若水を汲み、かんをすうれ共、亭主かほのさまあしくて、さらに物いはず。中間ふしんにおもひ、つく／＼思案しゐて、よひにをしへし福の

同—慶本無し

覺ひとり法藏坊といひけり。なんぞと返事あれば、山椒をまゐるかと。

○同千部講讀の請狀まゐりけるに、一文不知の經たつ坊あり。つかふ小者を松若といふ。に向ひて、此度の出仕生涯の大事とおぼゆるぞ、おのれねふりをとゞめ、我がうしろの方にきつとゐよ、もしよぶに返事遲くば曲事ならんといひつけ、かくて大衆の席につらなり、讀經すでにはじまり、序品第一とつくるから、かの經たつ坊、松若々々と如何にも靜にいふ。連讀少しもちがはざりしが、經しどろ讀の時、例の磬をひしとうちきる。彼坊が唯一人松若と讀みたり。松若やつと返事するに、お湯のまうと。

○博奕にうちまけ詮方なき者、冬の暮髮を剃りて法師となり、法華宗の寺に行き、座敷の掃除をも仕り候はんといふ時、經をばおぼえたるやと問はれ、なか〳〵の事とこたふ。さらばまづおきても見よとありけり。其晩景檀那のもとより使者來り、明日は親の年忌なる條、僧衆十人にて一部經をつとめ給へとなり。彼あたらし坊主、終夜工夫するに經をよむべきやうなし。我わかき時藥屋に奉公し、藥種の名をおぼえたり。これにて筈をあはせんとおもひ、既に妙法蓮華經と始りける時、その儘彼人つくる。桔梗、人參、續斷、白朮、干姜、木香、白芷、黃連といひけるを、藥屋の亭主聽聞して、あら有がた

て、わざと遠路を行きて見せければ、うちうなづきていふやう、何もいんしんの物は無いかといふにぞ、三いろまで候へども其物をも見知らぬまゝ、これへもちて參りたりといへば、一目みんとて見れば、山賤よりも猶おとれり。されど口はかしこくて、文をひろげ聟殿へ申す、むすめの大切さに、龍王のへのこねこぎにして十許、鬼のきくぶし三十許、手ごろのつぶて百ばかり、三いろともに山海の珍物とぞよみける。

此みの果はなにとなるらん

海士の屋の軒より高き貝のから

〇人ありて千部の經を執行せらる。施物は米二石なり。志の沙門は兼日より集會有るべき旨觸ありて、ある一村に本覺坊、法藏坊とてあり。多寺の中に法藏坊は、法華八軸をそらに誦する達者なり。本覺坊は妙法の二字をもおぼえず。此ふれまはりてより、本覺思ひたくむやう、二石の米をどりにがさんは不覺なるべし、所詮法藏坊をたのみ、我むかふの座になほしおき、大衆まねをせんに仔細あらじと出仕をとぐる。かくて導師經をはじめければ、本覺よみけることば、法藏坊はおれを見る、おれは又法藏坊見るとよむに、少も讀經にたがはず。さりながら經はやくちになれば、導師磬をうちきると、本

無智之僧

○幼少より、つひに經にむかうたる事もなかりし坊主、千部の經に座列するあり。よく案内知りたる人、そとちかより、そちは何事をいうて、一座の役をば勤むるぞや。さればとよ、一首歌をよみたるが、それを吟じて理をすますは、われ師匠に習ひて覺えたる文唯一つあり、いはゆる阿耨多羅三藐三菩提也、此外は無し。其歌はと問はれてなん。

あのくたら三みやく三ぼだいこそ佛なれのこる文字ともおとなたてして

恥といふ事を知らぬ、あのくたらよみやれ。

○大般若を轉讀の施主あり。かたちばかりは出家の身、讀むべきあてはなけれど、いかやうにも座をはり、布施を得たき望あるゆゑ、法衣をまとひ膝を組み、人々大般若波羅密多と高聲によめば、經をひろげおなじ調子にあげ、大だんな三藏ほつしめが、ようない物をもてきておいて、人に難儀をかくるはやといへども、人はきかなんだげな。

○海邊の者山家に聟を持ち、いんしんに、蛸と辛螺と蛤蜊と三色を持たせやりたり。其文をよむ者もなく、三いろを見しりたるなし。文をば物しりの出家をたのみてきけやと

いんしん—音信、見舞

時宜を出かせ—挨拶をうまくせよ

三藐院殿—近衛信尹

いや字—餘計な字

○わかき男の聟入するといふに、知音の者異見し、かまへて時宜を出かせ。心得たる由にて行きしが、一圓言のはなし。あまり本意なく思ひ、立さまに手をきつとつき、此中柱はこなたので御座あるか、どれからまゐりたるぞ。

○田舎より主従二人始めて上洛し、京の町に逗留せし、休息の後見物に出づる。下人にむかひ、都はいづれも同様なる家作なり、よく〳〵目じるしをせよとをしふる。心得たりと領承せしが、晩にのぞみ宿を知らず、主腹をたてしかる。返事に、いや門の柱に唾にて書附を、たしかに仕りしが、消えて見え候はず、其上に猶念を入れ、屋根の上に蔦の二つありしを目附にしたりしが、それもいな事で見えぬと。

○不断光院の住持近衛殿へ參られし時、三方を許すとあれば、其後常に三方にて齋非時を給はれり。此由三藐院殿聞召し給ひ、

かり初にゆるすといひし三方を不斷くはふはむえきなりけり

○筆者を頼み伊勢物語を寫させけるに、昔男と云を假名にむし男と書き、かの字を落したり。主人見附け、最初の三字の内をさへおとされたるやと腹立する時、彼かきて云ふ、ひた物書ゆかば、如何程も末にいや字の候はんを、たしに仕つり候はんと。

くちわきしろき—小さかしき

歯をもぬき—腹をも立ち

ば、推したり、其犬は一圓文盲にあつたものよ。

○京にてくちわきしろき男、ちと出家をなぶり、理窟につめてあそびたやと思ひつゝ、さかしき人に向ひ問ふ。やすき事なり、をしへん、なんぢ沙門にあうた時、お僧はいづくへといふべし、さだめて風にまかせてといはれんずる、其時風なき時はいかんといへ、やがて閉口すべし。此をしへを得、ある朝、東寺の門前にて出家に行逢ふ。お僧はいづくへと問ふ。僧の返事に、たちうりの勘介が所へ齋に行く、なにぞ用ありや。男とつてにはぐれ、あらお僧は風にはおまかせないのと。

○越中に井見の庄殿といふ大名あり。世にすぐれたるうつけなりし。母儀常にくやみ歎き給ひしが、ある時の見參に、笑止や、そなたは內の者侮り、何事もいひたきまゝにいうて、道なき作法と聞く、ちと折ふしは歯をもぬき、折檻もあらば、さほどまではあるまじき物をと敎訓あれば、心得たりとうけがひ、是非ともに一歯ぬかん物をとたくまれし。去程に八朔の禮とて諸侍出仕ある。家老の人申す樣、今日の御祝儀千秋萬歲、ことに天氣能くといはふなかばに、彼大名、なにと御祝儀天氣もよしと、左右いひたきまゝにはいはせまいぞ。

師走油は云云―火にたたるといふ

りけ―此二字慶安本によりて補ふ

其中樣しきに腹がいたい、此水は疊の上なればこそ苦しからね、又此月が霜月なればこそ大事なけれ、このこぼれ物水なればこそあれ、若し疊がわが身で、此月が師走で、此水が油ならば、そも〳〵よい物か、しはす油はかゝらぬ事といふなるに。

○旅人寒夜の物うさに、古疊を一でふ所望してきせられ、

下にしき上にもきたる古だたみ二條殿とや人の見るらん

○大客のあらんよしを舅聞附け、俄に造作をする故、材木をえらばず、節穴おほしとて氣の毒に思へり。彼娘夫に敎ふるやう、見舞にゆかれんにふしあなの事を申されば、短册や色紙にて張りたまへといはれよ。尤に思ひ行く。案のごとくの時宜なりき。舅大によろこび、此年月聟をうつけといひつるはうそやと。其後舅に腫物出來たり。又見舞に行き、見參らして、若し藥を知り給はぬや、唯腫物の上に短册色紙をおしたまへと。平家物語に書きたる平基盛公勢田山中に麥漆の指南と同じ。

○人くらひ犬のある處へは、何とも行れぬなどかたりけるに、さる事あり、虎といふ字を手の内に書いて見すれば、くらはぬとをしふる。後犬を見虎といふ字を書すまし、手をひろげ見せけるが、何の詮もなくほかとくうたり。悲しく思ひ、ある僧にかたりけれ

星一つ―諺「一つ星を見つけると長者になる」

むざと―やたらに

だいつぶ―飯をお臺といふ

申しける―此四字慶安本によりて加ふ

○小僧あり。小夜ふけて長棹をもち、庭をあなたこなたと振廻る。坊主是を見附け、それは何事をするぞと問ふ。空の星がほしさに、打落さんとすれども落ぬと。扨々鈍なるやつや、それ程作がなうてなる物か、そこから棹がとゞくまい、屋根へあがれと。お弟子はもと候へ、師匠の指南ありがたし。

星一つ見つけたる夜のうれしさは月にもまさる五月雨の空

○始めて奉公する者あり。お殿樣、おわかう樣、おかみさま、何にもおをつくる。主人かれに向ひ、むざとおの字をつけまい、聞にくしとあり。此後膳をする爲跪きゐけるが、主の鬚に飯粒つく。右の男殿さまのとがひに、だいつぶがついたと申しける。

○二番にかまへられたる聟殿、舅のかたへ始めて行きいたるを、友の教へけるやう、初對面に物をいはずば、うつけとこそ思ふべけれ、相構へ何とぞ時宜をでかせよ。心得たりとうけがひつるが、一言の挨拶もなし。既に座を立たんとする時、聟殿がいひ出すやう、なにと舅殿は一抱ほどある鴫を、御覧じた事はおりないか。いや見たる事はおりない。私も見まゐらせぬと。いはぬはいふに勝るとやらん。

○うつけめける亭主の腰まはりへ、下司あやまちに水をこぼしぬ。果せずこれを叱る。

しやが―胡蝶花、かきつばたの屬

申したり―慶安本「申しける」

笑止―氣の毒

に鈍なる男ありて、つひに芝恩といふ名をわすれ、お禪門〳〵と呼ぶ。禪門腹立し、しをんといふ草あり、見られたことはなきか。いやまだ見ぬと。さらば見せんとてつれだち、ある人の前栽へ行き、しをんとしやがと花さきてありしを、これはしをん、是はしやがといふと教へ、此しをんの花の名をよく覺ゆれば、我が名と同じことぞ、忘れたまふなと言含めてかへりぬ。くだんのをとこ領掌しけるが、又二三日ありて後よりあひし時、しをんをばうち忘れ、さてもしやがお久しいと申したり。

○福は宿善の果なれば、鈍なる人にまゝたのしきあり。堺にてさる町人家を建てしが、藏にも居間にも對面所にも、唯九間四方のぬり屋一つつくり、戸口を都合一つあけけり。見る人わらひさんだんする。智音の者笑止がりて、此大なる家に出入口一つあらんは、むげに不覺のいたりなり、火事といひ何はにつけ、せめて裏と表に二つなうてはかなはぬ事やといひければ、彼亭主の返答に、せんない異見や、我は一口さへあけまいと思うたもの。夢庵

いかなる罪のいまむくふらん

くちなしに咲こそ花も悲しけれ

かた子―一歳未滿の子

塔頭―大寺の境内にある小寺

本意ならめ、あなかしこ、そこつに人を年寄といふなと教へられ、あけの日彼弟子使僧に行き、女房の子を抱きゐるを見附け、此御子息はいくつにてありや。是はことしむまれ、かた子でおいりあると答へけり。弟子さてかたこには若く御座あるよと。

◯鈍なる男兵庫の町を通りけるに、黑犬の大なるが出でて、したゝかに臑を喰ひけり。あら悲しやといふ聲聞つけ、犬の主おひ散しぬ。此男詮方なく無心なる事に思ひつゞけ、尼が崎まで來りしが、黑きゐのこのあるを見附け、ひた物蹴つふみけるを、主人出合ひ、これは癖者なり、なにの咎にさやうにはするぞ、打て擲けと人あつまりたれば、まつぴら御免候へ、兵庫で足を黑犬にくらはれたる、無念の腹をいんとて蹴たとこそ。

◯塔頭の僧、途中より客をつれだち歸る。小僧出て、爰なる緣には虱が候といふ。坊主目をして、其やうな事を高くは言はぬ物ぞと叱られし。かさねて立寄り、虱と思ひしをしづかに見、坊主にむかひ、さゝやき、虱ではおりない、わたかみのおちたで御ざつた。

しらみほど世をへつらはぬ者はなし貧なる者になほも近づく

◯石州銀山にての事ぞとよ。常によりあひぬる者一人入道し、法名を芝恩とつく。友達

○ひたいかい雷震といふ觀音經の文を、何としても忘るれば、師匠餘の事に弟子が額をつかまへて、こゝの事を思ひ出よと敎ふるに、又忘れておのが額をとらへ、こゝがいらいしんと讀みし事、申しふりたるどんふくすや。

○病癒えて後よろこび事の振舞あり。酒宴のなかば、臺の物に鶴のつくりたるを取上げ、鶴の舞を見ばやなどはやされ、よきふりに舞收めしを見、一腑ぬけたるおかた立ちて、床にたてたる矢をとり手に持ち、やまひを見ばやなどはやされ、又矢を一つとりそへ、二つの矢の根をつぎ合せ、羽のかたを左右へなし、ながやまひを見ばやなど舞納めし。

○うつけらしき坊主のかたへ、折ふしは出入する農人ありし。道ゆきぶりに相逢ふ。見れば不淨をになへり。件の出家、そちは骨折や、今より後かまへて田畠に糞をせんと思ふなの、其代におれが仁王經をよまうぞよ。

○いはんかたなき鈍なる弟子あり。檀那のあつまりて、茶うけなどある座敷に、年さだんのあるは常のならひなり。然るに彼弟子、やゝもすれば、未だ三十の者をば四十と見損じ、五十許の者をば、六十あまりと見そこなうて笑はるゝを、坊主聞兼ね、さてうつけに藥がないとはまことや、我も人も年のよりたきはなし、誰をも若いといはんこそ

やまひ―病、矢舞

梅づけ—梅法師を梅干と誤解し更にいひ誤りたる悪落ち也

せんやと申されたれば、弟子いふ、いや苦しうも候はず、ちと女房ごとの出入りで御座あると。

○三井寺に貧しき僧ありしが、寺内の兒に思ひを寄せ、詮方なくあこがるれども、言ひよらん縁さへまれにて過ぎけるに、かのちごの後見の法師聞附けあはれみて、先づせめて兒の言葉になりとかけたきまゝ、いつの日の入相の頃、壺の内なる梅のもとに來りゐよ、今を春邊と花のかほばせ御覽ぜよかしなど、さそひ出んずる時、あれなる花の本のは何者ぞやと兒尋ねたまはゞ、梅法師で御ざあるといへと敎ふる。切なき志やとかんじ、行きてゐければ、案の如く伴ひ出て、あれなるはと兒の問はれければ、梅づけで御座あると申したり。

人ならばうきなやたゝんさよふけて我手枕にかよふ梅がか

○磨師にある小名の刀をあつらへ、程ふりて後宿をとひよられければ、お目にかけんと持出たり。さつとぬき見る〳〵、さてもあら下手や、あたら一腰をすてたよと腹立し、小姓にわたさる。亭主赤面しながら門送して、彼袂をひかへ、殿様は私をさん〴〵におほせ候が、下手がこれやうに大な家をもつ物で御ざるかや。

むづかしい に―厄介なれば

ければー此三字慶安本によりて補ふ

な忘れ果てたるまゝ、少も恩とは思はぬなり、三つは寺屋敷資財雜具殘なく、汝にとらするはと仰あれども、これ又少も恩とは思はぬ、むづかしいに、取つておかへりあらうまでよ、さあれば三つながら一つも坊主の道理はないと。

あだをさへ恩にてむくういはれありおんを忘るゝ人は人かは

⑥ある寺の院主に知音の人ありて、門前までおとづれられけるを、弟子出て見つけ、そのまゝ方丈に行き、ものの御出にて候といふ。院主大に腹をたて、ものとは誰が事ぞ、さてもうつけを盡す奴かな、いざわれ出て見んとて、窓よりそと覗きつくづく見るに、顏ばかり覺え、つひに名をばうち忘れ、弟子に向ひ、誠にものぢやよといへり。

○洛陽にて淨土宗の寺へ、ある尼公の參られ、一人の弟子をよび出し、十念を受けたきよし披露してたび候へとありしかば、心得たるとて方丈に行き、下京にて何といふ人の女人の參りにてと申しもあへぬに、長老はを出し、上臈とか女房とこそ申すべけれ、女人といふ事やあると大に叱られければ、弟子の返答に、そなたは我に阿彌陀經を教へて、善男子善女人といへというて置いて、今は又さういはぬとは、一事兩樣なる事をなど、さんざんにからかひて表へ出ける時、尼公赤面し、笑止や、機嫌のあしきをと、すぐ下向

御造作―お世話

坊主傳へ聞いて、汝うつけたり、明眼論に云ふ、一日師壇百劫結緣一度赴〻請師僧以〻其檀那〻如〻親子〻とも書れたり、人の賞翫するをも知らず、むざとたまはる曲事ぞや、膳にむかひ箸を手に持ち、御造作などいひて食へと指南せり。尤と同じ明朝齋に行き、例のうつそりぞ、やき鹽許にてよしとて膳をすゑけるに、敎の如く弟子箸をきつと持ち、いふやう、めしは御造作に、お汁ばかりがよう御座あらう物をと。

○小姓をおきて、試みに始めて茶をひかする、事の外あらし。是はと叱りたる時、ちと座をしさり、それはまづあらびきで御座ると。扨々おのれは、日本に又二人ともあるまいうつけやとあれば、又きつと手をつき、いや日本も廣う御座るほどに、お尋ねならばまだも御座らうと。

○日本一の鈍なる弟子が、師の噂をいふやう、坊主のいつも色々の事をいうて叱らるゝ中に、近頃聞えぬ無理を三ついはるゝ、一つは先づおのれを、なんぼうの辛苦にて人にないたと仰せある、我が犬の子にてもあらばこそ、生得人の子にてあるを、人にないたとは何事ぞや、二つはいかほど氣をつくして經を敎へしその恩を、仇に思ふとの折檻、これもいはるゝ所道理にてはあれども、其習ひよみたる經を、一字もわれが覺えばこそ、み

山陣をしつけ—慶安「山陣に」
にと—慶安本「と」なし
身ひとつ—此歌慶安本なし

の野陣山陣をしつけ、せう〳〵寒き事をば知らず、無用というて著のまゝいねけるが、夜ふくるに従ひ、ひた物さむし。時に亭主々々是の鼠には、足をあらはせたかと問ふ。いや左様の事はなしと答ふ。それならば、むしろを一二枚きせられよ、鼠がきた物をふまばさむからうずにと。

身ひとつは山の奥にもありぬべしすまぬこゝろぞおき所なき

○十計なる娘の容顔美麗なるに、女房達二三人打添ひてゐけるを人みつけ、是はこなたの御息女候や、さて〳〵いつくしさばかりなき花の形は、名に聞し楊貴妃李夫人もかくこそありつらめ、などほめければ、親父是を聞いて、さればよ此娘はそのまゝ母の顔ぢやと。

○ある人連歌の席に句を出し、けしからず慢じたる顔を見つけ、脇からいき天神と云うて膝をつきければ、あまりなつかれそ、社壇がゆるぐにと申され事は。

鈍副子

○鈍なる弟子齋に行き、檀那汁菜をとゝのへてもてなせども、あへて感ずる事もなし。

悴侍—やせ侍
しか〲の事—布施

やなど語り、時刻うつり、やう〱かへらんとする時、升に鹽をはかり僧にあたへぬ。こはなんの故ぞと問ふ。親は泣きよりといへり、われならで誰とはん、次信が日なり、こころざしに參らする。

○悴侍の妻あり、ふしぎに夫にはなれぬ。日頃かれが賴みし寺によせて、追善のいとなみをなせども、しか〲の事もなかりし。七日にあたる今日ゐはいのまへに參り、愁淚袖をしぼりけるに、住持出合ひていはるゝやう、冥途はきりもなくはれがましや、あらゆる大名小名のつきあひにて候に、二字をうけたる人の、挾箱を一つもたせぬ程なれば、身すぼらしく候と、たしかに經文に見えてありと示しければ、いたはしや、なりがわるからうずとて、唯一つある挾箱をぞ施しける。

○壁に耳ありといふ事をわすれ、そんでうそれは中々人ではないといひ出しけるが、うしろを見れば其仁ゐたり。肝をけして唯活佛ぢやといふ。そしらるゝ人ほむるを聞いて悅び、そのまゝ阿彌陀の印を結びたることよ。

○奉公人のはてと覺しきが宿をかり、四方山の事をかたりつくしけり。亭ほめて、いかさま唯の人とは見え候はず、もはや休み給へ、夜著を參らせんやといふ。いやいかほど

平家—平家琵琶

じき様になりすましたると思ひ、ある所に行きたれば、人々かのあたまの逸興を見つけ不審しあへり。刀の中心にてやきたる故に、備前長舟祐定作といふあとあり。さすが俄になほさんよしもなければ、又もとの鍛冶になりぬる事よ。

○卜都檢校叡山にて大衆集會の砌、平家ありし、山法師をりのべ衣うすくして、恥をばえこそかくさゞりけれとあるを、いかに心の涼しかるらんとなほして語りけり。其時大衆あつと感じ、平家過ぎて同音にほめつるを、大に慢じ山を下りたるが、思ひの外俄に日の暮ぬるまゝ、灯のあるをたより宿をかりぬ。亭出て挨拶し、則ち一句所望せしを、あなどりて、あそこゝゝ落しかたりける時に、亭主、

うぐひすの聲ばかりして一の谷平家はおちてきかれざりけり

此歌を吟ずるまに、もとの如く天地あきらけし。是は此檢校自慢の心より、天狗の所爲なりとぞ。

○足利にての事なるに、鹽は〳〵とよんで、いかにもいつくしく若き商人來れり。こざかしき學侶一人出合ひ言ひけるは、たゞさへも道を二里三里とは、たやすく歩行なりさうもなき、いうにそだちのすがたなるが、此おもき物をもちては、何としてありかれる

問訊—會釋
摩利支天—陽炎と釋す帝釋天の眷屬武道守護の神
飛鳥井殿—蹴鞠の許を司る公家
いつくしく—美しく

も知らぬも、ことゞゝく物見に出るに、幸藏主は鑓、兵法者は太刀にて向ふ。鑓をさつとふりまはすを見て、其儘太刀をなげすて問訊しけり。こは何事ぞやと問へば、幸の鑓先より火焰出でたり、活身の摩利支天なり、尊きに太刀をすつといひければ、幸大に悦喜し、みづからすゝめて、彼兵法者に弟子どもあまたひきつけたり。のせすまいた上手。

○仁物らしき男、朸の前後にたひを入れ擔ひ、たひはたひはと賣りけるを、ある家の主呼び入れて、けしからず寒き日なり、まづちと火にもあたり、茶を飲みておとほりあれ、ちらと一目見しより、これはたゞならず、古はさもありし御身なりしが、思はずも世におちぶれて、かゝるわざをもし給ふにやと、涙をこぼし候ひぬと、言ひければ、靜かに火にあたり、茶など飲みて、たちざまに大なるたひを一つ、亭主が前に差出したり。こは何としたる事としんしやくしければ、いやけふは心ざす先祖の賴朝の日なり。

○始は鍛冶にてありつる者、傍に鞠を好いてけたり。てんねんと器用ありければ、人みな褒めそやすにより、家職をすてて飛鳥井殿に出入し、葛袴と沓をゆるされ、田舍へ下らんと催す時、知音の者異見し、そちは生れつきいつくしく、自然と殿上人の形あり、とてもの事に其風を似せよといふに同心し、五體つけの具をひた物しけり。すでに位ら

みのをはり　一身の終り、美濃尾張　をさ田—長田忠致

○昔能登の太守畠山殿の不慮の取合出來、合戰のありつる陣のはりやう、一番に松浪、二番に小島、三番に梶と三段なりしが、先の松浪敗軍し、次の小島討れにければ、先くづれたりとも、三段目の梶がすけたらんには、大事有まいものをと沙汰せし時、

おき津舟小じまがさきにしづみしは松浪あらく梶よわきゆゑ

○美濃國土岐の二郎は、齋藤山城守聟にてありしを、たばかりて害し參らせたれば、

とき世とて聟を殺すはみのをはりむかしはをさ田今は山しろ

○後陽成院御卽位の日をうけたまはり、聞く者市をなして參りたるが、晝より暮におよび、夜ふけても儀式ばかりに過ぎ時うつりければ、

暮るゝまでおしねやしたる御そくいひ世々の續目を違じが爲

ふはとのる

○忿怒の前には、不動劒をひつさげて、降魔の儀をしめす事あり。さればにや昔五山の僧に、幸藏主とて兵法の道に達せし人あり。都にのぼる達者、みな一打二打うたぬはなかりしが、或時奥山流の兵法者上洛しけり。例の如く試合の日さだまりぬ。京中知る

かせう―迦葉
源將軍―家康
源―此一字慶安本なし
儀同―准大臣の異稱
あまくに―天國、刀鍛冶の祖といはるゝ刀工

釋迦むりに彌陀に御堂を取れけり阿難むさんや何とかせうと

○慶長十九年の冬、源將軍大阪の城へよせさせ給ふとき、日本六十餘州の軍兵一騎も不ㇾ殘出陣ある。本陣は天王寺の茶臼山にてありしを、何者やらん、

大將はみなもとうぢの茶うす山ひきまはされぬ武士ぞなき

○後柏原院の御宇に、松木殿天氣にかなはせ給ひて、卽ち儀同になさせ給ひければ、

權門にひきまはされてめでたやな松は茶臼のしん儀同殿

○駿河の今川殿を松の下の弟子にとり、鞠稽古の時、雄長老

今川がくゝりたてたる駿河鞠松の下ちかくよりてけられな

○越前朝倉殿に子息十二人あり。金吾は十二番目なり。四番目を小太郎といひ、五番目を五郎と云ふ。五人ばりをひかれしつよ弓なり。或時兄弟寄合ひ給ひ、雙方の侍衆相撲をとるに小太郎方勝ぬ。小太郎弟にむかひ、參りた〳〵のと名乘られし。五郎無念に思はれ、近々とより一刀に小太郎を切殺されし。小太郎女房尼になりて後ゐこんやまず、人數をもよほし、五郎の館へおしよせ、つひに國に置かれざりし時、

越前にものきれ二つ出來たりあまくに太刀に五郎入道

大垣の陣の張樣へたけにてはやまくれたるちぶのせうかな

○天正十八庚寅三月朔日、大相國秀吉公、小田原北條左京大夫氏直退治の爲、駿河に長陣ありし時、すそ野にて曾我兄弟が乘りし馬に、水より外かふ物なしといひけるも、今身の上に覺えぬるとなげくをきゝて由己、

在陣をするがのふじの山よりも高ねにかふは馬のまめかな

○同じく三月二十九日山中の城を攻落されたれば、其勢に恐れ箱根足柄の城をあけのきけるに、

山中をせむればあぐる箱根山にぐるもはやきあしがらの敵

○西陣といふは絹屋のあまたある所なるが、一とせ黑舟わたらず糸高直なる故、手前不如意なれば孝養のいとなみも調へがたし、さるにより、まづ暫は月忌の僧衆もおはするなど申しあへる時、

西陣にいかなる敵のあるやらん關もあけけり旗もあけけり

○上京に誓願寺のありし時、事の惡緣によりて炎上せしが、戒光寺の釋迦堂をば借りて、假屋にせよやと毀ちとりて、彌陀を置きたりし時、前の山科殿、

月忌―月々の命日

にくー憎、二句

われー「見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世へぬらん」

取合ー爭ひ

こつていー犢牛

家康ー此二字慶安本なし

即ちならべて此歌を、

　觀音の福壽の海はみなにする誰もかけかしあらにくの偈や

○美濃國墨股に岸といふ侍あり。幾春もかはらぬ色の袴きて出仕するを、

　われみても久しく成りぬすのまたの岸が袴は幾代きぬらん

○大頭彦左衛門と弟子の黑助と、何事にや間あしくなり、中を違ひたる時、

　まひ〳〵の師弟のなかもこくすれば大夫も今はない頭なり

○越中神保殿の内に、寺島牛介といふ侍あり。越後の長尾と取合の時、牛介長尾へ心がはりするに、

　牛介こつていつかで敵をせば後はうなめがたをれなるべし

○京にて日吉大夫能をするに、浮舟の始りてよりこゝを先途とふりければ、何者やらん歌をよみ舞臺へなげあげし。

　名は日吉能するたびに雨ふりて芝居の中にうきふねをこぐ

○家康將軍に對し、石田治部少輔心替りつかまつり、關が原陣に駈け負け捕人となり、頭をはねられし時、雄長老

きみ—木見
風吹けば—「風吹けば沖つ白浪立田山夜半にや君が獨越ゆらん」
印地—小石を打合うて戰ふ戲れ

○いつの比かとよ、日吉大夫山城のへたがつぼといふ所にて、勸進能ありつるに、うちつゞき雨ふりけるを、
能は只上手ときけど下手が壺日吉といへど雨は降りけり
○奈良の春日山に、朽木のしたゝかなるがころびて、いくらともなくあり。それを禰宜衆の中より、忍び〳〵とるなどと沙汰しけるに、
風ふけば起つ轉びつ禰宜達の夜半にやきみにひとり行らん
○祇公周防の山口へ下向ありつれば、
都よりあきなひそうぎ下りけり言の葉めせといはぬ許りに
○妙心寺の僧に金藏主といふあり。賀茂の競馬を見物に行き、かへりに印地のある所にて、まくるかたを贔屓し、つよみ過ぎ鑓につかれぬれば、
五月五日競馬がへりの金藏主鑓に突れてひしやとこそなれ
○大頭勸進舞のわきに笠屋、つれに池淵といふ者なりしが、折節わろう雨ふりし。
雨ふらば笠屋をきせよ大がしらこゝもかしこも池淵となる
○慈眼視衆生福壽海無量をば、一句の偈といふなり。此文を卒都婆に皆無量と書いたり。

はこ—嚢

山寺の—「山寺の春の夕暮來て見れば入相のかれに花ぞ散りける」

諸行—所行

荒木攝津守—村重

○山崎にて、上の殿へ下の殿の日記箱を取りておき、なにと乞へども渡さず。後にはいさかひになる。宗鑑、

下の殿はつを放つておこひあれ上なる筥の下らぬはなし

○甲斐國武田信虎公の息女を、菊亭殿へ契約ありしが、いまだ婿入も無き先に、信虎公菊亭殿へおはしける時、

むこいりをまだせぬ先の舅いりきくていよりも武田入道

○三井寺に一山相談の事ありて、幾度も鐘をつき集會はあれども、つひに落著はなかりし。

山寺の春の談合來てみればよりあひの鐘に腹やへるらん

○諸行無常を、無常諸行と書きたる卒都婆のわきに、

無常とはいかなる人の諸行ぞや外は恥かし内にたておけ

○荒木攝津守蟻岡の城を退出の跡に、ありつる女房達をみな〳〵車にてひかれ、信長公より御成敗の砌、

荒木殿國をば人にくれはとり怪しや今日のはたものの音

しようてい—承禎、正
くんづころんづ—組んだりころんだり
藹次云々—順序亂脈なりしが
普光院御所—普廣院なるべし足利義教
方兄—錢
湯のかは—柚の皮
新藤ご—新藤五國光

○江州六角佐々木四郎と三好家ととりあひ、鴨川迄出らるれども、三好家つよくして、佐佐木しりぞかれぬる時に、

世中をしらう〱と言けれど鴨川迄もしようていはなし

○伊勢の桑名にて、法華宗門の中、一致勝劣の爭論出來、所をさし日を定め、雙方對談の上に、兎やありけん、頭をくはせくんづころんづ藹次なかりつるが、勝劣方の僧、一致方の坊主のふぐりをしたゝかにしめければ、その痛堪へがたきなど沙汰する刻、

法門のその勝劣はしらね共きんをしむるは一致めいわく

○紀州根ごろより、普光院御所へ言上し、覺鑁の大師號を望み、方兄千貫つみ奉らんとまで才覺ありつれども、頻に高野山よりさゝへにて成就せざりしを、

千貫でこぎれどならぬ大師號御所はねごろに思しめせ共

○紀伊國にて湯の川といふ侍、諸大夫になられたれば、

湯のかはが宮内の少輔になるならば密柑柑子は近衞關白

○宗長は江州にて進藤といふ武士の養子なり。生得は駿河島田鍛冶の子なりしゆゑ、

引拔は新藤ごには似たれ共よく〱みれば島田かぢなり

はしろ―齒
白
鐘― 槃を
掛く
よの―四布
一布―人の
もとを云々
―元金を失
ひし上に
御臺―妻女

○三井寺の兒ははしろになりぬらん撞べき鐘を山へ取れて

○美濃國にて土岐殿と齋藤山城守取りあひて、終に土岐殿方まけになりし頃、

ときはれとのりたてもせぬよの袴みのは破れて一布にぞなる

○信長公の御前にて、直に理を御すましなされたりし公事あり。出頭人の馬丞といふを頼み、今一度對決のあるやうにと、馳走ぶりするを聞いて、

ぜにぐつわはめられけるか馬丞人畜生と是をいふなり

○秀吉公の御時、ならかしといふ事あり。かしたる者もとを失墜せしうへに、猶放埓のはたらき罪科輕からずとて、再び黄金を出させ給へば、

奈良かしや此天下殿二重取とにもかくにもねだれ人かな

○攝津國蟻岡の城を、信長公とりまきておはせしに

君にひくあらきの弓の筈ちがひいるもいられぬ蟻岡の城

○越中の太守神保殿は、美濃の土岐殿の壻にてありし。其御臺我意に任せて、よろづ作法みだりなりければ、

神保が家は破れの窓しやうじみのうす紙のはり異見かな

○さやの宗久といふ者、初花の茶入を持ちてゐたりしに、ある人三好松山殿をたのみて其威光をかり見度よし催しけるに、

もの知らぬ人のしわざか初花に松山風をふかせきぬるは

○信長公諸大名をよせ給ひ、馬ぞろへ遊ばし、思ひ〳〵の出立はなやかなりし風情にて、綺羅をみがきあたりを輝やかせば、いにしへも例まれなる事と沙汰しあへり。即ち主上も簾中より叡覽なされし。

金銀をつかひすてたる馬ぞろへ將棊に似たるわうの見物

○信長公始めて京都に石垣の普請おほせつけられ、毎日石をひく音喧しかりければ、

花よりもだごの京とぞなりにけるけふも石々あすも石々

○信長公洛中に御普請の時、餘國よりも都へ方角ちかき故、江州の衆殊更苦勞あれば、

なまなれの鮓にも似たる近江衆石を重しと持ぬ日もなし

○攝津國高槻の城主たりし和田といふ侍、信長公御前世に越えて出頭がほなり。

信長のきては破るゝ京小袖わたが指出て見られざりけり

○山門より三井寺を打破り、鐘を叡山へ取りし時、

だご—團子
石々—團子の別名
なり—慶安本「あり」

俗―彌次郎

彌次郎といふ者、其道場をはなれず給仕しけり。彼聖、年月を經て後頻に入定せんと披露する。各落涙し名殘を惜しむ。來る二十日をかぎり、時を定め山の原に大なる穴をほり、法衣を著し入りすまし、外より土をよせ、かたく埋み畢んぬ。奇特なる行狀なりし。かたはらに沙汰するをきけば、かねほりを賴み過分に物をとらせ、ぬけ道をほり置き、其身は恙なく行ひうせたる、などいふ者もありけり。斯くて三年を過ぎ、彼聖を信仰せし彌次郎越後に渡り、さる所にて件の聖にあひぬ。疑ふべくもなし。すなはち近くより、そなたはそれではなきか。聖、いやそちをば夢にも知らぬ、我もさいふ者でもなしと爭ふ。俗あらゝかに證據をひきしかる時、かの聖、げにも〱よく思ひ合すれば、娑婆で見た彌次郎かと申したりき。それより此言葉はありといふ。

落書

○田中の眞宗とかや云ふ者、ちひさき茄子の茶入を所持し、けしからず祕藏して出しければ、

○二服さへいらぬ茶入の生茄子あへて其身の顔よごしかな

校割―目錄によりて相傳する

六趣四生―六趣と四生、六趣は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、四生は胎生、化生、卵生、濕生を云ふ

にも神通無礙なりとかたる。さらば湯づけを出し、燒味噌をそへて振舞れよ。やすき事と身を變じ、燒味噌となりしを口へ入れ、一嘗にしけり。其後は彼寺になにの祟もなければ、案の外煩なく住みぬ。此いはれにより、音はおそろし左右に聞え、させる手柄も奇特もえせぬものを、あれは鬼味噌ぢやと、一口にはいふよし。

○芋掘僧とは、いかなる因緣ありていふ詞ぞや。されば巨細あり。たとへばいづれの佛地にても、一寺一院と相續するほどの所には、或は山林、或は田村、分々に似合の資糧あり。又は校割の靈寶財祿あり。みなこれ供養三寶鳴法鐘勤讀誦、大乘妙行解第一議、爲導六趣四生也。爾をば四沙門乃中、纔汚道比丘にても計緣勝劣師となり弟子となすべき法用なるを、末世のこの作法悉背之、法器をば更にえらばす、唯我が姪我が從子などいつて、其類親をたづねいだし、寺院を他人に誤りても、不讓を法とする儘、山の芋はつるをたどしてこそほるなれば、芋掘僧といふならん。

○娑婆で見た彌次郎かともいはぬとは何ぞ。いにしころ佐渡の島に銀山出來、人多く集まりぬ。其時一人の聖ありて、十穀をたち禁戒をまぼり、六時不退の稱名たゆる事なく、いき佛とはこれならん、參れや拜めやとて晝夜のわかちなく、男女袖をつらぬる中に、

つけ—慶安本つき

圓寂—僧の死を云ふ

看坊—留守居

○或人云く。貫之が年比すみける家の跡は、萬里小路よりは北、富小路よりは東の角なり。

○京にて乘物をかき、あるひは庭にて働く男を、六尺とはなどいふならん。さる事候。屋敷につけ家につけ、たゝみにつけ。一切竪横間をさだむるに、田舍のは一間を六尺にとる法なり。都のは間尺を六尺三寸にとつて一間とする法なり。されば亭主をば都六尺三寸の間にとり、つかはるゝ男をば田舍六尺の間にとる。其故は主人たる人の心と下男の心と、物每はらりと違ひて、まにあはぬゆゑに、かの下人を六尺とはいふとなり。

○世話に鬼味噌と云ふはなんぞ。或山寺に修行底なき僧、老年を久しく住せしが、かれ圓寂の後看坊をすうるに、一夜をあかして見れば跡なし。いくたりも右の如くなるまゝ、恐れて彼寺に住せんといふ者なし。或時行脚の比丘來るに、件の旨を語り聞かする。卽ち我ゐてみんといふ。あないたはしや、又とられん事よとは思ひながら寺をわたしぬ。件の看坊しん〳〵と坐す。三更の後僧一人來れり。そちは誰ぞ。我は此前住なりと。汝世を去つて程ありと聞く、如何なれば再來する。我汝をあはれみ、一鉢の飯を與へんためと。不思議や亡魂の作法に終にきかずといふ。彼靈、我は鬼にもなり、畜生乃至食物

河だち—水練に達したる者の稱

○娘ひとりに壻三人と云ふ事は、昔富める人のむすめを持ちたりしが、ある時舟あそびに出でぬ。如何したりけん、娘ふなばたを踏みはづし水に落入りぬ。父母おどろき悲み、高札をうつやう、此娘をたすけたらんを必ず壻にせんとあり。占する者來り、いづくの程に其姿ありと敎ふ。又河だちの上手一人來り、我とりあげんというて卽ちいだきあげたり。されども息たえてなし。時に醫者來り藥をあたへ二度蘇りぬ。其後卜人云ふ、我始め娘のあり處を云ひてあればこそ、取りあげたれ、壻にならん。又水練が云ふ、我抱きあげずんばなんとして蘇生すべき、我壻にならん。又くすしいへらく、我藥をあたへずんば、爭で二度壽を保つべき、我壻にならんと爭ひ、所の地頭に伺ひければ、批判左右なく濟ず。終には都にのぼり、多賀の豐後守に義をうけければ、さる事あり、欲界に生をうくる者、凡三百六十種としるせる中に、人これが長たり、婚合の法形をまじふるにあり、しかる時は水練の者娘に身をそへ膚をふれたり、是をこそ尤も壻にとるべきと掟しぬ。

○丹後國與謝郡に、あさもがはの明神と申す神います。是は昔浦島の翁の神になれるとなん云傳へたる。

寺、大安寺、東大寺、西大寺、藥師寺、法隆寺を云ふ
出居─表座敷
路─ろ(爐)の誤なるべし

や。
○旦九郎といふ兄あり。性鈍にて富めり。田九郎とて弟あり。性さかしくて貧しく、ある時弟釜をもとめ庭にて湯をわかす。たぎりゐける處へ兄來るに、其釜をぬき出居の火もおかぬ路にかけぬ。旦九郎見つけ、是は火もなうてたぎる事如何にとあれば、弟それこそ此頃來り候、火もなくて湯のわく寶なれと語るにぞ、兄膽をつぶして金十枚にかふ。金をわたして後あらひてかくるにわかず。腹立しとへば、其儘水を入給はゞわき候はん物、あらはせ給うたほどに、今からは湯わくまじきとて歸りぬ。又ある時馬を一疋かうてつなぐ。其馬屋に金を二枚入れて置きけり。旦九郎來り馬はいづれよりと問ふ。弟申しける、是こそ世にためしなき名馬に候へ、三日に一度はかならず金を糞に仕り候。又うそをつくとてしかる。馬のゐるあたりを御見せ候へと、人をして見するに黄金あり。今は疑ひなし、われにくれよ、其價金子五十枚つかはさんとて貰ひたり。馬屋の結構にしたるに、兩はづなにつながせ、今や〳〵とまつに其樣子なし。大に瞋りて、田九郎をよびはをぬくに、いや〳〵板の上につながれし故、心たがひてあり。其後は中々きどくあるまじきとぞ申したる。是よりうつけを旦九郎とは云ふなり。

○月次の連歌にて宗匠たる人、朝朗と云ふ詞をせられたれば、句がら面白しと一座皆かんずるを聞き居て末座より、夕ぼらけと五文字を出すに、宗匠あら珍しやといはれぬ。又其儀ならば晝ぼらけとなほしけるを、宗匠それは猶いな詞ぞとおつこめたるに、右の作者うく、これ〳〵、

　我はして人のほらけやきらふらん

○遣唐使もろこしにある間に子あり。日本へ歸る時、妻に此子乳母はなれん程には、迎へ取るべしとちぎりて歸朝しぬ。遣唐使のくるごとに、消息を尋ぬれど音なし。母大に恨み、兒の首に簡をゆひつけ、緣あらば親に逢ひなんと、海になげ入れ歸りぬ。父難波の浦を行く。沖より浮びて物の見ゆ。馬をひかへて見れば、四つばかりなる兒なり。大なる魚の脊にのれり。取らせ見ければ札あり。我子にこそありけれ。いひちぎりし兒をとはぬを、母が腹立てて海になげ入しが、緣ありて魚にのりきたるなめりと、哀覺えいみじう悲しくてやしなふ。此よし書き遣りたれば、母も聞きて今はなき物にと思ひけるに、希有の事とて悅びける。此子おとなになり、手をよくかけり。魚に援けられたる故、名を魚養とぞつけたる。七大寺の額どもはこれが皆書きたるなり。あなおもしろの由來

かくらくの泊瀬の寺の佛こそ北野の神とあらはれにけれ

○鰯をば上臈方のことばに、紫ともてはやさるゝ。紫の色はあゐにはましたといふえんとや。されば下司らしきいわしも、其人のすきなれば鮎の魚にもまさるよのう。

○理をば非になし、非をば理になし、顏をあかめ興をさまし、むざと物每によこさまにわめく者を、なべて世の人、あれはいかいどろふみよといふ事、はだしぢやとの緣語なり。雄長老

春雨の風に隨ふかいだうはしるくなれども早かわきけり

○あわてふたみき、前後を忘じたるを、とち目になつて尋ねたは、とちめになりて走りありきたるは、などいふ事なんの故ぞや。昔あるもの木から落ちて、目をつき破りかなしめば、人かれをあはれみ物をとらする。さる程にはじめよりも富貴になりぬ。うつけ是を見うらやましき心出來、態と山に行き無理に落たれば、不思議に大なる岩に頭のあたり打ちわり、目の玉ぬけたり。さぐりて見肝をつぶし、玉をたづね這廻るに、折ふし橡一つ手にあたるを、玉とおもひ押入れたる。ほんの玉にはなかりしを入れたれば、とちめになりたる事よ。あまり痛み悲しみ泣きゐければ、とち程の淚を流すともいふ由。

雄長老―此三字慶安本なし

はや斬らずに剃りはてんとするつがひにふと立ち、少きられんとしければ、耳を一つ落されたり。腹をばたゝで結句よろこびぬるは、めづらしきうつけなるかな。

○七歩とぬるゝとは何事ぞ。されば釋迦誕生の時、阿難陀龍王は湯を吐き、難陀龍王は水を吐き、此産湯にぬれながら、七歩を行せられしより起りたる詞ぞかし。浄土の無量壽經に、從右脇生 現行七歩といへり。しとゞ濡るゝも七歩となり。

○鵜のまねする鳥は大水をのむとは何ぞ。

　水に入る道をばしらで山がらす鵜のまね學ぶ浪の上かな

○豆腐を串にさして焙るを、など田樂とはいふ。されば田樂のすがた、下には白袴をき其上に色ある物をうちかけ、鷺足にのり踊るすがた、豆腐の白に味噌をぬりたてたるは、そのまゝ體に似たるゆゑ、田樂といふにや。夢庵の歌に、

　たか足を踏みそこなへる面目をはひにまぶせる冬の田樂

○僧の米をもちよりて食するを、打飯とはいかでいふ。だとは出合せたる心なり。八人の「爐打」話火の字の分字なり。

○ある人北野に籠りて本地を祈りければ、

夢庵―牡丹花肖柏

本地―本地佛

圓座―藁、蒲、菅などの莖葉にて渦の如く圓く平たく組みたる蓐
うき藏主―陽氣な坊主
切所―要害なる所

顏し、圓座を尻につけ立ちて踊れり。明方になり、天狗共かへらんとする時いふ、禪門うき藏主にてよき伽なり。今度も必ずきたれと、約束ばかりは僞りあらん、たゞ質にしくはあらじとて、目の上のこぶを取りてぞ行きける。禪門寶をまうけたる心地し、故郷に歸る。見る人感じ、親類歡喜する事かぎりなし。

○あさ謠ばうたはぬ事とも、又朝うたひは貧乏の相とも言傳へたり。みな僻言なり。本說は麻をまく時、謠をうたふなと誡しむる。其故は麻はふしをきらふ程に。

○へちまの皮とも思はぬとは、紀の國の山家に、大へち小へちとて、峯たかう岸けはしくつゞらをりなるつたひ道、人馬の往來たやすからぬ切所あり。彼あたりに使ふ馬は、糠につけ藁につけ、大豆などは申すにおよばねば、實に骨許なる樣なり。さる程にかしこの馬、皮を剝ぎてもせのあと瘡の跡疵のみにて、何の役にもたゝぬ物を、へち馬の皮とも思はぬ事にいふならん。

○世間に下手なる者を饂飩くらひと云ふ事は、けしからず饂飩をすく者あり、流石買うては食ひともなし、利口になき坊主に向ひ、そなた我髮をそりてたび候へ、もしきられ候はゞ饂飩をふるまはれよ、難なくそられたらば我振舞はんといひあはせ、そらるゝに

しるしらず—すべて

昌叱—連歌師里村昌叱

三更—午前二時頃

〇わらんべは風の子と、しるしらず世にいふは何事ぞ。ふうふの間のなればなり。

〇山城の國伏見のつゞきに、法性寺といふ在所あり。人此處をば何とて寺の名を呼ぶぞや。老いたる男出合ひ、さる事候、昔此地に庄屋あり。かれ燒米をすいて食ひ、終日かみくたびれ、頰にふくみながらねいりたり。鼠にほひに便り、くひ破り大に口をあけたり。其朝地下の者共とぶらひくる中に、金瘡の上手あり、風を引いてはあしかりなんと、先障子を折りて疵の口にたてしより、ほうしやうじとはいふなり。

〇昌叱のもとへ、やき米を三袋おくりければ、

いち早きこめらうどものなす業を奧齒に入れてかみふくろかな

又俳諧に、

さしてなきとがする臼に繩つけて

まはる度にぞ米を見せける

〇鬼に瘤を取られたといふ事なんぞ。目の上に大なる瘤をもちたる禪門ありき。修行に出しが或山中に行暮れて宿なし。古き辻堂にとまれり。夜すでに三更に及ぶ。人音あまたしてかの堂に來り酒宴をなす。禪門おそろしく思ひながら、詮方なければ心うきたる

はんじの事

みたる男をもたんずる吉夢なりと祝ひければ、次の娘いふ、あれほど大なる富士の山が、姉御ひとりの身の上ばかりへはころぶまじ、兩方に竦たる者の上へもかゝりこそせめと、うれしげにて居たりしが、はだして三人ながら、目出度く富貴の男をえたりし。これよりこの辭はありとなん。

あしがきー慶安本あらしほ

○物を無用といふ詞のかはりに、よしにせよといふは、

あし垣も戸ざしもよしやするがなる清見が關は三保の松原

此歌にて心得ぬべし。三保の松原の面白き景を詠めるば、關におよばずえ行くまい程に、清見が關はよしにせよとよめり。

やせー矢瀬

○痩法師の酢ごのみとは、やせの寺は昔より禁酒にて酒をいれず。僧の中に酒をこのみ、えこらへぬあり。常に土工李をもちて行通ふ。若人問ふ事あれば、酢にて候といふ。日を經ずかよひしげし。又問ふ時も同返事なるまゝ、諺にいひならはし、やせの法師はすごのみや。

さゝぢんー糠味噌

○なべて上臈がたにはさゝぢんといふを、禁中にはまちかねとかや。もてあつかひ給ふ事、こぬかといふ詞の緣にや。

傳教大師―叡山の開祖
あはせ―夢合せにて夢

○和州より出るほてんといふ瓜は、延暦寺傳教の弟子慈覺大師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし。命久しかるまじき事を思ひわきまへ、叡山の北谷に草庵をむすび、三年つとめ行して終をまたれければ、ある夜夢に天人來りたり。これ靈藥なりとてあたふ。そのかたち瓜に似たり。半片を食す。その味蜜のごとし。人ありて告ぐるやう、これ梵天王の妙藥なりと。夢さめて口中に餘味あり。しかうして後やせたるかたち更にすくやかに、暗まなじります／＼明かなり。その半片を土にまきければ、まつたき瓜の生ぜし、いまの梵天これなり。元亨釋書に見えたり。

○瓜の糟づけ奈良づけといふ事は、かすがのあれはよいといふ緣なり。

○何事も油斷の樣に取合のおそきを、ぬかるといふなる。俊成卿の歌に、

せき入るゝ苗代水やこぼるらんぬかりて道の乾くまもなし

○何にても水に入りたる物を、湯いりとは何しにいふぞや。沖なかでそこねたとのえんにや。

○こほれさいはひとは何をいふ。昔女子三人一つ枕にいねたりし。姉夢見るやう、我が身の上へ富士の山がころびかゝると見たとかたれば、人ありてあはせける。それこそ富

しんかう―あかつきに對して深更、今普通しんこと呼ぶ

子をいさする是なりとて八百に賣りたり。聟よろこび座敷へ持ちて出で、隨を出しまらするとてあゆませたり。それより隨八百とはいふと。をかしや。

○餅をかちんとは、かちんの手拭にて、髪をつゝみゆうたる女房の、いつも禁中へもちを賣りに參りつけたり。餅賣とあれば詞のさまいやし。いつものかちんが參りたるなと沙汰あればよろし。

○餅のちと赤きやうなるをしんかうといふ事、あかき小豆をうへにきする、あかつきといふ縁にていふとなり。

○河内の國に珍といふあり。大和に場といふあり。二人なから兵法の上手なりしが、ある時試合をし、雙方片足をおとし落され、旣に死にのぞむ時、金瘡の上手とて來る。あまりあわてふためき、其ぬしの足をば取違へ、我がを人に、人のを我がにつぎかへたり。さるまゝ一人は足長くなり、一人は足みじかくなり、腰をひきしより、今もかゝるありきの人をちんばとはいふよし。

○いそがば廻れといふことは、物毎にあるべき遠慮なり、宗長のよめる、

武士のやばせの船は早くともいそがば廻れ瀬田の長橋

陽五行に北は水、南は火、東は木、西は金、中央は土とせり

隨八百—氣儘

らず。しかるあひだ水ないといふになぞらへ、きたないといふかや。

○宗祇宗長とつれだち、浦の夕に立出で遊ばれしに、漁人のあみに藻を引上げたり。是はなにと名をいふぞと問はれたれば、めとも申し、もとも申すと答ふ。時に祇公やれ是はよい前句やとて、

○めともいふなりもともいふなり

宗長につけられよとありければ、

○引連れて野飼のうしの歸るさに

牝牛はうんめとなき、牡牛はうんもとなくなる。祇公感ぜられたり。宗長の一句沙汰あれと所望にて、

よむいろは敎ふる指の下を見よ

ゆの下はめなり、ひの下はもなり。

○隨八百とはなにをいふ。聟が舅のもとに行き、いんぎんに一禮ありて後、舅のいふやう、今までは公界のむきよし、此後は隨をいたいてあそばれ候へと。聟きゝて肝をつぶし、京へ俄に隨を買ひにのぼする。高聲に隨を買はんと呼ぶ。利口なる者行合ひ、龜の

お期—海
髪、海中の
石に生ず
北は水—陰

醒睡笑

巻之一

謂被謂物之由來

○そらごとをいふ者を、などうそつきとは言ひならはせし。さればにや、うそといふ鳥木のそらにとまりゐて、琴をひく縁によせ、そらことをうそつきといふよし。

○いづれもおなじ事なるを、常にたくをば風呂といひ、たてあけの戸なきを柘榴風呂とはなんぞいふや。かゞみいるとの心なり。

○かいさうの類にお期といふ藻あり。かのおごもよく食をすゝむる効能あり。さてぞ武家の臺所に、飯をはからひもり、人にすゝむる役者をおごとはいふならし。

○よろづ物のむさき事をきたないとは如何に。北は水の方なり。水なければ萬物きよか

醒睡笑序

ころはいつ、元和九癸亥の稔、天下泰平人民豐樂の折から、策傳某小僧の時より、耳にふれておもしろくをかしかりつる事を、反故の端にとめ置きたり。是年七十にて、誓願寺乾のすみに隱居し安樂庵と云ふ。柴の扉の明暮、心をやすむるひま〳〵、こしかたしるせし筆の跡を見れば、おのづから睡をさましてわらふ。さるまゝにや是を醒睡笑と名付け、かたはらいたき草紙を、八卷となして殘すのみ。

一休三毒を見たる人を教化し給ふ事……五四六
小僧一休和尚に字の訓を問申せし事……五五〇
一休和尚算者と問答幷鶏を飼ひし事……五五一
一休和尚泉州高須の町遊女の事……五五五
一休和尚詩文の事……五五七
曾呂利狂歌咄　五六一—六五〇

一休和尙死人に引導の狂歌賜る事……四七六
蜷川新右衞門一休の許へ謎にて手紙を參らする事……四七九
一休和尙放下師の繪幷鍾馗大臣の繪に讃の狂歌を書給ふ事……四八二
一休和尙狐の妖怪をしり給ふ事……四八七
一休石火問答の事……四九四

卷之二

一休和尙を諷經に請待し奇特の事……四九五
一休和尙禪の老婆が物語し給ふ事……四九八
蜷川新右衞門に一休對句し給ふ事……五〇〇
一休和尙に雨の祈を乞し事幷志摩の國伊曾𡈽が崎龍神の事……五〇二
茶人深山宗喜一休に狂歌望れし事……五〇七
一休夫婦いさかひを狂歌にて中直し給ふ事……五一一
一休能の番附を判じ給ふ事……五一五

卷之三

一休癩病人の娠に教化し給ふ事……五一八
一休あて字を訓み給ふ事……五二三
火吹竹の五戒を破るといふ事……五二四
一休和尙古法眼の繪に狂歌書き給ふ事……五二六
紫竹彌惣妻を離緣の事……五二八
一休お弟子得道の事……五三一
一休奈𡈽の里にて問答の事……五三三
一休硝子の魚に詩を題し給ふ事……五三六

卷之四

一休和尙蜷川新右衞門子息の方へ壽の狂歌を送られし事……五四〇
一休和尙猫の引導の事……五四一
一休愚なる人に狂歌をしめし給ふ……五四四
一休の御方へ二見の禪尼より頭巾を參らせられし事……五四五
一休御弟子手柄の事……五四五

第三……四〇四
第四……四〇五
第五……四〇九
第六……四一〇
第七……四一三
第八……四一六
第九……四一八
第十……四二〇
第十一……四二一
第十二……四二三
第十三……四二五

巻之三

第一……四二六
第二……四三一
第三……四三三
第四……四三五
第五……四三五
第六……四三七
第七……四三八
第八……四三九
第九……四四三
第十……四四七

巻之四

第一……四四九
第二……四五〇
第三……四五三
第四……四五五
第五……四五九

續一休咄……四六五—五六〇

巻之一

一休幼き時發明の事……四六九
一休和尚活則返答の事……四七一
盜人一休和尚の弟子となる事……四七三

若道不知……二四九
戀のみち……二五二
悋氣……二五五
推はちがうた……二六〇
うそつき……二七五
卷之七
思の色を外にいふ……二八一
いひ損ひはなほならぬ……二八八
似合うたのぞみ……二九二
癡忘……二九八
謠……三〇二
舞……三一五
卷之八
頓作……三三一
平家……三四四
かすり……三四六
秀句……三五二
茶の湯……三五八
祝濟多……三六五
一休咄　三七三—四六四
卷之一
第一……三七七
第二……三八〇
第三……三八四
第四……三八六
第五……三八八
第六……三九一
第七……三九四
第八……三九六
第九……三九九
卷之二
第一……四〇一
第二……四〇二

目錄

醒睡笑　一—三七二

卷之一

謂被謂物之由來　三
落書　一七
ふはとのる　二六
鈍副子　三〇
無智之僧　四一
祝過るも異な者　四四

卷之二

名津希親方　五五
貴人之行跡　六一
吝太郎　七九
賢達て　八五

卷之三

文字知顔　九一
不文字　九七
文之品々　一一一
自墮落　一一六
淸僧　一二三

卷之四

聞多批判　一二九
いやな批判　一四五
曾而那似合點　一五二
唯有　一六六

卷之五

婲心　一七七
上戶　一九二
人はそだち　二一六

卷之六

児の噂　二三二

の耳目に親しからしむるに於て、本書の如きは蓋し與つて大に力あるべし。續一休咄は、一休咄に繼ぎたるもの、作者也來の傳は詳ならず。

曾呂利狂歌咄は、亦安樂菴の作として傳へらるれども、眞僞は詳ならず。一段ごとに必ず狂歌を以て結び、每段の小話之が序引をなせる所、狂歌の伊勢物語とも謂はん歟。古來傳ふる所の有名なる小話にして、此の書によりて形式を與へられたりと思はるゝもの少からざるは、蓋し讀者の首肯する所なるべし。

右いづれも原本に據りて校訂し、讀みにくき處に往々漢字を當てたる外は、つとめて原本の體裁を存せんことを期したり。又校訂校正につきては石井晴信氏を煩はしたるところ多し。記して謝意を表す。

大正四年一月

校訂者　武　笠　三

緒言

本書は醒睡笑、一休咄、續一休咄・曾呂利狂歌咄の四部二十一卷を收む。

醒睡笑は德川初期の茶人として有名なる安樂菴策傳(寛永十九歿、八十九)が、一代の名奉行板倉重宗の爲に、其の聞き集めたる笑話を記して贈りたるもの。其の來歷既に奇なり、況んや其の蒐錄する所の材料の豐富なる、趣向の奇拔なる、眞に此の種の類書中の白眉にして、また同時に後世幾多の笑話の源流たるをや。たゞ其の時代の稍古きが爲に、用語語法の今日の讀者に耳遠きもの少からざるを遺憾とすれども、讀者若し多少の難澁を忍びて一讀過了せば、其の間に於て、從來耳に熟せし笑話の源に逢ひて、覺えず破顏一番するを禁せざるもの、蓋し一二のみならざるべし。

一休咄は其の作者を詳にせず。文體によりて之を察すれば、蓋し德川中期のものなるべし。その記す所の幾許が眞にして幾許が作り話なりやは、此の種の書にあつては蓋し之を問ふを要せず、唯その話題の興趣多きを取るべきのみ。しかも禪師の性格の一面を傳へて世人

LIBRARY
APR 10 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
795
S35S4
1915

醒睡笑　全

一休咄　全

曾呂利狂歌咄　全

PL 795 A56S4 1915
Anrakuan, Sakuden
Seisuisho

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

PL 795 S35S4 1915
Sakuden
Seisuisho

East Asia

有朋堂文庫